

博士学位論文

# 知覚経験の概念性と非概念性

東京大学大学院 総合文化研究科

小口峰樹

# 知覚経験の概念性と非概念性

小口峰樹

## 目次

序論..... 5

第一部 概念主義の分析的論証..... 12

第一章 概念主義と非概念主義..... 12

第一節 知覚経験の内容..... 12

第一項 知覚経験と現象的特徴..... 12

第二項 知覚内容と正合条件..... 14

第二節 概念性／非概念性の分析..... 18

第一項 フレーゲ的意義としての概念..... 18

第二項 概念性の四つの基準..... 20

第三節 非概念主義の諸相..... 23

第一項 知覚の肌理細かさと動物および幼児の知覚..... 23

第二項 知覚の改訂不可能性と矛盾許容性..... 27

第三項 知覚の文脈依存性と記憶からの論証..... 29

第四項 シナリオ内容と原命題的内容..... 30

第二章 マクダウェルの概念主義..... 34

第一節 経験的信念の不可能性というアポリア..... 34

第二節 所与の神話と斉合主義のジレンマ..... 39

第三節 自発性と受容性の協働としての経験..... 42

第四節 理由への応答性としての概念能力..... 47

第五節 経験の受動性と合理的授權..... 50

第六節 マクダウェルの描像と概念性の基準..... 54

第七節 命題概念主義と直観概念主義..... 57

第一項 マクダウェルの自己修正..... 57

第二項 知覚経験と非推論的内容..... 58

第三項 知覚経験と直観的内容..... 61

第四項 直観概念主義の問題点..... 62

第三章	ブリュワーの概念主義.....	66
第一節	命題概念主義に対する二つの批判.....	66
第二節	直示的要素の必要性：ストローソン論法.....	69
第三節	理由付与役割の必要性：切り替え論法.....	74
第四節	概念的内容の必要性：正当化の論証的理解.....	81
第五節	全体的概念主義と部分的概念主義.....	87

第四章	内容概念主義と状態概念主義.....	91
第一節	内容説と状態説.....	91
第二節	混成説 1 の整合性.....	96
第三節	混成説 2 の整合性.....	99
第四節	内容概念主義の擁護.....	101

## 第二部 概念主義の経験的基盤..... 106

第五章	自然化された概念主義の構築.....	106
第一節	命題的構造の条件.....	106
第二節	視覚的指標理論.....	107
第一項	指標による個別的対象の指示.....	107
第二項	指標メカニズムの理論的・経験的証拠.....	110
第三項	対象ファイルと命題的形式.....	113
第三節	感覚的分類理論.....	115
第一項	分類装置としての感覚システム.....	115
第二項	神経処理による感覚クラスの構成.....	117
第三項	知覚経験とデジタル表象.....	119
第四項	具体性の現象学と特徴の統合.....	121
第五項	感覚的序列化と肌理細かさ.....	124
第六項	初期視覚による命題的内容の形成.....	127

第六章	自然化された概念主義の擁護.....	129
第一節	自然化された概念主義とフレーゲ的内容.....	129
第一項	合成性原理.....	129
第二項	認知的意義の原理.....	130
第三項	指示決定性の原理.....	133
第四項	力からの独立性の原理.....	135
第五項	感覚的概念と言語的概念.....	136

第二節 非概念主義への応答.....	138
第一項 動物や幼児の知覚からの論証.....	139
第二項 知覚の肌理細かさからの論証.....	140
第三項 知覚の改訂不可能性からの論証.....	141
第四項 知覚の矛盾許容性からの論証.....	141
第五項 知覚の文脈依存性からの論証.....	143
第六項 記憶の概念独立性からの論証.....	144
第七項 概念の基礎づけからの論証.....	144
第三節 対象基盤説と位置基盤説.....	145
第一項 結びつけ問題と感覚的個別者.....	145
第二項 対象基盤説の三つの証拠.....	147
第三項 三つの証拠への反論と応答.....	149
 第三部 概念主義と意識および行為.....	 159
 第七章 知覚経験と意識.....	 159
第一節 意識と概念的内容.....	159
第二節 意識の AIR 理論.....	161
第一項 意識の中間レベル説.....	161
第二項 意識の注意制御説.....	164
第三項 注意の機能とその神経基盤.....	167
第三節 意識の AIR 理論への批判.....	169
第一項 意識なき注意と注意なき意識.....	170
第二項 意識の周縁.....	171
第三項 拡散的注意.....	175
第四節 意識と概念的内容の距離を埋める.....	182
第五節 階層的な概念主義.....	184
 第八章 知覚経験と行為.....	 188
第一節 知覚と行為をめぐる二つの理論.....	188
第二節 二重視覚システム仮説.....	191
第一項 二重視覚システム仮説の概要.....	191
第二項 視覚形態失認と視覚運動失調.....	193
第三項 自己／外界中心参照枠.....	195
第四項 視覚運動行為と錯覚.....	197
第五項 概念主義と二重視覚システム仮説.....	201
第三節 感覚運動アプローチ.....	203

第一項	感覚運動アプローチの概要.....	203
第二項	感覚運動知識と知覚の障害.....	306
第三項	感覚運動知識と知覚の獲得.....	308
第四項	概念主義と感覚運動アプローチ.....	209
第四節	感覚運動アプローチへの批判.....	211
第一項	経験的証拠に対する別解釈.....	211
第二項	経験的証拠に対する不整合.....	216
第五節	二重視覚システム仮説への批判.....	220
第一項	画像理論と現前の感じ.....	220
第二項	中間レベル説からの応答.....	223
結論.....		225
参考文献表.....		228

# 序論

## 1. 本論文の目的

われわれは覚醒しているあいだ、好むと好まざるとにかかわらず、間断なく何らかの知覚経験を享受している。私が街路を歩くとき、私は頬にそよ風が撫でるのを感じ、靴底に硬いアスファルトの感触を感じる。私の眼には、周囲の建物や道路を背景として、色とりどりの服をまとった人の群れが通り過ぎてゆくのが映る。私の耳には人々の不揃いな靴音や他愛のないおしゃべりが聞こえてくる。私の鼻にはどこからか季節を迎えた金木犀の香りが漂ってくる。睡眠や昏睡に陥っていない限り、私はこのように絶え間なく何かを経験し続け、こうして織り成される経験の流れが、私が一人称的な観点から生きているこの現実を紡いでいくことになる。

われわれがこうして日々享受する知覚経験は、われわれの心へとやにわに去来し、しかるのち流れ去るのみではない。われわれは経験の流れに埋没してしまうのではなく、それをもとにして思考や信念を形成することができる。そうして形成された思考や信念は、他の思考や信念と組み合わせられることで、われわれがこの現実を生きてゆくための支えや手がかりを与えてくれる。たとえば、私が青信号で安心して交差点を渡ることができるのは、「青は進め」といった交通規則に関する知識を背景とした上で、知覚経験を通じて、歩行者用信号がいま青であることや、信号待ちをしている車が停車していることを信じているからである。こうした信念群による体系的な支えがなければ、私にとってこの世界を生きることは暗中模索に等しい行為であり続けるだろう。しかしながら、信念体系がこうした支えとしての役割を演じるものであるためには、それ自体が信憑に値するものであることが何らかの仕方で確保されなければならない。「青は進めを意味する」という知識があやふやなものであるとすれば、私は安心して交差点を渡ることはできないのである。では、信念体系はそうした信憑をどのようにして獲得するのだろうか。

自らが有する信念の多くについて、われわれがそれに信憑を置いているのは、その内容を信じるための理由を挙げることができるからであるように思われる。たとえば、なぜ「青信号のときは渡ってよい」と信じているのかを尋ねられたならば（大人になってからそのように尋ねられることは稀であろうが）、私は交通規則に関する知識や他者からそのように教示された記憶を理由として持ち出すことで、当該の信念に対して正当化を与えるだろう。そして、それらの知識や記憶に対してさらにそれが信憑に値するかどうかを問われたならば、私はさらに別の信念に訴えることでそれらが信憑に値するものであることを示すだろう。

ここで重要なのは、われわれが有する任意の経験的信念について、こうした正当化の階梯を一つ一つ辿ってゆくとき、われわれは最終的に知覚経験に行き着くように思われるという点である。たとえば、「青は進め」という規則に関する知識は、私がそれを過去のある時点で信頼できる他者から聞いたという経験や、それが記された文書を読んだという経験によって支えられている。それらの経験は、「パパは『青は進め』だと言った」や「本に『青

は進め』と書いてあった」といった関連する知覚信念に対して、それらを信じるための理由を与える。こうした具体的な知覚信念に多かれ少なかれ基づくことで、交通規則に関する知識といったより抽象性の高い信念は正当化される。では、このように関連する信念に対して理由を与えうるものであるためには、知覚経験はどのような内容を備えていなければならないのだろうか。

第一章で概説するように、知覚経験に関する「非概念主義 (nonconceptualism)」と呼ばれる立場に立つ論者は、知覚経験の内容は信念や思考とは異なり概念的に構造化されていない非概念的なものであると主張する。それらの論者は、知覚と信念のあいだに成立しているように思われる特徴的な違いに依拠しつつ、そうした違いが生じるのは知覚と信念がそれぞれ異なる種類の内容を備えているからであると論じる。

それに対して、第二章と第三章で論じるように、マクダウェルやブリューワーといった論者はこの非概念主義に異を唱え、知覚経験の内容は信念や思考と同じように構造化された概念的なものであると主張する。彼ら「概念主義 (conceptualism)」に立つ論者によれば、信念や思考に対して理由を与えうるものであるためには、知覚経験はそれらと同種の概念的な内容を備えていなければならない。経験的信念が信憑に値するものとして成立しうるためには、それは概念的内容を備えた知覚経験によって合理的な制約を与えられていなければならないのである。

本論が考察の主題とするのはこの概念主義と非概念主義のあいだの論争である。当該論争は、マクダウェルやブリューワーの関連書籍が刊行された 1990 年代以降、知覚の哲学の内部において主要な争点の一つを構成しており、今なおさまざまな論者によって活発な議論が展開されている。本論の目的は、これらのうち概念主義の側に立った上で、その理論内容を整備し、それを擁護するための新たな論証を構築することである。

マクダウェルやブリューワーの論証においては、われわれが経験的信念を有していることを前提とした上で、それが成立する「可能性の条件」を探究することで知覚経験が概念的な内容をもつことが示されてきた。この意味で、概念主義を支える主要な議論は超越論的論証を通じて与えられてきたと言ってよい。しかしながら、第四章で論じるように、こうした超越論的なタイプの論証に対しては、それが知覚経験の「内容における概念性」を論証するには届いておらず、たかだかその「状態における概念性」を支持するに留まっているという指摘がなされている。本論ではこうした批判に応答するため、知覚に関する認知科学や神経科学といった経験科学の成果を取り込みながら、知覚内容の概念性に関する自然主義的な論証を構築する。そうした自然主義的な論証は、知覚経験の形成過程に着目することで、知覚内容の概念性に対するより直接的な論証を与えるものである。

概念主義の論証におけるこうした自然主義的なアプローチの採用は、知覚内容の概念性を支える経験的な基盤の探究を通じて、非概念主義と同じ土俵に立った上で論争を展開できるという点でも有益である。非概念主義者の多くは自然主義的な立場に立った上で議論を行っており、経験科学の知見によって自らの立場を擁護しうることを非概念主義の強みの一つであるとみなしている。こうした論者からすれば、超越論的な概念分析に依拠した論証は、その方法論の有効性自体が疑問視されることになる。だとすれば、非概念主義と

同じ自然主義的なアプローチに依拠しながら、そこから逆に概念主義を支持する説得的な論証を引き出しえたならば、それらの論者に対してより深刻な反論を提示することになる。自然主義的なアプローチからの概念主義の構築は、このように「同じ土俵で優劣を決する」という点で論争上の利点を有しているのである。

## 2. 本論文の構成

このように、本論は「概念主義に対する超越論的な論証の批判的検討と、それを受けての自然主義的な論証の構築とその擁護」を目的として設定する。この目的を達成するために、本論は以下のように全八章の構成に従って展開される。

第一章では、まず「知覚経験」や「内容」、あるいは「概念」といった本論に登場する基本用語について、それらがどのような意味において使用されるのかを述べる（第一節と第二節）。本論の用語法において、知覚経験とは、感覚の働きを通じて形成される、何らかの現象的特徴を備えた意識的な心的状態である。このように規定される知覚経験は、信念と同様に世界の在り方に応じて評価される正合条件を備えた内容を有しており、知覚者に対して世界がどうなっているかを表象する役割を果たす。概念主義とは、このように規定される知覚経験の内容が、信念や思考の内容と同じく概念的なものであると主張する立場である。ではこのとき、「概念的」ということで何が意味されているのであろうか。

概念主義と非概念主義の論争において問われているのは、信念や思考の内容が概念的であるのと同じ意味において知覚経験の内容が概念的であるかどうかである。本論では、信念がもつ「フレーゲ的内容」について、それを概念的たらしめている諸基準を明確化した上で、それらの基準が知覚経験に対しても適用しうるかどうかを探るという方針をとる。それらの概念性の基準とは、(1) 合成性、(2) 認知的意義、(3) 指示決定性、(4) 力からの独立性、の四つである。本論において、ある心的状態の内容が概念的なものであるのは、それがこれら四つの基準を満たしているときである。

第一章ではさらに、続く各章で概念主義を論じるに先立ち、非概念主義の代表的な論者たちがどのような論拠によって非概念主義を支持しているのかを概説する（第三節）。非概念主義を支持するとされるそれらの論点は、概念主義が成功しているか否かを考える上で格好の試金石となるだろう。

第二章と第三章では、概念主義に対する超越論的な論証を展開した代表的な論者であるマクダウェルとブリューワーの議論を取りあげ、それぞれについて詳細な検討を行う。

第二章ではマクダウェルの概念主義について論じる。マクダウェルはその哲学の中心的な課題を「心と世界の関係性に関する近代哲学に特徴的な不安」を治療することにあると述べる。その不安とは、「経験が一種の自然現象であり、それゆえ理由の論理空間のなかに位置をもたないとすれば、経験的信念は成立不可能なのではないか」というものである（第一節）。マクダウェルはこうした不安に応じているようにみえるものとして、「所与の神話」と「斉合主義」という二つの立場を一對のジレンマとして描きだす（第二節）。マクダウェルの概念主義はこうしたジレンマからの脱出口として示されている。それは、「知覚経験は自発性（＝概念能力）と受容性（＝感性能力）の協働として成立するのであり、それゆえ



理由の論理空間のなかにその座を占めることができる」というものである（第三節）。この見方によれば、知覚経験は概念能力が受動的に現実化された状態であり、この概念能力によって判断とのあいだに理由付与関係を結ぶことで、主体に対してその内容を受け入れるための合理的な権利を付与する（第四節と第五節）。マクダウェルの概念主義において、知覚経験は概念性の四つの基準をすべて充足するのであり、この点で信念と同様に概念的な内容をもつと言える（第六節）。しかし近年、マクダウェルは知覚経験が命題的な構造を備えているという従来の説を修正し、知覚経験は命題的な構造を欠きながらなお概念的であるような直観的内容をもつと主張している。第七節では、こうした直観説の抱えている問題点を指摘し、マクダウェルの自己批判に抗して、従来の命題説を堅持すべきであると論じる。

第三章ではブリューワーの概念主義について論じる。第二章で取りあげたマクダウェルの議論は、概念主義の論証にとって取り組むべき次の二つの問いに対して十分な答えを与えるものではない。それらの問いとは、（１）知覚経験から判断に与えられる合理的制約はなぜ主体にとってアクセス可能な理由でなければならないのか、（２）なぜそうした合理的制約を与えうる項は概念的内容をもつものに限られるのか、というものである。ブリューワーによる論証は、これら二つの問いに対する応答を行うことで、マクダウェルによる命題概念主義を継承しつつ、それを補完するものであると解釈することができる（第一節）。ブリューワーは（１）の問いに答えるために、「ストローソン論法」と「切り替え論法」と自らが呼ぶ二つの論証を提示する。ストローソン論法は、外界の個別的对象に対する指示が成立するためには、われわれの経験は直示的要素を含んだ内容を備えていなければならない、という点を論証するものである。こうした知覚経験がもつ直示的要素によって、外界の個別的对象についての信念はその内容を規定されるのである（第二節）。もう一方の切り替え論法は、こうした経験と信念のあいだの内容規定関係は、同時に主体にとってアクセス可能な理由付与関係でもなければならない、と言う点を論証するものである。ここでは、ブリューワーによる切り替え論法は十分に説得的ではないという指摘を行い、その論証に対してより有望であると思われる代替案を提示する（第三節）。次に（２）の問いに対してブリューワーは、経験と判断のあいだの理由付与関係は、その関係項に概念的内容を要請する「正当化に関する論証的理解」に基づいてのみ捉えられると応答する（第四節）。本節では、こうしたブリューワーの議論に対して非概念主義者のラーマンが行っている批判を取りあげ、その批判に対する反論を呈示することで、概念的内容のみが理由付与関係に寄与しうると論じる。

続く第五節では、概念主義内部における「全体的概念主義」と「部分的概念主義」の対立を取りあげる。前者にはマクダウェルの立場が、後者にはブリューワーの立場がそれぞれ該当する。この節では、いずれの立場も欠点を抱えているという指摘を行い、それらの欠点を克服するものとして「階層的概念主義」という立場を素描する。この立場に対しては第七章においてより詳細な記述が与えられる。

第四章では、概念主義／非概念主義論争の内部におけるさらなる対立軸として「内容説」と「状態説」という区分を取りあげる。内容説とは、概念的／非概念的であるのは知覚経

験の内容であると主張する立場であり、状態説とは、概念的／非概念的であるのは知覚経験の状態であると主張する立場である。一部の論者によれば、従来の概念主義／非概念主義の論争ではこれらの区別が曖昧なままに置かれており、それによって議論の正否を判定する際に無用な混乱が生じている。すなわち、内容非概念主義を支持するとされる論証の一部は実際には状態非概念主義を支持するものでしかなく、また、内容概念主義を支持するとされる論証（マクダウェルとブリューワーの超越論的論証）も実際には状態概念主義を支持するものでしかないのである（第一節）。内容説と状態説の区別が妥当であるとすれば、当該論争には概念主義／非概念主義との組み合わせとして、二つの純粹説と二つの混成説が存在することになる。第二節と第三節ではそれぞれ、これらのうち一方の混成説（内容概念主義＋状態非概念主義）は整合的な立場であるが、他方の混成説（内容非概念主義＋状態概念主義）は整合的な立場ではないと論じる。もしこの結論が妥当であるとすれば、内容概念主義を擁護するためには、内容非概念主義を擁護する場合とは異なり、対応する状態説を介してではない直接的な論証を与えるが必要になる。こうした考察を踏まえた上で、第四節では、「マクダウェルやブリューワーによる超越論的論証は状態概念主義を支持するものでしかない」という上述の批判を取りあげる。ここでは、知覚経験がフレーゲ的内容ではなくラッセル的内容をもつという可能性を考慮するならば、超越論的論証は内容非概念主義が成立する可能性を十分に排除するものではない、という否定的な結論が導かれる。内容概念主義を擁護するためには、それを直接擁護するような論証を提示しなければならないのである。

第五章では、こうした否定的な結論を乗り越えるために、自然主義的なアプローチから新たな概念主義の描像を提示し、内容概念主義に対する直接的な論証を構築する。内容概念主義によれば、知覚経験が備える内容は命題的に構造化された概念的なものである。知覚経験が命題的な構造を獲得するためには、（１）最低でも主部と述部に該当する分節形式を備えていること、（２）その構造の構成要素が合成性という特徴を有していること、の二つの条件を満たさなければならない（第一節）。本章では、知覚経験の形成過程においてこれらの条件を満足する内容を与えるメカニズムとして、認知科学および認知哲学の分野で提唱されている、ピリシンの「視覚的指標理論」とマッテンの「感覚的分類理論」という二つの理論に着目する。

視覚的指標理論によれば、感覚システムの初期過程には最大で四個程度の対象に対して同時に指標を配分し、因果的にそれらの数的同一性を追跡するという選択的注意のメカニズムが備わっている。この指標メカニズムは意識経験の成立する以前の段階で働くボトムアップ型のものであり、感覚刺激を概念的にコード化することなく、その顕著性のみに応じて指標の配分を行う。指標が配分された対象に対しては、それがもつ諸性質を格納していく「対象ファイル」が作成される。この対象ファイルは、視覚的対象が例化している性質を述定するための主部として機能することで、知覚に命題的な構造を与える役割を果たすと考えられる。このように、視覚的指標理論が描き出すメカニズムは、上述の（１）の条件を充足するものとして解釈できる（第二節）。

しかし、知覚経験が世界の在り方を表す内容をもったものとして成立するためには、こ

の命題形式に対して概念的内容を付与するさらなるメカニズムが必要とされる。感覚的分類理論によれば、感覚の初期過程には入力刺激を並列的に処理する分類メカニズムが備わっており、諸性質を感覚クラスとして処理することで、対象ファイルへと収納されるべき内容を生み出す。これらの分類された諸性質は、視覚的指標の働きによって形成された対象ファイルのもとへ統合されることで、他の諸性質と合成可能なものとしてコード化されることになる。このように、感覚的分類理論の描き出すメカニズムは、上述の（２）の条件を充足するものとして解釈できる（第三節）。

これらの理論はいずれも認知科学や神経科学の知見によって経験的な支持を得ており、組み合わせられることで、われわれの感覚システムが意識経験に対してどのように命題的に構造化された概念的内容を与えるのかを示す。これらの理論を通じて描き出される描像を本論では「自然化された概念主義」と呼ぶ。続く第六章では、この自然化された概念主義に対してその擁護を行う。はじめに、自然化された概念主義における知覚経験が概念性の四つの基準を満たすことを論じ、感覚システムによって形成される概念的 내용이信念と同様のフレーグ的な内容であるということを示す（第一節）。続いて、第一章で概説した非概念主義を支える七つの論点に対して、自然化された概念主義の立場からそれらすべてに回答しようということ論じる（第二節）。第三節では、知覚経験において主部の役割を演じるのは何かという問題を取りあげる。視覚的指標理論は「対象」が主部の役割を演じると主張するが、クラークはこれに対して「位置」がその役割を演じると主張する。この対象基盤説と位置基盤説の論争に対して、本節では対象基盤説を擁護するための議論を展開する。

視覚的指標理論と感覚的分類理論によれば、視覚的指標の配分や感覚的特徴の分類は初期知覚過程に属するメカニズムの働きであり、意識経験が成立する以前の段階で遂行される前意識的なものである。だが、概念主義が主張するのは意識的な経験内容の概念性である。だとすれば、概念主義は視覚的指標と感覚的分類の協働によって成立する概念的 content がどのようにして意識経験の内容となるのかを説明しなければならない。第七章では、視覚的指標がある種の注意のメカニズムであるという点に着目してこの問題に対する検討を行う（第一節）。注意と意識の関係は現代の認知科学や神経科学において大きな議論の的となっているが、神経哲学者のプリンツはそれらの関係性に関して「AIR 理論」と呼ばれる新たな見方を提唱している。意識の AIR 理論は、「意識の担い手となりうるのは階層的な知覚処理過程のうちで中間レベルに属する表象のみである」とする「意識の中間レベル説」と、「中間レベルの表象が意識的になることにとって、それが注意を向けられることが必要十分である」とする「意識の注意制御説」とによって構成される（第二節）。本章ではこの注意制御説に対する批判的な検討を通じて上述の問題に対するアプローチを行う。第三節では、「意識の周縁は注意の外部にありながらなお意識的である」という点を論証することで、注意制御説の主張する注意の必要性に対する批判を行う。第四節では、注意制御説それ自体は妥当でないとしても、プリンツの議論からはなお「選択的注意は無意識的な情報や背景的な意識的情報を前景化するという役割を果たす」というテーゼを析出することができ、このテーゼは概念的 content と意識経験の内容の距離を埋めるために十分であるという

ことを論じる。

第五節では、第三章で素描した階層的概念主義に立ち戻り、本章の議論を踏まえてその精緻化を行う。階層的概念主義によれば、知覚経験は選択的注意によって構造化されており、対象についての命題的構造をもつ焦点的内容と、そうした命題的構造をもたない周縁的内容に区別される。だが、そうした周縁的内容もなお限定された意味において知覚判断に合理的制約を与えることができる。この意味において、知覚経験は階層的に組織化されつつも、全体として概念的内容を有しているのである。

知覚経験は認知的な判断に対して制約を与えるだけではなく、身体的な行為の形成や制御においても重要な役割を演じているように思われる。こうした知覚経験と行為の関係性をめぐっては、現在、二つの主要な見方が存在している。一方の「二重視覚システム仮説」によれば、われわれの視覚システムは「知覚のための視覚」と「行為のための視覚」という機能的に区別される二つのシステムによって構成されている。他方の「感覚運動アプローチ」によれば、意識的な知覚経験は感覚運動知識に対して構成的に依存している。前者は知覚と行為の機能的分離を強調するものであり、後者は知覚と行為の相互依存性を強調するものである。第八章では、これら二つの理論をめぐる論争を通じて、知覚と行為はどのように関係しているのか、そして、そのなかで知覚の概念的内容はどのように位置づけられるのかを検討する（第一節）。第二節と第三節では、二重視覚システム仮説と感覚運動アプローチのそれぞれについて、それらがどのような理論的内容を備え、どのような経験的知見によって支えられているのかを論じ、合わせて概念主義との関係性について検討を加える。それら二つの理論のうち、本論の擁護する自然化された概念主義と親和的なのは二重視覚システム仮説である。この点を踏まえ、第四節では感覚運動アプローチに対する批判を行う。感覚運動アプローチに対しては、それを支えるとされる経験的証拠に対して別の解釈が可能であり、かつ、他の経験的証拠と不整合をきたすという問題点を指摘できる。この点で、感覚運動アプローチは自らの主張に反して経験的基盤を欠いている。だが、二重視覚システム仮説に対しても感覚運動アプローチから批判が行われている。その批判とは「二重視覚システム仮説は、知覚経験がもつ『現前の感じ』という現象的特徴をうまく捉えられない」というものである。この批判に対して本章では、前章で論じた意識の中間レベル説を援用することで応答を行う（第五節）。以上の議論は二重視覚システム仮説の優位を示すものであり、それを通じて自然化された概念主義に対してさらなる支持を与えるものである。

以上の全八章を通じて、本論は概念主義に対する従来の超越論的な論証の限界を確定し、その限界を克服する自然主義的な論証とその擁護を展開する。本論で展開される議論が妥当なものであるとすれば、知覚経験の概念主義は従来の陥穽を乗り越える堅牢な理論として再構築されることになるだろう。

# 第一部 概念主義の分析的論証

## 第一章 概念主義と非概念主義

### 第一節 知覚経験の内容

本章では、概念主義について論じるために必要とされるいくつかの予備的な考察を展開する。はじめに、本節および次節では、いくつかの鍵となる用語が本論においてどのような意味で用いられるのかを説明する。

#### 1. 1 知覚経験と現象的特徴

まずは「知覚経験」という用語である。本論では、何らかの心的状態が意識的なものであることを、それが知覚経験であるための必要条件として考える。知覚経験が意識的なものであるとは、それが何らかの現象的特徴を有しているということである。ネーゲル (Nagel 1974) の有名な表現を援用すれば、ある知覚経験が有する現象的特徴は、主体にとって「何かを知覚するとはどのようなことか (what it is like to perceive something)」という言葉によって表現される。私が目の前に置かれた赤い物体を見ているとき、私はその物体を見ることに特有な「質的な感じ」——たとえば赤色という性質に特有な感じ——を享受している。感覚を通じてこのような質的な感じを享受することが、何かを現象的特徴をもったものとして知覚的に経験することなのである。

知覚経験を意識的なものに限定するという制約は、「何かを知覚している状態はすべて意識的なものである」という知覚に関する素朴な理解からすると冗長に思われるかもしれない。われわれは、眼を開けば眼前に広がる光景を意識し、何かに指先で触れればそのものの感触を意識し、何かを頬張ればその何かに特有な味を意識する。それゆえ、感覚的に何かを知覚している状態にあることと、その状態が意識的なこととは相即不離であるように思われる。しかしながら、感覚的な処理を通じて形成される知覚状態のなかには、現象的特徴を欠いており、それゆえ意識的な気づきを伴わないものが存在する。第七章で見ると、盲視 (blindsight) や視覚失認 (visual agnosia) と呼ばれる視覚障害の患者においては、外界から視覚器官を通じて対象についての情報を受けとっており、かつ、その情報が認知システムや行動システムに何らかの仕方で利用可能であるにもかかわらず、その情報を担っている心的状態をしかるべき現象的特徴をもつものとして享受できない場合がある。たとえば、視覚形態失認と呼ばれる障害を負った患者は、対象をその形に応じて成功裡に掴むことができるにもかかわらず、その対象がどんな形をしているかについて意識的な視覚経験をもつことができない。このことは、知覚情報が意識的に経験されることなしに行動に利用されうるということを示している。また、同様の事態は視覚障害患者だけではなく健常な視覚者においても生じうる。たとえば、第七章で取りあげる、閾下知

覚（subliminal perception）や注意の瞬き（attentional blink）と呼ばれる現象では、ある呈示刺激を被験者が視覚的に気づくことができないにもかかわらず、その刺激に対する認知的な処理が行われているということが示されている。このように、知覚状態は現象的特徴を欠いたままでも成立しうるものであり、必ずしも意識的な知覚経験を構成するわけではない。それゆえ、知覚経験という概念の適用範囲を意識的なもののみに制限するのは、単に同語反復的な表現を弄することではなく、実質性をもった規約を導入することなのである<sup>1</sup>。

以上のように、本論において、知覚経験という概念は何らかの現象的特徴を備えた意識的な心的状態を指すものとして用いられる。だが、感情経験や想像経験、あるいは夢の経験も同様に何らかの現象的特徴を伴いうる<sup>2</sup>。それゆえ、それが知覚経験であるためには、単に現象的特徴を備えた心的状態であるだけでは十分ではない。ある心的状態が知覚経験であるためには、何らかの現象的特徴を備えていることに加えて、それが感覚（sense）の働きを通じて形成されたものである必要がある。

では、感覚という概念はどのように規定されるのだろうか。感覚は、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の五つの感覚様相（いわゆる五感）に加えて、運動感覚や固有受容感覚といった他のいくつかの感覚様相を構成要素とする。各感覚様相は主体が有する知覚経験の形成に対してそれぞれ独自の寄与をなし、それぞれ固有の現象的特徴に対応している。ただし、各々の感覚様相が従事するのは単一の種類の現象的特徴であるとは限らない。たとえば、視覚は色や形、肌理、傾き、運動など、複数の種類の現象的特徴に関わっている。

ここではプリンツの考察に従って、各々の感覚様相を「専門化された入力システム（dedicated input system）」（Prinz 2002, p. 115）と定義しておこう。感覚様相がシステムであるとは、各々の感覚様相がそれ固有の神経経路に従った情報の変換と処理を行うことを意味する。別言すれば、各々の感覚様相はそれ固有のモジュール化された神経機構によって担われているのである<sup>3</sup>。感覚様相は刺激を受けとる受容器（必ずしも一つの様相に一つとは限らない<sup>4</sup>）を備えており、そこで受容した信号はその種類の情報に特化した脳内の神経細胞ネットワークによって処理される。感覚様相がどのような基準によって個別化されるかは現在も論争の続いている問題であり、それが神経経路の個別化基準と一致するかどうかは未解決である。だが少なくとも、感覚は何らかの固有の神経経路（ないしは神

<sup>1</sup> 実際、クラークやピリシンは「経験」という語を意識的なものに限定せずに用いている（Clark 2000; Pylyhsyn 2007）。

<sup>2</sup> ただし、感情に関するいわゆる「ジェームズ＝ランゲ説」を採用するならば、感情経験は知覚経験と異なるものではなく、むしろその一種であるとも考えることもできる（Prinz 2004, p. 120）。ジェームズ＝ランゲ説に対する一つの解釈によれば、感情とは自律神経系や内分泌系における変化によって引き起こされるさまざまな身体状態の知覚であり、それらの身体状態を感覚的に表象することによって生起する。本論では感情経験を主題的に取り上げることはしないが、もしそれを知覚経験の一種であると考えれば、感情が判断に対して理由付与関係に立ちうる限りで、そこに認知的内容を認める「認知主義」に組することになるだろう。

<sup>3</sup> 「モジュール」とは特定の領域に関する計算に特化した処理機構のことであり、他の領域のシステムに対して情報遮蔽性を有する。この概念については Fodor 1983 を参照。

<sup>4</sup> たとえば、視覚様相は異なる複数の受容器を備えているが、だからと言ってそれが単一の感覚様相ではなく複数の感覚様相の寄せ集めであるということにはならない。感覚様相を受容器の種類によって個別化することは、感覚様相を過度に細分化してしまうという結果を招くことになるだろう。

経路群)によって担われており、ある二つの感覚様相が互いに異なるならば、それらの各々に対応する神経経路にも何らかの違いが存在するという点に異論はないだろう<sup>5</sup>。

次に、感覚様相が入力システムであるとは、それが脳の外部から何らかの刺激を受容するシステムであることを意味する。感覚刺激は視覚や聴覚のように身体外部の環境からか、あるいは固有受容感覚のように身体内部から生じる。いずれにせよ、それが感覚であるためには、何らかの仕方でその処理が入力刺激に対応するかたちで駆動するものであることが必要である。換言すれば、感覚システムはいわゆる「データ駆動型 (data-driven)」のシステムでなければならないのである。知覚経験と想像経験や夢の経験とを区別する一つの基準は、それがこのように外部刺激に応じて駆動する経験であるか否かという点である。知覚経験が成立するためにはそれを引き起こす直近の外部入力が必要であるのに対し、想像経験や夢の経験をもつためにはそうした入力は必ずしも必要ないのである。

最後に、感覚様相が専門化された入力システムであるとは、感覚様相が各々に特有な入力刺激のクラスに対して調整されているということの意味する。たとえば、視覚は光の波長に対して感受性を有しており、聴覚は音の周波数に対して感受性を有している。視覚や聴覚を光や音以外の刺激によって駆動させることも可能であるが(たとえば、閉じた瞼を上から押すと光知覚が生じる)、ここでの論点はそれらが特定の刺激クラスに反応することを機能とするように(たとえば進化の過程によって)調整されているということである。たとえ視覚システムが触刺激に対して反応することがあるとしても、それはそうしたタイプの刺激に反応することを機能としてもっていることを意味するわけではない。視覚は光刺激の処理に特化したシステムであり、触刺激の処理に特化したシステムではないのである。このように、感覚とは「脳の外部から与えられた特定の刺激クラスに対して処理を行うように調整されたシステム」であると規定することができる。

以上の論述では、本論において知覚経験という用語がどのような意味で用いられるのかを説明してきた。知覚経験とは、(上述のように規定される)感覚の働きを通じて形成される、何らかの現象的特徴を備えた意識的な心的状態である。

## 1. 2 知覚内容と正合条件

次に、知覚経験が「内容」をもつということの意味も明確化しておこう。知覚経験は感覚刺激の受容を通じて形成されるものであり、その刺激に関連する何らかの内容を有している。一般に、「内容」という語には二つの用法が存在する (Siegel 2005)。第一に、たとえば「コンテナの内容」と言う場合、その表現はコンテナの内部空間に収納されているものを指す。これは「内容」という語を空間的な意味で用いる場合である。第二に、たとえ

---

<sup>5</sup> もし二つの知覚経験において、その各々の基盤となる神経経路にいかなる物質的な違いも存在しないにもかかわらず、それらの様相に何らかの違いが生じるとすれば、このことはスーパーヴィーニエンスの原理に反することになる。それゆえ、感覚様相の違いが神経経路の違いを含意しないと考える者は、反物理主義的な立場にコミットせざるを得なくなるだろう。これは同一様相内での逆転クオリアではなく、様相間での逆転クオリアを認めることにつながる。感覚様相の違いは何らかの機能的な違いを伴うと考えられるため、様相間での逆転クオリアの可能性を擁護することは、同一様相内でのそれを擁護することよりもはるかに困難であろう。

ば「新聞の内容」と言う場合、その表現は新聞記事がどのような情報を伝達しているかを指す。これは「内容」という語を情報的な意味で用いる場合である。内容という語が知覚経験に対して用いられる場合、それは主として空間的な意味ではなく情報的な意味で用いられる。知覚経験の内容とは、われわれの感覚が（知覚者自身の身体を含む）世界からの作用を受けて知覚者へと伝達するものを指すのである。

ここで重要なのは、空間的な意味での内容とは異なり、情報的な意味での内容は、それがその下で「正しい」とされる条件——正合条件（*correctness condition*）と呼ばれる（Peacocke 1992）<sup>6</sup>——を有しているということである。たとえば、今年のノーベル賞受賞者を報じる新聞記事は、それが記述しているところの事態（誰がどの分野のノーベル賞を受賞したか）がこの現実世界において実際に成立している場合、かつその場合に限り正しい記事であるとされる。同様に、知覚経験の内容もそれがその下で正しいとされる何らかの条件を備えている。知覚経験が知覚者に伝達するのは、この条件が現実世界において充足されているということである。換言すれば、知覚経験の内容は、経験それ自体を越えて、世界で何が成立しているかを表象するのである。ただし、ここで表象された内容は必ずしも常に正しいとは限らない。今年のノーベル賞受賞者が記事に記載された人物と異なっていた場合、その新聞記事は誤った内容をもつとされる。同様に、私の経験が崖の上にクマがいるという内容を伝えながら、実際にはその動物はクマではなく大型のイヌであった場合、私は経験によって欺かれたのであり、その内容は正しくなかったということになる。この意味において、知覚経験は世界がどうなっているかを正しく表象しようと同時に、それを誤表象する可能性も有しているのである。

このように正合条件を備えた内容を持つという点で、知覚経験は信念や記憶といった心的状態と一定の類似性をもつ。たとえば、「北極にはシロクマが住んでいる」という信念は、北極にシロクマが住んでいる場合、かつその場合に限り真である。当該の信念は北極にシロクマが住んでいるかどうかによってその真偽が評価されるのである。だが、内容を備えている心的状態がすべて正合条件を有しているわけではない。たとえば、経験や信念と同様に、欲求や意図といった心的状態も内容をもつ。しかし、経験や信念と欲求や意図との間には「適合方向（*direction of fit*）」が異なるという重要な相違点がある（Anscombe 1957; Searle 1983）。たとえば、「南極にはシロクマが住んでいる」という信念は世界がどうなっ

---

<sup>6</sup> ここで「真理条件」ではなく「正合条件」という用語を使用しているのは、真理値を付与することのできる命題的内容をもつということを前提せずに、知覚が何らかの意味論的な制約を備えた内容をもつということを表現するためである。たとえば、似顔絵はそれ自体として真理条件をもっておらず、それゆえその真偽を問うことは意味をなさないが、それでもその似顔絵がモデルとなった人物をどれだけ正確に表象しているか（モデルにどれだけ似ているか）を問うことには意味がある。この点で、似顔絵は世界がどうなっているかに応じて評価される意味論的な条件を備えており、かつ、その条件は真理条件とは異なるものとして理解されるべきである。もちろん、その似顔絵が誰についてのものであるかという作者の信念は真理条件を備えており、かつ、その信念はその似顔絵が誰に対して評価されるべきかを固定することに（さらには、そもそもそれが誰かについての似顔絵として成立していることに）関係しているだろう。しかしこのことは、似顔絵に対する評価が全面的に真偽という点からなされるということを意味するものではない。このように、真理条件は意味論的な条件の下位分類の一つにすぎないため、それが備える内容が命題的なものであるかどうかに係争点であるような心的表象に対しては、より中立的な「正合条件」という用語を適用する方が望ましいのである。



ているかに応じてその真偽が評価され、誤っている場合には世界がどうなっているかに合わせてその内容を改訂することが求められる。この点で、信念は「心から世界への (mind-to-world)」適合方向をもつとされる。他方、欲求は信念とは逆の適合方向をもつ。私が「ペンギンがわが家のペットになる」ということを欲求するとき、私は世界がどうなっているのかを表象しているのではなく、世界がどうなって欲しいかを表象しているのである。ペンギンが我が家のペットではないとき、ある意味では世界の側が間違っているのであり、世界の側が欲求の内容に合わせて変化することが求められている。この点で、欲求は「世界から心への (world-to-mind)」適合方向をもつとされる。欲求や意図も内容を持つという点では経験や信念と同様であるが、その適合方向が逆であるという点で、経験や信念とは異なり正合条件を有してはいないのである<sup>7</sup>。

このように、経験と信念はともに心から世界への適合方向をもち、ともに事実に応じて充足されるかどうか定まる正合条件を有している。端的に言えば、経験と信念はともに世界がどうなっているかを表象するのである。しかし、両者がこのように共通する特徴を備えているとすれば、なぜ両者を別々のものとして措定しなければならないのかが疑問に思われるかもしれない。実際、われわれは通常の場合、経験がもつ内容をそのまま受け入れて知覚信念を形成する。たとえば、山道を歩いていて崖の上にクマがいるということを知覚的に経験した場合、私はその経験がもつ内容と同じ「崖の上にクマがいる」という内容の信念を形成し、危険を避けるために一目散に逃げる態勢をとる。経験の内容は即座に信念の内容に組み込まれ、われわれがどのような行動をとるかに対して影響を与えるのである。このように、経験の内容がそのまま信念の内容になるのであれば、なぜわれわれは信念の内容とは別個に経験の内容を認める必要があるのだろうか。

経験の内容を信念の内容とは別個に認めるべきという論点に対する主要な理由としては次の二つが挙げられる。一つ目は「経験の信念独立性」という特徴である。すなわち、しかるべき状況においては、経験の内容が信念の内容として受け入れられず、両者のあいだに乖離が生じる場合がある、というものである。これは通曉した錯覚図形を知覚している場合を考えれば明らかであろう。たとえば、ミュラー・リヤーの錯視では、物理的に等しい長さの二本の線が、知覚者には互いに異なる長さを持つように見える。このとき、もしそれが錯視図形であることを知覚者がすでに知っているとすれば、知覚者はそれら二本の線が異なった長さをもっていると素直に信じることはないだろう。そして、そのように信じなかったとしても、それら二本の線はなお異なる長さをもつものとして知覚者に現われ続けるだろう。それゆえ、経験の内容と信念の内容は常に同一であるわけではなく、状況に応じて乖離する場合があり、かつ、その場合の経験の内容は信念の内容に従って直ちに改訂されたりはしないのである。このことは、われわれが信念の内容と区別されるものとして経験の内容を認めるべき一つ目の理由を与える。

二つ目は「知覚経験の豊かさ」という特徴である。マクダウェルが指摘するように、知覚経験が備えている内容は、実際に知覚判断によって思考へと取り込まれる以上に豊かな

---

<sup>7</sup> 欲求や意図の場合には「達成条件 (fulfillment condition)」をもつと言われる。志向的内容をもつ心的状態一般に対しては「充足条件 (satisfaction condition)」という用語がしばしば用いられる。

ものである (McDowell 1994, p. 49, n. 6)。たとえば、私が崖の上にクマがいるのを目撃し、「あの崖の上にクマがいる」という判断を形成したとしよう。この時にも、私にはその事実だけではなく、その動物が黒い毛で覆われていることや、こちらをじっと見つめていること、低い唸り声を上げていること、その背後には藪が生い茂っていること、崖の傾斜がそれほど急ではないこと、冷たい汗が背中を流れていることなどが知覚されている。このように、知覚経験は複数の感覚様相を通じて形成されるのであり、その内容の全体は多様な経験内容が複合化されたものとして実現されている。われわれが知覚判断を形成することで取り込むのはこれらの内容のうちの一部にすぎない。それゆえ、知覚信念が知覚経験をそのまま受け入れて形成されるとしても、知覚経験がもつ内容はそのような仕方を取り込まれた内容に尽くされるものではない。このように、経験の内容が信念の内容とは異なる豊かさを備えているということは、信念の内容とは区別されるものとして経験の内容を認めるべきもう一つの理由を与える<sup>8</sup>。

以上のように、知覚経験の内容は信念の内容と同様に正合条件を備え、知覚者に対して世界がどうなっているかを表象する役割を果たす。だが、同じように正合条件を備えながらも、経験の内容は信念の内容に還元されない独立性を有しており、信念の内容とは別個にその存在を認められるべきである<sup>9</sup>。もちろん、それぞれ別個の存在であるとしても、知覚経験の内容と知覚信念の内容とのあいだには密接な関係があることもまた事実である。すなわち、われわれは通常、特に疑うべき理由が存在しない限り、知覚経験の内容の一部をそのまま信念の内容として受け入れ、そうして形成された信念の内容に基づいてさらなる思考や行為を行うのである。

---

<sup>8</sup> 経験の信念独立性という主張に対してはさらに次のような理由も挙げることできるだろう。すなわち、知覚経験がもつ内容には特有の現象的特徴が伴うのに対して、信念の内容はたとえその内容が意識されているとき（つまり、今現在行われている思考の内容となっているとき）にもそうした特徴をもたない、というものである。私が何か赤いものを知覚的に意識しているとき、私の知覚経験は必然的に赤いものに特有の現象的特徴をもつが、私が（目の前に赤いものが存在しない状況で）何かが赤いと考えているとき、私の信念には赤いものに特有の現象的特徴が伴うことはない。もちろん、このときに私が何か赤いものについて考えると同時にそれを視覚的に想像するならば、私の心には赤いものに特有の現象的特徴が伴うことになる。だが、このときに生じる現象的特徴は想像に伴うのであって信念それ自体に伴うのではない。その証拠に、私は「民主主義」や「不完全性」のような現象的特徴を欠いた抽象概念についても、思考を巡らせ、それについての信念をもつことができる。信念や思考の内容にその内容に特有な現象的特徴が伴うとしても、それは同時に行われる他の心的活動に依存して偶然的に生じるにすぎない。このように、経験の内容と信念の内容は、その内容に特有の現象的特徴をそれ自体として伴うか否かという点でも異なるのであり、それゆえ、経験の内容は信念の内容とは異なるものとして認められるべきである。ただし、思考には内語ないしは発話が必ず伴う（あるいはそれらによって構成される）とすれば、思考にはそれらの活動に付随する感覚運動フィードバックが伴うことになり、異なる思考内容には異なる現象的特徴が伴うことになる。だが、たとえそうだとした場合、そのときに伴うのは（たとえば）「赤い」という日本語列の発話に特有な現象的特徴であって、赤いという感覚的性質に特有な現象的特徴ではない。

<sup>9</sup> 加えて言えば、経験の内容は思考の内容から分離しうただけではなく、網膜上の刺激パターンなど、感覚受容器が担う内容からも分離しうる。このことはネッカーの立方体などの反転図形の事例を思い浮かべれば理解しやすいだろう。ネッカーの立方体を見ているとき、私はその図形から相互に反転可能な二つの異なる知覚像を得ることができる。だが、私がいずれの知覚像を経験しているときにも、（固視点が一定であれば）網膜上の刺激パターンは変わらず同一であり続けている。それゆえ、感覚受容器に外界から与えられる刺激情報は、私がどのような知覚経験をもつかを必ずしも決定しないのである。この点について、より詳しくは第五章を参照。

ここで重要なのは、このとき、知覚経験の内容は単に因果的に知覚信念の形成に寄与するだけではなく、同時に知覚信念が備えるべき内容を制約するという点である。たとえば、知覚経験が目の前にリンゴがあることを示しているならば、われわれは「目の前にリンゴがある」という信念を形成すべきであり、「目の前にミカンがある」という信念を形成すべきではない。このように、知覚経験は知覚信念に対して単に因果的な制約を与えているだけではなく、それに対して規範的な制約をも与えているのである。知覚信念は知覚経験から規範的な制約を受け取ることで、自らが備えている内容に対して正当化ないしは理由を与えられる。私が「目の前にリンゴがある」という信念を形成したのは、目の前にリンゴがあることを見ているがゆえにである。

概念主義と非概念主義のあいだの論争は、知覚経験がどのような種類の内容を備えているかについての論争であるだけではなく、信念とのあいだに存在するこうした規範的關係に対してその内容がどのような関わりをもつかについての論争でもある。一方で非概念主義者は、知覚経験は非概念的な内容を含み、かつ、その非概念的な内容が知覚信念に対して規範的な制約を与えることができると主張する。他方で概念主義者は、知覚経験は概念的な内容を含み、かつ、知覚信念に対して規範的な制約を与えることができるのはその概念的な内容のみであると主張する。非概念主義者が概念的でない項によっても合理的制約を与えられるということを認めるのに対し、概念主義者はただ概念的な項のみが合理的制約を与えられると主張するのである。

さて、続いて、当該論争の具体的な展開を見てゆく前に、そもそも当該論争において「概念」という概念がどのような意味をもつものとして使用されているのか——あるいは使用されるべきなのか——を考察しておこう。知覚経験の概念性および非概念性を論じる際に、あらかじめ概念という概念がどのように用いられるかを固定しておくことは重要である。なぜなら、概念という概念の用法が両陣営において異なるとすれば、双方が共通の事柄について議論しているとはもはや認められなくなるからである。それゆえ、続く第二節では、当該論争の文脈に即して「概念」という概念の分析を行いたい。

## 第二節 概念性／非概念性の分析

### 2. 1 フレーゲ的意義としての概念

概念主義と非概念主義の論争において、その概念性および非概念性が問われているのは知覚経験が有する内容である<sup>10</sup>。では、何によって概念的な内容と非概念的な内容の区別は付けられるのだろうか。

「概念とは何か」という問いに対してはさまざまな解答が可能であり（代表的な理論としては、理論説、情報アトミズム、プロトタイプ理論、エグゼンプラー理論などが挙げら

---

<sup>10</sup> ただし、第四章においてわれわれは、概念主義と非概念主義の論争が知覚経験の内容に関するものであるのか、それともその状態に関するものであるのかという点において曖昧性を抱えているという問題を見てゆくことになるだろう。本論が第一に目指すのは、内容に関する概念主義の擁護である。

れる<sup>11)</sup>、それらのうちでどれが妥当であるかについて論者間で明確な意見の一致はみられない。また、どのような特徴を概念にとって本質的なものとみなすかについても論者間で見解は一致しておらず、その結果として、依拠する立場によって概念的なものの外延に違いが生じるという事態が生じている。たとえば、概念と言語の結びつきを本質的なものと捉えるならば、言語使用者の有する心的状態のみが概念的でありうることになり、言語をもたない幼児や動物はそこから排除されることになる。他方、カテゴリー分類という機能を概念にとって本質的なものとみなすならば、行動上の証拠からカテゴリー分類を行っていると解釈しうる動物にも概念的な状態を帰属することができるようになり、概念的なものは必ずしも言語使用者の心的状態には限定されなくなる<sup>12)</sup>。

しかしながら、このことは概念に関して中立的な特徴づけが存在しないということの意味するものではない。そうした中立的な特徴づけの一つは、「概念は思考の構成要素である」というものである。どのような立場に立つ論者においても、「思考が成立しているならば、その構成要素には概念が含まれる」という点に関しては意見の一致が見られる(Prinz 2002, p. 2)<sup>13)</sup>。たとえば、私が「カタツムリは巻貝である」という思考を行うとき、この思考は〈カタツムリ〉と〈巻貝〉という概念をその構成要素として含んでいる。これは〈カタツムリ〉や〈巻貝〉という概念をどのような理論のもとで捉えるかは独立に認めることができる論点である。われわれはこの中立的な特徴づけを出発点として、内容の概念性／非概念性に関する明確化を進めてゆくことができる。なぜなら、概念主義と非概念主義のあいだで争われているのは、「思考や信念の内容が概念的であるのと同じ意味において経験の内容が概念的であると認められるかどうか」だからである。それゆえ、この論争の文脈においては、概念に関してどの理論に立つかを明示的に選択せずとも、思考内容が概念的であることに重要な関わりをもつ諸特徴を同定し、それらの諸特徴が経験内容においても成立しているかどうかを問うことで、経験内容が概念的であるかどうかに関する探究を進めることができる。

ここでの概念性／非概念性の区別は思考の概念性に依拠した相対的なものであり、別の基準に依拠するならば異なる区別が導かれうる。しかしながら、われわれが概念主義と非概念主義の論争を文脈とする限り、概念性の基準として思考のもつ諸特徴に依拠した基準を適用することは十分な妥当性をもつ。それゆえ、われわれは「概念とは何か」という難問に正面から取り組まずとも——この問題にまともに取り組むためにはさらに別の論考を要する——、本論にとって必要十分な仕方で概念性／非概念性を区別する基準を明示化することができる。

---

<sup>11)</sup> これらの理論については Prinz 2002 を参照。また、現代の概念に関する哲学的・心理学的探究を広範に扱ったものとしては Margolis and Laurence 1999 を参照。

<sup>12)</sup> 後にみるように、概念主義者のなかでは、前者の概念理解にはマクダウェル (McDowell 1994) が、後者の概念理解にはマッテン (Matthen 2005) がそれぞれコミットしていると解釈できる。ただし、マクダウェルは自身の概念規定が論争の文脈における要求を満たすための規約的なものであり、実質的な定義を与えるものではないと留保している (McDowell 2009, p. 133)。

<sup>13)</sup> ただし、この主張は「概念はもっぱら思考の構成要素である」ということを含意してはいない。それゆえ、この主張にコミットすることは、概念は経験の構成要素ではないという非概念的な主張を認めることとは独立である。

では、思考内容の概念性に重要な関わりをもつ特徴とは何なのだろうか。この問いに対しては、フレーゲによる意義 (Sinn) と意味 (Bedeutung) の区別に訴えるのが妥当な出発点であろう。フレーゲを意義と意味に関する考察へと導いたのは「同一性言明」に関するパズルである。もし固有名の内容がその指示対象であるとするならば、「明けの明星は明けの明星である」という言明と「明けの明星は宵の明星である」という言明は同じ内容をもつことになる。だが、前者の言明はトリヴィアルに真な内容を表現しているのに対して、後者の言明は「明けの明星」が「宵の明星」であることを知らない者にとっては認識上の価値がある内容を表現している。このことは「明けの明星」と「宵の明星」が異なる内容を表現していることを意味している。ここからフレーゲは、こうした水準の内容を表すために、ある表現の「意味」(＝その表現の指示対象)とは区別される、その表現の「意義」という概念を導入する。意義はその表現の指示対象そのものではなく、その指示対象への経路を定める提示様式 (mode of presentation) である。「明けの明星」と「宵の明星」は同一の指示対象(＝金星)をもつが、その提示様式においては異なるのである。思考や信念の内容はその指示対象のレベルにおいてではなく意義のレベルにおいて個別化されている。それゆえ、われわれは意義によって構成される内容(しばしばフレーゲ的内容と呼ばれる)がどのような諸特徴を有するかを問うことで、思考内容の概念性がどのような基準を有しているかを明確にすることができる。

## 2. 2 概念性の四つの基準

では、フレーゲ的内容はどのような特徴を有しているのだろうか。ここではガンサー (Gunther 2003a, pp. 8-14) の論述に基づき、意義としての内容が有する特徴を次の四つにまとめておこう。すなわち、(1) 合成性 (compositionality)、(2) 認知的意義 (cognitive significance)、(3) 指示決定性 (reference determinacy)、(4) 力からの独立性 (force independence)、である。これらはフレーゲ的内容の特徴づけを論じる際によく取り上げられる標準的なものである。

まずは合成性について説明しよう。合成性とは、複合的な概念的内容はその構成要素からの関数的な操作によって決定されるという特徴のことである。

合成性原理：

もし内容  $c$  が概念的(かつ複合的)であるならば、 $c$  の構成要素は  $c$  を関数的に決定する。

この合成性という特徴は思考や言語がもつ「体系性」や「生産性」に対して説明を与える。たとえば、「ペンギンは眠っている」という言明と「シロクマは走っている」という言明を理解することができる者は、それらと体系的な結びつきをもつ「ペンギンは走っている」という言明と「シロクマは眠っている」という言明も理解することができる。それは、前者二つの言明を理解できているということが、その構成要素から合成される後者二つの言明を理解することができるということを含意するからである。また、われわれが把握でき

る概念は有限であるにもかかわらず、われわれはそこからほぼ無数の新しい思考や言明を生み出すことができる。このことが可能であるのは、たとえ新しい組み合わせの内容であっても、その構成要素となる概念を把握しているならば、当該の内容の意味はそれらの概念のみから合成されうるからである。

この合成性という概念はエヴァンズが概念能力の要件としている「一般性制約 (the Generality Constraint)」(Evans 1982, pp. 100-105) という概念とも密接に関係している。「私の前には赤い四角形がある」という信念を例にとろう。この信念と、たとえば、「私の前には赤い三角形がある」という信念には、〈赤〉という一つの同じ概念能力が行使されている。また、この信念と、「私の前には青い四角形がある」という信念にも、〈四角形〉という一つの同じ概念能力が行使されている。エヴァンズによれば、このように概念能力が他の関連するもろもろの信念において行使可能であることは、それが概念能力であることにとって本質的である。単一の文脈においてしか行使されない一般性を欠いたものは概念能力とは認められない。それゆえ、「私の前には赤い四角形がある」と考えることができる者は、例えば、「私の前には赤い三角形がある」とも、「私の前には青い四角形がある」とも考えることが可能でなければならない。概念能力にはこうした一般性ないしは合成性が備わっているのである。

次に認知的意義の説明に移ろう。認知的意義とは、概念がどのような基準によって個別化されるのかを表す特徴である。ある内容の構成要素である F と G は、それらが同一の事物に述語づけられたときにある人物に対して認知的意義をもたらしうるならば、互いに異なる概念である。換言すれば、ある人物が、同一の事物 a について、それが「F であり、かつ、G でない」と認知的に表象しうるのであれば、それらは異なる概念である。

認知的意義の原理：

もし内容 c が概念的であるならば、c の構成要素である F と G は、ある人物がある事物 a について「a は F であり、かつ、a は G でない」という内容の志向的状态を持ちうる時、異なる概念である。

たとえば、明けの明星が宵の明星と同一であることを知らない人物は、「火星は明けの明星であり、かつ、宵の明星ではない」という内容の信念をもつことができる。それゆえ、〈明けの明星〉と〈宵の明星〉は異なる概念である。この原理はある人物が有する志向的状态が整合的であることを前提としている。仮に、ある人物が矛盾した内容の信念を持つことができるとしよう。その場合、当該の人物は「a は F であり、かつ、a は F でない」という内容の信念を持つことができることになる。これに認知的意義の原理を適用するならば、F と F は異なる概念であるということになり、同一性原理に違反することになる。しかし、同一性原理を放棄することはわれわれの信念体系に——信念体系の維持を困難にするほどの——非常に高い改訂コストを支払うことを要求する。それゆえ、認知的意義の原理を適用すべき人物は、矛盾した内容を許容しないという意味において合理的な人物でなければ

ならないのである<sup>14</sup>。

三番目は指示決定性である。これは意義が指示対象の提示様式であることと関係している。意義としての内容を把握することは、その内容が指示するところの対象や性質、ないしは事態、つまり、その内容の意味論的値 (semantic value) が何であるかを把握することでもある。

指示決定性の原理：

もし内容 *c* が概念的であるならば、主体 *s* は *c* の意味論的値を決定することができる。

意味論的値の決定には、ある内容の指示対象を同定する、分類する、あるいは識別する能力が必要である。ガンサーによれば、この定義に含まれる「意味論的値の決定」という言葉をどの程度の強さで読むかに応じて、当該の原理に関する異なる解釈が導かれる。

- (a) 形而上学的解釈……*s* は *c* の指示対象の本質を知っている。
- (b) 記述的解釈……*s* は *c* の指示対象を位置づける (locate)、ないしは同定する (identify) ことができる。
- (c) 識別的解釈……*s* は *c* の指示対象を識別する (recognize) ことができる。

これらのうち、いずれの解釈をとるかで主体に要求される能力は異なる。形而上学的解釈において必要とされる能力は明らかに言語能力をもった主体にのみ可能であり、おそらくは（指示対象が自然種である場合）科学理論などの高度な知識の習得を必要とする。しかし、この解釈は（たとえば）古代ギリシャ人が〈水〉という概念をもっていなかったということを含意するため、概念性の基準に含めるには強すぎる解釈である。他方、識別的解釈において必要とされる能力はそれほど高度な知性をもたない動物にも所有可能である。なぜなら、ある動物が *c* に対応するあるタイプの刺激に対して弁別的に反応する傾向性を獲得したならば、当該の動物は識別的な意味において指示対象を決定することができると思われるだろうからである。ここで問題としているのが思考や信念の内容に応じた概念性の特徴であることを踏まえるならば、これは逆に概念性の基準に含めるには弱すぎる解釈である。それゆえ、本論では (b) の記述的解釈を採用することにしたい。ただし、ガンサーは考慮に入れていないが、指示対象の「位置づけ」ないしは「同定」が記述的にのみではなく直示的にも可能であるとすれば、この原理は直示的な仕方でも概念が行使される可能性を許容するものとなるだろう。この可能性をさしあたり開かれたものとしておくために、本論ではこの解釈を「記述的解釈」ではなく「同定的解釈」と呼ぶことにしたい。

---

<sup>14</sup> ここでは、合理的な人物が「*a* は *F* であり、かつ、*F* でない」という一つの信念を持つことができないと言われているのみであり、「*a* は *F* である」という信念と「*a* は *F* でない」という別の信念を同時に持つことができないということは含意されていない。認知的意義の原理が適用される主体に合理性が要請されるとしても、その主体においてこれら二つの内容が同時的かつ明示的に意識されておらず、それらから連言的な信念が形成されていないならば、当該の主体がそれらの信念を同時に抱くことは可能性として許容されるのである。

このことを踏まえて指示決定性の原理を再定義するならば、それは以下ようになる。

指示決定性の原理（同定的解釈版）：

もし内容  $c$  が概念的であるならば、主体  $s$  は  $c$  の指示対象を（記述的あるいは直示的に）位置づける、ないしは同定することができる。

指示決定性の原理は、ある内容がその指示対象を誤表象しうるということと結びついている。意義としての内容は指示対象への経路を指し示す道標のようなものであるが、その道標が正しいものであることは必ずしも保証されていない。それゆえ、この原理に従えば、概念的な内容は常に誤りに対して開かれているということになる。

最後に、力からの独立性について説明しよう。力とは、言語の場合、ある文がどのような法（mood）——直説法や命令法——のもとに発話されたかを表す概念である。命題的な心的状態の場合、内容とその内容に対する態度（信念、願望、欲求など）のあいだの区別がこれに相当する。命題的な内容と力とは独立であり、ある内容に異なる力が付与されたとしても、それによって内容それ自体に変化は生じない。

力からの独立性の原理：

もし内容  $c$  が概念的であるならば、 $c$  はその力とは独立に個別化されうる。

命題的な内容が力から独立であることはコミュニケーションの成立において不可欠である。仮に、ソクラテスが偉大な哲学者であると私は信じているが、あなたはそのことを疑っており、互いのあいだで口論を交わしているとしよう。もし内容が力から独立でなかったとすれば、われわれが信じていたり疑っていたりするものは同一の内容ではないということになる。ここから、われわれは互いに別々のことについて口論していたという不合理な帰結が導かれる。このように、同一の内容について人々が異なる態度をとりうるということは、コミュニケーションが成立するために欠かすことのできない条件である。

ここまでで説明した四つの条件（合成性、認識的意義、指示決定性、力からの独立性）は思考の概念性をもつ特徴を必ずしも網羅したものではないが、概念主義と非概念主義の論争において何が概念的であるかを区別する基準として多くの論者が訴える主要な条件である。それゆえ、ある心的状態の内容がこれらのすべてを満たすことができると示されたならば、この論争の文脈においてその内容は概念的なものであると認められることになるだろう。

本節では、本論において何を心的内容の概念性／非概念性を区別する基準であると捉えるかを説明してきた。次章以降、われわれは知覚経験がいかにしてこれらの基準に合う内容をもちうるかを論じてゆくことになる。本章の最後となる第三節では、そうした議論を展開してゆくに先立ち、概念主義に対立する立場である非概念主義を中心に切りあげ、その代表的な論者たちがどのような論拠によって非概念主義を支持しているのかを紹介したい。非概念主義者たちが提起しているそれらの論点は、概念主義者にとって自らの立場が



成功しているか否かを考える上での試金石となるだろう。

### 第三節 非概念主義の諸相

本論が主題とするのは知覚経験の内容に関する概念主義／非概念主義であるが、非概念的内容という概念は知覚経験以外の文脈においてもしばしば使用される。第一に、認知科学において、サブパーソナルな表象状態（たとえば視覚処理の初期過程における神経機能的な状態）が有する内容はしばしば非概念的であると言われる。第二に、認知行動学において、言語をもたない動物の行動を説明するために導入される表象状態の内容もしばしば非概念的であると言われる。これらの意味において表象状態の内容が非概念的であることは、知覚経験の内容が非概念的であることを必ずしも含意しない。たとえば、サブパーソナルな表象内容が非概念的であることを認めたとしても、パーソナルな意識経験の内容が概念的であることを主張するのは十分に可能である。第五章と第六章において、われわれはこれらの意味における表象内容の概念性／非概念性と知覚経験の内容の概念性／非概念性がどのように関係するかを論じることになるが、さしあたり以下でわれわれが扱うのは知覚経験に関して非概念主義を唱えている論者に限定される。

#### 3. 1 知覚の肌理細かさと動物および幼児の知覚

知覚経験に関して「非概念的内容」という概念を知覚の哲学の分野へ最初に導入したのはエヴァンズである（Evans 1982）。エヴァンズはわれわれが何らかの情報を受け取る能力の体系を「情報システム」と呼び、その下位分類として知覚（*perception*）、伝聞（*testimony*）、記憶（*memory*）の三つを位置づける。われわれは感覚器官を通じて情報を収集し（知覚）、コミュニケーションによって他者から情報を受け取り（伝聞）、保持した情報がある時間が経過した後で想起する（記憶）（Evans 1982, p. 122）。エヴァンズによれば、われわれが知覚によって世界から受け取る情報は非概念的なものであり、知覚に基づいた判断においてその非概念的内容は概念的内容へと移行する。

主体が知覚を通じて獲得する情報状態は非概念的である、あるいは、いまだ概念化されていない。そのような状態に基づいた（*based upon*）判断は必然的に概念化を含んでいる。知覚経験から（たいていはいは何かの言語形式において表現される）世界についての判断への移行において、人は基礎的な概念的スキルを働かせるであろう。[...] 概念化あるいは判断の過程は、主体を一種の（非概念的内容をとまなう）情報状態から他の（概念的内容をとまなう）認知状態へと移行させる。（Evans 1982, p. 227）

ここでの「情報状態」とは、世界についての情報を担った何らかの内的状態を指している。

内的状態は、それが運動システムとのあいだに有する系統学的により古いつながりに

よって内容を有しているのだが、そのような生物の場合、当の内的状態はまた概念行使および推論システムに対する入力としても働く。それゆえ、判断は内的状態に基づいている（信頼に足る仕方で行き起こされている）。（Evans 1982, p. 227）

エヴァンズによれば、概念能力をもたない生物においては、情報システムが担う内的な情報状態はもっぱら当該の生物がもつ運動システムへの入力としてのみ機能している。他方で、概念能力を有する生物に対しては、同じ内的状態が、運動システムへの入力として機能するとともに、概念を操作する推論システムへの入力としても機能している。推論システムに利用されるか否かという点で違いはあれ、両者は行動システムへの入力として情報システムを利用しているという点で共通である。この点で、情報システムは推論システムの成立に対して系統的に先立つ「よりプリミティブ」（Evans 1982, p. 124）なものであり、両方のタイプの生物に等しく共有されている<sup>15</sup>。

このように、エヴァンズは知覚を情報システムの働きによる非概念的な情報状態として捉える。知覚的な情報状態は概念能力との結びつきなしに所有可能であり、それゆえ、概念をもたない動物や概念を習得していない幼児も概念をもつわれわれと同じ種類の情報状態をもちうる。むしろ、概念能力をもたない動物や幼児も概念能力をもつ成人と同様に知覚する能力を有しているということは、知覚内容が非概念的なものであることに対する論拠の一つを構成するものと考えられる。もし何かを知覚するためにその内容に対応する概念能力が必要だとすれば、概念能力をもたない幼児や動物は知覚をもたないことになってしまう。この帰結は不合理であるがゆえに、何かを知覚するために概念能力を所有することは必要ではないと考えられるのである。

また、エヴァンズは知覚内容が非概念的であることの別の論拠として、「知覚は一般性をもつ概念によっては捉えられない肌理細かな（fine-grained）内容をもつ」という点を挙げ、次のような修辭的な問いを提起している。「われわれは自身が感覚的に識別可能な色合いと同じだけの色概念をもっているという提案を本当に理解しているのだろうか」（Evans 1982, p. 229）。エヴァンズの指摘によれば、色に対してわれわれが行う知覚的識別はわれわれが有する色概念によって捉えられる内容を超え出ている。ヘックの次のような言葉はこのエヴァンズの論点を明瞭に示している。

いま私の目の前には様々な対象が配置されているが、それらがもつ様々な色と形について、私はいかなる概念ももっていないように思われる。[...] 風が通りすぎる度、窓の外に立つ木々の葉が不規則に揺れ動いているのが私には見える。しかし、それらの

---

<sup>15</sup> この情報システムの「共有」という発想は、少なくとも知覚や記憶の場合には明瞭に理解できるように思われる。だが、それに加えてエヴァンズは、伝聞に関しても、少なくとも人間の場合、概念能力をもつ成人ともたない幼児の双方において当該システムが共有されていると考える。その論点は次の通りである。「それによってわれわれが他者から情報を得るメカニズムが、より洗練された観念の適用可能性に先行して、すでに人間知性の発達段階において働いているのでなければ、われわれはそれを適切に理解できるとは思えない」（Evans 1982, p. 124）。つまり、幼児が概念能力を身に付けることによって他者との言語的なコミュニケーションを行えるようになるためには、概念能力の習得に先立って、すでに伝聞によって利用される情報保有状態が実現されていなければならない、とエヴァンズは考えるのである。

事物についての私の経験は、これよりもはるかに正確にそれらを表象しているように、つまり、私が現在所有している概念に関して、私が自分や他人に向かって表現しうるいかなる特徴づけよりもはるかに弁別的にそれらを表象しているように思われる。ここで問題なのは時間が不足しているということではない。そうではなく、記述的資源が欠如していること、つまり、しかるべき概念が欠如していることが問題なのである。  
(Heck 2000, pp. 489-490)

ヘックによれば、われわれの感覚によってもたらされる知覚経験は、それについてわれわれが行う判断よりもはるかに正確かつ詳細な内容を有している。知覚経験は概念によっては捉えられない肌理細かさをもっているのである。この肌理細かさは、たとえわれわれがもっている概念的資源を適用するための時間が存分に与えられたとしても、決して捉えられることはない。なぜなら、われわれがもっている概念的資源は、そもそもそうした肌理細かさを捉えることができるような種類のものではないからである。

たとえば、われわれが有する〈赤〉、〈緋色〉、〈朱色〉といった色概念はすべて「一般性」を有しており、ある一定の範囲の異なる様々な経験に対して適用可能であることをその本質としている。反対に、われわれの具体的な色経験はある特定の「規定性」を有しており、われわれがもつ色彩語彙によっては捉えられないような、より細かく弁別された事物の特徴をわれわれに対して表示する。私には、目の前の大樹が、風に揺らめいて刻一刻とその色合いを変える無数の葉によって覆われているのが見える。だが、知覚経験が捉えているこの複雑かつ多様な色合いのすべてをわれわれのもつ色概念によって捉えることは不可能であろう。このように、知覚経験が概念によっては捉えられない肌理細かな内容をもつのだとすれば、それは知覚内容を非概念的なものとみなすことへの強い動機づけを与えるように思われる。すなわち、知覚経験の内容は概念がもつ一般性という特徴を欠いているように思われるのである。

以上のように、エヴァンズはいくつかの論拠から知覚内容に関する概念主義的な立場を支持している。ただし、ここで次のことに注意する必要がある。それは、エヴァンズは、情報システムの働きである知覚と、主体の意識的状態である知覚経験とを単純に同一視してはいない、という点である (Evans 1982, p. 157)。たとえば、盲視患者の場合のように、局所的な感覚刺激に対して通常の反応傾向を示しながらも、その刺激に対するいかなる特定の自覚的な意識経験ももっていないということは可能である<sup>16</sup>。それゆえ、単に行動と結びついた知覚的な情報状態が実現されているというだけでは、当の主体が知覚経験を有しているとは言えないのである。知覚が知覚経験となるためには、知覚がもつ非概念的内容が単に運動システムと結びついているだけでなく、さらに推論システムの入力として利用可能でなければならない。つまり、知覚の非概念的内容が思考において利用可能な場合に限り、当の知覚は知覚経験とみなされうるのである。この点は、エヴァンズの立場を

<sup>16</sup> 盲視とは、視覚器官に損傷がないにもかかわらず、大脳の第一次視覚野における損傷によって引き起こされた（部分的ないしは全面的な）盲状態を指す (Weiskrantz 1997)。盲視患者は呈示刺激が見えないと報告するにもかかわらず、その刺激に関する強制選択課題に対して一定程度正確に答えられるということが知られている。

単純に非概念主義という枠組みに収めて理解することが果たして妥当であるかを考察する際に重要な論点となる。この問題については第四章でふたたび触れることになるだろう。

### 3. 2 知覚の改訂不可能性と矛盾許容性

続いて、非概念主義を擁護する議論を展開した別の代表的な論者としてクレインを取り上げよう。クレインが非概念主義を擁護するために提出している議論は「知覚の改訂不可能性」および「知覚の矛盾許容性」という論点からのものである。

まずは知覚の改訂不可能性からの議論である。クレインは、知覚と信念が独立である理由の一つは、知覚が信念とは違って、他の知覚や信念による「改訂可能性」をもたないという点にあると指摘し、次のような議論を展開する (Crane 1992, pp. 151-152)。知覚と信念が共通に持つ特徴として、両者はともに何らかの信念を受け入れることへの動機づけを有しているという点が挙げられる。ある知覚経験はそれに対応するある信念を受け入れることを動機づけ、ある信念（ないしは信念群）はそこから導かれる他の信念を受け入れることを動機づける。しかし、信念がもつ動機づけは、それが誤っているとする何らかの決定的な証拠が示されたならば容易に消え去るのに対し、知覚がもつ動機づけは、たとえ決定的な証拠が示されたとしても消えずに残り続ける。知覚の場合、たとえそれが動機づけている知覚的信念が否定されたとしても、それがもつ動機づけそのものは残存し続けるのである。たとえばミュラー・リヤーの錯視を考えてみよう。その図形を眺めるとき、知覚者は「二本の線分の長さは異なっている」という錯覚的な知覚内容を有する。このとき、物差しによって線分の長さを測ったり、図の矢羽部分を隠したりすることによってその内容が否定され、当該の知覚内容とは別の内容（「二本の線分の長さは同じである」）が知覚者の信念内容となったとしよう。それでもなお、その図形に含まれる二本の線分は異なった長さを知覚的に提示し続けるだろう。このように、信念はそれに反する他の信念や知覚に応じて改訂されうるのに対し、知覚はそうではない。

クレインは、信念や判断ならば当然有している改訂可能性を知覚が有していないということは、知覚の内容が概念的ではないということの証左であるとみなす。前節の合成性原理の箇所述べたように、信念は概念をその構成要素としており、概念がもつ合成性という特徴のゆえに、他の諸信念とのあいだに体系的な結びつきを有している。クレインによれば、このような体系的な結びつきは信念同士のあいだの推論関係として捉えることができる。すなわち、しかるべき信念同士のあいだには（適切な補助信念のもとで）一方が他方の前提ないしは結論になるという関係が成立しており、そうした個々の推論関係が織り合わされることで信念体系が構成されているのである。証拠に対する改訂可能性はこのような推論関係に基づいている。したがって、もし知覚が概念をその構成要素としてもつならば、それは信念と同様に証拠に対する改訂可能性をもつはずである。だが、上述のように、実際には知覚は改訂可能性を欠いている。それゆえ、知覚の内容は概念を構成要素とするものではないと考えられる<sup>17</sup>。

---

<sup>17</sup> 正確に言うならば、以上の議論は推論関係を用いて非概念主義を擁護するクレインの議論の一部ではない。クレインは概念的な項のあいだに成立する推論関係として、証拠関係だけではなく「演繹関係」

次に知覚の矛盾許容性からの議論である。クレインは「滝の錯視 (the Waterfall Illusion)」と呼ばれる錯覚経験を例にとって、「知覚は信念とは異なり矛盾した内容を許容しうる」と主張する (Crane 2003, p. 232) <sup>18</sup>。滝の錯視は「運動残効 (motion aftereffect)」と呼ばれる錯視の一種である。流れ落ちる滝をしばらく眺めた後に、静止した岩へ素早く視線を向け変えると、その静止しているはずの岩は滝の動きとは逆方向に動いていくように、つまり上昇していくように見える。クレインは、このとき、岩は静止していると同時に運動しているように見えると主張する。つまり、滝の錯視には矛盾した内容が含まれているように思われるのである。

ここに含まれているとされる矛盾は、ミュラー・リヤーの錯視に含まれている矛盾とは異なるということに注意されたい。ミュラー・リヤーの錯視においては、「二本の線分の長さは等しい」という信念内容と「二本の線分の長さは異なっている」という経験内容とのあいだに矛盾が存在するのに対し、滝の錯視においては、「岩は静止している」と「岩は運動している」という矛盾関係を結ぶ二つの項は、相ともなって一つの知覚経験の内容を構成している。滝の錯視における矛盾は、信念内容と知覚内容とのあいだにではなく、一つの知覚内容のなかに含まれているのである。

もし滝の錯視が実際にこのような「ある対象は運動し、かつ同時に、運動していない」という矛盾した内容をもつのであれば、このことは知覚経験の内容を非概念的なものとみなす見方に対して支持を与えるように思われる。なぜなら、知覚経験の内容が矛盾を許容するようなものであるならば、その内容は概念性の基準の一つである認知的意義の原理と齟齬をきたすことになるように思われるからである。仮に、知覚経験の内容が概念的なものであり、認知的意義の原理が適用可能であるとしよう。このとき、滝の錯視の事例を踏まえるならば、知覚経験の内容においては、同一対象に対してある述語 (=運動している) とその否定となる述語 (=運動していない) が同時に適用可能である。もし知覚に認知的意義の原理が適用可能であるとすれば、ここから〈運動している〉という概念はそれ自身と異なる概念であるということが導かれる。これは同一性原理に違反した不合理な帰結であるがゆえに、知覚経験の内容に対しては認知的意義の原理は適用可能ではないということになる。以上のように、知覚経験の内容は矛盾を許容するものであるがゆえに、概念性の基準の一つである認知的意義の原理に反しており、それゆえ非概念的なものであるように思われるのである。

---

と「意味論的關係」も含まれると述べており、知覚に対しては証拠關係だけではなく後者二つの關係も成立しないと論じている (Crane 1992, pp. 152-154)。演繹關係とは、しかるべき項同士のあいだで演繹的推論が成立するという關係であり、意味論的關係とは、(たとえば、「チーズは栄養価が高い」という信念を所有する者は「チーズは食べられる」という信念をもっていなければならないというように、) しかるべき項同士のあいだに (論理的關係によらず) 意味的なつながりによって成立する關係である。クレインによれば、知覚同士のあいだにはこれらいずれの關係も成立しておらず、それゆえ知覚経験は非概念的である。

<sup>18</sup> より正確を期すならば、このクレインの主張は「知覚は、それが概念的内容であるとすれば矛盾に陥るような内容を許容しうる」あるいは「知覚は、それが概念化されたときに矛盾に陥るような内容を許容しうる」と換言されるべきであろう。

### 3. 3 知覚の文脈依存性と記憶からの論証

非概念主義を支持するその他の代表的な議論としてはケリーやマーティンによるものが挙げられる。

ケリーは知覚内容が「文脈依存的」であるという点から知覚内容の非概念性を主張している (Kelly 2001)。例えば、知覚の恒常性現象において、われわれは一樣な壁面上の異なった照明状況下にある諸部分を同一の色として知覚する。ケリーによれば、この壁面上の諸部分間の差異は、色に関する差異ではなく (色は恒常的であり同一である)、それがどのような文脈——この場合は照明状況——に置かれているかに関する差異である。それゆえ、単なる色概念によってその差異を捉えることはできない。ケリーは、こうした文脈依存的な内容はいかなる概念によっても捉えられないがゆえに、知覚経験の内容には非概念的な要素が含まれると主張する。ここで注意すべきは、ケリーは知覚経験が全面的に非概念的な内容によって占められていると主張しているわけではないという点である。ケリーの議論が正しいとした場合、そこから導かれるのは、たかだか、知覚経験には少なくとも部分的に非概念的な内容が含まれるという主張のみである。それゆえ、ケリーの主張と正面から対峙するのは、知覚経験は全面的に概念的な内容をもつという立場のみである。

マーティンも同様に知覚経験には非概念的な内容が部分的に含まれるという見方を支持する議論を展開している (Martin 1992)。マリーという女の子が正八面体のサイコロと正十二面体のサイコロを使ってボードゲームで遊んでいるとしよう。マリーはまだ幼いため、正六面体を超える面をもつサイコロは区別できず、正八面体と正十二面体のサイコロを同じように「たくさんの面をもつサイコロ」として扱っている。マリーはそれらの形や色の違いを見てとることはできるが、正十二面体なら正十二面体だけを個別化しうるような概念を備えてはいないのである。さて、今やマリーは成長し、正十二面体の概念を習得したとしよう。マリーは以前にサイコロを振ってゲームをしていた記憶を想起し、それが正十二面体のサイコロであったということに気づいた。マーティンによれば、このことが示しているのは、マリーがゲームをしていた時の経験はそのサイコロを正十二面体として提示していた、ということである<sup>19</sup>。しかし、マリーがその経験を享受した時点では、彼女は正十二面体の概念を所有していなかった。だとすれば、その経験は非概念的な内容を有していたと考えるべきであろう。もちろんこの議論は、たとえそれが成功していたとしても、その経験が有するすべての内容が非概念的なものであることを示すものではない。この点で、ケリーとは異なる側面においてはあがあるが、マーティンも知覚経験が部分的に非概念的な内容をもつという見方を支持していると考えられる<sup>20</sup>。

<sup>19</sup> ここでマーティンは「記憶が誤ったものでない限り、記憶の内容に関する想起判断 (「私は十二面体のサイコロを投げていた」) は過去の知覚の内容にも妥当する」ということを前提としている。また、マーティンは概念の習得によって過去の記憶に微妙な変化が生じる可能性があることを認めているが、マリーの事例に関しては——概念主義にコミットする以外に——そうした可能性を肯定すべきアプリアリな理由はないと述べている。

<sup>20</sup> ただし、いかなる感覚的特徴についても、それに対応する概念の習得に先立って、われわれがそれを他の感覚的特徴と知覚的に識別するという点が論証されたとすれば、マーティンの議論は知覚経験が全面的に非概念的な内容をもつという点を支持するものへと拡張されることになる。

### 3. 4 シナリオ内容と原命題的内容

さて、非概念主義を支持する代表的な論者の一人として最後にピーコックを取りあげよう。ピーコックは他の多くの非概念主義者たちとは異なり、知覚経験のもつ非概念的内容とはどのようなものであるかに関する描像をかなり詳細に記述している (Peacocke 1992; 1995)。

ピーコックは概念の所有条件を特定するというプロジェクトの一環として知覚経験の非概念的内容の問題に取り組んでいる。ピーコックの提案によれば、知覚経験の内容は、知覚者を取り巻く空間内の各点（知覚者が識別可能な最小限の点の各々）に対して、その点に有する感覚的諸性質の値を特定してゆくこと——ピーコックはこの作業を「書き込み (filling out)」と呼ぶ——によって与えられる。この作業の第一段階は、知覚者の身体に対して原点と座標軸を固定することである。たとえば、原点を知覚者の胸の中心に固定し、その原点に対して前後／左右／上下という三つの座標軸を設定することで、知覚者の自己中心的空間における各点をそれらと相対的に位置づけることができる。第二段階は、第一段階で設定した原点からの距離と方向によって規定される各点に対して、そこに表面が存在するかどうか、存在するならどのような勾配、肌理、明度、彩度、輝度、等々をもっているかを特定することである。知覚者の表象内容は、知覚者の自己中心的空間のすべての点に対して、感覚的諸性質に関する書き込みがどのように行われるかを特定することで与えられる。ピーコックによれば、この書き込み作業を行う上で使用される概念は、知覚者自身がもつ概念の範囲に限定される必要はない。知覚経験の内容の特定は三人称的な仕方で行うことができるのである。

ピーコックはこのタイプの非概念的内容を「シナリオ内容 (scenario content)」と呼ぶ。シナリオ内容は知覚経験の内容に必要なとされる正合条件を備えている。

シナリオ内容の正合条件：

時点  $t$  において知覚者  $p$  が有するシナリオ内容  $c$  が正しいのは、 $t$  における  $p$  の周囲の現実世界が  $c$  と整合的な在り方をしているとき、かつそのときに限る。

ピーコックは知覚者の周囲世界の実際の在り方を「シーン」と呼ぶ。ある時点における知覚内容が正しいのは、当該の時点におけるシーンがシナリオの内容通りのものであるとき、かつそのときに限られるのである。

シナリオ内容は概念的内容によっては獲得不可能であると考えられるいくつかの特徴を備えている。その一つは（エヴァンズの立場を紹介する際に登場した）知覚経験の「肌理細かさ」を捉えることができるという特徴である。シナリオ内容は詳細な書き込みを行うことによって特定されるものであり、知覚経験が備えるその肌理細かさをまさに知覚経験と同等なレベルで捉えることができると考えられる。ただし、エヴァンズやヘックが知覚経験の肌理細かさを概念によって把握不可能なものである——知覚内容は徹頭徹尾「思考可能 (thinkable)」であるわけではない——と考えたのに対して、ピーコックはシナリオ内容がそれと同等の詳細さをもつ概念的資源によって把握可能である——知覚内容は原理

的には思考可能である——と述べている。この点で、知覚の肌理細かさに関するピーコックの議論はエヴァンズやヘックの議論と比べると弱いものになっている。ピーコックの議論は、シナリオ内容は概念的資源によって特定不可能だというものではなく、概念的資源によって特定可能であるが、このことはそうした概念的資源が知覚者の表象内容の構成要素であることを意味しない、というものである。シナリオ内容それ自体はある種のタイプであり、無数の仕方で概念的に記述可能であるが、それらの記述と同一ではない。あるシナリオ内容を知覚経験の内容としてもつためには、その内容の記述に必要とされる概念を備えている必要はないのである。むしろ、シナリオ内容の特定には高度な概念的資源が必要であり、普通の知覚者はこうした概念的資源を有していない。この点で、シナリオ内容は知覚者自身が所有している概念によっては特徴づけることのできない内容を備えているのである。

シナリオ内容が備える別の重要な特徴は、それが非循環的な仕方で概念（特に観察可能な性質に関わる概念）の所有条件を与えるという役割を部分的に担うことができるということである。たとえば、正方形（square）という概念の所有条件の一部は正方形に対応するシナリオ内容に言及することで与えられる。それは、シナリオ内容がその内容に対応する概念の所有を前提せずに獲得可能だからである。反対に、もし知覚経験が概念的であるならば、それはある観察的概念の所有条件を循環的にしか与えることができないだろう。それゆえ、概念的内容をもった知覚は概念に基礎づけを与えるという知覚のもつ重要な役割を果たしえないように思われる。このことは、知覚経験の内容が非概念的であるという見方を支持する別の論拠を与える<sup>21</sup>。

ただし、正方形に対応するシナリオ内容はそれだけでは正方形という概念の所有に必要な内容の全幅を与えることはできない。なぜなら、当該のシナリオ内容は正方形が知覚者に対してどのように現れるかを完全に特定するものではないからである。たとえば水平軸に対して 45 度傾いた正方形を考えよう。この図形は傾いた正方形としても正立したひし形（diamond）としても知覚することができる。そして、そのどちらとして見るかに応じて知覚者が経験する見え方も異なる。だが、当該の図形をこれらのいずれの仕方で見の場合でも、それらに対応するシナリオ内容は同一である。ここでピーコックはシナリオ内容に加えて「原命題的内容（proto-propositional content）」という別の種類の非概念的内容に訴える。原命題的内容は対象や性質、ないしは関係を含んだ内容である。原命題的内容には、たとえば、〈正方形である〉〈ひし形である〉〈平行である〉〈等距離である〉〈対称的である〉などといったものが含まれる。これらの性質や関係はシナリオ内容のなかの位置や線分、領域などにあてはまるものとして表象される。この原命題的内容を援用することで、われわれは正方形とひし形の知覚経験に関する現象学的な違いを捉えることができる。すなわち、当該の図形を正方形として知覚するときには、知覚者はそれを辺の二等分線に

---

<sup>21</sup> ただし、ピーコックは非概念的内容に関する自律性テーゼ——主体はいかなる概念も所有することなしに非概念的内容を備えた状態にあることができる——を否定し、「シナリオ内容を外界のなかに位置づけるためには、主体は場所の再認に関わるような原初的な一人称的概念を所有していなければならない」という「局所的全体論（local holism）」を主張している（Peacocke 1992, pp. 90-91）。このように、概念の基礎づけに関するピーコックの見方は実際にはそれほど単純ではない。



対して対称的なものとして捉えるのに対し、ひし形として知覚するときには、角の二等分線に対して対称的なものとして捉えるのである。ただし、シナリオ内容と同様に、知覚者はこうした原命題的内容を特定する際に使用される概念を所有している必要はない。それゆえ、原命題的内容もシナリオ内容と同じ意味において非概念的な内容の一種である。以上のように、ピーコックは知覚経験がもつ非概念的内容をシナリオ内容と原命題的内容という二つの概念装置をもちいて描き出すのである。

以上が非概念主義を支持するためにこれまで提起されてきた主要な論証である<sup>22</sup>。これらの論証に対して概念主義の立場から適切な反論を構成できるかどうかは、概念主義が成功しているかどうかを判定する上で有効な試金石となるだろう。ここでそれらの論証を整理しておこう。

(1) 動物や幼児の知覚からの論証：

概念をもたない動物や概念を獲得していない幼児も概念をもつ成人と同じ種類の知覚内容をもつことができる。それゆえ、知覚経験の内容は非概念的である。

(2) 知覚の肌理細かさからの論証：

知覚経験の内容は信念の内容よりもはるかに肌理細かく、概念がもつ一般性を欠いている。それゆえ、知覚経験の内容は非概念的である。

(3) 知覚の改訂不可能性からの論証：

知覚経験の内容は信念の内容とは異なり証拠に対する改訂可能性をもたない。それゆえ、知覚経験の内容は非概念的である。

(4) 知覚の矛盾許容性からの論証：

知覚経験は信念とは異なり矛盾した内容を許容する。それゆえ、知覚経験の内容は非概念的である。

(5) 知覚の文脈依存性からの論証：

知覚経験の内容の一部は文脈依存的であり、この内容は概念によっては捉えられない。それゆえ、知覚経験には非概念的な内容が含まれる。

(6) 記憶の概念独立性からの論証：

記憶の内容の一部はそれに対応する概念能力を主体が有しているかどうかとは独立に獲得されうる。それゆえ、記憶の内容の一部は非概念的であり、それに情報を与える知覚の内容の一部も非概念的である。

(7) 概念の基礎づけからの論証：

知覚経験が概念的内容をもつとすれば、それは知覚経験が有する概念の基礎づけという役割を説明することができない。それゆえ、知覚経験の内容は非概念的である<sup>23</sup>。

---

<sup>22</sup> 非概念主義をめぐるにはその他にも多数の論者がそれを支持する議論を展開している。代表的な論文は Gunther (ed.) 2003 に収録されているが、その後に提出された議論のいくつかについては本論のなかで取り上げる。

<sup>23</sup> こうした論証を行っている論者として本章ではピーコックを取りあげたが、ヘックも同様に概念の基礎づけは非概念的内容を要請するという議論を行っている (Heck 2000, p. 492)。ヘックによれば、われ

本節では、非概念主義の側がどのような論拠によって自らの立場を擁護しているかを概略的に描き出してきた。次章以降、今度は概念主義の側へと視点を移し、その主張がどのような理路によって導き出されるのかを検討していく。次章では、まず概念主義者の嚆矢であるマクダウェルの論証を取り上げる。

---

われが概念（特に直示的な要素を含んだ概念）をもっていることに対して説明を与えるのは、われわれがしかじかの内容を備えた経験を享受しているということである。このとき、当該の説明役割を果たすためには、経験が備える内容は被説明項である概念を前提としたものであってはならない。それゆえ、経験の内容は非概念的なものでなければならない。

## 第二章 マクダウェルの概念主義

### 第一節 経験的信念の不可能性というアポリア

知覚経験と知覚信念のあいだには単なる因果関係ではなく規範的な制約関係が成立している。知覚経験は何が事実であるかを知覚者へと伝達することで、その内容に対応した知覚判断に正当化を与えるのである。マクダウェルはこの知覚と判断のあいだに認められる規範的關係から出発して概念主義を擁護するための議論を展開する。すなわち、マクダウェルによれば、知覚経験が知覚信念を正当化しうるものであるためには、知覚経験の内容は概念的なものでなければならないのである。

では、なぜそもそも知覚経験と知覚判断のあいだに規範的關係が成立していると考えなければならないのだろうか。それは、もし両者のあいだに規範的關係が成立しえないとすれば、そこから「われわれが実在に應じた内容を有する経験的信念をもつことは不可能である」というアポリアが導かれてしまうからである。前節でわれわれは、信念や判断はその本質的特徴として「改訂可能性」を備えているというクレインの見解に触れた。この改訂可能性という特徴をわれわれの信念体系が備えていることは、実在する世界に対して適合可能であるという特徴を信念がもつために不可欠である。すなわち、われわれの信念体系が世界の在り方に適合しうるものであるためには、その信念体系の一部が世界の実際の在り方と食い違っているという証拠が示された場合に、信念体系が全体として証拠に適合しうるように、主体の側にそれを修正する用意がなければならないのである。ここで信念体系に対して世界の在り方を提示する役割を担うのが知覚経験である。クワインの言葉を援用するならば、信念体系は知覚を通じた「経験の裁き (the tribunal of experience)」(Quine 1951) に対して応答することができなければならないのである。仮に、信念体系がこうした改訂可能性をいささかも示さないとしてみよう。このとき、経験の裁きによってある信念が偽とされたとき、当該の主体はその経験ののちにも自らの信念体系をいささかも修正することがないだろう。われわれは、こうした主体が行う思考を実在の在り方に応答するものとみなすことはできない。主体がもつ信念と実在とのあいだに食い違いが生じたならば、それが経験的な信念である限り、その信念（あるいは全体論的に結びついた関連する他の信念）は何らかの仕方で改訂されなければならない——あるいは、その不整合に対して少なくとも何らかの対処が行われなければならない<sup>24</sup>——のである。このように、知覚経験と知覚判断とのあいだに規範的關係が成立していることは、われわれが経験的信念を所有しうるための不可欠の条件なのである。

信念とのあいだにこのような規範的關係を取り結ぶことで、経験はわれわれの信念体系

<sup>24</sup> そうした対処はたとえば自己欺瞞という形をとることもあるだろう。自己欺瞞は、証拠という観点からすれば信じざるを得ない信念に対して、当該の信念を抑制し、それとは反対の信念を信じることによって不整合に対処しようとするものである。これは証拠という観点からすれば不合理なものであるが、それでも不整合に対して何らかの対処をしようとしているという点で、当該の主体が実在に対して応答を示している一つの事例であると言える。

に対する裁きとしての役割を演じ、われわれの信念体系が世界に対する応答可能性をもつことを可能にする。われわれの信念体系が世界に応答することができるというこの考えは、われわれにとって「デフォルト」(Gaynesford 2004, p. 4) となる見方を構成するような常識的なものである。このデフォルトとなる見方を、マクダウェルはしばしば「われわれの心は世界へと開かれている」と表現している。この見方によれば、われわれは経験において実在へと開かれており、その「開かれ (openness)」のおかげで思考は実在に係留されることができるのである。

だが、マクダウェルによれば、経験に対する従来の考え方は、「われわれの心は世界との繋がりをもちうる」というこの常識的な見方に対してある種の不安を生じさせる。その不安とは、「心と世界の関係をめぐる、近代哲学に特徴的な不安」(McDowell 1994, p. vi) である<sup>25</sup>。

「経験的内容 [= 経験的思考の内容] はそもそもいかにして可能か」と問いたくなる経緯を明確化することで、近代哲学の中心的前提のいくつかを理解できる [...]。というのもその問いは、われわれの思考の適否に関して、果たして自分たちの知性活動が実在にどこまで応答しうるのかということ——つまり、そうした活動がそもそも思考であると認められるための要件——への不安を表明するものだからである。(McDowell 2000a, p. 3)

『心と世界』においてマクダウェルが試みるのは、この不安が喚起する「オブセッション」を診断的精神の下で治癒することである<sup>26</sup>。マクダウェルの診断によれば、この経験的信念の可能性に対する不安は、心と世界のあいだに架橋すべき断絶があると告げることで、それを埋めるために何らかの理論を構築しなければならないというオブセッションを喚起する。これに対してマクダウェルは、この不安が実際には誤った前提（「近代哲学の中心的前提」）に基づいたものであると診断を下すことで、断絶を埋めなければならないという責務が見かけ上の錯覚にすぎないことを示す。言い換えれば、『心と世界』におけるマクダウェルの目的は、心と世界のあいだに存在する断絶を架橋することにではなく、そこにはそもそも架橋すべき断絶など存在しないということを露呈させることに存するのである。

マクダウェルが治癒しようと試みる不安は、ある一組の考え方が生じさせる二律背反にその源泉をもつ (McDowell 2000a, p. 4ff)。それらの考え方のうち、一方は経験的思考の

---

<sup>25</sup> マクダウェルが「近代哲学」によって意味するのはデカルト以降の哲学的伝統である。ただし、マクダウェルが『心と世界』で取り組んでいる不安はデカルト的な認識論的不安——「経験的知識はいかにして成立可能か」という懐疑に起因する不安——ではなく意味論的不安——「そもそも経験的思考はいかにして成立可能か」という懐疑に起因する不安——である。コナントは前者の懐疑を「デカルト的懐疑」、後者の懐疑を「カント的懐疑」と呼んで区別している (Conant 2012)。もっとも、マクダウェルがカント的な懐疑に着目するのは、それに正面から応答するためではなく、その懐疑を喫緊なものと感じさせる暗黙の前提を掘り崩すためである。

<sup>26</sup> マクダウェルはこうした「治癒としての哲学」という哲学観を後期ウィットゲンシュタインより継承している。

内容が存在するための要件を与えるが、他方はその要件が満たされえないという宣告を下す。その一対の考え方とは次の二つである。

- (1) 経験的思考の内容は実在する世界の在り方に対して合理的な応答可能性をもつ。
- (2) 実在が主体に与えるところの印象——それが知覚経験を構成する——は一種の自然現象である。

これら二つの考え方は、(1) 心と世界の関係性は心の側からすればどのようなものでなければならないか、(2) 心と世界の関係性は世界の側からすればどのようなものでなければならないか、を異なる視点から捉えたものである。これらはその各々をみる限り妥当なものであるように思われる。だが、その二つは実際には両立不可能であり、互いに組み合わされるならば二律背反を構成する。件の不安はこの二律背反から生じてくるのである。

(1) において表現されているのは、上述の「実在への応答可能性」に関わる考え方である。この考え方によれば、経験的信念は、それが実在へと向けられたものである限り、真偽や正誤といった規範的な文脈に位置づけられねばならない。言い換えれば、経験的信念は経験の裁きを通じて実在の在り方に応じた改訂可能性をもたなければならない。経験において示される実在の在り方は裁きを構成するようなものでなければならず、反対に、経験的思考はその裁きを受ける被告という立場に置かれうるものでなければならない。信念に対してこのような経験からの合理的な制約関係が成立していなければ、心を実在へと開かれたものとして認めることはできないのである。

マクダウェルはこのような考え方を表現するために、セラーズから「理由の論理空間(the logical space of reasons)」という概念を借用する。われわれが有する信念体系は、概念によって規定される合理的関係によって構造化された体系である。ここでの合理的関係とは、その関係に立つ項の一方が他方に対して理由ないしは正当化を与えることで、後者に対してある種の理解可能性を付与するような関係である。セラーズはこのように理由付与関係によって構成される空間を「理由の論理空間」と呼ぶ(以後、「理由の空間」と略記する)。

(1) の考え方によれば、経験と信念は、前者が後者に理由を与えるという仕方に関係しうるものでなければならない。それゆえ、経験と信念はともに理由の空間の住人としてその空間のなかに位置づけられうるものでなければならない。これは信念だけではなく経験もまた理由の空間の内部にその位置をもつということを要請する。

他方、(2) において表現されているのは、経験の生起する過程は自然の一部として——それゆえ自然法則によって支配された過程として——理解されなければならないという考え方である。主体は自らがもつ知覚経験を、各感覚器官に対する刺激——「世界からの干渉としての印象」(McDowell 1994, p. xv)——という形で受け取る。そうした刺激ないしは印象の享受は、世界の側から(それが人間であれ他の動物であれ)感覚能力の所有者に与えられるものである限り、「自然のなかでのやり取り(transaction)」(McDowell 1994, p. xv)として考えられるべきものである。そして、近代科学の興隆以降主流をなしている自然概念——マックス・ウェーバーが述べたような「脱魔術化された(disenchanted)自

然」という概念<sup>27</sup>——によれば、ある事項が自然的なものであるとは、物理法則を典型とする自然法則によって捉えることができるような種類のものであるということの意味する。例えば、感覚刺激の受容や伝達の過程は、原理的には、物理学や神経科学などの自然科学によって説明することができる。それゆえ、この考え方によれば、経験を構成する印象は法則的に捉えうるような自然的な文脈に置かれるものでなければならない。そして、理性と自然を二元論的に捉えるデカルト的な枠組み——マクダウェルはそれを近代哲学の典型例として位置づけている——においては、経験が自然的なものであるとは、それが思考主体としてのわれわれからは独立に扱いうるものであり、概念的なものが織り成す領域の外部にあるものだということの意味する<sup>28</sup>。それゆえ、(2)の考え方においては、経験の内容は概念的に構造化されていない内容、つまり非概念的内容であるということになる。

この考え方を明確化するために、マクダウェルは理由の論理空間と対照されるものとして「法則の領界」(the realm of law) という概念を導入している。法則の領界とは、「自然科学がそのなかで機能するような論理空間」(McDowell 1994, p. xv) である。マクダウェルは次のように述べる。

私の考えでは、この二つの論理空間のあいだのコントラストを理解する最良の手だては、物ごとが理解可能とみなされる二つの仕方を区別することである。一方は、物ごとを、それを支持する理由やそれに反する理由を挙げるような考察の脈絡のうちに置くこと（たとえば、あるふるまいを「理由に基づいて行為していること」として理解する場合にわれわれがおこなっているような種類のこと）であり、他方は、自然科学がおこなっているように、たとえば物ごとを法則的な一般化のもとに包摂することによって、その物ごとの理解可能性を発見することである。(McDowell 2000a, p. 6)

この箇所ではマクダウェルは二つの論理空間がそれぞれ異なる理解可能性を有しているということを強調している。理由の空間を構成するのは理由や正当化などの合理的関係であり、法則の領界を構成するのは科学的説明に見出される法則的關係である。合理性という規範は、理由の空間のなかのある事項から関連する別の事項への移行に対して特有の支持を与える。他方、自然科学の法則も、法則の領界のなかのある事項から関連する別の事項への移行に対して特有の支持を与える。すなわち、いずれもその論理空間のなかに置かれたある項に対して別の項への移行をある意味において必然化するのである。マクダウェルによれば、合理的関係がもたらす必然化の在り方は、法則的關係のそれから再構成することのできない「それ独自の (*sui generis*)」性格を有する (McDowell 1994, p. xviii) <sup>29</sup>。それ

<sup>27</sup> マクダウェルは McDowell 1994, p. 70 においてこの「脱魔術化」という概念に言及している。

<sup>28</sup> 経験を独立的に扱いうるのは、「思考主体としてのわれわれ」からであって、必ずしも「生体としてのわれわれ」からではないということに注意されたい。

<sup>29</sup> 理由の空間を法則の領界から再構成可能であるとみなす立場をマクダウェルは「露骨な自然主義 (bald naturalism)」と呼ぶ。露骨な自然主義は典型的には還元主義というかたちをとるが、マクダウェルはそれを還元主義には限定しないと述べる。「[露骨な自然主義の特徴づけにおいて] 重要なのは、理由の空間を主な住処とする諸観念が、自然科学的な見方のもとでの自然のうちに位置づけることに結局のところは寄与するものとして描かれていること、この一点である」(McDowell 1994, p. 73)。

ゆえ、理由の空間は法則の領域とは異なる特有の理解可能性に基づいて機能していると考えられる。理由の空間は法則の領界と互いに排他的な関係に立っており、その理解可能性に関して他方に回収されない「自律性」を有しているのである<sup>30</sup>。

ここで、理由の空間と法則の領界という概念を用いて（２）の考え方を記述しなおしてみよう。（２）の考え方によれば、経験の生起する過程は自然法則の支配する過程であり、それゆえ法則の領界の内部に位置づけられなければならない。法則の領界は理由の空間と相互排他的な関係に立つため、このことは、経験が理由の空間の外部に位置づけられなければならないということを意味する。

ここまで来れば、（１）と（２）がどのように二律背反を構成するのかは明白であろう。（１）の考え方によれば、経験は信念に対して合理的な制約を与えなければならないがゆえに、理由の空間のなかにその位置を占めるのでなければならない。だがしかし、（２）の考え方によれば、経験は自然的過程の産物として生起するため、法則の領界にその位置をもたなければならない、それゆえ理由の空間の内部に位置を占めることはできない。ここから、（１）と（２）の両者をともに肯定するならば、経験が理由の空間と法則の領界に同時に位置づけられることになる。だが、理由の空間と法則の領界は排他的なものであるがゆえに、経験は同時にそれら両者のうちに位置を占めることはできない。（１）と（２）は個別に見れば一見妥当な主張であるが、実際には両立不可能であり、ともに肯定されるならばそこから二律背反が生じてしまうのである。マクダウェルはここからさらに次のことが帰結すると述べる。

こうして、思考が印象に応答責任をもつことが、そもそも経験的内容が存在するための条件であるとはされながら、印象という考えが理由の論理空間のうちに場所をもたないがゆえに、この条件を満たすことはできない、と思われるようになるのである。

(McDowell 2000a, p. 5)

この二律背反から帰結するのは、（１）に示されている経験的信念に関する成立要件は満たされえないという受け入れがたい結論——経験的信念の不可能性というアポリア——である。そしてここにおいて、「経験的信念はいかにして可能か」という問いが、心が實在に係留されることは不可能ではないかという「近代哲学が抱える特有の不安」に表現を与えるものとして浮かび上がってくるのである。

以上のように、（１）と（２）の考え方が生じさせる二律背反は、経験的信念に対して、それが不可能であるという宣告を下し、「われわれの心は世界から閉ざされているのではないか」という不安を掻き立てる。これが、マクダウェルが『心と世界』においてその治癒を試みる哲学的問題である。マクダウェルの概念主義はこの不安に対する処方箋として提示されることになる。

---

<sup>30</sup> 理由の空間が自律性をもつという主張の論拠について、マクダウェルはデイヴィッドソンやセラーズの関連する論述を引き合いに出すのみで詳細には論じていない。筆者は修士学位論文（小口 2007）の第一章第四節でその論拠——どのような点において理由の空間と法則の領界の理解可能性は異なるのか——を分析しているので参照されたい。

## 第二節 所与の神話と斉合主義のジレンマ

マクダウェルは自らの処方箋を際立たせるために、こうした不安に応じているようにみえる二つの立場を一对のジレンマとして描き出している。そのひとつは「所与の神話 (the Myth of the Given)」であり、もうひとつは「斉合主義 (coherentism)」である。これらは、一方の立場がもつ問題点が浮き彫りにされると俄かに他方が魅力的に映るという、シーソーのような対立関係にある。マクダウェルは自らの処方箋をこのシーソーから降りるための手段として描き出している。

一方の「所与の神話」とは、セラーズが『経験論と心の哲学』において批判の対象としたものであり、マクダウェルも彼からその名称を踏襲している<sup>31</sup>。所与の神話は、経験は一種の自然現象であるという考え方を受け入れながら、同時にそのような経験が経験的信念への裁きを構成することが可能であると称する立場である。つまり、所与の神話とは、前節の(1)と(2)の考え方をともに受け入れ、肯定しようとする立場なのである。所与の神話の擁護者は典型的には次のように考える。われわれがもつ任意の経験的信念に対して、その信念の根拠となる他の信念を次々と遡行してゆくとき、概念の空間内部において利用可能なすべてのステップを使い尽くしたとしても、なおわれわれに利用可能なひとつのステップが存在する。それは「外部から概念の領界への干渉」(McDowell 1994, p. 6)を指し示すことである。そうした外的干渉によって、概念の領界の最外縁に位置する観察的判断に対する正当化が果たされる。つまり、経験的信念はその究極的な基礎を、経験において単に受容されるだけの非概念的な所与に有しているのである。

所与の神話が主張する描像は、理由の空間が概念の空間を超えて拡張されていることを要請する(McDowell 1994, p.7)。なぜなら、その立場は非概念的な所与が経験的信念に対して正当化や根拠づけといった理由付与的な役割を果たすということを認めようとするからである。この描像は、拡張された理由の空間からその内部の概念の空間へと合理的制約が及ぼされると想定する。しかし、これは法則の領界の住人である非概念的所与に対して同時に理由の空間の住人であることを要請するものである。前節でみたように、理由の空間と法則の領界が互いに排他的なものだとすれば、これは不可能なことを要請しているということになる。

このように、所与の神話は信念に対する非概念的所与による基礎づけを認めようとすることで、われわれのもつ信念体系が世界からの合理的な外的制約に服さなければならない

---

<sup>31</sup> ただし、セラーズが〈所与〉という概念によって意味する範囲は通常その語によって理解されている範囲に比べて非常に幅広いものである。「多くのもの——感覚内容、物理的対象、普遍、命題、実在的結合、第一原理、さらには所与性そのものさえ——が『所与』であると言われてきた。実際、哲学者がこのような概念を用いて分析する状況を解釈するための一つの方法、所与性の枠組 (the framework of givenness) とでも言うべき解釈の方法が存在するのである」(Sellars 1997, p. 14)。『経験論と心の哲学』においてセラーズは「感覚与件」の概念を主要な攻撃対象としているが、それはこうした枠組全体への批判の第一歩にすぎないと言われている。マクダウェルも『心と世界』の「後記 第一部 デイヴィッドソンとその文脈」において、セラーズにおける所与概念の理解に触れ、「経験において与えられるもの」という場面において用いられる「所与」という概念の使用は、このより一般的な概念の特殊な適用にすぎないと指摘している (McDowell 1994, p. 136)。



という要求に対するひとつの応答であることを企図している。確かに、そうした要求が正当なものであり、何らかの仕方ですべての要求を満たすべきである点で所与の神話は正しい。しかし、所与の神話は外的制約を与えるものを概念領界の外部からの非概念的な干渉として捉えるがゆえに、その制約が単なる因果的なものであることを超えて「合理的なもの」であるための資格を確保しえず、結果として、われわれの信念体系が外的干渉に対する応答可能性をもつことを不可能にしてしまうのである。さらに、概念能力としての自発性が実在に対する応答可能性を失うならば、もはやそれはしかるべき内容を備えた経験的信念を生み出す能力を有しているとはみなしえない。それゆえ、所与の神話はわれわれの心的活動が実在に係留されることを保証すると称しながら、その可能性を自ら手放してしまうことになる。この意味において、所与の神話は自己論駁的な立場なのである。

マクダウェルが、所与の神話と対をなし、それとともにジレンマを構成するもうひとつの立場として描き出しているのは「斉合主義」である。マクダウェルが斉合主義の代表的論者として念頭にしているのはデイヴィッドソンである。マクダウェルによれば、デイヴィッドソンは所与の神話をもつ欠点をよく理解していたが、所与の神話が正しくも認めていた要求を看過しているがゆえに、認めがたい立場へと陥っている (McDowell 1994, p. 14)。デイヴィッドソンは経験に対して正当化の役割を帰すことの問題点について次のように指摘する。

感覚とか観察といった仲介となる段階や存在者を因果連鎖の中に導入しても、認識論的な問題を一層明白にするだけである。なぜなら、もしその仲介者が原因にすぎないならば、それは、それが原因となっている信念を正当化するものではないし、またもしそれが情報を伝えるならば、それは嘘をついているかもしれないからである。

(Davidson 1986, p. 312)

ここでデイヴィッドソンは、二つの理由から、経験的信念を正当化するものとして感覚や観察といった経験を持ち出すことが誤りであるということを指摘している。第一に、経験が単なる原因としての仲介者、すなわち概念的な構造をもたない仲介者にすぎないのであれば、それは因果的な役割を果たすのみで正当化の役割を果たすことはできない。また第二に、もし経験が情報を担うことのできる仲介者、すなわち概念的な構造をもつ仲介者であるならば、その仲介者が世界の在り方を正しく伝えているか否かという点に関して、懷疑論的な問いが持ち上がってくる。そして、われわれは経験を仲介者とするとなしに世界の在り方に直接接触することはできないのだから、経験に対して認識的な意義を認めてしまうならば、懷疑論的な問いを静める手段をもはやわれわれはもたないことになる。したがって、経験は認識的仲介者として認められるべきではない。経験に単なる因果的仲介者以上の役割を帰すことは、不要な懷疑論を招来することにつながるものである。

このようにデイヴィッドソンは、われわれのもつ経験的信念を正当化するために——概念的なものであろうと非概念的なものであろうと——感覚経験に訴えることはできないと考える。それが可能であると考えすることは、因果的制約と合理的制約の区別をわきまえずに

所与の神話へ陥るか、あるいは経験に認識的意義を認める錯誤を犯し懷疑論へ陥るか、いずれかである。そして、そこで生じる苦難に鑑みれば、いずれの道も容認できるものではない。

「経験を非概念的な干渉として捉えるならば、経験的信念を正当化するためにその干渉に訴えることはできない」と考える点において、デイヴィッドソンは所与の神話が抱えている欠陥をよく見抜いていた。しかし彼は、経験に命題的構造を認めることは認識的仲介者の導入を招くことになるとして、所与の神話が前提としている経験概念をそのまま肯定してしまう。つまり、デイヴィッドソンは所与の神話と同様に経験は概念の空間の外部に位置づけられねばならないとするのである。さらに、デイヴィッドソンは経験に対して理由構成関係への寄与を認めないのであるから、彼の立場においては理由の空間は概念の空間の外部へと拡張してはならず、二つの空間はその外縁において等しいということになる。デイヴィッドソンによれば、経験が信念や判断と結ぶことができるのは因果関係のみであり、それらと正当化関係を結ぶことはできない。彼は「ある信念をもつことに対する理由とみなしうるものは別の信念以外にはない」(Davidson 1986, p. 310)と述べる。正当化や理由づけといった合理的関係を結ぶことができるのは、信念体系内部の命題的構造をもった諸事項間においてのみである。いかなる信念であろうと、それが理由を得ることができるのは、当の信念が他の諸信念とのあいだに結んでいる斉合関係からのみなのである。このように、認識的役割を担うものを信念体系内部の諸事項に限定し、経験に対しては因果的役割しか認めない立場が「斉合主義」である。斉合主義は、前節における(2)の考え方を保持しつつ、同時に(1)の考え方を放棄する立場であると言えよう。すなわち、経験が一種の自然現象であることを認めつつ、そうした経験に対して思考が応答可能性をもつことを否定するのである。

マクダウェルは次のような論拠から斉合主義を批判する。デイヴィッドソンは、経験に対していかなる正当化の役割も認めないという点において、自発性に対する外的な合理的制約の可能性を自ら放棄している。なぜなら、自発性に対する単なる因果的制約だけでは、われわれが求める合理的制約を満たすことはできないからである。因果関係を結ぶ諸事項は必ずしも概念的に分節化された内容を保有している必要はないが、合理的関係に立つためには必ずそうした内容を保有していなければならない。しかし、デイヴィッドソンは信念と因果関係を結ぶところの経験を非概念的なものとしてしか捉えていないため、経験が他の事項と合理的関係に立つと認めることはできない。その一方で、デイヴィッドソンは、われわれの概念の空間が「自律性」をもち、法則の領域へと還元されえないような独自の理解可能性を有するということを認めている。

一方において、物的変化は、物的に記述された他の変化や状態とその変化とを結合する法則によって説明しうる、ということが物的実在の特徴である。他方、心的現象がある個体に帰属させる場合には、その個体の理由や信念や意図といった背景をも同時に考慮しなければならない、ということが心的なものの特徴である。その証拠の本来の源泉が示すところに忠実であるかぎり、これら二つの領域の間に厳格な結びつきは

ありえない。(Davidson 1980, p. 222)

この自律的なものとしての自発性の働きは、それが経験的思考において実在に応じうるものであるために、外界からの合理的制約による摩擦を必要とする。しかし、もし自発性に対するしかるべき外的制約が存在しないとすれば、自発性の作動が「摩擦なき空転 (frictionless spinning in a void)」(McDowell 1994, p. 11) へ陥るというリスクをわれわれは背負うことになる。デイヴィドソンの斉合主義は、経験からの制約を因果的なものに限定することでまさにこのリスクを負っている。摩擦を失った自発性はもはや、経験的思考として認めることのできる何ものも生み出すことはできない。そのような自発性の働きは空虚な内閉的運動にすぎなくなってしまうのである<sup>32</sup>。斉合主義においては、信念と経験のあいだに合理的関係が成立しえないがゆえに、われわれは信念体系の外部からの合理的制約を獲得しえず、その結果、自発性の領域は「閉じこもり (confinement)」(McDowell 1994,

p.16) の状態へと陥ってしまうのである。デイヴィドソンは所与の神話がもつ欠点を正しく見抜いていたが、逆に所与の神話が正しくも認めていた自発性への外的制約という要求を見誤ったのである。以上が斉合主義に対してマクダウェルが下す批判の要点である。デイヴィドソンは経験を単なる非概念的な因果的干渉としてしか捉えておらず、その結果として確保されるべき外的制約への通路を自ら遮断している。この点において、斉合主義もまた自己論駁的な立場なのである。

### 第三節 自発性と受容性の協働としての経験

マクダウェルは、所与の神話と斉合主義の両者を、心と世界の関係性についての「近代哲学に特徴的な不安」に対して応答を試みるものとして描き出している。われわれが前節においてみてきたのは、所与の神話と斉合主義のいずれも、この不安への応答としては成功しえない自己論駁的な立場だということであった。一方で、所与の神話は不安を生じさせる二つの考え方をともに肯定しようとする。だがそれは理由の空間の外部の住人にその内部でしか演じえない役割を担わせようとする錯誤に陥っている。所与の神話が行きつくこの陥穽は、所与に対して理由構成的な役割を認めるという発想を断念するようわれわれに迫る。ここにおいてシーソーはもう一方へと俄かに傾き始める。斉合主義は、所与が果たしうる寄与を単なる因果的役割へと限定し、それによって所与の神話が陥った錯誤を逃れようとする。だが、そうすることによって、斉合主義は自発性に対する外的な合理的制約をも放棄し、われわれの思考が実在に係留されるという発想を理解不可能なものにしてしまう。こうして再びシーソーは他方へと傾き始める。われわれはいかにしてこの振り子

---

<sup>32</sup> ここで、経験によって直接に生み出されるような観察的信念による他の信念の正当化可能性を「実在との通路」として確保しようと画策しても無駄である。なぜなら、その観察的信念もやはり信念体系の一員にすぎないからである。

運動を逃れ、ジレンマを克服することができるのだろうか。

そのためにマクダウェルが示す処方箋は、所与の神話と斉合主義がどちらも共通の前提としている経験概念に対してその再考を迫るものである。すなわち、「経験は理由の空間の外部からもたらされる非概念的な因果的干渉である」という前提を否定し、経験は理由の空間のなかに収まることができるとするのである。ここでマクダウェルが着目するのは次のようなカント的な洞察である。

カントの元来の思想は、経験的知識は受容性 (receptivity) と自発性 (spontaneity) との協働の結果であるというものであった。[...] この協働への受容性の寄与は観念上でさえ〔自発性と〕切り離すことができない、というこの思想をしっかりとつかむことができる、シーソーから降りることができるのである。(McDowell 1994, p. 9)

この引用文に示されているカント的な発想を、経験的信念の成立可能性というマクダウェルの文脈へと移し変えて換言すれば、「経験的信念の成立において、受容性と自発性が果たす寄与はたとえ観念上であっても互いに切り離しえない」となる。ここに含まれる洞察をつかむためには、ただ次のように考えればよいとマクダウェルは述べる。すなわち、

その協働に関与する概念能力は受容性のうちで引き出されている (drawn on *in*)。[...] こうした概念能力は、受容性が引き渡す概念外的なものに対して行使される (exercised *on*) のではない。(McDowell 1994, p. 9)

「自発性」とは悟性の能力であり、概念を統御する働きを意味する。他方、「受容性」は感性の能力であり、感覚刺激を受け取る働きを意味する。われわれは、まず非概念的な感性的刺激が受容性によって与えられ、次にその所与に対して概念能力が行使されることで経験的信念が成立すると考えるべきではない。そうではなく、経験的信念に関連する概念能力はすでに受容性のなかで現実化されている (actualized) と考えるべきである。われわれは、経験を「すでに概念的コンテンツをもっているような出来事や状態」(McDowell 1994, p. 9) として理解すべきなのである。概念的であるような経験内容とは、「事物はしかじかである (things are thus and so)」という命題的構造をもった事実である。われわれは経験においてすでに概念的に構造化された事実を取り入れるのである。そして、「経験判断によって新たな種類の内容が導入されるわけではなく、その判断を根拠づける経験がすでに所有している概念的コンテンツが、あるいはその一部が、単に是認される (endorses) だけ」(McDowell 1994, p. 49) なのである。

経験をこのように「自発性と受容性の協働」(McDowell 1994, p. 9) として捉えることによって、われわれは所与の神話の陥穽を免れることができる。所与の神話の陥穽とは、非概念的な因果的干渉にすぎないものに経験的信念の究極的な基礎を担わせようとすることによって、概念の空間の内部においてのみ担いうる役割をその外部の住人にあてがうという錯誤を犯してしまうことであった。もし経験がすでに概念的なコンテンツを有しているので

あれば、任意の経験的信念から出発して正当化の序列を遡行してゆくとき、その最後の一步によってわれわれは——所与の神話とは異なり——概念の空間の外部へと連れ出されることはない。その代わりに、われわれは概念の空間の内部にある経験へと行き着くのである。だが同時に、そこでは受容性が作動しており、それによってわれわれの概念能力が必要とする感性的なものとの結びつき、すなわち、自発性に対する外的制約が与えられる。したがって、われわれは所与の神話の陥穽に陥ることなく、しかるべき外的制約を手にすることができるのである。

マクダウェルの経験概念は同時に斉合主義の陥穽をも免れている。デイヴィドソンは「ある信念をもつことに対する理由とみなしうるものは別の信念以外にはない」と考え、経験を単なる因果的仲介者へと制限し、経験を信念とのあいだに正当化関係を結びうる候補から除外する。斉合主義の陥穽とは、その除外によって自発性が必要とする外的な合理的制約が失われ、その結果、われわれの信念体系が実在に対する応答可能性を獲得できなくなってしまうことであった。もしマクダウェルのように経験が概念的に構造化されていると考えるならば、われわれは正当化関係を結びうる事項を信念だけに限る必要はなくなる。デイヴィドソンが「理由を与えることができるのは別の信念以外にはない」と述べたのは、命題的構造をもたない非概念的なものは理由付与関係に立つことができないという洞察に基づいてであった。だとすれば、上のテーゼはそこに含まれる洞察を失うことなく次のように言い換えることができる。「ある信念を抱く理由とみなされうるものは、同じく概念空間のうちにある他のものをおいてほかにはない」(McDowell 1994, p. 140)。この修正されたテーゼはマクダウェルによる経験概念の改訂と完全に整合する。それゆえ、マクダウェルは、経験が信念との間に理由付与関係を築くことができると認めることで、自発性が受容性による制約を失って空虚に陥ることを免れることができるのである。

しかしながら、ここで次のような反論が提起されるかもしれない。デイヴィドソンがある信念をもつことに正当化を与える候補を他の信念に限ったのは、経験に命題的構造を認めるならば、それが認識的仲介者として思考と世界のあいだに入り込むことで懐疑論を呼び込んでしまうからではなかったか。だとすれば、マクダウェルのように経験に概念的内容を認めた場合、それが認識的仲介者として働くという嫌疑をどのように払拭しうるのだろうか<sup>33</sup>。

だが、マクダウェルの考える経験は認識的仲介者として働くものではなく、それゆえいかなる懐疑論的問題も生じさせるものではない。ここで重要な役割を演じるのが、「概念的なものの無境界性 (the unboundedness of the conceptual)」(McDowell 1994, chap. 2) という考え方である。マクダウェルによれば、経験は世界と信念のあいだを何らかの仲介者として仲立ちしているのではない。真正な経験は世界そのものへと到達しており、その内容は「成立している事実」であり「世界の一片断」である。

実在はわれわれの思考から独立ではあるけれども、概念領域を取り囲む境界線の外に

---

<sup>33</sup> デイヴィドソン自身、マクダウェルからの批判に答えるなかでこうした疑問を提起している (Davidson 1999, p. 105)。

あるように描かれるべきではない。物事がしかじかであること (that things are thus and so) は経験の概念的内容であるが、その経験の主体が誤っていない場合には、まさにそれと同じこと、すなわち物事がしかじかであることが、知覚可能な事実、つまり知覚可能な世界の一側面でもあることになる。(McDowell 1994, p. 26)

経験内容はそれが正しいものである限り、世界への開かれとして、事実そのものへと到達している。加えて、マクダウェルは『論理哲学論考』冒頭の「世界は成立していることがらの総体である」という命題を受け入れ、世界を事実の総体として捉える<sup>34</sup>。マクダウェルが考えるように、正しい経験内容が事実そのものへと到達しており、かつ、世界が事実の総体であるならば、世界は概念的なものの外部としてではなく、経験内容と同様にそれ自体が概念的なものとして捉えられるべきである。そして、観察的信念の内容が成立するのは経験内容のなかから一部を受け入れることによってであり、両者のあいだにはいかなる内容上の隔たりも存在しないのであるから、「事実一般は本質的に自発性の行使において思考のなかに包含されうる」(McDowell 1994, p. 28) ということになる。この見方によれば、思考、経験、事実という系列において、概念的なものと非概念的なものとを画する境界など存在しないのである。

こうした概念的なものの無境界性という見方は、デイヴィッドソンの斉合主義と結びついた「内閉状態」という描像と鋭い対照をなす。デイヴィッドソンは、概念領域に対して経験がなす寄与を因果的なものへと制限し、合理性の及ぶ範囲を信念体系の内部へと囲い込むことで、思考と経験とのあいだに合理的関係が成立することを否定する。確かに、経験を構成する印象が非概念的なものにすぎないのであれば、そうした印象が思考に対して合理的影響を及ぼすことはできないと主張する点において、デイヴィッドソンは正しい。しかしマクダウェルは、デイヴィッドソンが前提としている「印象は非概念的なものにすぎない」という点を否定し、印象は思考に対して単に因果的な影響だけではなく合理的な影響をも及ぼしうると考える。マクダウェルは、印象を単なる受容性の作動としてではなく、同時に概念能力が現実化されたものとして捉えることで、自身の描像から概念領域を取り囲む境界を消去するのである。それによって、「経験において、われわれは認識的仲介者を介することなく、実在とのあいだに直接的な接触を確立する」という素朴実在論的な見方と、「経験は、理由の空間の住人として、信念に対して外的な合理的制約を与える」という概念主義的な見方とが両立しうようになるのである。

マクダウェルによるこうした経験概念の改訂は、一見したところ、「経験的思考は応答可能性をもつ」という考え方を確保するために、「経験は一種の自然現象である」という考え方を否定するものであるようにみえる。つまり、経験が理由の空間に収まりうるとするならば、それは法則の領界のなかに位置をもたないはずであり、それゆえ、マクダウェルは経験を法則の領界の外部にあるもの、すなわち非自然的なものの一種とみなさざるをえないように思われる。しかし、正確に言えば、マクダウェルは経験が自然現象であるという

---

<sup>34</sup> McDowell 1996, p. 284 において、マクダウェルは『論考』のこのテーゼを受け入れる旨を明確化している。

考え方を否定するのではない。むしろ、その考え方を特定の解釈のもとから解放することで、二律背反が生じることが不可避であるという見かけが実は錯覚にすぎないということを明らかにするのである。

上の二つの考え方が二律背反を生じさせるという見かけを与えるのは、経験が自然現象であるということが、経験が法則の領界にのみ属するというものと等価であると前提されているからである。そうした前提に立つならば、経験が裁きを構成しうるようなものであるという発想は、理由の空間の外部にあるはずの経験を、理由の空間内部の諸事項にしか立ちえない関係に立たせるという錯誤を犯すものであるようにみえる。この錯誤が不可避なものと思われるのは、「自然科学における法則的關係によって理解可能なものだけを自然現象とみなす」という特定の自然概念——脱魔術化されたものとしての自然概念——が自明視されているからである。つまり、自然を法則の領界の占有物とみなすという概念理解を前提することによって、経験による思考への裁きが成立不可能であるかのような外見を与えられているのである。そして、経験内容が概念的であるというマクダウェルの発想が、経験を自然的なものの領域から締め出し、自然的なものを越えた非自然的なものを経験概念のうちに呼び込んでしまうように思われるのも、同じ特定の自然概念を自明視することによってなのである。なぜなら、自然が法則の領界によって占有されているならば、概念能力によって構成される理由の論理空間は「非自然的なもの」であらざるをえないように思われるからである。

マクダウェルによる経験概念の改訂が、経験を非自然的なもののうちに数え入れることになるのではないかという嫌疑を免れているのは、彼が概念能力の習得を人間にとっての「第二の自然 (second nature)」(McDowell 1994, p. 84) と考えるからである。マクダウェルはこの概念をアリストテレスから引き出してくる。「アリストテレスが倫理的性格の成型を考える仕方を一般化することで手にできるのは、第二の自然の獲得によって自分の眼を理由一般へと開かせるという観念である」(McDowell 1994, p. 84)。アリストテレスは『ニコマコス倫理学』において次のように述べる。「倫理的な卓越性ないしは徳は、[...] 本性的に生まれくるわけでもなく、さりとてまた本性に背いて生じるのでもなく、かえって、われわれは本性的にこれらの卓越性を受け入れるべくできているのであり、ただ、習慣づけ〔エートス〕によってはじめて、このようなわれわれが完成されるに至るのである」(1103a)。われわれに生まれつき備わっている能力は「第一の自然」に属するのに対し、われわれがしかるべき習慣づけによって獲得する能力は「第二の自然」に属する。ある種の能力は、われわれが生まれつきそれを所有しているがゆえに使用される。例えば、われわれは呼吸する能力を所有しているがゆえに「自然に」呼吸する。これは獲得される能力ではなく、われわれが生得的に有している第一の自然の能力である。逆に、われわれが第二の自然の能力を所有するに至るのは、それを適切な仕方でも繰り返し使用することによってである。マクダウェルはこの能力の典型をわれわれの概念能力に見出している。われわれが自発性の能力である概念能力を身に付けるのは、しかるべき言語共同体のなかに参入し、そのなかで伝統に学びつつ実際に言語を使用してみることによってである。そうした参入によってしかるべき機会を得るならば、われわれは「自然に」概念能力を習得す

るに至るのである<sup>35</sup>。人間存在は理由の空間に生まれつくのではなく、それを成長過程において第二の自然として身につける。「人間は単なる動物として生まれ、成熟してゆく過程で思考者にして意図的行為者へと変容してゆくのである」(McDowell 1994, p. 125)。人間が理由の空間に参入するのは、それが人間にとっての「自然」だからである。このようにして捉えられた第二の自然は、進化論的探求と矛盾する非自然的あるいは超自然的なものの導入を招くようなものではない。第一の自然も第二の自然も同様に自然概念の範疇に属するのである。「人間の幼児は単なる動物であり、ただその潜在能力の点で特異なだけであって、人間がふつうに育成される過程でなにか不可思議なことが起こるわけではない」(McDowell 1994, p. 123)。

マクダウエルを考えでは、近代自然科学の隆盛以降、われわれはこの「第二の自然」が自然のうちに含まれるということをしばしば忘却してきたのであるが、一旦これが認められるならば、理由の空間を自然的なものの中に数え入れることには何の問題もない。このように、マクダウエルによる経験概念の改訂は、より根本的には近代が前提としていた自然概念の改訂にまで行き着くのである。

#### 第四節 理由への応答性としての概念能力

マクダウエルの考える経験概念は、受容性の作動である知覚経験においてすでに概念能力が現実化されている、というものであった。自発性の働きは受容性のうちにすでに組み込まれており、両者の不可分な協働によって初めて、経験的信念と経験とが理由付与関係に立つという考えが理解可能となる。こうした経験概念の改訂によってこそ、経験が理由の空間に属しつつ判断に対する外的制約としての「裁き」を構成するという考えが整合的なものとして捉えられるようになるのである。

マクダウエルはこのように、経験内容の形成には概念能力が関与しており、この概念的 content によって関連する知覚信念に対して正当化が与えられると主張する。では、マクダウエルはここで「概念」という概念をどのような意味において用いているのだろうか。この問いに答えるため、本節ではマクダウエルの概念理解がどのようなものであるかを概観する。

マクダウエルは概念を経験主体がもつ「能力」の面から特徴づける (McDowell 2009, p. 129)。前章でも言及したように、マクダウエルはカント的な見方に重きを置き、概念能力を自発性に属する能力として捉える。自発性の働きを理解するための典型的な文脈は「思考」において与えられる。思考は自発性の能動的な行使によって形成されるものであり、概念をその構成要素としている。エヴァンズが一般性制約という観念によって示したように、思考を構成する概念能力は他のもろもろの思考においても行使されうる一般性ないし

<sup>35</sup> これは、概念能力が現実化されるのは実際の言語使用においてのみであるということの意味しない。「〔経験〕内容が概念的であるためには、それが言語的な表現を与えられうるということで十分である」(McDowell 2005, p. 10, n. 10)。マクダウエルは経験を実際の言語使用以外における概念能力の現実化として捉えている。



は合成性を備えていなければならない。〈赤〉や〈青〉といった概念をもつ者は、関連するさまざまな思考においてその同じ概念能力を行使できなければならないのである。

概念能力は（語に対応するような）個別的なレベルにおいてこのような一般性を示すとともに、（文に対応するような）複合的なレベルにおいて特有の構造的性を示す。すなわち、任意の命題的態度は他の関連するもろもろの命題的態度と合理的な仕方で結びついているのである。例えば、「今日は天気が悪い」という私の信念は、「いま雨が降っている」という他の信念によって正当化され、「午後の野外コンサートは中止だ」という別の信念を支持し、「雨が降っているのではなく、窓に壊れたスプリンクラーの水が掛かっているだけだ」という新たな信念によって阻却される<sup>36</sup>。このように、概念能力の行使として実現されるもろもろの命題的態度のあいだには規範的な理由付与関係が結ばれている。

マクダウェルは思考という文脈から摘出したこの「理由への応答性（responsiveness to reasons）」（McDowell 2009, p. 128）——理由構成関係を見て取り、それに対して応答すること——によって思考者の概念能力を特徴づける。理由関係に対して構造的な寄与を果たすことが概念としての機能をもつことの要件であり、また、理由関係に対して応答する能力をもつことが概念能力の所有者であることの要件なのである。「しかるべき意味における概念能力は、私が扱っている意味におけるその所有者の合理性——理由への応答性——に属する」（McDowell 2009, p. 129）のである。

マクダウェルはこのように概念能力を合理性の能力として捉え、その合理性を「理由への応答性」という概念によって特徴づける。この特徴づけは理性的動物と非理性的動物という伝統的な区分に連なるものである（McDowell 2009, p. 128）。行為を例にとろう。非理性的動物は危険に直面してそれを回避する際に、その危険によって誘発される回避への傾向性に従うだけであり、その危険が回避を行うための十分な理由となっているかどうかを反省することはない。反対に、理性的な主体は「危険と思しきものによって誘発された回避への傾向性から一步後退し、自身がそのような傾向性に従うべきか否か——危険と思しきものが、いまここにおいて、回避のための十分な理由であるか否か——という問いを提起することができる」（McDowell 2009, p. 128）。対象によって誘発される生物学的要請から身を引いて、自らの行為理由を反省的に思考するこうした能力を帰属できなければ、当の主体を理性的な主体として認めることはできないのである。この論点は理性的主体のみが信念体系をもつことができるということを含意する。なぜなら、理由関係に対する反省的自己精査を行う能力を欠いた主体は、経験から判断へと与えられる理由の適切性を評価することができないがゆえに、経験の「裁き」に応じて自らの判断を改訂しえないからである。理性的な主体のみが、反省的自己精査を通じて、信念体系の要件である「実在に対する応答可能性」を示すことができるのである。

ここで次のことに留意すべきである。それは、ある主体の行った判断や行為が上述の意味において合理的なものであると認められるために、その判断や行為の時点で自身が従っている理由を明示的に考慮している必要はない、という点である。もしそのような明示的な考慮が要求されるとすれば、われわれの行う判断や行為の少なからぬ部分は合理的なも

<sup>36</sup> この例文は Gaynesford 2004, p. 22 を参照した。

のではないことになってしまうだろう。ここで必要なのは、単に、その判断や行為の理由を反省することのできる能力を潜在的に有していることである。例えば、後に行為の理由を尋ねられたときに、その理由を振り返って評価することができるならば、その行為は合理性の働きのもとにあったと言える。つまり、その行為は主体の自己決定によるものだと言えるのである<sup>37</sup>。

以上のように、自発性を理由への応答性によって特徴づけるならば、カントの用法がまさにそうであるように、自発性という観念が行為の「自由」という観念と密接に結びついていることも容易に理解することができる。理由を評価することのできる能力をもつことで初めて、主体は「自由な」行為をなす可能性を手にすることができる。なぜなら、行為の理由を評価する能力とは、どういった行為を行うべきかに関する複数の理由を比較考量し、そのなかからひとつの理由を採択することによって、自らがどのように行為するかを決定する能力だからである。反対に、理由を評価することのできない非理性的動物は、この意味での行為の自己決定能力を欠いているという点において、自由をもっているとは認められない<sup>38</sup>。ある行為は、それが理由への応答性をもった合理的なものであるならば、つまり、それが自発性の働きの制御下にあるならば、たとえその時点において理由の明示的な評価がなされていなくとも、「自由な」行為であると言えるのである。以上の論点は行為に関してだけではなく信念に対しても当てはまる。行為の理由が関わるのは実践的推論であり、信念の理由が関わるのは理論的推論であるという違いはあれ、どちらも「思考」という概念能力が典型的に行使される文脈を形作るという点において違いはないからである。

こうしたマクダウェルの概念理解は、概念能力が典型的な文脈である信念や判断とは別の文脈において現実化されるという可能性を残している。

私は、ほかならぬ概念についてカント的に考えるために投錨すべき地点を指定するために、概念能力が現実化されている出来事の典型は判断するという作用であるということをもってした。とはいえこれは、まさにその同じ意味での概念能力が、非典型的な仕方でも、すなわち判断するという作用とは別の種類の出来事のうちに現実化されることもありうるという余地を残している。(McDowell 2000a, p. 11)

知覚経験のなかに概念能力が組み込まれているとは、そこにおいて概念能力が非典型的な仕方でも現実化されているということである。そして、マクダウェルの考えるように、知覚経験の内容がその経験に基づいた信念に対して理由を与えるものであるならば、その経験

---

<sup>37</sup> その際に主体が分節化することのできる理由は、それが適切なものであれば、どれほど素朴なものであっても構わない。例えば、知覚的信念に対して主体が与える理由は、「そのように見えるから」というような素朴なものであっても構わない (McDowell 1994, p. 165)。その場合でも、主体は当の信念に対する理由を評価していると確かに認められるのである。

<sup>38</sup> だからといって、マクダウェルは動物が単なる自動機械にすぎないと主張したいのではない。マクダウェルは、動物がそれぞれ固有の仕方でも機知に富んだふるまいを行う能力を有していることを当然ながら認める。マクダウェルが主張しているのは、動物は「カント的な意味での自由」、つまり、自発性の能力をもたないということにすぎない (McDowell 1994, p. 182)。

は上で述べた意味で「理由への応答性」をもったものだと言うことができる。理由への応答性によって概念能力を特徴づけるというマクダウェルの見方を受け入れるならば、信念に対して理由構成的に働く経験は、非典型的な仕方においてであれ、概念能力が現実化された状態であるとも考えることも十分に可能である。無論、ただ単にその可能性が示されるだけでは、それが知覚に関する妥当な描像を提供しているとは言えない。次節では、概念能力の非典型的な現実化という論点に関してさらにその内実を分析してゆこう。

## 第五節 経験の受動性と合理的授權

マクダウェルの「知覚経験は概念能力が現実化された状態である」という主張に対しては次のような疑問が提起されている (e.g., Collins 1998; Ayers 2004)。概念能力が典型的な仕方では現実化されるのは信念や判断といった思考の文脈においてである。だが、マクダウェルが主張するように、経験においても非典型的な仕方では概念能力が現実化されているとすれば、その状態が概念的であるか否かによって経験と思考とを区別することはできない。そうだとすると、われわれは経験の特有性を捉える方途をなくし、それを思考へと同化するという錯誤に陥ってしまうのではないか。経験が概念的内容をもつということを認めながら、なおそれを思考と区別することはどのようにして可能なのだろうか。以下、この疑問へ答えることを通じて、マクダウェルの経験概念の内実を明らかにしてゆこう。

思考における概念能力は（カント的な意味での）自由な自発性の働きとして特徴づけられる。われわれは自らがどのような判断を下すかに関して、推論による比較考量に基づいた自由選択の可能性へと開かれている。われわれは通常ほとんど反省を伴わずに行われている知覚判断においてすら、（錯視図形を錯視図形と知りつつ見ている場合のように）知覚経験が提示するものを受け入れるか否かに関して原理的には選択の自由をもつ。こうした意味で、思考における自発性の働きは能動的（active）である。他方、知覚は感性的な能力としての受容性の働きによって生じる。思考が能動的であるのとは異なり、知覚は受動的（passive）である。

経験において生じることに對してひとがおこなえる制御には限界がある。どこに身を置くべきか、注意を〔聞こえる音の〕どのピッチに調整すべきか、といったことであれば決定できる。しかし、そういったことをすべておこなったうえで自分が何を経験することになるかはその人に決められることではない。(McDowell 1994, p. 10, n. 8)

何を知覚するかに関してわれわれがどれほど能動性を発揮しようと、知覚経験はこのようなミニマルな受動性をたえずもち続けている。「経験においてひとは内容を負わされる」(McDowell 1994, p. 10) のであり、その内容はわれわれがどのような選択をなすにも先立ってすでに利用可能な状態にある。このように受容性の働きが受動的であるからこそ、知覚経験は自発性をもつ自由に対して外的な制約を課することができるのである。

マクダウェルは思考と経験のそれぞれがもつこの能動性および受動性という特徴と調和させるために、概念能力の「行使 (exercise)」と「現実化 (actualization)」を区別する (McDowell 2000a, pp. 11-12)。思考において概念能力は能動的な行使という仕方で現実化されているのに対し、経験において概念能力は行使されてはいないが別の仕方で受動的に現実化されている。知覚経験において概念能力は受動的な仕方で現実化され、受容性の働きと協働しつつ経験内容の成立に寄与しているのである。では、概念能力の能動的行使と区別されるこの受動的現実化とは何か。

マクダウェルは、経験において概念能力が受動的に現実化されているということは、経験が判断に対してその内容を受け入れることへの合理的な権利付与を行うことだと考える (McDowell 2002, p. 278)。この「合理的授権 (rational entitlement)」という概念を理解するために、マクダウェルとストラウドのあいだに交わされた議論を参照しよう。

われわれは前節において、マクダウェルが概念能力を「理由への応答性」という概念によって特徴づけているということを確認しておいた。信念——より一般的には命題的態度——同士の関係として成立する能動的な推論の場面においては、この理由への応答性は命題的態度をもつ一つの事項と他の諸事項との間に成立する理由付与関係において示される。この関係においては、当の事項がどのような「内容」をもつかという点だけではなく、どのような「態度」をもつかという点が正当化の在り方において重要な差異をもたらす。例えば、「ソクラテスは偉大な哲学者である」という命題的内容に対して、それに「賛成する」という態度をとっている場合と「反対する」という態度をとっている場合とでは、そこから他の諸事項に対して導かれる正当化の在り方が異なってくる。能動的な推論の場面においては、理由関係を結ぶ諸事項がどのような態度を有しているかが当の関係に対して構成的に働くのである。しかしこれは、理由関係を結ぶことのできる事項が命題的態度をもったものだけに限られるということを必ずしも含意しない。すぐ後でみるように、マクダウェルは、知覚経験の内容は何らかの態度を伴うものではないが、知覚信念との間に理由関係を結ぶことが可能であると主張するのである。

これに対してストラウドは、理由付与関係が成立するのは命題的態度をもった諸事項のあいだに限られると主張する (Stroud 2002, p. 89)。ストラウドによれば、態度を欠いた単なる命題が果たしうるのは、せいぜい他の命題を論理的に含意することであって、他の命題を正当化したり、支持したり、保証したりすることではない。例えば、「容疑者は犯行時刻に現場から遠く離れたところにいた」という証言が容疑者の無罪を信じることの理由となるためには、それが真であれ偽であれ、証言者がその証言の命題的内容を「信じて」いなければならない。理由付与関係に寄与しうるのは、当人がその内容に対して何らかの態度をとっている事項に限られるのである。

ストラウドは同じ論点が経験に対しても適用できると考える。つまり、知覚経験が——たとえ能動的なものではないにせよ——その内容が真であることの是認 (endorsement) や容認 (acceptance) などの態度を含んでいるからこそ、それは他の命題的態度と同様に信念に対して正当化の役割を果たすことができるのである。それゆえ、信念同士の間で成立する理由付与関係と信念と知覚のあいだに成立する理由付与関係とは、どちらも命題的

態度のあいだに樹立される関係であるという点において違いはないのである。

マクダウェルはこのストラウドの主張に反論し、知覚経験は命題的態度を含まないが、なお信念との間に理由付与関係を築くことができると主張する (McDowell 2002, pp. 277-278)。例えば、ある人物が心理学の実験室を訪れた際、そこに並ぶ実験装置のひとつに興味を引かれ、たまたまその覗き窓からなかを見たとする<sup>39</sup>。その人物は覗き窓からそこに青色をしたボールが置かれているのを見る。このとき、その人物が「装置にはどのような細工が施されているか分からないから、知覚が提示するボールの色に関して自分は判断を下すべき立場にはない」と信じていたとする。その人物は後になって、実験者からその装置は何ら知覚を歪めるものではないと知らされ、その時に差し控えていた知覚判断を改めて是認したとする。このような場合、知覚者は当該の経験が生じた時点において、そのボールが青色であることを確かに見ていたと言えるが、その同じ時点において、そのボールが青色であるのが真であると是認あるいは容認していたとは言えない<sup>40</sup>。知覚者はその時点において「そのボールは青い」という命題に対する態度決定を差し控えていたのである<sup>41</sup>。この「差し控え」は、是認や容認などの別の「態度」に対して行われているのであり、「内容」に対して行われているのではない、という点に注意されたい。「差し控える」という態度はその作用域にある別の態度をキャンセルする機能をもつ高次の態度なのである。したがって、知覚内容に対する是認の差し控えとは、いかなる態度も伴わない知覚内容の享受を意味すると言える。上の例では、この知覚内容はのちに差し控えを解除され、是認するという態度を改めて加えられ、晴れて知覚者の信念体系へと組み入れられている。それゆえ、知覚経験はそれ自体命題的態度を欠きながら、なお命題的態度とのあいだに理由付与関係を築きうるのである。

以上のように、「知覚内容に対して何らかの態度をとること」と「知覚内容を享受すること」とは明確に区別されなければならない。マクダウェルは、知覚内容を享受することは、その内容を受け入れることではなく、受け入れることへの「権限を付与されること」だと述べる。彼はこれを「招待状 (invitation)」を受けとることに喩える (McDowell 2002, p. 278)。招待状を受けとることは招待された者の自由にはならないが、その招待に応じるか否かは招待された者の自由である。同様に、知覚者は、それ自体は自由にはならない受動的な知覚内容の享受によって、その内容を是認するか否かを決定する能動的な権限を付与されるのである<sup>42</sup>。知覚経験が与えるこの判断への権限の付与をマクダウェルは「合理的

<sup>39</sup> この例はマクダウェルの記述をもとに筆者が若干の創作を加えたものである。

<sup>40</sup> この例が示しているのは「是認しないという態度をとる」ということではない。「是認するという態度をとらない」と「是認しないという態度をとる」とはその認識的地位において明確に異なる。前者はいかなる正当化も欠いているが、後者は（いわば）負の正当化をもつのである。

<sup>41</sup> その時点において知覚者は「そのボールは青い」という命題に対する同意は差し控えていたかもしれないが、その代りに「そのボールは青く見える」という命題は受け入れていたのではないと言われるかもしれない。だが、後者の命題の内容は前者の命題の内容とは別物である。後者の現われに関する命題をどう扱うかに関しては、Sellars 1997 の第三節「「見え」の論理」(The Logic of 'Looks') を参照。マクダウェルは基本的にそこでのセラーズの分析を受け入れていると思われる。

<sup>42</sup> もちろん、招待状を受けとるためには何らかの条件が必要である。知覚内容の享受の場合、しかるべき感受性を備えていることに加え、その内容に対応する概念能力を有していることがそのような条件を構成する。

授權」と呼ぶ。知覚経験と知覚判断とのあいだに結ばれる授權関係は、判断同士のあいだに結ばれる推論関係とは明確に異なる関係様態をもつ。なぜなら、授權関係には通常の推論関係にはない受動的な要素が介在しているからである。さらに、推論関係においては典型的には内容の組み換えが生じるのに対し、授權関係においては内容自体が同一に保たれ、ただ態度決定が加わるだけだという点でも両者は異なる。もっとも、ここで態度決定が加えられる内容は経験それ自体がもつ内容のごく一部にすぎない。なぜなら、経験は実際の判断において用いられるよりもはるかに豊かな内容をもつからである。われわれは自身に課されたこの豊かな内容のどの部分を判断に用いるかを選択できる。だが、それに先立つ内容の享受に関しても、また内容の決定に関しても、われわれは原理的に選択の自由を欠いているのである<sup>43</sup>。

以上より、知覚経験における概念能力の受動的現実化とは、知覚者がその経験の概念的 content に対して何らかの態度決定を行うことへの権限を獲得することであると結論できる。経験において現実化されている概念能力の役割は、思考とのあいだに授權関係を結び、それによって知覚的信念に内容の制約を課すことなのである。多くの論者が認めてきたように、通常の知覚的判断はその形成過程に推論を介さない非推論的なものである<sup>44</sup>。われわれは経験が判断に対して果たす役割を「合理的授權」として捉えることで、理由付与関係のうちに推論関係だけではなく非推論的な授權関係をも認めることができる。これらはどちらも理由への応答性を示す概念的な関係として捉えられるが、それぞれの関係様態において明確に区別されるのである。

このように、マクダウェルの示す描像は、経験と思考との区別を脅かすことなく、知覚経験の受動性や知覚判断の非推論性といった、経験と思考に関わる基本的な諸特徴を満足するものである。また、マクダウェルの描像において、知覚経験のもつ内容は、彼が概念の特徴として定める理由への応答性という基準にも適うものである。ではそれはさらに、前章で述べた四つの基準、すなわち（１）合成性、（２）認知的意義、（３）指示決定性、（４）力からの独立性をも充足しうるのだろうか。もしマクダウェルの描く知覚経験がこれらの基準を充足するのであれば、その内容はまさに思考や信念の内容が概念的であるのと同じ意味において概念的であると認められることになるだろう。

---

<sup>43</sup> われわれは能動的な身体運動を行うことで、どのような知覚内容を獲得するかに関して一定の選択を行うことができる。だが、その選択がどれほど能動的なものであろうと、知覚経験の内容の最終的な決定権は常に世界の側にある。例えば、われわれは建物の裏側に回り込むことで、今まで未規定だった知覚内容を規定的な内容へと変化させることができる。だが、その規定的な内容がどのようなものであるかは世界の在り方に依存している。

<sup>44</sup> マクダウェルは 2010 年の論文 (McDowell 2010) で、心理学的な意味での非推論性と認識論的な意味での非推論性とを区別する。前者は「判断の形成過程に推論を介さない」という意味での非推論性であり、後者は「事後的な正当化においてすら訴えることのできる推論構造がない」という意味での非推論性である。マクダウェルによれば、知覚判断は単に心理学的な意味においてだけではなく認識論的な意味においても非推論的でなければならない。本章第七節で後述するように、知覚判断に後者の意味での非推論性を要求することは、マクダウェルが従来の命題概念主義を捨てて直観概念主義を採用する動機の一つをなしているように思われる。

## 第六節 マクダウェルの描像と概念性の基準

まずは（１）合成性からみてゆこう。合成性原理によれば、ある内容の構成要素が概念として認められるためには、その構成要素は当該の内容以外の様々な内容において現実化されうるものでなければならない。これが意味するのは、経験のなかで受動的に現実化される能力が概念能力として認められるためには、経験と同一の内容をもつ観察判断においてだけでなく、観察的な場面を離れた様々な判断において行使されえなければならない、ということである。マクダウェルはこの制約を認め、次のように述べる。

経験のうちで引き出される能力が概念的であると認められるのは、この能力をもつひとが、経験判断の内容を他の判断可能な内容と連関させる合理的関係に応答できるという事実が背景にある場合だけである。（McDowell 1994, pp. 11-12）

つまり、経験のなかで働く能力は、関連する理由付与関係のネットワークと結びつきつつ、それを背景として現実化される場合に限り、概念的なものとして認められるのである。換言すれば、経験のなかで現実化される能力が概念能力としての資格を得るのは、それを備えた主体が理由の空間へと参入し、当該の経験内容を理由として考慮することができるようになることによってである。このように合理的連関へと帰属することこそが、受動的に現実化されている能力を概念能力として、すなわち合成性原理を満たすものとして認めることを可能にするのである。以上のように、マクダウェルは知覚経験が成立するためにはその内容が合理的連関を通じて他の判断へと利用可能でなければならないと考える。この点で、マクダウェルの描く知覚経験は合成性原理を満たすものであると言えよう。

では、（２）認知的意義についてはどうだろうか。認知的意義の原理によれば、ある内容が概念的であるためには、当該の内容は「意味（Bedeutung）」のレベルではなく「意義（Sinn）」のレベルで個別化されるものでなければならない。マクダウェルは自らの描像において「境界なき概念領域」というテーゼを援用することで、事実を取り込むこととしての経験がフレーゲ的な意義の領界に属しているという見方を擁護している。真正な経験が取り込むのは「成り立っている思考可能なもの」（McDowell 1994, p. 179）としての事実であり、したがってそれは信念や判断の内容と同じく意義の領界に属している。真なる経験や思考の内容と世界とのあいだにはいかなる「存在論的ギャップ」（McDowell 1994, p. 27）も存在しないのであり、もし人が誤りに導かれずに知覚や思考を行うならば、それらの内容は事実として成立している事柄そのものと一致するのである。ただし、このように思考と実在のあいだに存在論的ギャップを認めないことは、実在の心的独立性を軽視するような観念論的な立場を採用することを意味するものではない。

思考そのものと世界とのあいだにはいかなるギャップもないと言うことは、自明の理を大袈裟な言葉で飾り立てることにすぎない。要するにそれは、たとえば春が始まったということをひとは考えうるのであり、まさにそれと同じことが、すなわち春が始

まうたということが成り立ちうるということにすぎないのである。これは自明の理なのであって、実在の独立性を軽視しているのではないかといった形而上学的問題を引き起こすものではありえない。(McDowell 1994, p. 27)

ここでのマクダウェルの論点は、「経験や判断の概念的内容が真であるならば、それは同時に実在の一位相としての事実でもある」ということである。われわれの経験することや考えることが事実でありうるということは、確かにマクダウェルが述べるように常識が告げるところの「自明の理 (truism)」であろう。このように、マクダウェルの描像においては、知覚経験が取り込むところの実在の独立性を損なうことなく、経験内容を意義のレベルで捉えることができるのである<sup>45</sup>。以上より、マクダウェルの経験概念は認知的意義の原理も満たしていると言うことができよう。

次に (3) 指示決定性について考察しよう。指示決定性の原理によれば、ある内容が概念的であるならば、主体はその内容の意味論的値を決定することができなければならない。ここでポイントとなるのは、われわれが知覚を通じて経験するのは外界に存在する特定の個別者であるという点である。知覚経験においてわれわれが会うのは、犬一般や猫一般といったタイプではなく、今現在われわれの眼の前で寝そべっている具体的な個別者としてのトークンである。知覚経験の内容が指示決定性の原理を満たすということは、その内容を通じてわれわれがこうした個別者としての知覚対象を同定できるということである。

しかしながら、ここで次のような問題が提起されうるだろう。もし知覚経験が指示決定性の原理を満たすとすれば、その内容は個別者を意味論的値としうるようなものでなければならない。しかしながら、通常、〈イヌ〉や〈ネコ〉といった一般概念は、世界のなかに存在する個々のトークンではなく、特定の時空間的な位置づけをもたないタイプを指示するものとして理解されている。この論点は一般性制約のなかに含意されており、概念性の基準を思考のレベルで設定するならば堅持されねばならない。もし知覚のもつ概念的内容がこのような一般性という特徴をもった概念によって構成されているとすれば、それはいかにしてタイプではなくトークンとしての身分をもつ個別者をその意味論的値とすることができるのだろうか。知覚経験の内容が概念的であり、それゆえ指示決定性の原理を満たすと考えるならば、われわれは概念的内容がいかにして個別的对象をその意味論的値としうるのかを説明できなければならない。

ここで概念主義がとりうる方策の一つは、知覚経験の内容を一般概念によって構成される記述として理解し、この記述によって個別者への指示が決定されるというものである。しかしながら、マクダウェルの指摘によれば、そのような一般概念から成る記述によっては、知覚経験がもつ「個別者に関係する」という性格を与えることはできない (McDowell 1998a)。なぜなら、ストローソンが指摘するように、一般概念のみによる記述は、その記述内容に適合する大規模複製 (massive reduplication) がこの宇宙のどこかに存在するという可能性を排除しえないからである (Strawson 1959, p. 20)。それゆえ、一般記述のみ

---

<sup>45</sup> 筆者の修士論文 (小口 2007) 第五章では、マクダウェルの概念主義に対する「観念論ではないか」という疑いについて立ち入った考察を展開しているので参照されたい。



によって個別的对象への指示の成功を保証することはできない（大規模複製に関しては次章でさらに詳細に扱う）。

マクダウェルによれば、経験において個別的对象との関係性を確立するためには、知覚者は対象を「あの猫は茶色い」と表されるような直示的な仕方において把握しなければならない。つまり、知覚経験の内容が概念的でありながら、それが意味論的値として外界に存在する個別的对象を採りうるためには、その内容は直示性を含むようなものでなければならないのである。実際、マクダウェルは知覚の肌理細かさの問題に応答するなかで、知覚経験が〈あの猫〉や〈あの色〉といった直示的概念をその構成要素とすることを認めている（McDowell 1994, pp. 56-57）。知覚経験がこのように直示的概念をその構成要素としうるのであれば、それは対象を一般性のレベルではなく個別性のレベルにおいて指示することが可能となる。このように、直示的概念を援用することで、われわれは知覚経験の内容を概念的なものとして認めながら、それが個別者のレベルで指示を行うという論点を救い出すことができるのである。

最後に、（４）力からの独立性について考えよう。力からの独立性の原理によれば、もしある内容が概念的であるならば、その内容は力とは独立に個別化されうるのでなければならない。逆に言えば、もしある心的内容がその内容に対してとられる態度から独立であると認められなければ、その内容は概念的であるとは言えないということになる。実際、この論点を利用してガンサーは感情が非概念的内容を持つという主張を行っている

（Gunther 2003b）<sup>46</sup>。では、知覚経験の内容に対しては力からの独立性を認めることはできるだろうか。

前節で確認したように、マクダウェルは「知覚内容を享受すること」と「享受した知覚内容に対して何らかの態度をとること」とを区別し、知覚内容を享受することは、その内容に対して是認や容認などの態度をとることではなく、そうした態度をとることへの合理的権限を与えられることだと考える。その見方によれば、知覚経験それ自体はいかなる態度からも独立であり、判断において初めてその内容に何らかの態度が付与されることになる。このように、マクダウェルの描像においては、知覚経験は何らかの命題的態度をとることへの合理的授權として捉えられており、その内容自体はどのような態度が付与されるかとは独立に成立する。したがって、マクダウェルの描像における経験は力からの独立性という基準を満たすと考えてよいだろう<sup>47</sup>。

以上、前章でわれわれが導入した概念性の四つの基準に対して、マクダウェルの描像における知覚経験がそのいずれをも充足しうるということを確認してきた。これらの議論が妥当であるとすれば、知覚経験において現実化される能力は、思考や判断において行使さ

<sup>46</sup> ガンサーは、感情の内容に対応する表出文（expressive）の論理的ふるまいを主張文のそれと比較することで、感情の内容には力からの独立性が認められないと論じる。もしガンサーの主張が正しいとすれば、感情の内容は概念性の基準の一つをみたさず、それゆえ非概念的であるということになる。

<sup>47</sup> 経験における力からの独立性の様態は他の命題的態度におけるそれとは異なる。他の命題的態度においては、その内容がさまざまな力のもとで同一に保たれるという点で力からの独立性が成立している。他方、知覚経験においては、そもそもその内容にいかなる力も付随していないという点で力からの独立性が成立している。とはいえ、知覚経験の内容は理由構成関係を通じてさまざまな命題的態度の内容と成りうるため、この点では両者の違いは本質的なものではないと言えるかもしれない。

れるのと同じ意味において概念的な能力であると言えることができる。知覚経験の概念主義においては、知覚内容の形成に関わるとされる概念能力は、受動的に現実化される能動性を欠いたものであるという点で思考における概念能力とは異なる。だがそれは思考内容の概念性を特徴づける主要な四つの基準を同時に満たすことができる。それゆえ、受動的に形成されるものでありながらも、知覚経験の内容はなお概念的であると認められるのである。

## 第七節 命題概念主義と直観概念主義

### 7. 1 マクダウエル自己修正

本章の以上の諸節では、『心と世界』を中心にマクダウエルの概念主義における主要な論点を描き出し、「知覚経験は概念的内容をもつ」というその主張が前章で論じた概念性の基準に適うものであることを論じてきた。しかしながら、マクダウエルは近年の論文「所与の神話を回避する (Avoiding the Myth of the Given)」(McDowell 2008)において、これまでの自らの概念主義に対して大きな修正を加えている。本節では、このマクダウエルによる自己批判の妥当性に関して考察を行う。当該論文はマクダウエルによる自己修正の試みであるが、それが以前のマクダウエルの立場と正確に言ってどのような関係にあるのか、また、それが本当に「改善」と呼べるものになっているのかは必ずしも明らかではない。本節では、修正された立場は修正以前の立場に対して必ずしも改善をもたらすものではなく、むしろマクダウエルが堅持すべき論点とのあいだに緊張関係をもたらすと論じる。

マクダウエルは当該論文のなかで次のように述べる。

私はかつて次のことを前提していた。すなわち、経験を概念能力の現実化とみなすために、われわれは経験が命題的内容——判断がもっているような種類の内容——をもっていると考える必要がある、と。また私は次のことも前提していた。経験の内容は、その経験が経験主体に対して非推論的に知ることを可能にするすべてのものを含んでいる必要がある、と。これらの想定はいまや両方とも私には誤っているように感じられる。(McDowell 2008, p. 3)

ここでマクダウエルは自らの以前の立場に含まれていた二つの前提について反省を加えている。それらの前提とは以下のものである。

- (1) 知覚経験の内容は命題的でなければならない。
- (2) 知覚経験の内容は知覚経験から非推論的に判断可能な内容のすべてを含んでいなければならない。

(1) の前提も (2) の前提も『心と世界』で明示的に述べられてはいないが、どちらも

『心と世界』の論述のなかから取り出すことができる。まず（１）の前提は、経験の内容が「思考可能なもの」であるとするマクダウェルの論点に含意されている。この論点は経験が思考と同じ形式において分節化された内容を有しているということを意味している。思考の内容は命題的に分節化された構造を有しており、それゆえ、それと形式を共有する経験も命題的に分節化された構造をもつことになる。これは（１）の主張に他ならない。また（２）の前提はマクダウェルが次のように述べる際におそらくは念頭に置かれていたものである。

根拠づけることは必ずしもある内容から別の内容へと推論を進めることに依存するわけではない […]。物事がしかじかであるという判断は、物事がしかじかであるという知覚的現われを根拠とすることができる。（McDowell 1994, p. 49, n. 6）

マクダウェルの描像において、知覚判断は知覚経験がもつ豊かな内容の一部を「取捨選択」することによって得られる。このとき、当該の判断の内容は知覚経験から推論的なステップを経ることなく直接的に理由づけを獲得する<sup>48</sup>。知覚判断の内容がこのようにそれに対応する知覚経験から正当化を得るとすれば、知覚経験にはそれが根拠づける判断と少なくとも同じだけの内容が含まれていなければならない。これは（２）の主張である。

マクダウェルは、これらの点に修正を加えた自らの描像は、知覚経験に対して概念的 content の存在を否定するものではなく、それゆえ以前の描像と同様に所与の神話に陥ることを避けうるものであると論じる。しかし、これらの修正点のうち一番目のそれは、マクダウェルがこれまで擁護してきた「境界なき概念領界」という見方とのあいだに緊張関係を含んでいるように思われる。

## 7. 2 知覚経験と非推論的内容

この点を論じるに先立ち、まずは、二番目の修正点に関して、それがどのような内実を有しているかという点と、それが概念主義の主張に対してどのような含意を有しているかという点を確認しておこう。マクダウェルはこの修正を、トラヴィスによる「再認能力（recognition capacity）」に関する議論（Travis 2004, p. 84）に促されたものであると述べている<sup>49</sup>。

---

<sup>48</sup> マクダウェルがこのような非推論的な理由付与を「合理的授權」と呼んでいたことは本章第五節で確認したとおりである。

<sup>49</sup> トラヴィスの議論との関係に関してマクダウェルは次のように述べている。「チャールズ・トラヴィスは私を〔本文の以下で扱う〕このような事例について考えるように仕向けた。そして、私は自分の古い想定を捨てるに際して、部分的に彼が私に推奨している見方に同意している」（McDowell 2008, p. 3）。もっとも、トラヴィスがマクダウェルに修正を促した論点に触れているのは、トラヴィスの当該論文における議論の本筋——知覚経験が表象内容をもつことを否定するという議論——からすれば周辺の部分においてである。トラヴィスは表象主義者が受け入れていると思われる四つのポイントのうちの一つについての但し書きとして当該の論点を導入しているにすぎない。そのポイントとは、「われわれがしかじかと表象しているときには、われわれはそれがそうであることを、そしてどうしてそうであるのかを、理解することができる」——つまり、表象内容に対しては、その「なに（what）」と「どうして（how）」について「一人称的な識別可能性」が成立している——というものである。再認能力に関するトラヴィスの考

たとえば、青空を一羽の鳥が飛んでいるのを目にし、そのことによってそれがツバメであると推論を経ることなく知るに至ったとしよう。このとき、前提（2）によれば、当該の知覚経験の内容には「あれはツバメである」という命題によって表現可能な内容が含まれているはずである。私が「あれはツバメである」と非推論的に知ることができたのは、知覚内容それ自体に当該の判断内容と同じ概念的内容が含まれていたからである。

だが、マクダウェルによれば、再認能力という概念を用いることで、このような前提によらずとも現在の事例に対する説明を与えることができる。

経験が私に対してその鳥を視覚的に提示し、再認能力が私の見ているものはツバメ<sup>50</sup>であると非推論的に知ることを可能にする。私の経験が内容をもっているとわれわれが前提し続けたとしても、そのもとで再認能力が私に何を見たかを示してくれるところの概念がその内容のなかに現われていると想定する必要はない。(McDowell 2008, p. 3)

つまり、われわれが「あれはツバメである」という非推論的な判断を行ったとしても、その内容（「ツバメである」というカテゴリー的な判断内容）を経験それ自体のもつ概念的内容によってもたらされたものと考えする必要はない。その内容は経験それ自体によってではなく、経験によって触発された再認能力によってもたらされたものと考えればよいのである。その場合でも、経験によって当該の再認能力が適切な仕方では現実化され、その結果として内容が判断へともたらされたならば、その判断の内容は経験の内容によって正当化されているとみなすことができるだろう。

マクダウェルは続けて、この修正は経験内容の概念性を掘り崩すものものではないと述べる。非推論的に判断可能な内容のうち、再認能力によってもたらされる部分を経験の内容から除外したとしても、そのことによって残りの経験内容が非概念的であると認める必要はない。その場合でも、経験を構成する残りの内容は概念能力の現実化によってもたらされていると主張しうるのである<sup>51</sup>。

---

察は、このうち「どうして」という点に対して制限を加えるものである。トラヴィスによれば、われわれの経験内容を構成する再認能力には、顔の識別や動物種の識別のように、経験のもつ観察可能な特徴（感覚内容）から当該の再認能力によってもたらされた内容に至る適切なストーリーを記述できると考えられるものがある。だが、再認能力にはそうしたストーリーを記述できないものもありうるし、それがありうると考えることはそれほど不合理な想定ではない。だとすれば、表象内容に対する一人称的な識別可能性から「どうして」に関する部分を外すべきであろう。ここでトラヴィスは、再認能力によってもたらされる内容（経験内容の「なに」に関わる側面）が経験のもつ表象内容の構成要素であるという前提のうえで議論を行っている。つまり、トラヴィスはこの論点を経験に対する内容上の制限を促すものであるとは論じていないのである。だとすれば、マクダウェルがトラヴィスの再認能力に関する論点から受けた影響は、「トラヴィスの批判を受けての修正」というよりも「トラヴィスの論点に触発されての修正」という程度の弱いものであると考えるべきであろう。

<sup>50</sup> 原文ではショウジョウコウカンチョウ (cardinal) が事例として使用されているが、日本では馴染みの薄い鳥であるためツバメに変更した。

<sup>51</sup> だがここで次のような疑問が提起されるかもしれない。すなわち、概念能力は何らかの対象や性質が当該の概念に包摂されるか否かの判断に関わるものであり、それゆえすべての概念能力は再認能力であると言ふべきではないか、と。そうだとすれば、経験内容から再認能力に関わる内容を除いた場合、何かが

では、非推論的に判断可能な内容のうち、どこまでが経験それ自体を構成する内容で、どこからが経験によって触発された再認能力による内容なのだろうか。この点についてマクダウェルは次のように述べる。

視覚経験にとって自然な停止点は、視覚固有の感覚可能者および視覚にアクセス可能な共通の感覚可能者であろう。われわれは経験を固有および共通の感覚可能者と関連する概念能力を引き込んでいるものとして理解するべきである。(McDowell 2008, p. 4)

ここでの考えによれば、経験それ自体の内容を構成するのは「可感的な内容 (sensible content)」であり、そこには各感覚様相に固有の内容 (たとえば色や音や味) といくつかの感覚様相に共通の内容 (たとえば形や大きさや運動) が含まれている<sup>52</sup>。

マクダウェルは以上のような再認能力に訴える説明を経験内容に訴える説明の可能な代替案として提示している。だがマクダウェルは、なぜ前者の説明が正しく、後者の説明が誤りであると言えるのかについて明確な論拠を与えていない。それゆえ、ここでのマクダウェルの論述から導くことができるのは、「前提 (2) が誤りである」という強い主張ではなく、「それに対して積極的にコミットする論拠はない」という弱い主張のみである。マクダウェル自身は前提 (2) を否定しているが、少なくともこの論文の範囲内においては、その正否に関して結論を出すことはできないと言うべきであろう。

ここで注意すべきは、前提 (2) を受け入れるか否かは、マクダウェルも指摘しているように、概念主義的な立場にとって論証上の関わりのある重要な帰結をもつわけではない、という点である。一般に、知覚経験に関わる内容のうち、色や形、運動などの可感的内容は認知的な要素の関与が比較的少ない低次の内容であり、〈スズメ〉や〈ツバメ〉などの対象のカテゴリーに関わる内容は高次の内容であるとされる<sup>53</sup>。もし低次の内容が概念的であると認められるならば、高次の内容も——それが知覚経験の内容に含まれるか否かにか

---

内容として残るとすれば、それはすべて必然的に非概念的な内容であるということになる。こうした批判を回避するためには、マクダウェルが問題にしている再認能力を、非推論的な判断内容のうち、(本文のすぐ後で触れる) 可感的内容に対応する内容を除いたものに限定して考える必要がある。マクダウェル自身はこの問題に触れていないが、こうした限定を妨げるものは何もないように思われる。

<sup>52</sup> しかしながら、感覚可能な内容とそうではない内容の境界線を明確に区画することは困難であろう。たとえば、眼の前にあるリンゴは、見えている表面だけで構成されているのではなく、現在の視点からは見えない裏側をもった三次元的対象として見える。あるいは、柵の向こうにいるネコは、部分的に遮蔽されているにも関わらず、断片的な部分の集合としてではなく、ひとつながりの連続体として見える。知覚経験に関わるこれらの側面は厳密に言えば感覚的な成分をもたないが (ものの背面や遮蔽部分からは直接の反射光はやってこない)、それでもなお、現象学的には知覚経験の構成要素であると認められるかもしれない。ノエはこのような内容を潜在的内容 (virtual content) と呼び、知覚経験のもつ正当な現象的内容として扱うべきという主張を行っている (Noë 2004)。こうした問題はあるものの、前提 (2) の正否にとっては、可感的内容とそうではない内容とのあいだに明確な境界線が引けるかどうかは無関係である。マクダウェルにとっては、両者それぞれの典型例のあいだに、感覚的性質との関わりにおいて明白な差異が認められるならばそれで十分である。

<sup>53</sup> 前者はしばしば感覚的 (sensational) ないしは現前的 (presentational) 内容と呼ばれ、後者は認知的 (cognitive) ないしは解釈的 (interpretative) 内容と呼ばれる (Fish forthcoming)。

かわらず——概念的であると容易に認められることになるだろう。逆に、低次の内容が概念的であると認められなければ、たとえ高次の内容が概念的であると認められたとしても、知覚経験の基礎的な部分には非概念的な内容が含まれることになる。それゆえ、概念主義の擁護者がまずもって確立すべきは、知覚経験の基礎をなす可感的内容が概念的であるということであって、より高次の内容が知覚経験に含まれるか否かは論証上直接的な関心の対象ではない。

### 7. 3 知覚経験と直観的内容

では次に一番目の修正点について検討しよう。マクダウェルは、知覚経験が有しているのは——自身が以前にそうであると考えていた——命題的に分節化された内容ではなく、そうした分節化以前の「直観的内容 (intuitional content)」であると述べる (McDowell 2008, p. 4)。直観的内容は、たとえば、「これは立方体である (this is a cube)」のように命題的な形式においてではなく、「この立方体 (this cube)」のような直示的な形式において表現される内容に対応する。ただし厳密に言えば、経験の直観的内容は「この立方体」という (命題の一部としてすでに分節化を施された) 直示的内容そのものではなく、そうした直示的内容を含んだ判断に先立ち、それを可能にするところのものである。人は「判断すること」としての叙述的活動 (discursive activity) によって直観に含まれている内容を命題として明示化する。しかし、直観的内容それ自体はあくまでそれが明示化されたところの命題的内容とは別物である (McDowell 2008, p. 6)。

では、直観的内容が命題的な構造をもたないとすれば、なぜそれを概念的な内容であると言っているのだろうか。この問いに対してマクダウェルは次のように答える。

なぜなら、直観がもつ内容のすべての側面は、(少なくともまだ) 現に叙述的能力と結びついてはいないとしても、叙述的能力と結びついた内容となるのに適した形式においてすでに現前しているからである。 (McDowell 2008, p. 7)

直観的内容は判断の内容として分節化されるのに適した形式において統一されている。マクダウェルはこのことをカントの次の表現のなかに読みとる (McDowell 2008, p. 4)。「判断における多様な表象に統一をもたらすのと同じ機能が、直観における多様な表象の単なる総合にも統一をもたらす」(A79/B104)。マクダウェルの理解によれば、ここで語られているのは、経験においてその内容を形成するために働く能力は、判断においてその内容を形成するために働く能力と同一の能力——すなわち概念能力——であるということである。経験においてその能力は(判断におけるように)叙述的活動として行使されるのではない。だが、その能力はそこで受動的に現実化され、特定の内容をもった直観の形成に寄与することで、その内容に対応する叙述的活動によって生み出される判断に合理的な根拠を与えるのである。

以上のように、マクダウェルは知覚経験が命題的に未分節な直観的内容をもつとみなしつつも、そうした直観的内容の明示化として判断の内容を捉えることで、両者のあいだに

合理的な制約関係が成立するという概念主義の要求を満たそうとする。では、なぜマクダウェルは命題説を否定して直観説を採用するに至ったのだろうか。

マクダウェルは次の二点から命題説に対する直観説の優位を主張する。

第一に、直観説は「経験が判断への合理的授權として働く」というマクダウェルが以前から主張していた論点に対してよりふさわしい枠組みを与える。経験を合理的授權とみなす見方によれば、経験はその内容に対して是認や容認などの何らかの態度をとることではなく、そうした態度をとるための権利を付与することである。経験は「われわれの周囲を視界へともたらすこと (bringing our surroundings into view)」であり、「物事が事実そう [視界へもたらされた通り] であるとみなすこと (taking things to be so)」ではない。「もし経験が命題的内容をもつとすれば、経験することが『物事が事実そうであるとみなすこと』であって、私がそう考えているように、『物事が事実そうであるとみなすための資格を与えること』ではない、ということを否定するのは難しくなる」(McDowell 2008, p. 11)。反対に、経験のもつのが直観的内容であるとすれば、知覚経験が是認や容認などの命題的態度ではないということはより明確なものとなる。なぜなら、その内容はそもそも何らかの態度がとられるような命題的なものではないからである。

第二に、直観説は経験による判断への合理的制約が非推論的なものであるという論点に対してよりふさわしい枠組みを与える。もし経験が命題的構造をもつとすれば、経験と判断のあいだの関係は命題同士のあいだの関係であることになる。このことから、信念同士のあいだの理由付与関係と同様に、経験と信念のあいだの理由付与関係もある種の推論的構造をもつとみなす誘惑が生じる。だが、経験が非命題的な直観であるとすれば、その内容と判断の命題的内容とのあいだの関係は推論的構造をもちえない。「[経験から判断への] 授權は [...] 推論の前提からではなく、対象それ自体が知覚者に現前することから生じる」(McDowell 2008, p. 12)。直観説は経験による合理的授權が推論関係によって成立するものではないということをより明確にするのである。

## 7. 4 直観概念主義の問題点

以上のように、直観説は「経験は命題的態度ではない」および「授權関係は推論的ではない」という二つの論点を捉える上でより適切な枠組みを与えるとマクダウェルは考える。だが、これらの利点は直観説を支持する根拠としてそれほど決定的なものではないように思われる。なぜなら、本章第五節で論じたように、命題説においてもこれらの論点を満たすことは十分に可能だからである。確かに、直観説に立つならば上記二つの論点をより誤解の余地の少ない仕方で擁護することができる。だがそのことは、命題説がそれらの論点を確保することのできない劣った見方であることを意味しない。だとすれば、上記の利点は命題説から直観説への移行を決定的に動機づけるものではない考えるべきであろう。それどころかむしろ、直観説にはマクダウェルが主張している別のテーゼとのあいだに不整合を生じさせるという欠点が潜んでいるように思われる。そのテーゼとは、本章第三節で取りあげた「概念領界の無境界性」である。

このテーゼによれば、経験が欺かれたものでない場合、それが有する内容は事実そのも

のへと到達している。ここでの事実とは「真なる思考可能なもの」であり、世界はこうした事実の総体から構成される。経験が取り込む事実がこのように思考可能なものとしての身分をもつとすれば、たとえ経験の内容が命題的構造をもつとしても、そのことによって経験と世界とのあいだに「存在論的ギャップ」が生じることはない。なぜなら、思考可能なものとしての事実はそれ自体としてすでに命題的構造を有しているからである。この概念領界の無境界性というテーゼは、概念主義に対して、経験が認識的仲介者として世界と思考を媒介することを否定し、素朴实在論的な見方を保持することを可能にするという役割を果たしている。

ところが、直観概念主義のもとでは、このテーゼは収まる場所を持たず排除されてしまうように思われる。直観説においては、経験の内容は命題的な構造をもたない直観的なものである。それゆえ、真なる経験において取り込まれるのは命題的構造を有するものとしての事実ではありえないことになる。だとすれば、思考可能なものとしての事実という観念を利用して素朴实在論的な見方を擁護する道は封じられているということになるだろう。

ここでマクダウェルがとりうるのは、(1) 素朴实在論的な見方を放棄するか、(2) 経験においてわれわれが直接的に接触するのは世界の構成要素である事実であるが、それは命題的な構造をもたないとするか、(3) 経験においてわれわれが直接的に接触するのは事実ではなく、世界の構成要素である物理的対象とそれがもつ諸性質であるとするか、いずれかである。

(1) の選択肢をとることはマクダウェルの基本的な哲学的立場に反する。マクダウェルの考える哲学とは、「常識に逆らうものではなく、むしろ常識を守るもの」(McDowell 1994, p. 44) であり、その営みにおいて「すべてのものを、そのあるがままにしておく」

(Wittgenstein 1953, p.42) ものである。マクダウェルはこのようなウィットゲンシュタイン流の静観主義の立場から一貫して常識としての素朴实在論の擁護を試みている。それゆえ、素朴实在論を捨て去ることはマクダウェルの選択肢にはないと考えるべきであろう。

では(2)の選択肢はどうだろうか。この選択肢をとることができるのは、事実が命題的構造をもたないことが可能である場合に限られる。だが、マクダウェルは事実と命題の結びつきを本質的なものとみなしている。「われわれは、成立していると正しく思考されうるもの (something that could be truly thought to be the case) という観念を離れて、事実という観念を把握するすべをもたない」(McDowell 2000b, p. 96)。マクダウェルによれば、「思考可能なもの」という観念と「事実」という観念は互いの文脈においてのみ理解可能であり、片方を理解するためにはもう片方に言及せざるを得ないような相互依存的なものである。確かに、われわれは「しかじかは事実である」ということを「しかじかは真である」ということを離れては理解しえない。そして、真偽を問いうるのは命題的構造を有したもの、すなわち思考可能なものだけである。経験的思考に関する限り、この逆もまた真であろう。このように、マクダウェルは事実と命題との結びつきを単なる偶然の事柄ではなく概念的真理であるとみなしている。したがって、(2) もまたマクダウェルの選択肢にはないと考えるべきであろう。

残されたのは(3)の選択肢である。この選択肢をとった場合、概念領界の無境界性と



いうテーゼを貫くためには、対象とその諸性質が——命題的に分節化されていないにもかかわらず——それでもなお概念的なものの範囲内にあるという主張を何らかの仕方で擁護する必要がある。だが、「われわれが経験するのは分節化以前の対象とそれがもつ諸性質である」という見方は、むしろ非概念主義に対して典型的に帰される主張である。それゆえ、経験されるのが命題的な事実であるという見方を放棄しながらも、なお概念主義的な立場に立とうとするならば、結果として得られる描像のどこが非概念主義のそれと区別されるのかを明確にしなければならない。上述のように、マクダウェルは直観的内容が命題的構造を欠きながらも、なお「叙述的能力と結びついた内容となるのに適した形式においてすでに現前している」という意味で概念的であるとみなす。だが、この意味において経験内容が概念的であるという主張は、「われわれの知覚内容は非概念的であるが、叙述的活動によって概念化可能であるような形式を備えている」という主張と実質的に何が異なるのだろうか。概念主義と（３）の選択肢が両立するという主張を擁護するためには、少なくともこの問いに対して何らかの解答が与えられなければならない。さもなければ、（３）の選択肢をとることは、概念主義を非概念主義と実質的に区別のつかない立場へと追いやることになるだろう。

本節の論述をまとめよう。マクダウェルの自己修正は、（１）知覚経験が有するのは命題的内容ではなく直観的内容である、（２）知覚経験はそこから非推論的に判断可能な内容のすべてではなく、その一部である可感的内容のみを含む、という二点に関わるものであった。このうち（２）の修正点は概念主義の論証にとってさしたる関連性をもたないため、その妥当性の如何は本論の直接的な関心の対象ではない。また、（１）の修正点はそれを採用するための決定的な動機づけを欠いているだけではなく、所与の神話の回避と素朴実在論の擁護というマクダウェルの堅持すべき論点を貫徹することを危うくする。

以上の議論が正しいとすれば、われわれはマクダウェルによる自己修正の試みを安易に受け入れるべきではないということになる。それがマクダウェルの以前の立場に比べてどのような決定的な利点を有し、彼が行ってきた他の主張とどのように整合するかが示されない限り、われわれは命題的概念主義から直観概念主義へと鞍替えすべき明確な理由をもたないのである。

しかしながら、われわれが命題概念主義の立場に留まるとしても、その主張に対してはなおさまざまな批判が提起されうる。たとえば、認識論における外在主義の一種である信頼性主義（reliabilism）に立つ論者であれば、知覚経験は知覚判断を行うための理由を主体に与えるものでなければならないという前提を否定するだろう（Heck 2007, p. 118）<sup>54</sup>。そして、所与の神話に対する批判が効力を発揮するのは、マクダウェルのように正当化に関して内在主義的な立場に立った場合のみであると反論するだろう。正当化に関する内在主義的な見方によれば、信念の正当化に関わる認知的な要素に対して、主体は内的にアクセス可能でなければならない。これに対し、正当化に関する外在主義的な見方によれ

---

<sup>54</sup> ただし、ヘックはこのタイプの批判を示唆しているのみであり、それを自ら受け入れているわけではない。

ば、信念の正当化に関わる要素は主体にとってアクセス可能でなくとも構わない。信頼性主義は外在主義を代表する立場であり、信念が正当化されるためには、それが「信頼のおける (reliable)」認知プロセスによって形成されることが必要であると主張する。この見方によれば、たとえ経験が主体にある信念を抱くための理由を与えないとしても、経験を通じた信念の形成プロセスが信頼のおけるものであると認められさえすれば、当該の信念は正当化されうることになる。

これに加えて、非概念主義に立つ論者であれば、たとえ知覚経験が知覚判断に理由を与えなくても、必ずしも知覚経験に概念的内容を帰属する必要はないと主張するだろう

(Lerman 2010)。すなわち、経験と判断のあいだに成立する規範的關係は概念的なもの同士のあいだにしか成立しえないものではなく、それゆえ、知覚経験はたとえその内容が非概念的なものだとしても望まれる規範的役割を果たしうるのである。

こうした批判に対して概念主義からはどのような応答が可能だろうか。残念ながら、マクダウェル自身は明確なかたちでそれらに対する応答を行ってはいない。そこで次章では、ブリューワーの『知覚と理由 (*Perception and Reason*)』(Brewer 1999) を中心に取り上げたい。ブリューワーはこの著作で、マクダウェルの命題概念主義を引き継ぎ、それを擁護するための精緻な論証を展開している。その論証を手がかりとして、上記の二つの批判を退けるための議論を構築し、命題概念主義に対するさらなる理論的な精緻化を行うことが次章の課題である。

### 第三章 ブリューワーの概念主義

#### 第一節 命題概念主義に対する二つの批判

前章の最後で示した命題概念主義に対する二つの批判とは、(1) 所与の神話が克服すべき問題とみなされるのは、経験から信念への合理的制約に関して内在主義的な描像を前提として受け入れた場合のみなのではないか、(2) 内在主義的な描像を受け入れたとしても、合理的制約を与えうるのは概念的 content のみに限定されないのではないか、というものである。

第一の批判によれば、「経験は判断を行うための理由を主体に与えるものでなければならない」という内在主義的な前提は不可欠なものではない。マクダウェルが考えるように、理由付与関係が概念的な事項間にしか成立しえないとすれば、確かに所与の神話は経験に対して不当な要求を課しているということになる。なぜなら、所与の神話とは、経験が非概念的な内容をもつとみなしながら、それが判断に対して理由を与えることができる立場だからである。だがそもそも「経験は判断に理由を与えるのでなければならない」という前提を疑う余地はないのだろうか。この前提を受け入れないとしても、信頼性主義のような外在主義的な立場をとるならば、われわれは経験が判断に対してある種の正当化を与えるという見方を放棄する必要はない。知覚経験がある条件下において判断を引き起こすならば、その条件が信頼性主義の基準に適うものである限り、当該の経験が判断を正当化するとみなすことができる。さらに、もし知覚者がこの信頼性基準に関する知識を有しているならば、この知識を利用して反省的な自己精査を行うことにより、当該の知覚者のもつ信念体系は（概念主義が要求するところの）合理的な改訂可能性を得ることができる。だとすれば、経験と判断が理由付与関係で結ばれていることは、経験的信念の成立にとって不可欠ではないということになる。こうした批判に対して概念主義を擁護しようとするならば、「経験としかるべき信念とのあいだには、知覚者本人がアクセス可能な理由付与関係が成立していなければならない」という内在主義的な主張に対する積極的な論拠を示す必要がある<sup>55</sup>。

また、第二の批判によれば、たとえこの内在主義的な主張を受け入れたとしても、そこから必ずしも概念主義的な立場が帰結するわけではない。この主張から概念主義が帰結するためには、「理由付与関係が概念的な事項間にしか成立しえない」という前提が必要とされる。前章で確認したように、マクダウェルはこの前提をデイヴィッドソンの斉合主義のテ

<sup>55</sup> この第一の批判に答えるためには、正当化一般に関して内在主義を擁護する（あるいは信頼性主義を否定する）必要はない、という点に注意されたい。ここではあくまで、経験が信念や判断に与える正当化に関して、内在主義的な見方が必須であることを示すことができればよい。本章で検討するブリューワーの論証もそうした目的に限定されている。本章で取りあげる応答は、知覚経験に関する内在主義的な見方を擁護するという方向のものであるが、この第一の批判への対処法としては、これに加えて、信頼性主義からの経験を通じた反省的自己精査に対する説明を批判するという方向もありうる。本論では取り上げないが、ブリューワー自身は後者の方向も扱っている (Brewer 1999, pp. 92-112)。

一ゼから引き出している。すなわち、マクダウェルはデイヴィドソンのテーゼを改変し、「ある信念を抱く理由とみなされうるものは、同じく概念空間のうちにある他のものをおいてほかにはない」と主張するのである。これに対して非概念主義者は次のような批判を行うかもしれない。確かに信念同士のあいだに成立する理由付与関係は概念的な事項によってしか満たしえないものである。だが、経験と信念のあいだに成立する理由付与関係は、信念同士のあいだの理由付与関係とは異なり、概念的でない事項によっても満たすことができる考える余地がある。たとえば、本章第四節に取りあげるように、ラーマンは「知覚と判断のあいだの規範的關係は概念が関わる構造的関係ではない」と主張している。もしこうした考えが成り立つとすれば、経験に対して内在主義な見方を認めたとしても、そこから必ずしも概念主義は帰結しないということになる<sup>56</sup>。こうした批判に対して概念主義の支持者は、「知覚信念に対する理由は知覚経験が備える概念的内容によって与えられなければならない」という主張に対する積極的な論拠を示す必要がある。

マクダウェルの議論はこれらの二つの疑問に対して明確な解答を与えるものではない。そこで本章では、ブリューワーの『知覚と理由』における議論に対する検討を通じて、これらの疑問に対してどのように応答しうるのかを考察する。ブリューワーの論証は、命題概念主義の基本的な立場を継承しつつ、応答のために必要な上述の二つの主張に対する論拠を与えるものである<sup>57</sup>。ブリューワーの議論は以下のようなステップをたどる。

- (i) 信念体系が実在に向けられたものとして成立するためには、知覚経験と関係することによってその内容を規定される、ある特定の基礎的な信念のクラスが存在していなければならない<sup>58</sup>。
- (ii) 知覚経験と知覚信念とのあいだの理由付与関係のみが、(i)によって要請される内容規定的な役割を果たしうる。
- (iii) 理由付与関係は何らかの論証構造として展開可能なものでなければならず、その関係項が概念的なものであることを必要とする。

(i)と(ii)は第一の批判への応答として働き、(iii)は第二の批判への応答として働く。以上の三つの前提を組み合わせることで、知覚経験が概念的な内容をもつことが帰結する。

ブリューワーは(i)と(ii)に対する論証を、次のような前提をもつ背理法のかたちで提示する(Brewer 1999, p. 20)。

<sup>56</sup> 残念なことに、マクダウェルは理由付与関係が概念的なものに限られるという根拠をデイヴィドソンやセラーズに訴える以上の仕方では明示的には展開していない。

<sup>57</sup> ただし、ブリューワーはその後概念主義を放棄し、素朴実在論をより徹底して擁護するために、知覚経験にいかなる内容も認めない「対象説(object view)」という立場へ移行している(Brewer 2011)。概念主義も非概念主義も知覚経験に表象内容を認める立場であるため、いずれもこの対象説——しばしば「関係主義(relativism)」とも呼ばれる——と対立する。本論ではこのブリューワーの転回後の立場に対する詳細な検討を行うことはできない。

<sup>58</sup> (i)において、当該の信念クラスが基礎的とされるのは、そうした信念クラスをもつことなしに、われわれは心から独立な世界についていかなる信念をもつことはできない、という意味においてである。こうした基礎的信念が実際にどのようなものであるかは次節の議論が進展するにつれて明らかになるだろう。

(H) 知覚経験が経験的信念に理由を与えないという仮定は、心から独立な空間的世界についての信念が成立する可能性を排除する。

(W) われわれは心から独立な空間的世界についての信念をもっている。

これらの前提のうち、(W) については、ブリューワーはそれを論証なしに前提として受け入れる。その際、(W) には弱い解釈と強い解釈の両方が可能である。(W) の弱い解釈が意味するのは、われわれの信念の一部は、心から独立な世界に存在する特定の事物についてのものとして——そうした特定の事物が実際に存在するかどうかとは無関係に——自らをその保有者に提示する、というものである。他方、強い解釈が意味するのは、われわれの信念の一部は、心から独立な空間的個別者を指示することに実際に成功しており、そうした個別者の客観的な在り方によって真偽が決定される、というものである。弱い解釈は外界の存在についての懐疑論とも両立可能であり、強い解釈は両立不可能である。ブリューワーはこれらのうち強い解釈を採用する。ブリューワーはさらに、(W) が真であるだけでなく、われわれはこの強い意味において (W) が真であることを知っている——つまり、経験的な信念によって外界の事物を実際に指示しえていることを知っている——ということも前提として受け入れる。後述するように、この付加的な前提は (H) を論証する際に重要な役割を演じることになる。

他方、(H) は上記の (i) と (ii) から帰結する (Brewer 1999, p. 22)。ブリューワーが (i) を論証するために提示するのが次節で取り組む「ストローソン論法 (The Strawson Argument)」であり、(ii) を論証するために提示するのが次々節で取り組む「切り替え論法 (The Switching Argument)」である。ブリューワーによれば、主体のもつある信念が経験的内容をもつと言えるのは、それが直示的な要素をもつ知覚経験とのあいだに結ぶ関係のゆえである。この関係によって、心から独立な特定の事物についてのものとして、当該の信念の内容が固定される——このことを示すのがストローソン論法である。しかし、もし経験が主体に対して、経験された事物が他でもなくある特定の仕方では存在しているということを判断するための理由をけっして与えないとすれば、経験はもはやこの役割を果たすことができなくなるだろう。このとき経験は主体の信念に対して真理条件を付与するという働きを失う。だとすれば、主体の信念は心から独立な実在についてのものであるという地位をも同時に失ってしまうことになる。それゆえ、もし知覚経験が経験的信念に理由を与えないならば、心から独立な世界についての信念の可能性は排除されるのである——このことを示すのが切り替え論法である。

以下、それぞれの論法に対して批判的な検討を加えながら、ブリューワーがどのように (H) を論証するのかを見てゆこう。

## 第二節 直示的要素の必要性：ストローソン論法

ブリューワーが（i）に対する擁護の出発点とするのは、前提（W）——われわれは心から独立な世界についての信念をもっている——である（Brewer 1999, p. 26）。ブリューワーが採用している強い解釈においては、（W）は「われわれの信念の一部は心から独立なもろもろの空間的個別者を指示することに実際に成功している」ということを意味する。こうした信念をもつことは、「実在するある特定の個別者がしかじかであるとみなす」ということである。この信念の内容の一部は、主体が当該の個別者についてもつ〈アイデア（Idea）〉に依存している。エヴァンズの特徴づけによれば、「ある対象についての〈アイデア〉とは、ある対象について考えることを——主体がその対象について同一の仕方考えるであろう無数の一連の思考において——主体に対して可能にするところのものである」（Evans 1982, p. 104）。一言で言えば、ある個別者についての〈アイデア〉とは、「フレゲ的な単称的意義（singular Fregean sense）」のことである。

ここでブリューワーは、当該の〈アイデア〉が一般記述のみから成り立っていると仮定する（これは背理法の仮定であるため後に廃棄される）。すなわち、外界に存在するしかるべき個別者によって一意的に充足される‘the F’という記述である。さらに、この記述は純粋なものであると仮定する。つまり、‘F’に含まれるいかなる他の空間的個別者も、同様に一般記述のみによってピックアップされなければならない。そうした純粋記述とは、たとえば、‘The red ball under the glass table between the chair and the sofa in front of the round white window’のようなものである。こうした記述が心から独立な特定の事物を指示するのに成功するのは、それが一意的に充足された場合のみである。逆に言えば、それが指示に失敗するのは、記述にあてはまる対象がこの世界に存在しない場合か、二つ以上存在する場合のいずれかである。

前者のケース——すなわち、記述を充足する対象が存在しない場合——は日常的にもさまざまな仕方で生じうる。たとえば、見間違えから実際とは異なる場所に対象を帰属するような記述を与えてしまった場合、当該の記述による指示は失敗することになるだろう。われわれは有限の認識力しか持ち合わせてはおらず、けっして不可謬な存在ではないがゆえに、このような誤りが特定の事例において生じる可能性があることは否定できない。とはいえ、そうした事例において、誤りを犯していたことに気づき、今度はさらに注意深く観察を行い、新しく正しい記述を練り上げるということも、また同じくわれわれが行いうることであるように思われる。

しかし、後者のケース——すなわち、記述を充足する対象が二つ以上存在する場合——は事情が異なる。この場合における失敗もさまざまな仕方で日常的に生じうる。たとえば、ガラステーブルの下に赤いボールが二個存在しており、かつ、主体がそのことを知らずに一個しかないと思い違いをしていた場合、主体は片方を指示するためにそれら両方のボールによって充足されうる記述を与えてしまうかもしれない。この場合、主体はさらに記述を詳細なものへと洗練させることで、意中のボールを一意的に指示する記述を与えようとするだろう。だが、どれほど記述を洗練させようとも、原理的には、この世界のどこか別

の場所に記述された場面全体の複製が少なくとも一つ成立しているという可能性は残されている。だとすれば、主体の与えた記述が特定の個別者によって一意的に充足されることに失敗しているという可能性は排除されていないことになる<sup>59</sup>。

ここに前者のケースと後者のケースの決定的な違いがある。前者の場合には、記述が空虚なものとなることは主体の努力によって避けうる性格のものであるのに対して、後者の場合には、こうした「大規模複製」の可能性を排除するために主体にできることは何もない。どれほど記述を詳細にしていっても、その詳細な記述を充足する場面がそっくりそのまま宇宙のどこかに成立している可能性は常に残されている。大規模複製の可能性は、〈アイデア〉が一般記述によって構成されている限り、原理的に排除することができない性格のものなのである。この非対称性を明確化するために、ブリューワーは「認識的可能性 (epistemic possibility)」という概念を導入する (Brewer 1999, p. 30)。この認識的可能性という概念によってブリューワーが意味しているのは次のようなことである。

S にとって p が認識的に可能であるのは、[Ks&p] が論理的に可能であるとき、かつそのときに限る。

ここで、“Ks” は S が知っていることすべての連言である。換言すれば、S にとって p が認識的に可能であるのは、S の有する全知識をもってしても p の可能性を論理的に排除できないとき、かつそのときに限られる。記述が空虚である可能性は S が特定の知識状態にあることによって排除しうる認識的可能性であるのに対し、大規模複製の可能性は S がどのような知識状態にあらうと原理的に排除不可能な認識的可能性である。つまり、S がどんな知識をもっていようと、記述が複数の対象によって充足される可能性を排除することはできないのである<sup>60</sup>。

だとすれば、当該の〈アイデア〉が特定の個別者を一意的に同定することに成功しているかどうかは、主体にとって常に不確定であるということになる。それにともない、その〈アイデア〉に基づく信念も、ある個別者についての特定の内容をもった信念であるかどうかは主体にとって常に不確定であるということになる。〈アイデア〉は、それが心から独立な個別者に関わるものである場合、純粋に記述的なものに留まることはできないのである。

では、〈アイデア〉が心から独立な個別者を同定しうるものであるためには、そこに純粋記述とは異なる何が含まれていなければならないのだろうか。この問いに対してブリューワーが与える答えは、ここで必要なのは本質的に経験的な知覚的直示 (essentially

<sup>59</sup> 記述に登場する対象がこの宇宙の半分より大きな体積を占める場合や、(それが指示対象に成りうるとして) この宇宙それ自体である場合には、この宇宙のなかに複製が存在する可能性は排除される。しかしそうした場合は例外として扱ってよいだろう。

<sup>60</sup> ここで問題にしているのは有限の認識力しか持っていないわれわれのような存在者である。S が神のような全知の存在者であれば大規模複製の可能性を排除することができる (宇宙の全領域の半分に関する知識を有していれば、その半分の領域全体を一般記述に取り入れることで大規模複製の可能性を排除することができる。それゆえ、より正確に言えば、「半知の存在者であれば」ということになるだろう)。

experiential perceptual demonstratives)である、というものである (Brewer 1999, p. 28)。すなわち、〈アイデア〉は ‘that ball I see in front of me’ のような知覚的直示を組み込まなければならないのである。ここで「本質的に経験的な」という修飾が付されているのは、〈アイデア〉が個別者の指示に成功するためには、指示対象に対する主体の意識経験が必要とされるからである。ある信念が直示的要素を含む場合、その直示的要素が経験的意義を受けとるのは、しかるべき仕方ですらその信念と関係している意識的な知覚経験を通じてである。つまり、個別者に対する一意的な同定を可能とするためには、〈アイデア〉は主体自身の意識経験に当該の事物が現前することを本質的に含んでいなければならないのである。他方で、純粹記述の場合には経験とのこうした関係は要請されない。純粹な記述的要素のみを含んだ信念によって指示を行うことは、その指示対象となる個別者を意識的に経験していないときにも可能なのである。

この主張に対して、心から独立な空間的個別者への指示が知覚的な直示に依存しているとしても、それが本質的に経験的であるという点は必要ではないのではないかという疑義が呈されるかもしれない。なぜなら、視覚的な経験をもたないとされる盲視患者ですら、その盲視領域に呈示された特定の対象に対して指示を行っているように見えるからである。当該の患者は特定の事物を指差しながら次のように言うかもしれない。「私にはそれが見えないけれど、それがそこにあるという感じはするんです」。もしこれが個別者への指示を行っているものとして認められるとすれば、必要とされる直示的指示は本質的に経験的である必要はないということになるだろう。

これに対してブリューワーは次のように論じる (Brewer 1999, pp. 44-45)。盲視患者は、他人から見て当人が表現しているように見えるいかなる直示的思考についても、それを理解しているとは言えない。たとえ当該の患者がある対象を指差して「あれ」と発話したとしても、当人はそれがどの対象であるかについていかなる考えももっていないのである。それゆえ、当該患者は他のいずれでもなくその事物を指示するような内容を適切な仕方理解することはできない。しかるべき経験を欠いた主体は、個別者に対する知覚的な直示的思考を行うことはできないのである。したがって、われわれが必要とするのは単なる直示詞を含んだ記述ではなく、指示対象についての経験を本質的にともなう直示的記述なのである。

ここで以上の議論に対してさらに次のような疑問が提起されうる。それは、〈アイデア〉に直示的要素を導入したとしても、指示が失敗する可能性は原理的に排除不可能なままに留まるのではないか、という疑問である。ある〈アイデア〉が純粹な一般記述のみによって構成されており、その記述が主体の目の前にある一つの対象によって充足されているとしよう。この場合、(当該の主体には確認しようもないが) もし大規模複製が実際には生じていないとすれば、その一般記述による一意的な指示は成功していることになる。反対に、直示的な要素を含んだ不純な記述 (たとえば、「あのテーブルの下にある赤いボール」) の場合にも、丸いトマトを赤いボールと見間違えるなど、知覚判断に誤りが生じている場合には、一意的な個別者への指示は失敗していることになる。こうした可能性を前提とすれば、われわれが慎重に直示的同定を行っている場合にも、その同定は必ずしも成功してい



るとは限らない。私からは見えないがボールの背後に別のボールが隠れているかもしれない、ボールだと思っていたものはボールにそっくりの地球外生命体かもしれない、そもそも私は幻覚に欺かれていてボールは実在してないかもしれない。このように、〈アイデア〉に直示的要素を導入した場合でも、直示的指示が失敗している可能性は原理的に排除できない(このような可能性を「懐疑論的状况の可能性」と呼ぼう)。しかし、われわれは通常、「そうした懐疑論的状况は生じていないはずだ」という態度をとることで当該の直示的指示に成功を帰している。不純な記述の場合にこうした態度をとることが許容されるのだとすれば、なぜ純粋な記述の場合にだけ同様の態度をとってはならないのだろうか。もし両者で同様の態度をとることが許容されるとすれば、「大規模複製は生じていないはずだ」という態度をとることで、われわれは純粋記述に対しても指示の成功を帰することができるのではないだろうか。

この疑問に応答する鍵となるのは、ブリューワーが前提としている(W)「われわれは心から独立な空間的世界についての信念をもっている」である。前節で述べたように、ブリューワーは(W)が強い解釈において真である——われわれは実際に心的に独立な空間的世界についての信念をもっている——だけではなく、われわれはこの意味において(W)がおおむね真であることを知っている、ということも前提している。換言すれば、われわれは自分がおおむね成功裡に外界の個別者を同定できていることを知っているのである。さて、懐疑論的状况の可能性が原理的に排除できない認識的可能性であるとしよう。この場合、われわれは〈アイデア〉をどのようなものとして解釈しようと、直示的指示が成功しているということをいかなる場合にも知りえないことになる。これは(W)がおおむね真であることを知っているという前提と矛盾する。だが、大規模複製の可能性の場合には状況は異なる。なぜなら、大規模複製の可能性が原理的に排除不可能な認識的可能性となるのは、われわれが〈アイデア〉を純粋な一般記述に限定した場合のみだからである。もしわれわれが〈アイデア〉に直示的要素のような不純な要素の導入を許容したとすれば、大規模複製の可能性はもはや原理的に排除不可能な認識的可能性ではなくなる。その結果、われわれは(W)が真であることを知っているという前提を放棄する必要もなくなる。このように、大規模複製の可能性と懐疑論的状况の可能性は、〈アイデア〉に不純な要素を認めることで排除可能かどうかという点で非対称的である。われわれが(W)がおおむね真であることを知っているという前提をとるかぎり、懐疑論的状况の可能性は視野の外に置いておくことができる。したがって、〈アイデア〉に直示的要素を認めるならば、われわれはその〈アイデア〉による指示の成功が原理的に保証しえないものであると認める必要はなくなるのである。

以上の議論が成功しているとしたら、それによって個別者の指示における大規模複製の可能性から直示的要素の必要性が導出される。この議論はストローソンから着想を得たものである(Strawson 1959)。それゆえ、ブリューワーはこの大規模複製論法を「ストローソン論法」と呼ぶ。以下、このストローソン論法の論証構造をまとめておこう<sup>61</sup>。心から

---

<sup>61</sup> ブリューワー自身によるまとめ(Brewer 1999, p. 46)は何点かの誤りを含んでいるため、ここではブリューワーによるものに適宜修正を加えて再構成を行った。たとえば、ブリューワーは以下の(3)に該

独立な空間的個別者 *a* について、知覚に基づいた信念を有している人物 *S* を考える。

- (1) *S* は自分が *a* を指示していることを知っている。
- (2) *S* の *a* についての〈アイデア〉は純粋に記述的であるか、不純な直示的要素を含んでいるか、いずれかである。
- (3) 帰無仮説として、*S* の *a* についての〈アイデア〉は純粋に記述的であり、‘the *F*’ という一般記述によって構成されている、と仮定する。
- (4) ‘*F*’ が多重充足される可能性は *S* にとって原理的に排除不可能な認識的可能性である。
- (5) ‘the *F*’ は ‘*F*’ が多重充足されているどの可能世界においても指示に失敗する。
- (6) ‘*F*’ が多重充足される可能性が *S* にとって原理的に排除不可能な認識的可能性であるならば、*S* は自分が ‘*F*’ が多重充足されていない世界にいるかどうかを知らない。
- (7) *S* の *a* についての〈アイデア〉は純粋に記述的ではない。
- (8) *S* の *a* についての〈アイデア〉は不純な直示的要素を含んでいる。
- (9) 直示的要素を含んだ〈アイデア〉が指示に成功するためには、どの対象が当該のものであるかを把握するための主体の経験が必要である。
- (10) *S* の *a* についての信念は、それが知覚経験とのあいだにもっている関係のゆえにのみその内容を有する。

(1) は (W) に関してブリューワーが置いている前提である。(4) は一般記述による個別者の指示が大規模複製の可能性を排除できないことから導かれる。(3)、(4)、(5)、(6) を組み合わせると、「*S* は自分が *a* を指示していることを知らない」という結論が導かれる。これは (1) と矛盾するため、(2) の帰無仮説は棄却され、(7) が導かれる。(2) と (7) から (8) が導かれる。(9) は盲視患者に関する上述の議論によって支持される。(10) は (8) と (9) から帰結する。

以上のストローソン論法は、(H)「知覚経験が経験的信念に理由を与えないという仮定は、心から独立な空間的世界についての信念が成立する可能性を排除する」を導くための前提の一つである (i) を確立するものである。(i) は次のようなものであった。

(i) 信念体系が実在に向けられたものとして成立するためには、知覚経験と関係することによってその内容を規定される、ある特定の基礎的な信念のクラスが存在していなければならない。

ストローソン論法の帰結が告げるのは、外界の個別者についての信念は、本質的に経験的な直示的要素を含むことによって当該の個別者への指示を行う、ということである。この

---

当する前提を「*F*」が多重充足される可能性は *S* にとって認識的に可能である」と書いているが、問題なのはそれが単に認識的に可能であることではなく、認識的に可能であることが原理的に排除不可能であることである。

タイプの信念は、当該の直示的要素の供給源となる知覚経験と関係することによってその内容を規定される。こうした信念は外界に存在する個別者に関するものであるがゆえに、他の経験的信念が成立するための基礎——不可謬のものではもちろんないが——としての役割を果たす。このように知覚経験との関係によって内容を充たされる基礎的信念が存在するからこそ、それを含むわれわれの信念体系は実在に向けられたものとして成立しうるのである。

付言すれば、以上の議論は、知覚経験がもし概念的内容を含むならば、その内容は純粋な一般概念のみによってではなく、直示的要素を含んだ概念を組み込んだかたちで構成されていなければならないということを含意する。なぜなら、もし知覚経験の内容が純粋な一般概念のみによって構成されているとすれば、それは信念に対して直示的要素の供給源として働くことはできないからである。この点は前章第六節でマクダウェルの概念主義における経験が「指示決定性」を充足するということを示す議論に支持を与えるものである。知覚内容が直示的要素を含むという論点に関しては、第四章で「視覚的指標理論」を検討する際にふたたび論じることになる。

### 第三節 理由付与役割の必要性：切り替え論法

では次に、(H) を導くためのもう一方の前提である (ii) を確立するための論証に移りたい。(ii) は次のようなものであった。

(ii) 知覚経験と知覚信念とのあいだの理由付与関係のみが、(i) によって要請される内容規定的な役割を果たしうる。

特定の内容をもった経験的信念を形成する際に知覚経験が果たす役割は、主体に対してそのような信念を抱くための理由を供給することに存する。すなわち、経験はある特定の信念を抱くことを主体自身の観点から見て合理的なものにするのである。(ii) が主張しているのは、こうした理由付与的な役割のみが、(i) によって要請される内容規定的な役割を担いうるということである。この点を論証するためにブリューワーが提示するのが、以下で検討する「切り替え論法」である。

ブリューワーは切り替え論法の基本的な論点を以下のように記述している (Brewer 1999, pp. 50-60)。まず、帰無仮説として、経験と判断のあいだの内容規定関係が知覚者自身によって把握される理由付与関係ではないと想定しよう。これは、いかなる知覚信念の組、 $x$  と  $y$  に対しても、主体のもつ知覚経験は  $y$  ではなく  $x$  (あるいはその逆) を信じるべき理由を与えない、ということの意味する。ここで、知覚者  $S$  がある知覚経験によって規定される  $p$  という内容をもった判断を行うとしよう。このとき、異なる知覚経験によって規定される判断内容の一つを  $q$  とする。さて、 $S$  は現在の知覚経験から  $p$  という知覚判断を行う。だが、仮定上、ここでの経験と判断の内容規定関係は理由付与関係ではない。

それゆえ、S はなぜ q ではなく p を信じるべきかについていかなる理由ももたない。p を信じることと q を信じることのあいだにあると想定される違いは S にとっては何もののでもない。それゆえ、p を信じることと q を信じることは S にとっては等価である。ブリュワーによれば、ここから知覚経験がもつと想定されている内容規定的な役割が空虚なものになってしまうということが導かれる。したがって、知覚経験と知覚信念とのあいだの関係が理由付与関係でないとすれば、経験は信念に対して特定の内容を規定する上でいかなる貢献もなしえないのである。

ここで「p を信じることと q を信じることが S にとって等価であれば、知覚経験と知覚判断のあいだの内容規定関係は空虚なものになってしまう」というのはなぜなのだろうか。この点についての手がかりはブリュワーの次の記述にある。

〔理由付与関係なしに内容規定関係が可能であるとすれば、〕p と q を信念において是認あるいは否認するための理由に関する限り、それらが絶対的に等価であるという事実を前にしてさえ、〔主体は〕それらを区別するように強いられる。言い換えれば、主体は、それら両方について十分な理解を有しているとき、それらに対して異なる態度をとる〔たとえば、一方を是認し、もう一方を否認する〕ことでさえ〔…〕必然的に不合理になるのだとしても、それらを区別するように強いられるのである。(Brewer 1999, pp. 52-53)

ある二つの内容が主体にとって区別可能であるためには、主体はそれらに対して異なる態度をとることができなければならない。これは内容に関するフレーゲ的な個別化基準である。信念の内容に関してこの個別化基準が適用できることは概念主義／非概念主義の論争に参加する論者のあいだでは共通理解であるとみなしてよい<sup>62</sup>。ところが、仮定上、S の知覚経験は S 自身に対していかなる理由も与えてくれないため、S は p と q に対して是認や否認などの異なる態度をとることができない。だとすれば、主体はそれらの内容を異なる内容としては理解していないということになるだろう。それゆえ、S にとって p と q を異なる内容として区別することは不合理な行いである。だが、経験が信念にいかなる理由も付与しないという想定は、S にそうした不合理な区別を行うことを強いるものである。言い換えれば、理由付与関係とは独立に内容規定関係を確保しようとすることは、それ自体からは構成しえない区別を導入しようとするることなのである。ではここで、切り替え論法の論証構造を明示化してみよう。

### 切り替え論法

- (1) 知覚経験と知覚判断のあいだにある関係は内容規定関係ではあるが理由付与関係ではない。
- (2) 知覚経験と知覚判断のあいだに理由付与関係が成立していないとすれば、現実の知

---

<sup>62</sup> これは第一章で概念性の基準の一つとして「認知的意義の原理」に言及したときに確認したことである。

覚経験に対応する  $p$  という内容を信じることに、対応しない  $q$  という内容を信じることは知覚者  $S$  にとって等価である。

- (3)  $1 + 2$  :  $p$  を信じることに  $q$  を信じることは知覚者  $S$  にとって等価である。
- (4)  $p$  を信じることに  $q$  を信じることに  $S$  にとって等価であれば、 $S$  にとって  $p$  と  $q$  を区別することは不合理である。
- (5)  $3 + 4$  :  $S$  にとって  $p$  と  $q$  を区別することは不合理である。
- (6)  $p$  と  $q$  は異なる経験によって規定される内容であるため、 $S$  はそれらを異なる内容として区別できなければならない。
- (7) 5 と 6 は矛盾する。この矛盾は 1 における理由付与関係の欠如に由来するものであるため、知覚経験と知覚判断のあいだには理由付与関係が成立していなければならない。

(4) は内容に関するフレーゲ的な個別化条件からの帰結である。(1) と (2) から (3) が導かれ、(3) と (4) から (5) が導かれる。(6) は経験が内容規定的な役割を果たすという (1) の前提から導かれる。(5) と (6) は矛盾するため、帰無仮説である (1) が否定され、知覚経験の内容規定関係は同時に理由付与関係でなければならないということが帰結する。

以上が (ii) を論証するためにブリューワーが提示した切り替え論法である。では、この論証は妥当であると言えるだろうか。推論のステップ自体は妥当であるため、すべての前提が正しいと認められるならば、この論証は妥当であるということになるだろう。ここで問題になるのが、前提 (4) 「 $p$  を信じることに  $q$  を信じることに  $S$  にとって等価であれば、 $S$  にとって  $p$  と  $q$  を区別することは不合理である」の正しさである。確かに、たとえば  $p$  と  $q$  が異なる経験によって規定されるとしても、仮定上、それらの経験は  $S$  が  $p$  と  $q$  に対して異なる態度をとるための資源 (= 主体にとってアクセス可能な理由) を与えてくれない。それゆえ、 $S$  はこの経験の違いに基づいて  $p$  と  $q$  に対して異なる態度をとることはできない。もし異なる態度をとることが信念内容の個別化条件であるとすれば、結局、 $S$  にとって  $p$  と  $q$  は異なる内容をもった信念であるとは言えないことになる。だが、この議論が正しいと認められるためには、信念内容を個別化するために必要な資源が、経験によって与えられる理由以外には存在しないということが示されなければならない。

ここで議論を見やすくするために、ブランドムによる「エンタイトルメント」と「コミットメント」という対概念を導入しよう (Brandom 2001, p. 43)。 $p$  という内容をもつ信念を考えたとき、 $p$  のエンタイトルメントとは、ある主体  $S$  に対して  $p$  を信じる資格を与えるところの内容——すなわち  $p$  を抱くための理由となる内容——である。また、 $p$  のコミットメントとは、 $p$  自体の明示的な内容に加えて、 $p$  から推論によって導かれるさまざまな内容のことである。たとえば、「このリングは赤い」という信念は、「赤いリングは熟している」という補助信念を主体が有しているならば、「このリングは熟している」という信念に対してエンタイトルメントとして働く。また、「このリングは熟している」という信念にコミットすることは、「熟したリングは甘い」という補助信念を主体が有しているとき、

「このリンゴは甘い」という信念をそれに対するコミットメントとしてともなう。

以上の概念を使って言い換えるならば、切り替え論法が成功していると認められるためには、**S** がもつ知覚信念 **p** と **q** に対して、それらの内容を規定する経験がエンタイトルメントとして成立していることが、それらを異なる内容として個別化するために不可欠であるということが示されなければならない。しかしながら、**S** は **p** と **q** に対応する経験からの理由付与を認識することはできないとしても、**p** や **q** と別の信念とのあいだで成立する理由付与を認識することができないとは仮定されていない。言い換えれば、**S** は **p** と **q** のエンタイトルメントは認識できないとしても、それらのコミットメントは認識できるのである。であるならば、**S** が **p** と **q** から（必要な補助信念を加えた上で）それぞれどのような信念が導かれるのかを——つまり、**p** と **q** を信じることがどのようなコミットメントをもつことになるのかを——理解しているならば、**S** はそうしたコミットメントの相違に応じて両者を異なる内容をもつものとして区別することができる。つまり、**S** は **p** と **q** が異なる推論役割をもつことを理解することで、それらを異なる内容として区別することができるのである。もしこのような主張が認められるとすれば、前提（4）は正しくないということになり、切り替え論法もその妥当性を失うだろう。

ブランダム自身もこうした「エンタイトルメントなしの信念」は不整合な概念ではないと主張している（Brandom 2001, p. 105）。たとえば、人が何らかの「信条（faith）」にコミットしながら、それを信じる理由を挙げることができないという状況は整合的なものとして想像可能であろう。その場合であっても、当該の信条が真であり、かつ、何らかの信頼できるプロセスによって形成されたものであるならば、信頼性主義の観点からすれば、それを知識であると認めない理由はないだろう。このように、信念の個別化がコミットメントのみに基づく場合にも行われうるとすれば、たとえ **p** と **q** がエンタイトルメントを欠いていたとしても、**S** がそれらから異なるコミットメントを引き出すことができる限り、**S** は **p** と **q** を区別するための十分な資源を有していることになるのである。

以上の批判に対してどのように切り替え論法を擁護することができるだろうか。一つの方向としては、主体が理由を挙げられないようなエンタイトルメントを欠いた信念は、ローカルな現象としては成立しえとしても、知覚信念全体のようなグローバルな現象としては成立しえないと論じるという選択肢が考えられる<sup>63</sup>。このように主張することができるとすれば、信念に対する知覚経験からのエンタイトルメントを全面的に認めない立場は認められないということになるだろう。しかしここでは、これとは別の方向から議論を行い、ブリューワーが理解しているものとは異なる論点から切り替え論法に対する擁護を展開したい。その論点とは、「理由付与関係なしの内容規定関係からは知覚信念を構成することはできず、高々単なる思考ないしは当て推量を構成しうるだけである」というものである。

こうした議論を展開するために、信頼性主義をめぐる議論でしばしば論じられる「ひよ

---

<sup>63</sup> ブランダムも信頼性主義について論じる文脈で、「主体が理由をもたないが信頼性には基づいているような知識は、ローカルにはありうるがグローバルにはありえない現象である」（Brandom 2001, p. 106）と述べている。

この雌雄鑑別士」の事例 (Brandom 2001, p. 102ff) を俎上にのせよう。その事例によれば、ある鑑別士 T はひよこのオスとメスを信頼に足る高い確率で識別することができるが、自分がどのような知覚的特徴に基づいて両者を識別しているのかについていかなる理解も有していない。つまり、自分がいまオスを見ているのかメスを見ているのかについて、知覚に基づくアクセス可能な根拠を何ら有していない。ところが T は、いったん識別が行われたときには、ひよこの雌雄に応じた異なる推論を行い、それぞれを別のカゴに入れるなど、適切な処置を施すことができる。この状況は、「理由付与関係はないが内容規定関係のみがある」という帰無仮説の想定が描く状況と類比的なものと考えることができよう。

この思考実験においては、T は自分がどのような知覚的特徴に基づいて雌雄を識別しているのかについていかなる理解も有してはおらず、それゆえ、主観的な観点からは「このひよこはオスである」と「このひよこはメスである」という二つの内容のいずれを受け入れるべきかについていかなる理由も挙げることはできない。このとき、たとえ T が高い確率で正しい判断を下していたとしても、それは何らかの理由に基づいて行われたものではなく、主観的な観点からは単なる当て推量を行っているか、あるいは単にそのような考えが浮かんでくるとしか感じられないはずである。だとすれば、ここで T が有しているのは、「世界の在り方がしかじかであると主体がみなしているその仕方」(Brewer 1999, p. 51) としての信念の内容ではなく、単なる思考ないしは推測の内容でしかない。

ここで重要なのは、経験的な内容をもった信念を形成することは、それが真であることに対する肯定的な態度をとまうように思われるという点である。別言すれば、ある心的状態が信念であると認められるためには、主体はそれが真であることに対して積極的な関心を有していなければならないのである。これは、前章で説明した「信念体系の改訂可能性」という論点を別の仕方で言い表したものに他ならない。ある信念を有しておりながら、それが偽であるという証拠が示された場合にいかなる対処も行わないのであれば、そもそもそれは信念であるとは認められない。信念という心的状態は、その保有者がそれが真であることにコミットし、その真偽を気にかけるという意味で、認識的な規範性に服しているのである。したがって、ある内容に対して肯定的態度を形成することが主観的に合理化されないのであれば、その内容は信念としての態度を抱かれるべき資格を欠くということになる。この場合でも、コミットをとまわらない単なる思考や推量としてその内容を心に抱くことはできる。たとえば、「假定する (presuppose)」という命題的態度はこのような心的状態の一種として認めることができるだろう。ある内容を假定するためにはその内容に対してコミットする必要はない。だが、その内容を信じるためにはその内容に対して何らかの肯定的な態度をとる必要があるのである<sup>64</sup>。

<sup>64</sup> ブランダム自身はこのひよこの雌雄鑑別士 T の事例から、「たとえそれに対する理由を挙げることはできないとしても、T にひよこの雌雄に関する信念を認めない理由はない」という結論を引き出している。ブランダムによれば、T の信念形成はその理由を挙げられないという意味で認識的に責任を欠いているが、認識的に責任を欠いた信念という概念は不整合ではなく、T に信念を認めない理由とはならない

(Brandom 2000, p. 105)。しかし、これはこの事例に対する適切な描写と言えるだろうか。T に「そのひよこがメスであると信じているか」と問うならば、T はおそらく「いや、当てずっぽうでそう考えているだけだ」や「単にそういう考えが浮かんだだけだ」と答え、そうした思考が形成されることに関して困惑の表情を浮かべるだろう。だとすれば、主体によるコミットをとまう信念とコミットのない単なる思

このように、その内容に対して肯定的態度をとることが、信念という概念のいわば「内的論理」に含まれているのだとすれば、雌雄鑑別士 T は自分が見ているひよこがオスであるという信念もメスであるという信念も有してはいないということになる。なぜなら、T は信念形成に必要な肯定的態度をとるための資源——すなわち、当該の内容に対して主観的にアクセス可能な理由——を欠いているからである。

もちろん、T が自分の判断によって偶然以上の高い確率で雌雄を識別できるという知識を独立に得たならば、その知識に基づいて自らの判断に対するエンタイトルメントを獲得し、そこから信念を構成することはできる。だが、この場合に得られるのは高々推論的に形成された信念にすぎない。前章でも述べたように、通常の知覚信念は知覚経験から非推論的に形成される信念であると考えられる。このことを踏まえるならば、独立に得た知識に基づく推論的な信念はわれわれが求めるところの知覚信念ではないというべきであろう<sup>65</sup>。

以上の議論が正しいとすれば、知覚経験が信念に対して理由付与関係を欠いた内容規定関係にしか立ちえないとした場合、そこからコミットのない単なる思考や推量を形成することはできるとしても、肯定的態度をともなった信念を形成することはできないということになる。この帰結は知覚信念の可能性を否定する不合理なものであるがゆえに、切り替え論法の帰無仮説は棄却されることになる。このように理解された場合、切り替え論法は、ブリューワー自身による理解とは異なる趣旨の論法となる。この場合の切り替え論法は、「理由付与の役割を欠いた経験は結局のところ内容規定の役割を果たすことができない」という趣旨の論証ではなく、「理由付与の役割を欠いた内容規定の役割のみの経験からは知覚信念を構成することができない」という趣旨の論証として再構成されることになる。ここで以上の改訂版の論証を整理しておこう。

### 切り替え論法（改訂版）

- （１）知覚経験と知覚判断のあいだにある関係は内容規定関係であるが理由付与関係ではない。
- （２）われわれは知覚に基づいて外界に関する信念を形成している。

---

考や推量といった心的状態を区別し、T には後者のみを帰属する方がより適切と言えるだろう。しかしながら、こうした信念概念の扱いに対しては次のような批判がなされるかもしれない。信念という概念はたとえば「認知行動学（cognitive ethology）」においても動物の行動を説明するために使われており、そうした場面では主体によるコミットの成立は特に必要とされていない。それゆえ、信念という概念にとって主体による肯定的態度の成立はその不可欠な要件ではないのではないか。しかしながら、こうした場面での信念概念の使用はあくまで擬人的なものであり、人間以外の動物の認知能力に対する指示を固定するための「便利な道具」であると解釈することは十分に可能であろう（植原 2011, p. 146）。このように考えることができるとすれば、認知行動学のような場面で信念概念が拡張的に使用されているという事実から、信念がその内容に対する肯定的態度の成立を含んでいるということを否定する帰結を導く必要はなくなるだろう。

<sup>65</sup> 付け加えれば、ここでの論点は信念一般ではなくあくまで知覚信念に限定されたものとして捉えられるべきである。たとえば、先述の「信条」のようなものも、それを抱くことが主体にとって何らかの肯定的な帰結をもたらす（たとえば、その信条を抱いている方が気分が向上する）のであれば、そうしたプラグマティックな利益に基づいて理由なくその信条を受け入れることはできるかもしれない。それゆえ、ここでは「理由なく何かを信じることそれ自体がありえない」という強い主張は含意されていない。



- (3) 信念が形成されるには、その内容に対して知覚者が是認などの肯定的態度をとることが必要である。
- (4) 知覚経験と知覚判断のあいだに理由付与関係が成立していないとすれば、知覚者はその内容に対して是認などの肯定的態度をとることはできない。
- (5) 3 + 4 : 知覚経験と知覚判断のあいだに理由付与関係が成立していないとすれば、知覚者はたかだか知覚に基づいた単なる思考や推量を形成しうるのみで、信念を形成することはできない。
- (6) 1 + 5 : 知覚者はたかだか知覚に基づいた思考や推測を形成しうるのみで、信念を形成することはできない。
- (7) 2 と 6 は矛盾する。この矛盾は 1 における理由付与関係の欠如に由来するものであるため、知覚経験と知覚判断のあいだには理由付与関係が成立していなければならない。

本節の議論をまとめよう。ブリューワーの提示した元々の切り替え論法は次のようなものであった。もし経験が内容規定の役割のみで理由付与の役割を果たさないとすれば、その経験によって規定される内容に対して主体が他とは異なる態度をとるための資源を確保することができなくなり、その結果、経験はそれがもつと仮定されていた内容規定の役割も果たすことができなくなる。それゆえ、経験と信念のあいだにある内容規定関係は同時に理由付与関係でなければならない。しかし、これに対しては次のような批判が生じうる。すなわち、ある内容を個別化するための資源が、その内容に対するエンタイトルメント(＝理由)だけではなく、その内容から導かれるコミットメントからも得られるとすれば、経験が理由付与の役割を果たさないとしても、そのことによって内容規定の役割まで失われることにはならないのではないか、という批判である。この批判に対して、本節では改訂版の切り替え論法を考案することで応答を試みた。改訂版は、「信念はその内容に対する主体の肯定的態度を要請する」という信念概念のもつ内的論理に訴えた上で、そうした肯定的態度を形成するためには、経験は内容規定の役割だけではなく理由付与の役割も有していなければならないという帰結を導くものである。この改訂版が妥当であるとすれば、経験による判断へのエンタイトルメントは、知覚信念の個別化にとって以前に、知覚信念の成立にとって必要であるということになる。これは、経験からのエンタイトルメントが必要とされる場面を知覚信念の個別化に置くオリジナルの論法に対して、それを論理的により先行する知覚信念の成立に再定位することで、上述の批判を退けるものである。

以上の応答が有効であるとすれば、「ストローソン論法」と「切り替え論法」により、(H)「知覚経験が経験的信念に理由を与えないという仮定は、心から独立な空間的世界についての信念が成立する可能性を排除する」を導くための前提である (i) と (ii) がそれぞれ論証されたことになる。また、われわれは (W)「われわれは心から独立な空間的世界についての信念をもっている」が強い意味において真であることを前提として受け入れたので、これと (H) とを合わせて「知覚経験と知覚信念のあいだには理由付与関係が成立している」という帰結が導かれることになる。知覚経験は主体に対して直示的要素を含んだ

知覚信念を抱くための理由を与えるのである。以上より、本章冒頭の第一の批判を退け、「少なくとも知覚経験と知覚信念の関係に対しては内在主義的な立場が妥当する」と主張することができる。

#### 第四節 概念的内容の必要性：正当化の論証的理解

概念主義に対する第二の批判によれば、知覚経験と知覚判断の関係について内在主義的な主張を受け入れたとしても、そこから必ずしも概念主義的な立場が帰結するわけではない。この主張から概念主義が帰結するためには、「理由付与関係が概念的な事項間にしか成立しえない」という前提が必要とされる。では、この前提はどのような論拠によって擁護されうるのだろうか。

ブリューワーはこの問いに対して理由概念を分析することを通じて応答を行っている。以下で論じるように、理由の本性に関して検討を行うならば、そこから次の論点が導かれる。

(C) 何らかの信念に対して理由を与えるところの状態は概念的内容をもっていなければならない。

この (C) と前節で示した「知覚経験と知覚信念とのあいだには主体自身がアクセス可能な理由付与関係が成立していなければならない」という論点とを合わせるならば、「知覚信念に対する理由は知覚経験が備える概念的内容によって与えられなければならない」という概念主義の主張が導かれる。まずは、ブリューワーがどのように (C) の命題を論証しているのかを検討しよう。

(C) が主張するのは、ある人物が何かを信じるための理由を有するのは、当人がしかるべき概念的内容を有する何らかの心的状態にある場合に限られる、ということである。ブリューワーは (C) を論証するために次の二つの前提を置く (Brewer 1999, p. 150)。

(C1) 理由を与えることは特定のしかるべき諸命題——その理由づけを明示的に分節化する推論の前提や帰結として現れる内容——を同定することを含む。

(C2) 何らかの信念を抱くことに対する主体にとっての理由は、主体自身が一人称的にアクセス可能な何らかの心的状態にあることから構成される。

まずは (C1) の妥当性から見てゆこう。ブリューワーは、日常的な理由付与实践がもつ特徴を明示化することで、理由と推論とのあいだにどのような結びつきが存在するのかを分析している。日常的な理由付与实践が示すように、理由とは常に何かに対する理由である。現在の議論の文脈に沿って言えば、その「何か」とは、何らかの判断を下すことや、何らかの信念を抱くことである。こうした文脈において、理由を与えることとは、関連する判

断や信念を、合理性の観点から見て適切なもの、あるいは理解可能なものにするところの、主体が置かれた状況がもつ何らかの特徴を同定することである。このような合理的な理解可能性を与えることは、当該の理由関係がもつ（～すべきという）合理的義務や（～してもよいという）合理的許可の源泉となる妥当な推論を特定することから構成される。換言すれば、ある判断を下すことや信念を抱くことを合理的に理解可能なものとするとは、それらの信念や判断を帰結としてもつ妥当な推論の前提を特定することである。それゆえ、理由を与えることは、そうした推論関係の前提（理由）や帰結（判断）となるしかるべき種類の事項を同定することを含む。伝統的な用語法に従えば、そのような推論関係に立つことの可能な事項とは命題に他ならない。以上より（C1）が帰結する。

この議論の背景にあるのは「正当化に関する論証的理解 (the argumentative conception of justification)」(Lammenranta 2004) である。この理解によれば、ある二つの事項のあいだに正当化関係が結ばれているとは、それら二つが妥当な推論の前提と帰結という関係に置かれていることである。正当化に関する論証的理解は正当化の解釈に関する唯一の選択肢ではない。たとえば、正当化に関する信頼性主義的な理解によれば、信念が正当化されているとは、その信念が信頼できる真理保存的 (truth-conducive) プロセスによって形成されていることである。このとき、当該の正当化はその関係項が推論関係に立っていることを必ずしも要求しない。しかしながら、ここでわれわれが問題にしているのは、正当化一般ではなく、主体によってアクセス可能な理由としての正当化である。こうした意味での正当化は、当該の信念に対して正当化を与える事項を主体がそれとして認識し、必要なときに改めてその正当化関係を吟味することができるということを要求する。信念体系の成立に必要な自己精査が行われるのは、理由に対するこうした反省的評価を通じてである。こうした場面ではまさに、正当化を与える事項と正当化を与えられる事項が妥当な論証関係に立っているか否かが問題となる。それゆえ、とりわけ主体にアクセス可能な理由に対しては、正当化に関する論証的理解を適用することが妥当であると考えられる。

以上の理解によれば、理由を与えることには、しかるべき推論関係の前提や帰結となる事項を同定することが含まれる。ここで「理由付与関係としての規範性を与える推論を同定する」とは具体的に何を意味するのだろうか。強い解釈をとれば、ここでの「推論を同定する」とは、主体が実際の発話や思考において、理由として持ち出される命題を前提の一つとする関連する諸命題を分節化することである。しかし、ある信念が明示的に思考されておらず、現在は傾向的な状態を構成しているにすぎない場合でも、われわれはしばしばその信念が別の信念を受け入れる理由を与えているとみなす。それゆえ、われわれはここでは弱い解釈を採用すべきである。弱い解釈によれば、「推論を同定する」という表現は、理由として持ち出される命題を前提の一つとする関連する諸命題について、問われるならばその一部を明示化することができるということを意味する。反省的な自己精査が行われる場合には、実際にそうした明示化が行われ、当該の推論関係を構成する諸要素が吟味されることになる。しかし、そうした理由付与関係の明示化がなされていなくとも、主体の側にそれをなす用意があるならば、すでに当該の理由付与関係は成立しているとみなしてよいのである。

ここで注意すべきは、経験が信念に与える正当化を論証的なものとして理解することは、それを非推論的な授権関係として捉えるマクダウェルの見方に反するものではないという点である。マクダウェルが授権関係を非推論的なものとして捉えたのは、知覚信念の形成においては通常明示的な推論過程は含まれないという意味においてである。このことは、知覚経験の内容とそれに対応する知覚信念の内容とが推論の前提と帰結として明示化可能ではないということを含意しない。正当化の論証的理解は経験と信念の関係がマクダウェルの述べる意味において非推論的なものであることを否定するものではないのである。

さて、次に (C2)「何らかの信念を抱くことに対する主体にとっての理由は、主体自身が一人称的にアクセス可能な何らかの心的状態にあることから構成される」の妥当性を確認しよう。何らかの信念を抱くことに対する理由が主体にとっての理由である場合、その理由は（他者の視点からではなく）主体の視点からそれとして認識しうるものでなければならない。このことは、そうした理由が主体自身によって一人称的にアクセス可能な何らかの心的状態にあることによって構成されなければならないということを含意する。これは (C2) の主張に他ならない。前節で見たように、とりわけ知覚信念に対する理由は主体にとっての理由でなければならないため、(C2) が正しいとすれば、主体が自らの知覚信念に対してもつ理由は、主体自身が認知的にアクセス可能な特定の心的状態にあることによって構成されることになる。この特定の心的状態とは、しかるべき内容をもった知覚経験のことに他ならない。

最後に、(C1) と (C2) から (C) を導こう。まず、(C1) によれば、何らかの信念を抱くことに対する理由を与えるのは、当該の信念を結論とする妥当な推論の前提となる命題の内容である。次に、(C2) によれば、何らかの信念を抱くことに対する主体にとっての理由は、主体自身が何らかの特定の心的状態にあることによって構成される。したがって、主体が何らかの信念を抱くことに対する理由をもつことは、主体がその信念を結論とする妥当な推論の前提となる内容をもった心的状態にあることから構成される。そうした心的状態がもつ内容はそれが正当化する信念と同様に命題的に分節化された内容——すなわち概念的内容——である。以上より (C) が導かれる。(C) と前節の結論（「知覚経験は主体自身がアクセス可能な理由を与える」）を組み合わせると、そこから「知覚経験は概念的内容を備えている」という概念主義の主張が帰結する。

以上の議論をまとめよう。本章冒頭で提示した第二の批判は、知覚的正当化に関する内在主義から経験内容に関する概念主義への移行が正当化されるためには、「理由付与関係が成立するのは概念的内容のあいだのみである」という前提が保証されなければならないというものであった。この前提が保証されるのは、切り替え論法（改訂版）より、知覚経験が与える理由は主体にとってアクセス可能な理由であるという論点が導かれるからである。主体にとってアクセス可能な理由は、正当化に関する論証的理解に基づいて解釈されるべきである。そして、論証的理解は正当化関係に立つ項が命題的に分節化された概念的内容をもつことを要請する。このように、切り替え論法の帰結を踏まえた上で、知覚経験の行う理由付与に関する分析を試みるならば、内在主義から概念主義への移行にとって必要な前提に正当化を与えることができるのである。

しかし、このブリューワーの論証に対しては、非概念主義者であるラーマンから次のような批判が提起されている (Lerman 2010)。ラーマンによれば、経験と信念のあいだに成立する規範的關係は論証的なものではなく非論証的なものである。そして、非論証的な規範的關係は経験が非概念的な内容しかもっていないとも成立しうる。もしこの可能性が考慮に値するものであるならば、ブリューワーが与えている概念主義に対する論証は強制的なものとは言えなくなるだろう。

ラーマンは内容間に成立する規範的な結びつきを二つの種類に区別している (Lerman 2010, p. 9)。第一のものは、内容間の構造的な關係に由来する結びつきである。たとえば、ある実在する対象  $a$  に関して、 $a$  が  $F$  であり、かつ、 $a$  が  $G$  であるならば、 $F$  かつ  $G$  なのものが少なくとも一つ存在する、という帰結が導かれる。この推論がもつ規範性は、それら三つの内容がもつ構造的な關係性に由来する。ラーマンはこれを「構造的リンク (structural link)」と名づける。第二のものは、内容の構造ではなく実質に由来する結びつきである。たとえば、 $a$  が円形であるならば、円形と同程度の特定性をもった任意の別の形態概念  $F$  について、 $a$  は  $F$  ではない、という帰結が導かれる。ラーマンはこれを「実質性リンク (substantial link)」と名づける。構造的リンクは内容の構造（たとえばその命題的な構造）に由来する規範性であり、実質性リンクは内容の実質（たとえばその構成要素の内実）に由来する規範性である。前者の構造的リンクは、推論の前提と帰結における構造的な結びつきに規範性の源泉を位置づけるものであり、この点で上述の正当化に関する論証的理解に相当するものと考えられることができるだろう。

ラーマンの主張によれば、「概念的 content のみが規範的關係の成立に寄与することができる」というブリューワーの主張が一定のもっともらしさをもつのは、関連する規範的關係が構造的リンクである場合に限られる (Lerman 2010, p. 9)。確かに、規範的な構造的關係が**命題的な**概念的 content と**命題的でない**非概念的 content のあいだにどうやって成立しうるのかを理解するのは困難である。しかしながら、実質性リンクもまた概念的 content のあいだにしか成立しえないという主張はけっして自明なものではない。それゆえ、もし経験と判断のあいだの規範的關係が構造的リンクではなく実質性リンクに由来するとすれば、経験が概念的 content を備えているということは必ずしも要請されないことになる。換言すれば、経験と判断のあいだの正当化關係が論証的なものではないとすれば、その關係項は命題的内容をもつ内容に限定される必要はなくなるのである。

ラーマンの解釈によれば、実際、ブリューワー自身の記述は経験と判断のあいだの關係が構造的なものでは**ない**という主張を含意している (Lerman 2010., pp. 9-10)。ブリューワーによれば、ある経験を特定の判断を下すための理由として捉えるときに主体が把握するのは、その経験の内容を前提とし、その判断の内容を結論とする論証であり、それらは同じ「これはしかじかである」という内容である。この推論は「 $p$ 、ゆえに  $p$ 」という同語反復的なものであり、内容に対する構造的な組み換えを要するものではない。しかし、この推論が規範的な力をもつためには、主体がこの論証を妥当なものとして受け入れるのに加えて、経験の内容が真であるということも受け入れる必要がある。つまり、主体は自身の経験が真正なものであるということに対する正当化をも同時に有していなければならな

いのである。ブリューワーによれば、主体は自らの経験が真であることに關して、経験を享受することに加えて何らかの正当化を与えられる必要はない。主体は自身の経験の在り方が外的な事物の在り方に依存しているということに対する背景理解をもっているならば、経験を享受するだけでそれが真であるとコミットすることに正当化されるのである (Brewer 1999, chap. 6)。

ここでラーマンは、主体による経験と判断のあいだの規範的關係の把握を実質的に分節化しているのは、「p、ゆえに p」が妥当な論証であるという点ではなく、経験の内容を享受することがその内容が事実であるということを受け入れるための正当化を主体に与えるという点である、と主張する (Lerman 2010, p. 11)。主体は経験を真なるものとして受け入れることで、その内容を判断において是認することに対して正当化されるのである。もしラーマンが述べているように、経験と判断とのあいだに存在する規範的關係が構造的リンクによるものではないとすれば、経験が非概念的内容を備えているという可能性は排除されていないことになる。それゆえ、概念主義を導くブリューワーの議論は妥当なものとは言えなくなる。

しかしながら、以上のラーマンの反論には以下のような問題点がある。

第一に、ブリューワーが構造的關係とは區別されるものとして経験と判断のあいだに認めている規範的關係は、ラーマンの自己理解に反して、彼が説明するところの実質性リンクではないように思われる。なぜなら、ラーマンの説明による実質性リンクは前提となる内容の内実に関わる規範的關係——前提がどのような内容を備えているかに関わる規範的關係——であるが、ブリューワーの述べている規範的關係は前提となる内容の真理に関わる規範的關係——前提が真であるか偽であるかに関わる規範的關係——だからである。「p、ゆえに p」という知覚経験による理由付与の場合、その規範性の主要な源泉となるのは、経験内容 p がどのような内実を備えているかではなく、それが真であるとみなすことに主体が正当化されているかどうかである。ここでは後者を「真理性リンク」と呼んで実質性リンクから區別しよう。真理性リンクは確かに前提となる経験が概念的内容を備えていることを要求するものではない。なぜなら、知覚経験がおおむね真な内容を主体に与えるということは、それが外界の在り方に依存して課される内容を備えていることに由来しているのであり、それがどのような種類の内容を備えているかとは無關係だからである。だが、実質性リンクは——ラーマンの説明を前提とする限り——そのリンクが結ばれる關係項に対して概念的内容を備えていることを要求するように思われる。なぜなら、たとえば、「a が円形であるならば、a は円形と同等の規定性をもった他の形ではない」という規範的關係を理解するためには、円形概念や形態概念の内実を主体が把握しており、かつ、それらの概念が理由付与關係を構成する項の内容を構成していなければならないからである。それゆえ、経験と判断のあいだの規範的關係が構造的リンクに関わらないとしても、それが真理性リンクに加えて実質性リンクに関わっているとすれば、そこにはなお概念的内容が要求されることになる。実際、経験と判断のあいだの關係には理由付与關係だけではなく内容規定關係が含まれているが、これを真理性リンクのみによって与えることはできないため、そこには何らかの別の種類のリンクが要求されるはずである。たとえば、地面に転

がったヒモを目にしてヘビであると誤って判断したといった事例においては、経験内容と判断内容のあいだに齟齬が生じており、その齟齬はそれぞれの内容に含まれる〈ヒモ〉や〈ヘビ〉といった概念の内実に関わっている。こうした場面では、知覚判断における「誤り」の源泉は真理性リンクだけではなく実質性リンクにも関わっていると考えるのが妥当であろう。

さらには、第二に、ブリューワーの記述が「経験と判断のあいだの規範的關係は構造的なものではない」という主張を含意しているというラーマンの解釈はいささか強すぎると思われる。確かに、ブリューワーは経験と判断の規範的關係に対する真理性リンクの寄与を強調しているが、だからといって構造的リンクの寄与を必ずしも否定しているわけではない。ある知覚信念を是認する理由に対して疑いが生じたとき、まずもって反省的に吟味されるのは、多くの場合、真理性リンクの方であって構造的リンクの方ではない。ここで行われる反省的吟味とは、真理性リンクの成立要件となる、経験が真正なものであるための諸条件（たとえば、照明条件が正常なものであることなど）が成立していたかどうかを問うことである。しかしながら、もともとの理由関係において成立していたトートロジカルな関係が棄却された場合、主体は構造的リンクに基づいて改めて信念を改訂する必要が生じる。それゆえ、構造的リンクが反省的吟味における対象にならないということは、それが知覚信念の受け入れに対する合理的な許可に関与していないということを意味しているわけではない。むしろ、経験と判断の内容が区別されるべきものである以上、構造的リンクは知覚信念の形成における暗黙の前提として常に作動していると考えべきであろう。

ここでラーマンによる批判とそれに対する再反論をまとめておこう。ラーマンによれば、内容間に成立する規範性の源泉となりうるのは、内容を構成する諸要素間の形式的関係に関わる構造的リンクと、それらの要素の実質的内容に関わる実質性リンクの二つである。そして、知覚と判断のあいだの關係は概念的内容を要求する構造的リンクに関わるものではなく、それゆえ非概念的な内容であってもそうした關係に立つことができる。ラーマンの解釈では、ブリューワー自身の記述のなかに、知覚経験の規範性が構造的リンクではなく実質性リンクに関わるという論点を見出すことができる。しかしながら、実際にブリューワー自身が認めているのは、知覚経験が判断に与える正当化には、その主要な源泉として、知覚経験の真理性に対する正当化を主体が有していることが関わっている、という点でしかない。これは構造的リンクではないが、だからといってラーマンの定義する実質性リンクでもない。むしろ、それらとは別の真理性リンクとでも呼ぶべきものである。確かに、この真理性リンクはそれに関わる知覚経験が概念的内容をもつことを要求するものではない。それゆえ、経験と判断のあいだの規範的關係が真理性リンクに限られるとすれば、その關係は非概念的内容によっても充足可能であるということになる。だが、ラーマンは当該の規範的關係が真理性リンクに尽くされるということを成功裏に示してはいない。むしろ、経験と判断の關係が内容規定的役割を果たすためには実質性リンクが必要であり、また、反省的自己精査が行われるためには構造的リンクが必要であるように思われる。そして、構造的リンクと実質性リンクは——実質性リンクに関してはラーマンの自己理解に反して——その關係項が概念的内容をもっていることを要求するように思われる。以上よ

り、ラーマンによる概念主義に対する反論は失敗していると結論できる。

以上、第二節から本節までで行ってきた議論が正しいとすれば、命題概念主義に対する二つの批判は退けられることになる。ブリューワーによる概念主義の論証は、マクダウェルの論証が積み残していた二つの批判に対する応答を提供することで、その論証を補強するものとして評価することができる。だが、両者の見解には無視しえない相違点も存在している。本章の最後に、そうした相違点に関する検討を通じて、命題概念主義に対するより精緻な理論化を行うためには、これまで触れてこなかった「注意」という概念に着目する必要があるという指摘を行いたい。

## 第五節 全体的概念主義と部分的概念主義

前章第七節で論じたように、概念主義内部における対立軸の一つとしては、命題概念主義と直観概念主義という分類が挙げられる。前章では、直観概念主義がマクダウェルの堅持すべき素朴実在論と両立困難であるという点から、直観概念主義へのマクダウェルの転向を批判し、命題概念主義を放棄すべきではないという主張を行った。本節では、概念主義内部における別の対立軸として、「全体的概念主義 (total conceptualism)」と「部分的概念主義 (partial conceptualism)」という分類を取りあげたい。全体的概念主義とは、知覚経験の内容が全面的に概念的であると主張する立場であり、部分的概念主義とは、部分的にのみ概念的であると主張する立場である。

たとえばマクダウェルは、知覚経験の内容に——たとえ部分的にであれ——非概念的な要素が含まれているという見方を否定している。それは彼が概念領界の無境界性というテーゼを採用していることから明らかである。このテーゼによれば、知覚経験は（それが真正な経験である場合）すでに概念的なものである事実を取り込むのみであり、そこに「概念化」という契機の入り込む余地はない。したがって、マクダウェルの概念主義において、知覚経験の内容は「端から端まで概念的」(Stalnaker 2003, p. 106) なのである。この意味において、マクダウェルは全体的概念主義に与していると考えることができる。

これに対してブリューワーは、知覚経験のうちにまだ概念化されていない非概念的な要素が含まれていると考える (Brewer 1999, pp. 240-241)。ブリューワーの主張によれば、判断に対して理由を与える働きをなすのは、知覚経験に含まれている概念的内容——「*a* はこのようである (*a* is thus)」や「これは *F* である (*this is F*)」といった直示的要素を含んだ内容——である。だが同時に、知覚にはこのような概念化された直示的内容以上の情報が含まれているとも主張する。それは、初期の知覚システムによって自動的に処理され、脳内のさまざまな処理過程において利用可能なサブパーソナルなレベルでの情報と、主体自身にとって潜在的に利用可能なパーソナルなレベルでの情報である。前者のサブパーソナルな情報は意識的なものとしての知覚経験の内容とはならないが、後者のパーソナルな情報はそうした内容の一部を構成すると考えられる<sup>66</sup>。このパーソナルな情報は、概

<sup>66</sup> 前者のサブパーソナルな意味での非概念的内容に関しては、それが適切な範囲内に留まる限り、マク



念化を被ることで、判断に対して正当化の役割を果たす内容として主体にとって利用可能となる。ブリューワーは、この潜在的に利用可能な情報を顕在化するのは、「選択的注意 (selective attention)」の働きであると主張する。ブリューワーの提示する概念主義において、知覚経験は、選択的注意の範囲外にあつていまだ概念化されていない内容と、選択的注意によって概念化された内容の二つの段階によって構成されているのである。そして、判断と理由付与関係を結ぶものとして働きうるのは、もっぱら後者の概念的内容であるとされる。このように、知覚経験の構成要素に非概念的内容を認めているという点で、ブリューワーは部分的概念主義に与していると考えることができる。

では、全体的概念主義と部分的概念主義のどちらがより妥当な見方であると言えるだろうか。以下で論じるように、マクダウェルの見方もブリューワーの見方もそれぞれ問題を抱えており、そのままの形では妥当な見解として受け入れることはできない。それら二つの見方は、注意という機能をめぐって知覚経験がどのように組織化されているかに関してさらなる考察を必要としている。

まず、マクダウェルの全体的概念主義から見てゆこう。マクダウェルによれば、知覚経験が備えている概念的内容は実際に知覚判断によって思考される以上に豊かなものである。経験内容は「無限定で多様な判断可能な内容 (open-ended multiplicity of judgeable content)」(McDowell 1998b, p.413)であり、知覚判断が取り込むのは当該の経験が備える豊かな内容のうちから取捨選択されたごく一部にすぎない。しかし、知覚経験が「端から端まで概念的」であるとすれば、それは知覚経験の周縁部においてもこうした無限定で豊かな内容を備えているということになる。この帰結は近年の視覚の認知科学における知見と緊張関係にあるように思われる。不注意盲と呼ばれる現象は(詳しくは第七章で扱う)、知覚されている光景——特にその周縁部——が、われわれが直観的にそう考えているよりも乏しい内容しか備えていないことを示している。であるならば、知覚経験が「端から端まで」——その中心部から周縁部に至るまで——同じ無限定で多様な概念的内容を備えているとは考えがたい。マクダウェルの全体的概念主義は、知覚経験が「端から端まで概念的」であるという見方を保持しながら、同時にその豊かさにおいて一定の構造的な限界を備えているという事実を説明しなければならない。

ブリューワーの概念主義はこのような問題を解決しうる道具立てを与えるように思われる。ブリューワーによれば、選択的注意の焦点となる部分がもつ経験内容は概念的なものであり、その外側の経験内容は非概念的なものである。この二層構造を利用することで、ブリューワーは知覚経験がその豊かさについて中心／周縁構造を備えているという事実を説明することができる。すなわち、部分的概念主義者は、経験の中心部は明示化された確定的な内容を備えており、周縁部は明示化される以前の未確定な内容しか備えていないと考えることで、知覚経験の構造的な性格を捉えることができるのである。

しかしながら、ブリューワーの部分的概念主義は次のような問題を抱えている。部分的概念主義によれば、判断と理由付与関係を結びうるのは選択的注意の焦点となっている概念化された経験内容のみである。このことは、「注意の外側にある経験内容が判断とのあい

---

ダウェルもそうした観念の使用に特に反対はしないと述べている (McDowell 1996, p. 55)。

だに理由付与関係を結びうる」ということを否定することを意味する。しかし、われわれがなおそうした周縁部を特定の仕方において経験しているとすれば、それが主体に対していかなる規範的な力もあたえないというのは奇妙である。実際、われわれは注意の焦点の外部を含んだ知覚光景全体について、非常に素早くその大まかな構造や特徴を知覚的に把握しうるということが知られている。こうした細部を欠いた大雑把な情景認知は「ジスト知覚 (gist perception)」と呼ばれる (Koch 2004, chap. 9)。われわれはこのジスト知覚の内容を知覚判断というかたちで報告することができる。もし部分的概念主義に立つとすれば、われわれはこのようなジスト知覚に基づく判断をうまく捉えることができなくなってしまうだろう。部分的概念主義者は、ジスト知覚に基づく判断が理由を欠いているとみなすか、あるいは、その知覚経験に部分的に含まれている非概念的内容が理由を与えうると認めるか、いずれかの選択肢をとらなければならない。だが、前者の選択肢は「知覚経験が理由付与の役割を欠くならば知覚信念は成立しえない」という切り替え論法 (改訂版) の帰結と矛盾するものであり、後者の選択肢は部分的にであれ所与の神話を許容することを意味するものである。それゆえ、ブリューワーの立場からすればいずれの選択肢もとることはできない。

以上の指摘が正しいとすれば、全体的概念主義も部分的概念主義もそれぞれ問題を抱えているということになる。ただしそれらのなかでは、全体的概念主義の問題よりも部分的概念主義の問題の方がより深刻である。一方で、全体的概念主義は、不注意盲の事例から示唆される、知覚経験がもつ構造的な性格を説明することができない。他方で、部分的概念主義は、ジスト知覚の事例から示唆される、知覚経験の周縁部が信念に対する規範的な力をもちうるという事実を説明することができない。全体的概念主義に対する批判を受け入れた場合にはその部分的な修正——構造的な性格を説明するための道具立てを加えること——で足りるのに対し、部分的概念主義に対する批判を受け入れた場合にはその全面的な放棄——部分的概念主義という見方そのものを捨て去ること——が必要となる。ただし、部分的概念主義は、選択的注意という概念に場所を与えることで、知覚経験がもつ構造的な性格を説明するための見通しを与えることには成功していると評価できる。

本論では、以上の問題点を踏まえ、全面的概念主義に選択的注意の役割を取り入れた「階層的概念主義」とでも呼ぶべき立場を提唱したい。この立場によれば、知覚経験の内容は「端から端まで概念的」である。ただし、経験は選択的注意によって構造化されており、内容の豊かさと詳細さは経験の中心部と周縁部で異なる。中心部は豊かで詳細な概念的内容を備えているのに対し、周縁部は乏しく簡略な概念的内容しか備えていない。この階層的概念主義という立場をより明確に特徴づけ、それに対する正当化を与えるためには、選択的注意に関するものをはじめとする視覚科学の諸研究によってそれを補完し、そうした研究から見ても妥当なものであることを示す必要があるだろう。われわれは第七章において、そうした階層的概念主義の精緻化と正当化を目標の一つとして、関連する科学的知見を参照しつつ考察を行う。

それに先立ち次章では、概念主義内部におけるさらなる別の対立軸として、近年さかんに論じられている「内容概念主義 (content conceptualism)」と「状態概念主義 (state

conceptualism)」という分類を取りあげたい。内容概念主義と状態概念主義に関する考察からは、視覚科学の諸研究に取り組むことに対して、全面的概念主義と部分的概念主義に関する考察とは別の観点からさらなる動機づけが得られることになるだろう。概念主義をめぐるこれらの対立軸は、概念主義に対して理論的精緻化を行うためには科学的知見を取り入れるかたちでの「自然化」が必要とされるということを示しているのである。

## 第四章 内容概念主義と状態概念主義

### 第一節 内容説と状態説

近年、概念主義と非概念主義の論争をめぐる新たな展開として、その基本前提の一つに再考を迫るような問題が提起されている。それは、「この論争で行われている多くの議論では、概念的か非概念的かが問われているのが、知覚経験の内容であるのか状態であるのかが曖昧なままに置かれている」という問題である。スピークスやクロザーらによれば、概念主義／非概念主義の論争において、この内容説(Content view)と状態説(State view)との区別を明確化せぬままに議論を進めることは、議論の正否を判定する際に無用な混乱を招きかねない(Speaks 2005; Crowther 2006)。なぜなら、概念主義および非概念主義を支えるために提出されている議論の少なからぬ部分は、内容説を擁護することを意図としたものでありながら、実際には状態説を擁護するものでしかないからである。彼らの見解では、マクダウェルとブリューワーが概念主義を支持するために提出した論証も、実際には内容説ではなく状態説を支持するものでしかない。本章では、この内容説と状態説の区別という論点を取りあげ、この区別のもとで概念主義と非概念主義の対立構図を整理した上で、マクダウェルとブリューワーが意図していた内容概念主義をどのように擁護するかを検討する。

まずは、内容説および状態説がどのように特徴づけられるのかを見てゆこう<sup>67</sup>。

「内容説」と「状態説」の区別を最初に明示的に行ったのは非概念主義者のヘックである(Heck 2000)<sup>68</sup>。エヴァンズをはじめとする非概念主義者の多くは、知覚経験が非概念的であるという議論を行うことによって、知覚経験は信念とは異なる種類の内容——非概念的内容——を備えていると主張することを意図してきた。ところがヘックによれば、エヴァンズが非概念主義を支持するために行っている議論のなかには、非概念的であると言われるのが知覚経験の「内容」ではなく「状態」であるという解釈を許容しているようにみえる側面がある。

エヴァンズによれば、知覚状態と信念のような認知状態とのあいだには次のような特徴的な違いが存在する。一方で、主体がどのような信念をもつことができるかは、当該の主体がどのような概念を有しているかに依存している。たとえば、もし私が〈カタツムリ〉という概念を所有していなかったとすれば、私は〈カタツムリ〉の概念を構成要素とするいかなる信念をもつことはできないだろう<sup>69</sup>。この意味で、認知状態は概念依存的な状態

<sup>67</sup> すぐ後の箇所ですべてのように、ヘックは「内容説」と「状態説」という用語を使用しているが、何人かの論者は別の用語を使って同様の区別に言及している。たとえば、スピークスは「絶対的／相対的」という用語を用いている(Speaks 2005)。また、クロザーは「構成的／所有的」という用語を用いている(Crowther 2006)。

<sup>68</sup> ただし、ヘック以前にクレインも状態と内容の区別に言及している(Crane 1992)。だが、クレインは内容に関する概念主義／非概念主義の区別は結局のところ状態に関する区別に帰着すると述べ、両者を実質的に異なるものとはみなしていなかった。

<sup>69</sup> もちろん、このことは私がカタツムリを指示対象とするいかなる信念も持つことができないというこ

である。他方、一見したところ、知覚に対してはそのような制約は存在していないようにみえる。「知覚者は、その内容を忠実に報告するためには自身が所有していない概念を援用する必要があるような、そうした特定の知覚状態にあることができる」(Heck 2000, p. 484)のである。もしこれが正しいとすれば、知覚者がどのような知覚状態にあるかは、当該の知覚者がどのような概念を有しているかとは独立に規定することができる。すなわち、知覚状態は概念独立的であるということになる。

このような区別が成り立つとした場合、そこからどのような帰結を導くことができるだろうか。ここから直接導くことができるのは、主体が置かれうる情報状態には概念依存的なものと概念独立的なものの二種類があるということである。認知状態はこの意味において概念的な状態であり、知覚状態は非概念的な状態である。しかし、知覚状態が概念独立的であるということからは、その状態の内容が非概念的であるということは直接には導かれない。もし知覚状態が知覚者自身の所有していない概念をその内容の構成要素とすることができるとすれば、内容に関する概念主義は状態に関する非概念主義と両立可能であるということになる<sup>70</sup>。同様に、たとえ知覚状態が概念依存的であったとしても、その状態の備える内容が非概念的なものであることは可能であるように思われる。実際、エヴァンズは(知覚状態一般ではなく)知覚経験に関してそのような立場をとっていたと解釈することができる(Crowther 2006, pp. 253-254)。エヴァンズは単なる知覚状態と知覚経験を区別し、ある知覚状態が知覚経験として成立するためには、その状態の内容が推論システムへと利用可能でなければならないと考える(Evans 1984, p. 157)。それゆえ、知覚経験をもつためには、その非概念的内容を推論の内容として利用できるように概念化する能力を有していなければならない。このことは、エヴァンズが知覚経験を概念依存的なものとして規定していたということを意味する。しかしながら、エヴァンズは知覚経験がもつ内容それ自体は非概念的なものであると明示的に述べている。このように、エヴァンズは知覚経験の内容に関しては非概念主義的な立場をとりながら、知覚経験の状態に関しては概念主義的な立場をとっていたと解釈することができる。

以上を踏まえ、知覚経験の内容と状態のそれぞれに対して、それが概念的／非概念的であるということがどのように特徴づけられるかを定式化しておこう<sup>71</sup>。

内容の概念性：S が c という内容を備えた経験 e を有しているとき、c が概念によって構成されているならば、c は概念的である。

---

とではない。もし私が〈あのアジサイの葉にいる小さな巻貝〉という提示様式においてカタツムリを指示する概念を有しているとすれば、私はその概念を用いてカタツムリを指示対象とするさまざまな信念をもつことができるだろう。だが、こうしたことが可能であるとしても、カタツムリをまさに〈カタツムリ〉という提示様式において把握するような概念を所有していないとすれば、私は〈カタツムリ〉という概念から成る信念を所有することはできない。

<sup>70</sup> たとえば、ある動物が餌となる特定の種類の植物に対して弁別的な知覚反応を示すとき、その動物の行動を理解するために、われわれはその動物に対して当該の植物についての概念によって記述される内容を帰属することがある。こうした経験帰属を、「われわれは概念の所有を認めることなく、その動物に対して概念的な経験内容を認めている」と解釈したとすれば、われわれは内容概念主義と状態非概念主義が両立しうることを認めることになる。

<sup>71</sup> これらはクローザーによる定義に筆者が修正を施したものである (Crowther 2006, pp. 249-52)。

内容の非概念性：S が c という内容を備えた経験 e を有しているとき、c が概念によって構成されていないならば、c は非概念的である。

状態の概念性：S が c という内容を備えた経験 e を有しているとき、S が e を享受するために c を特徴づける概念を所有していなければならないならば、e は概念的である。

状態の非概念性：S が c という内容を備えた経験 e を有しているとき、S が e を享受するために c を特徴づける概念を所有している必要がないならば、e は非概念的である。

内容概念主義／非概念主義者はそれぞれ知覚経験に関して内容の概念性／非概念性が成立していると主張する立場であり、状態概念主義／非概念主義者はそれぞれ知覚経験に関して状態の概念性／非概念性が成立していると主張する立場である<sup>72</sup>。

これらのうち、状態の概念性／非概念性の特徴づけに対しては注釈を加えておく必要がある。この特徴づけは、知覚内容が概念によって特定可能である (specifiable)、あるいは記述可能である (describable) ということを前提としている (Bermúdez 2007, p. 64)。なぜなら、この特徴づけにおいて問題となっているのは、経験内容 c に対して適切な特徴づけを与える概念が存在することを前提としたうえで、内容 c をともなった経験を享受するために主体が当該の概念を所有している必要があるか否かという点だからである。ここで注意すべきは、知覚経験の内容が何らかの概念によって特定可能であることは、その内容が当該の概念によって構成されていることを必ずしも含意しないという点である。たとえばピーコックのシナリオ内容を考えてみよう。ピーコックによれば、シナリオ内容は三人称的な観点から概念的資源を用いて特定する——その内容を記述する書き込み作業を行う——ことができる。だが、そうした概念的資源それ自体は知覚者の経験内容の構成要素ではない。シナリオ内容は無数の仕方で概念的に記述可能であるが、そうした記述に用いられる内容と同一ではなく、信念や思考とは種類を異にするのである。他方、ピーコックとは異なり、一部の内容非概念主義者は、知覚経験が概念によって言表不可能 (ineffable) な内容をもつと考える。そうした論者によれば、たとえば、知覚に含まれる肌理細かい内容はどのような概念的資源によっても特定不可能である。もしこのように知覚経験が概念によって特定不可能であるとすれば、それは上で示した状態の概念性／非概念性の特徴づけには収まらないということになる。しかしながら、知覚経験の内容が言表不可能なものである場合、その内容はいかなる概念によっても捉えられないのであるから、その経験を享受するためにはそもそもいかなる概念の所有も要求されることはない。それゆえ、こうした場合の経験は状態非概念的なものと考えるべきであろう<sup>73</sup>。以上の考察を踏まえるな

<sup>72</sup> この区別に対して自覚的に議論を展開している概念主義者としてはウーが挙げられる (Wu 2008)。ウーは状態概念主義へと自らを限定し、行為を誘導する知覚のあり方に着目することで、人工物の知覚に関しては状態概念性が成立するという主張を行っている。

<sup>73</sup> 知覚内容の肌理細かさからその言表不可能性を導いている代表的な論者としては、第一章でも紹介したようにエヴァンズとヘックが挙げられる。エヴァンズは一方で知覚的な情報状態のもつ肌理細かい内容

らば、状態の非概念性の特徴づけは次のように修正されることになる。

状態の非概念性：S が c という内容を備えた経験 e を有しているとき、c が概念的に特定不可能であるか、あるいは、c が概念的に特定可能であり、かつ、S が e を享受するために c を特徴づける概念を所有している必要がないか、いずれかであるならば、e は非概念的である。

この状態非概念性の特徴づけを踏まえるならば、内容非概念主義と状態非概念主義の関係に関してさしあたり次のような含意を導くことができる。上で見たように、内容非概念主義には経験内容が言表不可能であるという立場と言表可能であるという立場の二つがある。前者の立場は状態非概念主義を含意する。だが、後者の立場は必ずしも状態非概念主義を含意しない。なぜなら、知覚経験の内容が信念と種類の異なる非概念的なものであっても、その内容が概念的に特定可能であり、かつ、その経験を享受するためにその内容の特徴づける概念を所有している必要があると主張する立場はありうるからである。後述するように、「意識に関する高階思考説 (higher-order thought theory)」をそのような立場として考えることは十分に可能である。それゆえ、知覚経験の内容を言表可能であると考ええるタイプの内容非概念主義は、状態非概念主義とは基本的に独立であると考えられる。

以上のように、概念主義／非概念主義に関する内容説と状態説が（内容が言表不可能である場合を除いて）相互に独立な主張であるとすれば、われわれはこの分類に即して二つの純粋な立場と二つの混成的な立場の計四つの立場を区別することができる。

- 純粋説 1：内容概念主義＋状態概念主義
- 純粋説 2：内容非概念主義＋状態非概念主義
- 混成説 1：内容概念主義＋状態非概念主義
- 混成説 2：内容非概念主義＋状態概念主義

繰り返し述べておけば、概念主義／非概念主義に関してこのように内容説と状態説を区別

---

が概念的に捉えられない言表不可能なものであることを主張しているが、同時に、それが知覚経験となるためには推論システムへの利用可能性が成立していなければならないとも主張している。このことからすると、エヴァンズは言表不可能な内容も推論に利用可能であるという奇妙な立場を採用しているようにみえる。これは、エヴァンズが言表不可能性と推論への利用可能性との緊張関係に無自覚であったか、あるいは、推論システムへの利用可能性が成立するのは知覚内容のなかでも概念で特定可能な肌理の粗い部分のみであると考えていたか、いずれかであろう。しかし後者であったとすると、知覚の肌理細かな内容は知覚経験とはなりえないということになる。単なる知覚経験と知覚状態の違いが意識的か否かという点にあるとすれば、これは知覚の肌理細かな内容が意識に上らないということの意味することになる。これは明らかにわれわれの現象学に反する。この帰結を避けるためには、エヴァンズが「経験」という概念を「意識化された情報状態」という意味で使っていたのではなく、「認知的にアクセス可能な情報状態」という意味で使っていたと解釈すればよいかもしれない。しかしそうすると、エヴァンズにおける「経験」という概念は同語反復的で内容空疎なものになってしまう。結局のところ、エヴァンズにとって非概念的内容という主題は理論的な考察の中心ではなかったという事情をここで想起すべきかもしれない。非概念主義に関してエヴァンズから整合的な「立場」のようなものを読み取ろうとするのは見当はずれな行為かもしれないのである。

しておくことが重要なのは、一部の論者によれば、概念主義および非概念主義を支えるために提出されている議論の少なからぬ部分が、内容説を擁護することを意図としたものでありながら、実際には状態説を擁護するものでしかないと考えられるからである。この点を非概念主義に対して提示されてきた論証のうち、第一章でも言及した「動物や幼児からの論証」および「記憶からの論証」を例にみてみよう<sup>74</sup>。

まずはエヴァンズらによる動物や幼児からの論証 (Evans 1984; Collins 1998; Peacocke 1998) を取りあげる。彼らは、成人の知覚と動物や幼児の知覚の連続性に訴えることで非概念主義を擁護しようと試みる。もしマクダウェルのように知覚が概念的な内容をもつと考えるならば、われわれは動物や幼児に対して知覚能力を認めることができなくなってしまうように思われる。なぜなら、もし何かを知覚するためにその内容に対応する概念能力をもつことが必要だとすれば、概念能力をもたない幼児や動物は知覚をもたないことになってしまうからである。この帰結は、動物や幼児も知覚能力を有しているというわれわれの常識的な理解に反するものである。それゆえ、何かを知覚するために概念能力を所有することは必要ではないと考えられる。この論証は、概念を所有していない動物や幼児も知覚能力をもつという常識的理解に訴えることで、知覚経験の内容が非概念的なものであることを示そうとするものである。しかし、たとえこの論証が成功しているとしても、それが実際に示しているのは、動物や幼児は概念を所有することなく知覚経験をもつことができるということ——すなわち、動物や幼児の知覚経験は概念独立的であるということ——のみであり、その内容が概念的な内容と異なる種類のものであるということまでも示すものではない (Speaks 2005, p. 366)。それゆえ、動物や幼児からの論証は実際には状態非概念主義を支持するものでしかない。

次にマーティンによる記憶からの論証 (Martin 1992) を取りあげよう。第一章で説明したように、この論証にはマリーという幼い女の子が登場する。マリーは正八面体と正十二面体を知覚的に識別することはできるが、それらを個別化しうるような概念を習得してはいない。数年後、成長したマリーは幼いころにサイコロで遊んだ記憶を想起し、それが正十二面体のサイコロであったということにはたと気づく。マーティンによれば、マリーは過去にそのサイコロを正十二面体として経験していたが、その経験を享受した時点では、彼女は正十二面体の概念を所有していなかった。ここからマーティンは知覚経験が非概念的な内容を有しているという結論を導く。しかしながら、たとえマーティンによる論証が成功していたとしても、それが実際に示しているのは、正十二面体についての概念を所有していなくとも、マリーは正十二面体に関する記憶（そしてそれが由来しているところの知覚経験）をもつことができるということだけである (Speaks 2005, pp. 367-368)。これは知覚経験が概念独立的であるということを示してはいるが、知覚経験が非概念的な内容をもつということまでも示すものではない。それゆえ、この論証も状態非概念主義を支持

---

<sup>74</sup> 非概念主義に対する論証のなかでこれら二つを選んだのは、他の論証に比べ、それらの論証は「状態非概念主義しか支持していない」という主張に比較的説得力があるように思われるからである。スピークスは他にも「知覚の肌理細かさ／豊かさからの論証」「知覚の状況依存性からの論証」「概念に対する基礎づけからの論証」などの論証も状態概念主義しか支持していないと主張している (Speaks 2005)。私見では、これらに対するスピークスの議論はそれほど説得的ではない。



するものでしかないのである。

以上のように、非概念主義に対する論証のうちのいくつかは、内容説を支持することを意図しつつも、実際には状態説を支持するものでしかない。もし混成説 1（内容概念主義＋状態非概念主義）が整合的なものであるとすれば、状態非概念主義を支持する論証は内容非概念主義が正しいことを示すものではないということになる。

同様に、もし混成説 2（内容非概念主義＋状態概念主義）が整合的なものであるとすれば、状態概念主義を支持する論証は内容概念主義が正しいことを示すものではない。それゆえ、マクダウェルやブリューワーの論証が状態概念主義を支持するものでしかないという指摘がもしも正しいとすれば、それらの論証から知覚経験が概念的な内容をもつという主張に対する支持を引き出すことはできないということになる。

しかしながら、二つの混成説は果たして本当に整合的な立場であると言えるだろうか。もしそれらの説が実際には不整合であるとするれば、採りうる立場は二つの純粹説しかないということになる。その帰結として、ある論証が状態概念主義／状態非概念主義を支持するものでしかないという指摘は、内容説の支持者にとっては取り立てて問題にすべきものではないということになる。なぜなら、その場合には、状態概念主義／状態非概念主義を支持する論証は、それぞれ内容概念主義／内容非概念主義に対しても間接的に支持を与えることになるからである。

そこで次節および次々節では、混成説 1 と混成説 2 のそれぞれに対して、果たしてそれらが整合的な立場であるか否かに関する検討を行う。あらかじめ結論を述べておけば、混成説 1 は不整合な立場であるが、混成説 2 は整合的な立場であると考えられる。それゆえ、（マクダウェルをはじめとする）内容概念主義の支持者は、自身の論証が状態説を支持するものでしかないという指摘に対して何らかの応答を試みる必要があるということになる。

## 第二節 混成説 1 の整合性

混成説 1 は、知覚状態に関して非概念主義をとりながら、知覚内容に関しては概念主義をとる立場である。一見したところ、混成説 1 は何ら論理的な不整合を含む立場ではないように見える。信念状態と知覚状態が内在的には同じ種類の内容——概念的内容——を含みながら、前者の状態にあるためにのみ特定の関係的な特徴——知覚者がしかるべき概念能力を所有していること——が必要とされるということは、それ自体としては特に矛盾を含むものではないように思われる。

しかしながら、トリビオはこれとは逆の結論を引き出している（Toribio 2008）。彼女によれば、知覚と信念の「共通通貨」としてどのような内容を採用すべきかを立ち入って検討するならば、実際には混成説 1 は不整合な立場であるということが露呈する。以下、トリビオの議論を追いながら、混成説 1 がどのような意味において不整合であるのかを考察しよう。

内容概念主義は経験と信念が同じ種類の内容（＝共通通貨）を有していると主張する立

場である。一般に、そうした共通通貨となりうる内容の候補としては、「可能世界的内容」「ラッセル的内容」「フレーゲ的内容」の三つが挙げられる。

可能世界説によれば、内容とは、それが真であるような可能世界の集合である。この分析において、ある内容がこの現実世界において真であるのは、その内容を真とするような可能世界のなかに現実世界が含まれているときである。また、ラッセル説によれば、内容とは「ラッセル命題」から成る内容のことである。ラッセル命題はしばしばフレーゲ命題と対比される。フレーゲ命題とラッセル命題のもっとも大きな違いは、フレーゲ命題が対象それ自体ではなくその提示様式である意義を構成要素とするのに対し、ラッセル命題は個別的な対象それ自体とその対象が有するもろもろの性質とを構成要素とするという点である。ラッセル命題を内容とする見方によれば、たとえば、「ソクラテスは裸足だ」という単称言明と結びついた内容は、ソクラテスその人と裸足であるという性質によって構成されるのであり、それらがどのように提示されているかは問われない。

内容概念主義における共通通貨であるためには、その内容概念は信念がもつ内容と知覚がもつ内容の双方を適切な仕方で捉えることができないと考える。だが、可能世界的内容は信念の内容を捉えるには肌理が粗すぎると考えられる。たとえば、論理的に同値な二つの信念は同じ可能世界の集合において真であり、それゆえ可能世界説においては同じ内容をもつことになる。だが、われわれは両者に対してそれぞれ異なる命題的態度をとることができるのであり、それゆえ両者は異なる信念内容をもつものとして扱われるべきである。また、ラッセル的内容も同様に信念の内容を捉えるには肌理が粗すぎると考えられる。たとえば、「イオカステは美しい」という命題と「オイディプスの母は美しい」という命題は同じ対象と同じ性質に関わるものであるため、ラッセル命題としては同じ命題である。だが、われわれは前者の命題に対して信じるという態度をとりながら、後者の命題に対して疑うという態度をとることが可能である。それゆえ、信念内容として両者の命題は区別されるべきである。このように、可能世界的内容もラッセル的内容も信念のもつ内容を適切に捉えることはできない。

また、これらの内容概念を知覚の内容に適用した場合にも困難が生じる。シーゲルは可能世界的内容を知覚経験に適用した場合に次のような問題が生じると指摘している (Siegel 2005)。可能世界説によれば、知覚経験の内容はその内容が真であるような可能世界の集合である。だが、われわれが (悪魔のフォークのような) 不可能図形を知覚しているとき、まさにそれは不可能な図形であるがゆえに、その内容を真とするような可能世界は存在しない。それゆえ、不可能図形の知覚内容は空集合であるということになる。だが、異なる二つの種類の不可能図形を見ているとき、双方の経験には何らかの内容上の違いが存在するはずである。可能世界説は双方の経験内容を等しいもの——空集合——として扱わざるを得ないがゆえに、知覚経験が有するこのような違いを捉えることができない<sup>75</sup>。また、ラッセル的内容が対象の提示様式ではなく対象それ自体を構成要素とするとい

<sup>75</sup> ただし、この批判に対して可能世界的内容を支持する側からは次のような反論が提起されうる。不可能図形とは、端的に存在することが不可能な図形なのではなく、知覚者がそれを不可能であると解釈してしまうような図形であり、それ自体は平面上に何ら矛盾を含まずに描くことができる。それゆえ、不可能図形の知覚を真とするような可能世界とは、その図形に描かれた不可能な事態が成立している可能世界—

う点は、それを知覚内容に適用しようとする場合に困難を生じさせる。何かを知覚する場合、われわれはどこでもない視点からその対象を知覚するのではなく、つねにある特定の視点から特定の仕方において対象を知覚する。このような主体への対象の現れ方を捉えるためには、対象や性質のレベルで個別化されたラッセル的内容ではなく、それらの提示様式のレベルで個別化されたフレーゲ的内容の方がふさわしい道具立てであると考えられる。このように、可能世界的内容もラッセル的内容も知覚の内容を捉える上で問題を抱えている。

以上より、可能世界的内容もラッセル的内容も知覚と信念の共通通貨としての役割を演じるにはふさわしくないと結論づけられる。

では、共通通貨としてフレーゲ的内容を採用した場合はどうだろうか。フレーゲ的内容はフレーゲ的な意義をその構成要素とする。信念の個別化は指示対象である「意味」のレベルではなくその提示様式である「意義」のレベルでなされている。それゆえ、フレーゲ的内容を信念内容として採用するときには、可能世界的内容やラッセル的内容において生じたような「肌理の粗さ」の問題は生じない。また上述のように、フレーゲ的内容は対象それ自体ではなくその提示様式であるため、知覚経験において対象や性質が主体に現れるその仕方を捉える上でよりふさわしい道具立てであると思われる。したがって、三つの内容概念のうち、フレーゲ的内容は知覚と信念の共通通貨としてもっとも有望な内容概念であると言えるだろう。では、このフレーゲ的内容を共通通貨とした場合に、混成説1は整合的な立場であると認められるだろうか。

この問いを考察する上で重要なのは、「知覚内容はそれが帰属されるための条件を有する」という点である。ある動物に対して何らかの知覚内容を帰属する場合、われわれは当該の動物の知覚範囲にあるさまざまな要素を無差別にその動物の知覚内容として帰属してよい訳ではない。その条件としては、たとえば、「帰属が許される内容は、その動物の知覚範囲にあるもののうち、当該の動物が信頼可能な仕方ですべて的に反応を行うことのできる傾向性をもっている要素に限られる」といったものが挙げられるだろう。知覚内容を非概念的なものとして捉えるならば、われわれはこのような弁別能力の所有をそれに対応する知覚内容を帰属するための条件として採用することができる。

では、知覚内容をフレーゲ的な意味での概念から構成されるものとして捉えた場合にはどうだろうか。トリビオによれば、フレーゲ的内容の所有条件を明確化した上で考察を行うならば、状態非概念主義と内容概念主義とは不整合であるという帰結が導かれる。

フレーゲ的内容の場合、その内容の所有条件には、主体がその内容に関連する認知能力を所有しているということが本質的に含まれる。このことはピーコックの概念理論におい

---

—そうした可能世界は一つもない—なのではなく、知覚者がそれを不可能であると解釈してしまうような図形が、見えている通りの場所に存在している可能世界——こうした可能世界は無数に存在する——である。それゆえ、異なる不可能図形に対する知覚は異なる可能世界の集合に対応することになり、その帰結として異なる知覚内容をもつことになる。このように考えることができるとすれば、知覚内容を可能世界的内容によって捉えることに対して、少なくとも不可能図形の知覚から問題が生じることはないということになる。ただし、この場合でも、信念内容を可能世界的内容によって捉えることには「肌理の粗さ」という問題が残されており、それゆえ、共通貨幣として可能世界的内容を採用することにも依然として問題が残されていることになる。

て明確に示されている (Peacocke 1992)。概念理論をフレーゲ的な枠組み (概念主義／非概念主義に関わるほとんどの論者は概念に関してこの枠組みを受け入れている) において構築する上で、ピーコックはダメットから次のような二つのアイデアを継承する (Millar 1994, p. 74)。それらのアイデアとは、(a) 意味の理論は理解の理論である、(b) ある表現を理解することは、それをどう使用するかを知ることであり、それゆえ、そうした使用に関する能力 (ないしは能力の複合体) に存する、というものである。これらのアイデアを概念に適用すると、(a') 概念の理論は、特定の概念に対する、それを所有するとはどのようなことかについての理論である、(b') 概念 C を所有することは、C を含む内容に対する命題的態度を形成するときに主体が行使する能力 (ないしは能力の複合体) に存する、ということになる<sup>76</sup>。言い換えれば、概念とはある種の認知能力であり、ある概念の所有条件には、主体がその概念に対応する認知能力を何らかの心的状態において例化することができる——その能力を所有し、実現することができる——ということが含まれるのである。

もしフレーゲ的内容の帰属にこのような概念能力の所有が要求されるとすれば、概念的 content をもった知覚経験を有するためには、主体自身がその内容に対応する概念能力を所有していることが必要であるということになる。それゆえ、知覚と信念の共通通貨としてフレーゲ的内容を採用した場合、知覚経験は主体によるしかるべき概念能力の所有に依存した状態であるということになる。これは「内容概念主義は状態概念主義を含意する」ということを意味している。状態概念主義と状態非概念主義は相互排他的な立場であるため、ここから「内容概念主義は状態非概念主義を排除する」という帰結が導かれる。これはまさに、混成説 1 の構成要素である内容概念主義と状態非概念主義は相容れない立場であるということを示している。したがって、フレーゲ的な概念理解のもとでは、混成説 1 は不整合な立場であるということになる。

もし以上で論じたように混成説 1 が不整合であるとすれば、状態非概念主義と両立可能なのは内容非概念主義だけであるということになる。言い換えれば、状態非概念主義は内容非概念主義を含意するのである。それゆえ、状態非概念主義を支持する論証は間接的に内容非概念主義を支持することになる。

### 第三節 混成説 2 の整合性

さて、もう一方の混成説 2 (内容非概念主義＋状態概念主義) に関してはどうか。混成説 1 と同様に、混成説 2 も一見したところ論理的に矛盾のない立場であるようにみえる。前節で述べたように、エヴァンズの立場はこの混成説 2 であると考えられる。ただし、エヴァンズが状態概念主義者であるのは、彼が知覚経験を「推論システムへと利用可能な

---

<sup>76</sup> これらはピーコックが依存原理 (the Principle of Dependence) と呼ぶものの背後にあるアイデアである。「概念の本性にとって、ある概念を含む内容に対する命題的態度を獲得するための、その概念を習得している思考者がもつ能力についての正しい説明によって規定される以上のものは何もない」 (Peacocke 1992, p. 5)。

知覚状態」として定義したからである。この点で、彼が状態概念主義者であるのはそのような規約——知覚状態のなかで推論に利用可能なものを知覚経験と呼ぶという規約——を採用した結果としてに過ぎない。では、状態概念主義に対してより実質的な支持を与える見方の下でも、状態概念主義は内容非概念主義を排除しないと言えるだろうか。

状態概念主義に対するより実質的な支持は、たとえば「意識に関する高階思考説」(Rosenthal 2005) から得られるだろう。高階思考説によれば、ある一階(あるいは  $n$  階)の心的状態が意識的な状態になるのは、それを対象とする二階(あるいは  $n+1$  階)の思考状態が成立しているときである。これを知覚状態に適用するならば、ある一階の知覚状態が意識的であるのは、その知覚状態がそれを対象とする二階の思考状態を伴っているときである、ということになる。これは、当該の知覚状態が意識的であるときには、その内容が思考を司る推論システムへの入力として利用されているということを意味する。それゆえ、高階思考説が正しいとすれば、主体がある知覚状態を対象として概念的な推論システムを行使しているかどうかは、当該の知覚状態が意識的か否かを区別する実質的な基準であるということになる。したがって、高階思考説は「知覚経験の成立は概念依存的である」という状態概念主義の見方に対して、単なる定義や規約の産物ではない実質のある支持を与えることになる<sup>77</sup>。

ここで注目すべきは、高階思考説の下では、一階の知覚状態は必ずしも概念的な内容を有している必要はないという点である。もし一階の知覚状態が概念的な内容を有しているとすれば、二階の思考はその一階の知覚内容をそのまま取り入れるだけで概念的な内容を獲得することができる。だが逆に、一階の知覚状態が有しているのが非概念的内容であるとしても、二階の思考はこの一階の知覚状態がもつ非概念的内容を概念化することでその内容を得ると考えることができる。ここで形成される概念的内容はあくまでも高階思考がもっている内容であり、それによって一階の知覚状態がもつ内容自体が概念化されるわけではない。それゆえ、二階の思考が形成されたときにも、一階の知覚経験の内容は非概念的なままに留まるという見方をとることは十分に可能である。だとすれば、高階思考説の下では状態概念主義と内容非概念主義は両立可能であるということになる。

このように、混成説 2 は混成説 1 とは違い、実質的な内容を与えた上でも不整合を生じないように思われる。以上の議論が正しいとすれば、状態概念主義は必ずしも内容概念主義を帰結しないということになる。それゆえ、状態非概念主義の場合とは異なり、たとえ状態概念主義を支持する論証が成功していたとしても、そこから内容概念主義が支持を得ることはない。だとすれば、内容概念主義者はまさに内容概念主義を直接擁護する論証を構築しなければならないということになる。次節では、マクダウェルの論証に対する批判を中心に取りあげ、いかにして内容概念主義を擁護しうるかを考察しよう。

---

<sup>77</sup> ただし、高階思考説から導かれるのは、「知覚経験が成立するためには、その内容に対応した概念を所有していることが必要である」という意味での状態説よりもさらに強い立場である。なぜなら、高階思考説においては、意識的な知覚経験が成立するためには、しかるべき概念を所有しているだけでなく、その概念を二階の思考において実際に行使していることが要求されるからである。ただし、そうした行使それ自体は意識化されている必要はない。

#### 第四節 内容概念主義の擁護

マクダウェルによれば、経験的信念が成立するためには、信念体系は「経験の裁き」に応じて改訂可能でなければならない。知覚経験がここで裁きとしての役割を演じるのは、主体に対して特定の信念を形成する理由を与えることによってである。マクダウェルの論証は、経験がこのように信念に対する規範的制約を与える役割を演じなければならないということから、経験の内容は概念的でなければならないという結論を導くものであった。しかしながら、スピークスやクローザーは、このマクダウェルの議論から導かれるのはたかだか状態概念主義にすぎないと主張する。

彼らが攻撃の対象とするのは、経験に対して理由付与の役割を認めなければならないという論点から、経験の内容は概念的でなければならないという論点への移行である。マクダウェルによれば、裁きに応じた信念体系の改訂は、経験内容とそれに対応した信念内容とのあいだの関係についての「反省的自己精査」を通じてなされる。

〔知覚内容とそれに対応する信念内容とのあいだの〕関係が、理由構成的であると本当の意味で真に認められるのだとすれば、この関係がそれをまたいで成り立つとされる境界線の内部に自発性を閉じこめることはできない。その関係自体、能動的思考の自己精査に服することが可能でなければならないのである。(McDowell 1994, p. 53)

ここで表明されているのは次のような考えである。知覚経験が主体に対して特定の内容を信じるための理由を与えるならば、その主体は当該の知覚と信念とのあいだの関係を反省的に精査する——その関係が適切かどうかをチェックし、適切でなければ何らかの改訂を行う——ことができない。つまり、主体は必要に応じて知覚内容と信念内容との関係について思考することができないのである。こうした自己精査を行うためには、主体は理由を与えるところの経験の内容に認知的にアクセス可能でなければならない。そして、経験の内容にアクセスするためには、主体はその内容を特徴づける概念能力を所有していなければならない。でなければ、知覚経験の内容は自発性の領界の外——主体がもつ自己精査能力の外——に置かれてしまうことになる。

しかしながら、クローザーによれば、以上のことは知覚経験の内容それ自体が概念的であるということを帰結しない。経験内容が自発性の能力の範囲内にあるということや、潜在的に自己精査の能力に服しているということは、状態概念主義を採用するだけで認めることができる。

しかるべき情報状態の内容を特徴づける概念を組み込んだ思考を主体が享受できるという事実のゆえに、われわれはその内容へのアクセス可能性について——それゆえ、そのような内容をもった経験を主体が享受することについて——賢明にも語ることができるのである。しかし、概念所有についてのこうした要請は、経験の内容がたとえ判断可能なもの〔＝概念的内容〕でなかったとしても充足しうる。(Crowther 2006, p.

信念体系が改訂可能性を獲得するためには、経験と思考の関係についての自己精査が可能でなければならない。だが、自己精査が可能であるためには、内容の概念性ではなく状態の概念性が成立していさえすればよい。それゆえ、マクダウェルによる論証は内容の概念性を帰結しないのである。

こうした批判に対して、内容概念主義者からは次のような反論が提起されうるだろう。知覚と信念の関係について自己精査を行うためには、主体は知覚内容を関係項の一つとする関係について思考することができなければならない。このとき、知覚内容は思考内容の一部となっている。知覚内容が判断可能なものではないとすれば、それがこのように思考の構成要素となることは不可能であろう。それゆえ、知覚の内容は思考の内容と異なる種類のものではありえない。

しかしながら、知覚の内容について考えることは、その内容がそれ自体として思考の一部となっていることを必ずしも意味しない (Speaks 2005, pp. 374-375)。たとえ知覚の内容が非概念的なものであるとしても、主体はその非概念的内容を概念化することでそれを思考の内容にすると考えるならば、「知覚の内容について考える」という事態を内容非概念主義の枠内で説明することは十分に可能である。もちろん、知覚の内容について考えるためにはその内容を特徴づける概念を主体が所有していなければならない。だが、このことが要請するのは内容の概念性ではなくたかだか状態の概念性にすぎない。

以上の批判が正しいとすれば、概念主義に対するマクダウェルの論証から直接導くことができるのは、マクダウェルが意図していた内容概念主義ではなく状態概念主義でしかないということになる。したがって、混成説2が整合的な立場であるとすれば、当該の論証から内容概念主義に対する支持を得ることはできないということになる。

では、このような批判に対して内容概念主義の擁護者はどのような応答を行うことができるだろうか。

前章においてブリューワーの論証を取り上げる際に用いた概念装置を利用することで、内容概念主義者からは次のような応答を行うことが可能であると思われる。スピークスやクローザーらは、経験内容と信念内容のあいだに理由構成関係が成立するという基本的な論点を認めた上で、その関係に対する自己精査が成立するためには前者の内容は概念的でなくともよいと主張する。しかし、このような主張は「ある信念を抱く理由とみなされうるものは、同じく概念空間のうちにある他のものをおいてほかにはない」というマクダウェルのテーゼに反するものである。前章で論じたように、このテーゼの元となっているのは「正当化に関する論証的理解」である。この理解によれば、理由と推論のあいだには不即不離な結びつきが存在している。理由を与えることは、当該の理由がもつ規範性の源泉となる推論を特定し、その推論の前提の一つとなる適切な事項を示すことである。このような推論関係に立つことの可能な事項は命題のみである。理由に関するこのような見方が正当なものであるとすれば、命題的な構造をもたない非概念的内容に理由構成関係を認め

ようとする点で、スピークスやクローザーの議論は妥当性を欠くということになる<sup>78</sup>。

この正当化に関する論証的理解を認めた上でなお、内容非概念主義の擁護者は次のような再批判を提起してくるかもしれない<sup>79</sup>。確かに、知覚の非概念的内容が命題的な構造をもたないとするれば、それは信念内容とのあいだに理由付与関係を築くことはできない。だが、われわれは非概念的内容が命題的な構造をもたない「裸の所与 (bare Given)」や「単なる感覚 (mere sensation)」のようなものであることを認める必要はない。ラッセル的内容や可能世界的内容は、信念がもつフレーゲ的内容とは異なる種類のものでありながら、命題的に分節化された構造を有している。それゆえ、非概念的内容としてこれらの内容を採用するならば、経験と信念のあいだに理由構成関係を認めつつ、同時に内容非概念主義を保持することができる。

確かに、内容の概念性／非概念性において問題となっている概念とは、信念や判断などのフレーゲ的内容を構成するものとしての概念である。ある内容がフレーゲ的内容であるためには、単に命題的な構造を備えているだけではなく、その命題が提示様式として成立している必要がある。それゆえ、ある内容が前者の条件を備えていたとしても、後者の条件を欠いているならば、その内容に対しては内容非概念性が成り立つと考えることができる。先述のように、ラッセル的内容や可能世界的内容は、命題的な構造を備えていながら、提示様式のレベルで個別化されるフレーゲ的内容よりも肌理の粗い内容である。したがって、もし知覚経験がラッセル的内容や可能世界的内容を備えているとすれば、それは非概念的な内容でありながらも命題的な構造をもっているということになる。もし正当化に関する論証的理解が要請するのが論証の関係項が命題的な構造をもつことのみであるとすれば、ラッセル的内容や可能世界的内容もそうした関係項に立つ資格を有しているということになるだろう。

この批判が妥当なものとして認められるためには、「可能世界的内容とラッセル的内容は知覚の内容を捉える上で問題を抱えている」という本章第二節で行った議論に対して反論を行う必要がある。そのような反論がなければ、それらの内容概念を知覚経験に対して安易に適用することはできない。さらに、同じ箇所では指摘した「可能世界的内容とラッセル的内容はフレーゲ的内容に比べて肌理が粗い内容しかもたない」という点も問題となりうる。なぜなら、両者に肌理の細かさという点で違いが存在するならば、たとえ両者ともに命題的な構造をもつとしても、非概念的内容が概念的内容を正当化するという論点をただちに許容可能なものと認めることはできないからである。少なくとも、これらのあいだの

---

<sup>78</sup> ではここで、経験内容と信念内容のあいだに理由構成関係が成立するという論点を放棄するという選択肢をとることはできるだろうか。その場合、理由構成関係が成立するのは、経験内容と信念内容のあいだにおいてではなく、経験内容についての思考内容（＝経験内容を概念化したもの）と他の信念内容のあいだにおいてのみであるということになるだろう。これはマクダウェルが批判した斉合主義にきわめて近い立場である。斉合主義は、理由構成関係を信念体系の内部に限定し、知覚経験に信念体系に対する因果的な制約関係しか認めない立場である。これは、知覚経験が外的な合理的制約として働く可能性を奪うことで、信念を生み出す自発性の働きが「摩擦なき空転」へと陥るリスクを与えるものである。だとすれば、マクダウェルの論証を批判する場合にも、経験内容と信念内容のあいだに理由構成関係が成立するという基本的な論点は保持しておく必要がある。

<sup>79</sup> 以下の再批判は Byrne 2004 における関連する論点から構成したものである。



正当化関係が知覚判断の場面においては健全なものであることが示されなければならない。さもなければ、マクダウェルやブリューワーの論証に対するこの批判を有効なものとなすことはできないだろう。

以上で指摘された問題点に対して、少なくともラッセル的内容の擁護者はさらに次のような議論を展開することができる。

まず知覚経験がラッセル的内容をもつと考えた場合に生じる問題について考察しよう。その問題とは、対象や性質のレベルで個別化されたラッセル的内容は、知覚経験における対象の「現れ方」を捉えることができないというものであった。しかし、タイによれば、われわれはラッセル的内容（タイの用語では「堅牢な非概念的内容（robustly non-conceptual content）」）の枠組みに留まりながらも、提示様式に関わる内容を付加的な性質として理解することで対象の現れ方の違いを捉えることができる（Tye 2006, pp. 525-528）。たとえば、ピーコックが取りあげている、水平面に対して 45 度傾いた正方形を見ている場合と、傾いていない正方形を見ている場合という事例を考えよう。タイによれば、これは正方形が二つの異なる「現れ方」において表象されている事例としてではなく、「正方形である」という性質に加えて他のさまざまな性質が表象されている事例として捉えることができる。上述の二つの例では「正方形である」という共通の性質に加えて、一方では「傾いている」という性質が表象されており、他方では「正立している」という性質が表象されている。いずれの付加的な性質が表象されているかによって、正方形がどのような現れ方をしているかが規定される。このように、経験がもつ提示様式の違いに対応する諸性質をラッセル的内容の構成要素として認めることで、非概念主義者はフレーゲ的内容に訴えることなく対象の現れ方における現象学的な違いを捉えることができるのである。

さらに、ラッセル的内容が肌理の粗い内容であるという点も、経験と判断のあいだの正当化関係を考える上で特に障害となるものではない。確かに、信念や判断の内容を個別化するには、ラッセル的内容がもつ肌理の粗さという特徴は問題となる。だがこのことは、そうした内容が信念や判断の内容とのあいだに正当化関係を結ぶことができないということの意味するものではない。第一に、可感的対象の提示様式の違いが現象学的な違いを含む場合、上述のように、ラッセル的内容はそこに含まれる性質を豊かにすることで、当該の対象の提示様式を適切な仕方で捉えることができる。それゆえ、ラッセル的内容は、現象学的に違いのある提示様式の各々に対して、それに対応する判断にあますところなく正当化を与えることが可能である。第二に、可感的対象の提示様式の違いが現象学的な違いを含まない場合、ラッセル的内容はそうした異なる提示様式の各々に対応する信念や判断と一対一対応している必要はない。なぜなら、ある知覚経験の内容は、そこに含まれる可感的対象や可感的性質が示しうるさまざまな提示様式のいずれに対しても正当化を与えることができるからである。たとえば、緋色の鳥が飛んでいるのを見るという経験は、「あの鳥の色は緋色である」という判断に対しても、「あの鳥の色はスカーレットである」という判断に対しても、あるいは「あの鳥の色は黄味がかった鮮やかな赤色である」という判断に対しても正当化を与えることができる。それは、これらの判断に含まれる内容が、当該

の経験内容が呈しうるさまざまな提示様式のなかに含まれているからである。ラッセル的内容は確かに肌理の粗い内容であるが、それが知覚経験の内容である場合、その粗さの範囲に含まれる肌理細かい内容のいずれに対しても、それを信じることに正当化を与えることができるのである。以上より、知覚経験がラッセル的内容であるとしても、それは経験と判断のあいだに正当化関係が成立しているという論点を損なうものではないと主張することができる。

マクダウェルやブリューワーの論証は、経験的信念の成立を前提としたうえで、その可能性の条件を探求するという超越論的なものである。以上の非概念主義からの応答が妥当なものであるとすれば、こうした超越論的論証は、結局のところ、状態概念主義に対して支持を与えるものではあるとしても、内容概念主義に対して支持を与えるものではないということになる。少なくとも、ラッセル的内容に基づいた内容非概念主義が成立する余地は排除されていないと言わなければならない。マクダウェルやブリューワーによる超越論的なアプローチは、内容概念主義を確立することを目的としつつも、結局は状態概念主義にまでしか到達しえないという懸念を抱えているのである。

もちろん、以上の議論は、マクダウェルやブリューワーの論証の限界を示すものであって、超越論的論証一般の限界を示すものではない。それゆえ、超越論的なアプローチに基づきながら、彼らとは異なる論証を提示することで、内容概念主義を直接的に擁護する可能性は残されている。だが、そうした論証がどのようなものであるかはまったくもって明らかではない。

では、内容概念主義に対する直接的な支持を得るために他にどのような理路がありうるだろうか。ここでわれわれは超越論的なアプローチに代えて自然主義的なアプローチをとることができる。すなわち、経験科学の知見を援用することで、知覚経験が成立する過程そのものを考察の対象にするというアプローチである。もしこうした理路において、知覚経験が概念的内容を分節化する過程を通じて成立することを示しえたならば、われわれは状態概念主義を介することなく内容概念主義に対する直接的な論証を手にすることができる。こうした方向性からのアプローチは、概念主義に対して「自然化」を施すことで、それに経験的な基盤を与えようとする試みとして理解することができる<sup>80</sup>。

次章では、こうしたアプローチを採用し、視覚における感覚処理の初期過程に関する諸研究に着目しながら、知覚経験がフレーゲ的内容を備えているという見方を擁護するための理論を構築したい。その過程でわれわれは前章の最後で触れた選択的注意というメカニズムをふたたび主題化することになるだろう。

---

<sup>80</sup> ここで述べている「自然化」とは、哲学と科学とを連続的なものとみなし、哲学的探究を進める上で経験科学との対話を重視するという意味での「方法論的な自然化」である。第二章でみたように、マクダウェルは自身の立場を「第二の自然の自然主義」と称しており、それを反自然主義的なものとはみなしていない。しかし、マクダウェルは概念主義の論証を構築する上でほとんど経験科学の知見を顧慮しておらず、この点で方法論的には自然主義的ではない。

## 第二部 概念主義の経験的基盤

### 第五章 自然化された概念主義の構築

#### 第一節 命題的構造の条件

命題的概念主義によれば、知覚経験はその成立の過程において、自発性と受容性の協働によって事実を取り込むことで、命題的な構造をもった概念的な内容を獲得する。しかしながら、事実はいかなる因果的な媒介項も経ずに知覚者に対して利用可能になるわけではない。視覚を例にとるならば、猫が縁側で寝ているとき、その光景を私が視覚的に経験するためには、その猫の体表で光源からの光が反射し、特定の配列パターンを保持しながら私の眼のなかに入射し、角膜を通過して網膜上の視細胞を特定の仕方で刺激し、さらに大脳の視覚処理経路に到達し、しかるべき処理を経なければならない。

この因果的なプロセスにおいて、外界からの光線が網膜に結ぶ像それ自体は、外界の諸表面からの幾何学的投射によって成立する二次元のイメージでしかない。このイメージは単なる物理的・光学的な情報伝達の過程によって成立するものであり、その意味において概念的に分節化されていない非概念的な状態である。計算論的な認知科学でよく論じられているように、われわれはこの二次元のイメージから「逆光学 (inverse optics)」と呼ばれる復元過程を経て、世界を三次元的な構造をもったものとして経験する。では、単なる非概念的なイメージを受容することから、いかにしてわれわれは事実に関する概念的な内容をもった経験を享受することが可能となるのだろうか。こうした問いはわれわれを初期視覚過程に関する経験的探究へといざなう。ここで、そうした視覚処理メカニズムの考察に移行する前に、そもそも何らかの内容が命題的構造をもつとはどのようなことかを手短かに説明しておきたい。

あるものが命題的に分節化された構造をもつためには、その形式面と内容面に関して次のような条件が要請される。すなわち、(1) 最低でも主部 (subject) と述部 (predicate) に該当する分節形式を備えていること、(2) その構造の構成要素が合成性という特徴を満たしていること、の二つの条件である。前者は命題がそれにふさわしい仕方で構造をもつための必要条件であり、後者はそうした構造の構成要素が概念としての資格をもつための必要条件である。(2) に登場する合成性という概念は、第一章で説明したように、有限の構成要素と結合規則から無数の命題を生成するという思考の生産性を説明するものであり、エヴァンズの「一般性制約」という概念と密接な関連性をもつ。エヴァンズによれば、あるものが概念であるためには、それは複数の異なる命題の構成要素として現れうる一般性を備えたものでなければならない。こうした合成性ないしは一般性のおかげで、われわれは有限の要素からでさえ無限に豊かな思考を表現できるのである。

加えて言えば、こうした命題的構造をもつ内容が信念や判断と同種のフレーゲ的内容で

あると認められるためには、それは合成性原理に加えて認知的意義の原理を満たしていなければならない。すなわち、ある内容がフレーゲ的なものであると認められるためには、その構成要素となるある対象や性質は特定の提示様式において主体に表示されていなければならないのである。もしそれがこうした肌理細かな内容を備えていないとすれば、たとえ命題的に分節化された構造を有しているとしても、(少なくとも本論の文脈において) 十全な意味での概念的な内容として認められることはない。

では、いかにして初期知覚過程はこうした概念的な命題的内容を知覚経験が備えることを可能にするのだろうか。ここで、知覚経験の成立過程において概念的な分節化を行うメカニズムとして、近年の認知科学および認知哲学において提示されている、意識的な知覚経験の成立に先立つ感覚処理メカニズムのもつ諸機能に着目したい。特に、ピリシンの視覚的指標理論 (visual index theory) とマッテンの感覚的分類理論 (sensory classification theory) を、それぞれ上述の (1)、(2) の条件に該当するメカニズムを提示したものとしてとりあげたい。

## 第二節 視覚的指標理論

### 2. 1 指標による個別的对象の指示

われわれの住んでいる環境世界は知覚可能な個別的对象に満ちている。それらは相互に区別可能な特有の輪郭をもち、比較的均一な感覚的諸性質を有し、特定の時空間的な領域を占めている。それらの対象を認識したり操作したりするとき、われわれは何らかの仕方でそれらの対象をその背景や並び立つ他の対象から区別して選択しなければならない。すなわち、われわれはそれらの対象を他とは異なる数的同一性をもったものとして把握しなければならないのである。では、われわれはどういったメカニズムに基づいてそうした対象の選択を行っているのだろうか。

認知心理学者のピリシンによれば、従来の認知科学において、知覚メカニズムにおける対象の選択は、「(視野内にある一番大きな青い三角形」といった) 記述——ここでの記述は当該の対象に対する個別化条件を指定するものである——による対象の指示と同様の、諸性質のコード化による対象同定の過程として理解される傾向があった<sup>81</sup>。この見方によれば、対象の選択はそれがもつ感覚的な諸性質をコード化するところから始まる。すなわち、まず視野内にある性質やその位置の情報がコード化され、対象はそれが有する諸性質の一意的な組み合わせに基づいて検出および同定される。対象を再認するときには、これらの記述的な情報に基づき、その内容におおむね合致する対象が当該の対象と数的に同一なものとして再同定される。また、対象がその性質や位置を変化させるときには、関連する記述内容が更新され、新たな一意的な記述へと書きかえられる。こうした見方をする論者の多くは、その記述内容には、当該の対象がもつもろもろの性質概念に加えて、可算的

---

<sup>81</sup> ピリシンは、こうした伝統的な見方はストローソンやクワインにおける個別化理解と同様ののものであると指摘している (Pylyshyn 2007, pp. 52-53)。

な事物に対応した類別概念 (sortal concept) —— 〈靴〉や〈椅子〉や〈人間〉といった、その対象が何であるかを分類する概念——が含まれていると考える。個々人が習得している類別概念の豊かさには程度の差があり、発達段階の初期にある幼児は〈もの〉といった非常に肌理の粗い原初的な類別概念しか備えていない。それでもなお、この見方によれば、対象の選択には何らかの類別概念に基づく世界の分割が必要とされるのである。

ピリシンはこうした「記述に基づく選択」という見方に対し、初期視覚 (early vision) が行う前意識的な選択的注意のメカニズムに着目し、数々の実験や議論を通じてその特徴を明らかにすることで、従来の見方とはまったく異なる選択メカニズムの在り方を提唱している。ここで言う「初期視覚」とは、階層的な視覚処理の比較的初期に属する諸過程のことであり、認知的な影響から比較的切り離されたかたちで計算処理を行うモジュール化された構造を有している。ピリシンが提示しているのは、初期視覚のモジュール化されたシステムは「視覚的表象と視野のなかの特定のトークン的な諸要素とのあいだに特別な種類の結びつきを与える」(Pylyshyn 2001, p. 128) という説である。ピリシンによれば、初期視覚は、視野内にある遠位的な諸要素に対して因果的に誘発された少数 (最大で 4 個程度) の「視覚的指標」を関連づけることで、個別的諸対象との直接的な結びつきを確立し、当該の諸対象の追跡や再認を可能にする<sup>82</sup>。ただし、ここでの追跡や再認は、視野内の中間サイズの対象に対して短時間のうちに行われるものに限定される。それはたとえば、対象が環境内を動き回るのを眼で追いかけたり、それが遮蔽物の背後に回り込んだ後にふたたび現われるのを目撃したりといった場面である。ある対象を数日後にふたたび眼にするなど、より高度な認知能力が要求される場面での選択や再認に関しては、上述のような類別概念を含めた何らかの記述的な資源が必要とされることが考えられる。だが、対象を眼の前にしてその追跡や操作を行うような場面においては、記述的な資源による媒介を必要としない、原初的なメカニズムの働きによって対象の選択が行われうるのである。

そうした原初的な対象選択は、自然言語における「これ」や「あれ」といった直示による指示になぞらえることができる (Pylyshyn 2007, p. 16)。われわれは直示によって対象が何であるかやどのような性質をもっているかに言及することなく指示を行うことができる (「あれは何だろうか」)。これと同様に、初期視覚は対象を同定したりそれがもつ諸性質をコード化したりすることなく視覚的指標を個別的な対象へと配分することができる<sup>83</sup>。だが、直示による指示と指標による選択のあいだにはいくつかの重要な相違点も存在する。

(1) 通常、直示が何を指示するかは話し手の信念や話し手についての聞き手の信念に依存している。これに対して、視覚的指標メカニズムが指示を行うのは透明な文脈にお

<sup>82</sup> ピリシンの研究は視覚を中心としたものであるため、視覚における指標メカニズムの分析に焦点が当てられているが、指標メカニズム自体は他の感覚様相へも適用可能である。たとえば、Pylyshyn 2007 の第五章第六節では、視覚的指標理論が固有受容感覚へも適用可能であることが述べられている。それゆえ、より一般的には、「視覚的」指標理論は「知覚的」指標理論と呼ばれるべきであろう。

<sup>83</sup> ピリシンは指標を「FINST (Fingers of INSTantiation)」とも呼んでいる (Pylyshyn 2007)。それは、指標による対象選択の在り方が、対象の上に指を置き、対象の移動に合わせてその指を動かすことで、その対象の同一性を追跡することになぞらえられるからである。このとき、われわれは対象がどのような性質を有しているかを知らずとも、その対象を指が捉えているところのものとして選び出すことができる。

いてである (Pylyshyn 2007, p. 94)。すなわち、それは知覚者が指示対象をどのように認知しているかとは独立に働くのである。それゆえ、視覚的指標による選択においては、「自分が選んだものがどの対象であるかを知っているとしても、それが何であるか […] を知らない、ということには実際に意味がある」 (Pylyshyn 2007, p. 94) ということになる。指標による選択は、対象をいかなる類別概念のもとに分類することも、また、それがもつ感覚的諸性質をコード化することもなく行われるものであり、その作動が概念的情報に依拠していないという意味で非概念的な過程であると言うことができる。

(2) キャンベルが指摘するように、われわれが自然言語において直示的指示を行うためには、その指示対象に対する意識経験を有していることが必要である (Campbell 2002, p. 136)。例として、あなたは友人とともに高台に立ち、眼下でひしめきあう群衆を眺めているとしよう。友人は群衆の方を指差し、「あそこに (二人の共通の友人である) 田中がいるね」と告げる。このとき、その群衆のなかのどの人物が田中であるかを視覚に基づいて識別することができなければ、あなたは「確かにあれは田中だね」という直示的指示を行うことはできない。たとえ、偶然あなたの指さす先に当該の人物がいたとしても、その存在に実際に気づくまであなたは指示を行っているとはいえない。これに対して、視覚的指標による指示は——少なくともそれが受動的に配分されるその過程においては——指示される対象についての意識経験を必要としない。視野の周辺で何かが素早く動いたとき、あなたの視覚システムは自動的にその対象の運動を検知し、それに対して指標の配分を行う。あなたがその対象に意識的に気づくのは、概して視覚システムが指標づけを行ったあとになってからである。

(3) また、直示語による指示は意図的に行われる自発的なものであるのに対し、視覚的指標による指示は感覚刺激がもつ顕著性 (saliency) に応じてボトムアップ的に作動する自動的なものである。ここで、われわれは何かに焦点的注意を向けることでその対象に自発的に指標を付着することができるのであり、そうである限り、視覚的指標による指示は必ずしも自動的なものであるとはいえない、という反論が提起されるかもしれない。しかし、厳密に言えば、われわれが自発的に制御しうるのは、視覚的指標メカニズムそれ自体ではなく、それが機能するための可能化条件 (enabling condition) であるにすぎない (Pylyshyn 2007, pp. 43-44)。すなわち、われわれが標的となる対象に焦点を向けるとき、われわれはその対象が指標メカニズムの作動する条件をクリアしうるように制御しているのである。一度その対象が条件をクリアしたならば、指標の配分それ自体は自動的に処理される。もちろんこのとき、感覚刺激の側がその条件のもとで指標を引きつけるだけの顕著性をもたないならば、いかに焦点を向けたとしても対象に指標を付着することはできない。

以上の比較をまとめれば、指標メカニズムによる個別化は、自然言語における直示とは異なり、「非概念的」、「自動的」、「前意識的」な過程である。つまりそれは、いかなる性質の

コード化も必要とせず、意識的な経験の成立以前の段階で働く、視野内の顕著な刺激に応じたボトムアップ型の処理過程なのである。

## 2. 2 指標メカニズムの理論的・経験的証拠

前項では、記述的指示との対比を通じて、ピリシンが提唱している視覚的指標メカニズムの基本的な特徴を見てきた。では、こうした視覚的指標の存在はどのような証拠に支えられているのだろうか。

ピリシンが指標メカニズムの必要性を訴える背景にあるのは、第一に、次のような理論的な要請である (Pylyshyn 2007, p. 10ff)。あなたがいくつかの図形を含んだディスプレイを前にして、それらの図形に順番に選択的注意を向け、あとで再認するためにその各々を記録してゆくという作業を課せられたとしよう。このとき、あなたが図形を記録してゆく際に利用可能な方法が、それがもつ感覚的諸性質を記述することだけであつたとしよう。もしすべての図形が互いに異なる感覚的性質をもっていたとすれば、個々の図形に対応する記述的内容の違いに基づいて、今注意を向けている図形がすでに注意を向けたことのある図形か、それとも注意を向けたことのない新しい図形かを識別することができる。だが、それらの図形が質的に同一な図形のペアによって構成されていたとすればどうか。この場合、今注意を向けているのがそのペアのうちのどちらの図形なのかを記述的内容に基づいて識別することはできない。ディスプレイのなかに質的に同一な複数の事物が含まれているときには、性質のみによる指示はそれらの数的同一性を追跡する役には立たないのである。しかし、質的に同一な図形であっても、それらは通常、異なる空間的な位置を占めているはずである。それゆえ、記述的内容のなかに場所情報が含まれうるとすれば、それらの図形を位置の違いに基づいて識別することができるだろう。だがさらに、もしそれらの図形がディスプレイのなかを動き回っていたとしたらどうだろうか。このときには、場所情報の記録も両者を識別するための有効な手段ではなくなる。また、すべての図形が時々刻々と感覚的性質を変化させていたとしたらどうだろうか。このときには、たとえすべての図形が互いに質的に異なるものであつたとしても、記述的内容に基づいてそれらを識別しうる保証はなくなってしまうだろう。

われわれの暮らしている日常の環境においては、このように事物が動き回ったり性質を変化させたりすることは特段稀なことではない。だが、そうしたなかでもわれわれは、視野内に一定数の事物について、それらの数的同一性を識別したり追跡したりすることに特に困難を覚えることはない。だとすれば、われわれは概念的記述に依存することなく個別的な諸事物を識別したり追跡したりすることが可能でなければならない。換言すれば、われわれの視覚システムには、個別的な事物の数的同一性を追跡する、記述に依存しない何らかのメカニズムが備わっていなければならないのである。視覚的指標理論が着想された背景にはこのような理論的な要請が存在している。

しかしながら、視覚的指標理論は単に理論的な要請に依拠しているだけではない。それはさまざまな経験的な証拠からも支持されている。それらのなかでもこの理論をもっとも鮮やかに例証しているのが、ピリシンの考案による「多対象追跡 (multiple object tracking:

MOT)」実験である (Pylyshyn 2007, pp. 34-37)。この実験の典型的なデザインでは、まずディスプレイに複数の小さな図形が呈示され、点滅などの手がかりによってそのうちのいくつかは標的として指定される。ついで、すべての図形が色や形を変えながらランダムに移動する。被験者は標的のみを追跡し、各試行の終わりに、どの対象が最初に標的として指定されたものかを判断するよう求められる。一見したところ、この課題はかなり難易度の高いものであるように思われる。だが、追跡する標的が4個程度である場合には、正答率は85%以上という高いものであった。視覚的指標理論のもとでは、このタスクは次のように解釈される。まず、最初の手がかり刺激によって指標が複数の標的へと束縛され、それらの指標が指示対象の移動している間も付着し続けることで、最終的に標的を特定することを可能にしている、と。

理論上は、このタスクは視覚的指標とは異なる記述的な資源に基づいたメカニズムによっても遂行されうる。たとえば、対象が持つ諸性質の情報をコード化してそれをもとに同定を繰り返してゆくメカニズムや、対象が置かれている位置情報をコード化してそれらを逐次的に更新してゆくメカニズムが考えられる。だが、すべての呈示刺激が質的に同一である場合にも追跡の成績はさほど損なわれないということから、前者の仮説が排除されるべきものであることは明らかである。また、ピリシンらは実験デザインを巧みに操作することで後者の仮説も排除している。対象の位置情報に基づいて追跡が行われているというこの仮説に従えば、運動する対象の追跡は、ある時点での標的の位置をコード化して保存し、その情報を更新してゆくことで行われることになる。サーリネンの研究によれば、位置のコード化は並列的にではなく逐次的に行われる (Saarinen 1996)。それゆえ、複数の事物を追跡するときには、位置情報の更新は標的へと焦点的注意を順番に移してゆくことによって遂行されることになる。こうした戦略においては、注意の移動が一巡し、標的 a が以前にコード化された位置 L へと注意が向けられたとき、その位置 L にもっとも近い標的が a と同一のものとみなされ、その新たな位置 L' が a の現在の位置としてふたたびコード化されることになる。このように位置の更新を繰り返してゆくことで追跡が行われているとしたとき、果たしてそのパフォーマンスはピリシンが MOT 実験で観察したような高い水準に達しうるであろうか。ピリシンは MOT 実験で使用された標的の軌跡情報に基づいて、この仮説の妥当性をシミュレーションによって確認した (Pylyshyn 2007, pp.

36-37)。その結果、注意の移動速度などのシミュレーションの条件を関連分野の知見に照らしてもっとも甘いものに設定した場合でも、追跡の成功率はわずか30%程度という低いものだった。実際の被験者から得られたパフォーマンスが85%以上という高いものであったことを考えれば、運動の追跡において位置のコード化を基盤にした戦略が使用されている可能性はかなり低いと考えられる。

また、デニスらの実験によれば、対象の色をすべて異なるものにしたとしても、MOT 実験における追跡の成績は向上しない (Dennis and Pylyshyn 2002)。このことは、コード化された性質が単に追跡の基盤となる役割を果たしていないだけでなく、追跡を容易にする役割すら果たしていないことを示している。それどころか、被験者は対象を追跡中にその対象がもつ性質に対して変化盲現象（視覚場面のなかで生じる明白な変化に



気づかない現象)を示す傾向さえある (Bahrami 2003)。ここからは、標的のもつ性質はそもそもその対象のものとしてコード化されていない場合さえある——むしろ、MOT 実験のように複数の対象を同時に追跡しているときにはそうした場合は頻繁に生じる——ということが示唆される。

これらの証拠は、対象の数的同一性に対する追跡は、性質や位置に関する概念的記述ではなく、非概念的な視覚的指標を利用して行われている、という仮説を支持するものである。MOT 実験はさまざまな研究室で条件を変えて行われており、無数の試行を通じて同様の結果が得られている。これらの結果は、上述のような視覚的指標メカニズムの存在を示す証拠が堅牢なものであることを示している。

視覚的指標メカニズムは選択的注意の一種であるが、同時に複数の対象に配分されうるという点で、一つ程度の対象にしか配分しえない焦点的注意とは区別される。ある対象に焦点的注意が向けられる場合には、その対象に対する視覚的指標の配分が必ず伴うが、その逆は真ではない。焦点的注意は、視覚的指標が配分された対象のうちのごく少数に対して、その属性や性質に関するより詳細な情報を得るために向けられる。したがって、視覚的指標理論に従えば、対象に向けられる選択的注意には、複数の対象に対する分散的な注意と、そのなかの少数の対象に対する焦点的な注意の二つの段階が存在しているという仮説が成り立つ。この注意に関する二段階の処理過程という仮説は、シューとチュン (Xu and Chun 2006; 2009; Xu 2009) による一連の fMRI (機能的核磁気共鳴画像) 実験によって支持されている。シューとチュンは、分散的注意は (最大四つまでの) 対象の数の違いに、焦点的注意は対象がもつ性質の複雑性の違いに対してそれぞれ可感的であると考え、そうした相違を反映した実験デザインを考案したうえで実験を行った<sup>84</sup>。その結果、分散的注意には頭頂間溝 (intraparietal sulcus) の下部領域、焦点的注意には頭頂間溝の上部領域と外側後頭複合体 (lateral occipital complex) がそれぞれ関わっていることが明らかにされた。頭頂間溝下部領域は対象の数の違いに対して異なる賦活の度合いを示したが、対象が同じ形をしている場合と異なる形をしている場合に対しては同様の反応を示した。それゆえ、この領域は、性質のコード化をとまなわずに対象を選択するという、視覚的指標の配分過程と関わっていると考えられる。これに対して、頭頂間溝上部領域と外側後頭複合体は、四つの対象が呈示された場合、すべてが異なる性質をもっているときに比べてすべてが同じ性質をもっているときの方が賦活の度合いは低く、その度合いは一つの対象が呈示された場合と同程度のものであった。それゆえ、これらの領域は対象がもつ性質がコード化される過程と関わっていると考えられる (おそらく、性質それ自体の表象には外側後頭複合体が主に関わっており、頭頂間溝上部領域は焦点的注意を通じてその性質を対象と結びつける働きをなしていると考えられる。この点については次節の第四項を参照)。シューとチュンによれば、これらの段階は逐次的なものであり、視覚経路を通る情報はまず分散的注意によって複数の物体表象として選別され、そのなかのいくつか (シューとチュンによれば、その数は統合する性質の複雑さによって変化する) がさらに焦点的注意によっ

---

<sup>84</sup> ただし、シューとチュンは分散的注意と焦点的注意という語を用いておらず、前者を「個別化の過程」、後者を「同定の過程」と呼んでいる。

て選別される。これらの実験結果は、ピリシンらによる実験心理学的な研究に加えて、脳科学の側からも視覚的指標理論に対する経験的な支持が得られるということを示すものである。

## 2. 3 対象ファイルと命題的形式

以上で見てきた視覚的指標メカニズムは、視覚経験に対して主部と述部という分節構造を備えた命題形式を与えるものと解釈できる。このことを説明するためには、カーネマンらによる「対象ファイル (object file)」という概念を導入するのが有効である (Kahneman et al., 1992)。対象ファイルとは、「実世界の諸対象についての一時的なエピソード的表象」 (Kahneman et al., 1992, p. 176) であり、長期記憶に保存された個別的対象についての表象とは区別される。それが対象「ファイル」と名づけられたのは、単に特定の個別的対象と結びついているだけではなく、その対象が有する諸性質をそのなかに一時的に保存していくための役割を担っているとされるからである。

ピリシンは MOT 実験において生じている事態をこの対象ファイル概念と結びつけて次のように説明している (Pylyshyn 2007, pp. 37-39)。対象ファイルは諸性質を保存するための場所を提供することで、指標メカニズムによって個別化された対象とその対象に関する情報とを結びつける働きをなすと考えられる。視野内のある対象が注意を引きつけることで指標を獲得したとき、その対象についてのファイルが当該の指標のもとで作成される。そのファイルは当初からっぽの状態にあるが、その対象がある時点において保持している性質が保存されるための場を提供することで、当該の対象が有するもろもろの性質の結びつけ (binding) を可能にする。カーネマンらの側も対象ファイルについて論じる過程で視覚的指標に触れており、それを「いかなる性質も保存される前の対象ファイルの初期状態」と解釈している (Kahneman et al., 1992, p. 216)。ある対象ファイルに保存される諸性質はそのファイルと結びついた対象のものとして帰属され、その対象に関するさまざまな認知的処理を行うための記述的資源として利用される。しかし、当該の対象に対する原初的な指示や追跡はファイルにともなう指標の働きによるものであり、そのなかに保存される諸性質を利用して行われるものではない。これは視覚的指標のメカニズムがいかなるコード化にも依拠しない非概念的なものであるという特徴づけに対応している。

指標メカニズムとそれにとまって作成される対象ファイルとは、視覚経験に対して命題的な構造を備えた内容を提供する役割を演じると考えられる。第一に、指標メカニズムは視野内にある特定の個別的対象とのあいだに直示的な指示関係を結ぶことで、知覚経験の内容に対して命題における原初的な「主部」に相当する要素を付与するものと解釈できる。第二に、このメカニズムによって作成される対象ファイルは、感覚的対象の有する諸性質が記録されるべき場を提供することで、対象を主部とする命題に対して、その諸性質が述部として機能するための形式を与える役割を果たすものと考えられる。指標メカニズムはわれわれの心に主部としての個別的対象を与えるとともに、その対象に対する述定を可能にする形式をも同時に与えるのである。

しかしながら、ここで次のような疑問が提起されるかもしれない。視覚的指標理論によ

れば、対象の追跡が行われている場合でも、対象ファイルのなかにはそれがもつ性質や位置がコード化されておらず、それゆえ当該の対象に関するいかなる概念的資源も利用可能でないという状態が生じる。だが、視覚世界のなかから対象を切り出し、それを追跡の標的として個別化するためには、視覚システムによってそれがもつ諸性質が処理されていなければならないのではないだろうか。ある対象がもつ何らかの性質をコード化することなしに、どのようにしてその対象に対する個別化が行われうるのだろうか。

この問いに答えるためにピリシンは「原因 (cause)」と「コード (code)」の区別を持ち出す (Pylyshyn 2007, p. 68)。換言すれば、対象が有している、指標が付着する原因となる性質と、指標が付着した後でコード化される性質との区別である。すなわち、ある性質が対象ファイルの作成を引き起こしたとしても、その性質が必ずしもその対象ファイルのなかに保存されるとは限らないのである。対象追跡において性質に対する変化盲が生じることを示した上述の実験 (Bahrami 2003) は、こうした二つの段階を区別することを支持する証拠とみなすことができる。コード化された性質は、単に指標配分の原因となるだけの性質とは異なり、次の二つの意味において表象的な性質である。第一に、コード化された性質は、外界における何かについてのものとして、対象のもつ性質を意味論的に表示するという機能を有する。それゆえ、コード化された性質を構成要素とする心的状態は、外界に存在する何かを誤表象するという可能性をもつことになる。第二に、コード化された性質は、行為や認知などの後続する心的諸過程へと利用可能である。それゆえ、コード化された性質は、そうした利用に適した形式——それが推論などの認知的過程に利用される場合には、思考の内容となりうるような概念的な形式——を備えていなければならない。コード化されず、指標を引きつける原因となるだけの性質は、これらいずれの意味においても表象的な性質ではない。表象的な性質の場合と並行的に論じるならば、第一に、その性質は指標メカニズムが受動的に反応しうる何らかの特徴によって指標の配分を因果的に作動させるだけであり、その処理に関わる状態が何かを正しく表象したり誤って表象するというわけではない。第二に、その性質は指標の配分を引き起こす役割を果たすだけであり、後続する認知的な処理のために保存されることはない。そうした性質は、対象の境界を検出し、対象を地から図として分離するために使用されはするが、追跡や再認の場面でその対象を同定するという役割を果たすわけではない。したがって、原因となる性質とコード化される性質という以上の区別を踏まえるならば、「それがもついかなる性質もコード化されることなしに、ある対象が個別化され指示される」ということは何ら不可解な事態ではないということになるだろう<sup>85</sup>。

以上で述べてきたように、視覚的指標は視覚経験に対してそれがもつ内容の主部となる対象を与えるメカニズムである。ただし、ここでの対象は、日常的な意味での「物質的対

---

<sup>85</sup> 第一の意味での表象の基準を満たしながら、第二の意味での表象の基準を満たさない状態も成立しうる。たとえば、第八章で取りあげる背側経路の担う情報状態は、何らかの行為に利用される運動パラメータ（たとえば物を把握するさいの指の開き幅）の設定に関わっており、この点で誤表象の可能性を有している。しかし、その情報は思考の内容となるような概念的な形式を備えておらず、この点で認知過程への利用可能性を欠いている。それゆえ、そうした状態は非概念的な表象状態として理解することができるだろう。

象」と必ずしも外延を等しくするものではない、という点には注意が必要である。概念的な区別を明確にするために、視覚的指標が付着する対象を「感覚的对象」と呼ぶことにしよう。感覚的对象は、初期視覚に備わるモジュール的なメカニズムにおける処理のあり方によって規定されるものであり、「視覚的指標を引きつける任意のもの」というかたちで操作的に定義される。多くの場合、感覚的对象はわれわれが物理的对象と呼ぶものの外延に属する特定の個別对象と一致する。しかしながら、物理的对象の外延に属すものでも、眼に見えないくらい小さすぎたり、視野に収まらないくらい大きすぎたりする対象は視覚的指標を引きつけることはない。また、輝度などの感覚的性質の急激な変化や、主観的にしか存在しない残像や幻覚像など、通常は物理的对象と呼ばれないものも視覚的指標を引きつけうる。それゆえ、感覚的对象はときに物理的对象とその存在論的身分を異にする。だが、そうした場合であっても、述定的構造が束縛される項となりうるという点で、感覚的对象はわれわれが物理的对象と呼ぶものと異なる論理的身分をもつわけではない。そして、知覚内容が命題的な形式を備えることにとって重要なのは、感覚的对象がどのような存在論的身分をもっているかではなく、どのような論理的身分をもっているかである。視覚的指標が付着しうる対象は、物理的对象もそうでない単なる感覚的对象も、述定的構造の主部となりうるという点で、等しく命題的な経験内容の成立に寄与しうるのである<sup>86</sup>。

### 第三節 感覚的分類理論

#### 3. 1 分類装置としての感覚システム

これまで論じてきたように、視覚的指標メカニズムによって成立するのは、あくまでも感覚的对象との非概念的な指示関係である。それは当該の対象を（たとえば、〈あの犬〉や〈あの赤いもの〉や、さらには〈あれ〉といった）いかなる概念的分類のもとへも包摂するものではない。指標メカニズムによって対象ファイルが作成されたとしても、そのファイルにしかるべき内容が収納されなければ、そこに準備されるのはいまだ内容のない空虚な命題形式にすぎない。知覚経験が世界の在り方を表す内容をもったものとして成立するためには、この原初的な命題形式に対して概念的内容を付与するさらなるメカニズムが要請される。

マッテンはその著『見ること・行うこと・知ること (*Seeing, Doing, and Knowing*)』

---

<sup>86</sup> ピリシンは代表的な古典的計算主義者として知られているが、『ものと場所』においては特に古典的計算主義とコネクショニズムの対立に関する議論は表立って行われていない。古典的計算主義とコネクショニズムという観点から概念的内容と非概念的内容について論じたものとしては Clark 1994 が挙げられる。クラークによれば、ある種の生物にみられるような領域特定の知性の働きは非概念的内容という概念を援用することで説明可能であり、こうした非概念的内容は一階のコネクショニストシステムによって実現することができる。だが、より高次の領域一般的な知性の働きは一般性制約を満たすような概念的内容によってしか説明できず、少なくとも一階のコネクショニストシステムを超えた何らかのシステムを要請する。クラークはそうしたシステムが古典的計算主義システムであるのか高階のコネクショニストシステムであるのかについては可能性を開いたままで論を閉じている。

(Matthen 2005a)において、自らが「感覚的分類理論」と呼ぶものを提唱し、感覚システムの役割は感覚的対象がもつ諸性質に対して自動的に行われる「分類 (classification)」あるいは「カテゴリー化 (categorization)」に存すると論じている。この理論によれば、視覚経験に対して内容を与えるのは、視覚的指標メカニズムと同じく初期視覚に属する感覚的分類メカニズムであるということになる。それらのメカニズムは協働することで知覚の概念的 content の成立に寄与するのである。

マッテンによれば、知覚の哲学における伝統的な見方——マッテンはそこにラッセルやカルナップ、グッドマンを数え入れている (Matthen 2005a, p. 1) ——においては、感覚は感覚受容器に与えられた刺激のパターンを受動的に記録し、そうしたパターンに対応するイメージを意識経験へと提供する役割を担うと考えられてきた。こうした見方においては、イメージは命題的に分節化された構造をもたない非概念的なものであり、その下流にある推論メカニズムが概念的な分類に基づく判断を行うための、生の素材であるとされる。たとえば、視覚イメージを構成する個々の領域は、視野内にある対応する諸表面からの幾何学的投射として成立するとされる。知覚者はこの視覚イメージに基づいて、その投射源である光景にどのような対象や性質が存在しているかを推測する。だが、このイメージは外界の対象や性質に対する「表象」として成立しているのではない。イメージはそれらを物理的に「反映」し、それらがもつ情報を「伝達」している。だがそれは、物質から投げかけられた影がその投射元となる物質の輪郭情報を反映し伝達しているのと同じ意味においてでしかない。丸い影がその投射元である物体が丸いことを「意味」しないのと同様に、この伝統的な見方における感覚イメージは外界がどうなっているかを表象することはない。それは外界についての意味論的な内容を欠いているのである。感覚イメージはそれ自体として何かを表象するという働きをもつのではなく、われわれがそこから外界に関する解釈を構成するための素材を与えるに過ぎない。われわれは感覚経験に基づいて真理条件をもった信念や判断を形成するが、その素材となるイメージそれ自体は真理条件（あるいは正合条件）を欠いているのである。

マッテンはこの伝統的な描像に異を唱え、それを次のように逆転してみせる。「事物は(通常の条件下で) 赤く見えるから赤として分類されるのではない。そうではなく、それが赤く見えるのは、視覚システムがそのように決定したからである」(Matthen 2005a, p. 24)。感覚システムの役割は、視野のなかのある個別的对象に関連した感覚刺激を〈赤〉や〈青〉といった特定の感覚クラスへと分類し、その分類結果をその対象に関連したものとして意識経験へと伝えることである。視覚的指標理論の語彙を用いて言い換えるならば、感覚システムの役割は、特定の指標に対応する対象ファイルのなかに当該の対象がもつ諸性質をコード化した結果を保存し、その対象ファイルを意識経験に対して利用可能にすることである。この段階に至ってようやく、感覚システムが行った分類の結果が対象ファイルのなかに保存され、それまで単なる空虚な命題形式にすぎなかった対象ファイルに内容が付与されるのである。

マッテンはこのように、判断に至る以前の初期視覚過程において、すでに入力情報に対して概念的な分類が行われていると考える。ここでマッテンが強調しているのは、視覚シ

システムは単に外界からの入力情報を受動的に処理しているのではなく、ある情報と別の情報とを同じカテゴリーのものとして扱うという能動的な分類活動 (classificatory activity) を行っているという点である。無論、こうした分類活動は主体が意識的に統御するという意味において能動的 (active) なのではない。だがそれは、外界の情報をそのまま記録するものではなく、神経処理を通じて当該の主体 (ないしは生物種) の観点や関心に相対的な仕方では分類されるという意味において能動的なのである。

次に、この分類活動についてももう少し具体的に分析してゆこう。

### 3. 2 神経処理による感覚クラスの構成

分類とはどのような活動なのであろうか。異なるトークン a と b を同じクラスに属するものとして分類するとは、a と b を何らかの特定の事柄に関して「同じもの」として扱うということである。では、神経処理メカニズムが入力情報に対してこうした分類を行っているとは具体的にどのようなことを意味しているのだろうか。この問いに対してはドレッキの次のような記述が有効な手がかりを与えてくれる。

情報が失われる、あるいは捨てられるのでなければ、情報処理システムが異なるものを本質的に同じものとして扱うことに成功することはない。そのシステムは入力进行分类あるいはカテゴリー化すること、あるいは一般化することに失敗してしまうのである。言い換えれば、より一般的なタイプの事例 (トークン) として「認識する」ことに失敗してしまうのである。(Dretske 1981, p. 141)

すなわち、異なるトークン a と b を同じクラス C に属するものとして分類するためには、a と b に関する情報のうち、C のトークンであることに構成的に関わる共通の性質以外の情報を捨象しなければならないのである。ここで「捨象する」とは、当該の無関係な情報を積極的に選別して廃棄することを必ずしも意味しない。何らかの表象状態は、それがああるクラス C を分類する上で無関係な情報を端的に無視することでも分類に必要な捨象を行うことができる。われわれの感覚処理システムは、階層的に組織化されたその各々の処理段階において、入力情報に関してこのような捨象によるフィルタリングを行っている可以理解することができる。たとえば、あなたがある特定の傾きと長さをもった線分 L を見ているとしよう。このとき、あなたの網膜上の細胞群は、線分 L から投射された光刺激によって、L の幾何学的形態に対応した賦活を行う。だが、これらの賦活された細胞の各々は、自らが線分を描き出す細胞群の一員であるということを「知る」ことはない。こうした状況は、マスゲームに参加しながら、全体としてどのような図像が描き出されるのかを知らされることなく、割り当てられたカードを盲目的に掲げている個々の参加者に喩えることができる<sup>87</sup>。そのような参加者は、特定の図像を描き出すことにおいてある役割を果たし

<sup>87</sup> この比喩表現についてはマッテンのプレゼンテーション (“Five Ways Sensory Content Can Be Conceptual (or Non-Conceptual)”) を参照した。  
[http://individual.utoronto.ca/matthen/Site/Mohan\\_Matthen.html](http://individual.utoronto.ca/matthen/Site/Mohan_Matthen.html) (Last accessed, 11th December, 2012)

ているのだが、それがどのような図像であるかを知ることはいない。それがどのような図像であるかを知ることができるのは、参加者全体によって描き出された図像に対して、観察者の視点に立つことのできる者のみである。多くの生物の感覚処理システムでは、細胞間に階層的な処理構造を導入することで、こうした観察者の視点に相当する仕組みが導入されている。たとえば、ヒューベルとウィーゼルは、その記念碑的な研究において、大脳の第一次視覚野（V1）には特定の傾きをもった線分のみ反応する細胞（傾き選択性細胞）が存在することを発見した（Hubel and Wiesel 1959）。この細胞は、たとえば、その受容野に 45 度の傾きの線分が呈示されたときにもっとも強く賦活する。比喩的に言えば、この細胞はその受容野に特定の傾きの線分が呈示されているか否かを「観察している」と言うことができる。

ここで重要なのは、傾き選択性細胞は、その受容野に呈示されたある線分が（たとえば）どのような色をしているかにかかわらず、それが対応する特定の傾きを備えていさえすれば賦活するという点である。傾き選択性細胞は、それが利用可能な情報のうち、傾き以外の情報を無視しているのである。このように必要な情報以外のものを捨象することで、傾き選択性細胞は特定の傾きをもった線分を分類しうようになる。ある傾き選択性細胞は、その受容野に呈示された線分がそれに対応する傾きを備えていれば、たとえそれが赤色の線分であろうと青色の線分であろうと無関係に反応する。当該の細胞は特定のタイプの傾きを備えた線分に対してのみ選択的に反応するのである。

ヒューベルとウィーゼルによる傾き選択性細胞の発見以降、脳科学研究の進展によって、感覚皮質のさまざまな場所に異なる特定の選択性をもった細胞が存在することが見出されてきた。たとえば、第四次視覚野（V4）には対象の色に選択的に反応する細胞が数多く見つかっており、第五次視覚野（V5/MT）には運動方向に選択的に反応する細胞や奥行情報に選択的に反応する細胞が数多く見つかっている。また、こうした基本的な感覚的性質だけでなく、より複雑なタイプの刺激に対して選択的に反応する部位も発見されている。たとえば、側頭皮質には紡錘状顔領域（fusiform face area）と呼ばれる顔刺激に特に強く応答する部位が存在する。このように、われわれの感覚システムを構成する各ユニットには、それぞれ異なる特定の可感的性質に対して並列的に分類活動を行う選択性が備わっている。われわれの知覚経験は、これらのユニットが階層的に組み合わせられてタイプのな処理を行った結果として実現されるのである。

以上の論点を別の角度から敷衍してみよう。われわれが住む環境内にはさまざまな種類の情報が溢れている。マッテンはそれを「包囲情報（ambient information）」と呼ぶ

（Matthen 2005b, p. 216）。包囲情報はその環境において何が起こったかについての軌跡（trace）として理解することができる。たとえば、夕刻に地面が乾いて熱を帯びていることは、日中にその地面に陽光が注いだことを示している。逆に、夕刻に地面が広範にわたって湿っていることは、日中にその地面に雨が降り注いだことを示している。われわれの眼に届く包囲情報にも周囲で生じた出来事に関するさまざまな情報が含まれている。しかし、われわれの眼はそこに届く包囲情報のすべてを利用可能なわけではない。われわれの網膜にある受容器は特定のタイプの情報に対してしか反応しないのである。たとえば、放

射性物質から届く放射線は、たとえ網膜の受容器を物理的に通過したとしても、それに対してしかるべき反応を引き起こすことはない。また、他の感覚様相に対しては反応を引き起こす音波のような情報に対しても、視覚の受容器は通常反応することはない。視覚の受容器は周囲環境から入射する光刺激にのみ反応するのである。ただし、光刺激のなかでも、紫外線や赤外線など可視領域から外れた波長の光線は（他の生物種は別としても）われわれヒトの網膜にある光受容器を刺激することはない。このように、特定の受容器が利用可能なのは、そこに届くさまざまな包囲情報のごく一部に過ぎない。他の情報は当該の受容器によって端的に無視されるのである。この意味で、視覚処理システムは、その入り口である刺激受容の段階において、すでに情報に対するタイプの分類を行っているといえることができる。

ここでマッテンにならい、視覚受容器が反応する情報を「視覚的に利用可能な情報 (visually available information)」と呼ぼう。二つの包囲情報は、たとえ何らかの点で物理的に区別されうるとしても、同一のタイプの視覚的に利用可能な情報として受容される。たとえば、環境内の放射能レベルのみに違いのある双子地球があったとすれば、地球の私と双子地球の私はタイプの同一の網膜状態にあることになるだろう。この場合、二つの環境にある物理的な違いは視覚システムによって捨象される。このようにして獲得された視覚的に利用可能な情報は、網膜の段階でさらなる処理を施された上で、間脳にある外側膝状体を通過して後頭皮質の V1 に送られる。そして、階層的に組織化された情報捨象ユニットのあいだで、順行 (forward) 伝達と逆行 (backward) 伝達による行き来を繰り返しながら、並列的に分類処理を施されてゆく。こうした階層のなかで、下流にある細胞群はその上流にある細胞群に対して——V1 の傾き選択性細胞が網膜の光受容体細胞に対して占めるのと同様に——観察者としての位置を占めている。こうした処理が進めば進むほど、それがもつ情報はますます捨象され、さらなる分類処理を施されてゆく。

知覚経験が以上のような脳内の処理過程を経て可能になるとすれば、その内容を、包囲情報は言うまでもなく、視覚的に利用可能な情報とも同一視することはできない。視覚経験がわれわれに呈示するのは、視覚的に利用可能な情報ではなく、視覚システムがこの情報に対してタイプの分類処理を施した結果なのである。感覚処理を通じて獲得される内容は、このように感覚タイプとしての一般性を備えているという点において、概念的内容であるための少なくとも必要条件は満たしているといえることができるだろう。

### 3. 3 知覚経験とデジタル表象

伝統的な見方においては、知覚イメージはしばしばアナログな形式で外界を表象しているとされる。それに対して、信念や思考などの命題的態度はデジタルな形式で外界を表象しているとされる。本項および次項では、第一項と第二項で論じた感覚処理に対する理解を前提とした上で、感覚イメージをアナログ形式の表象として捉える見方について批判的な検討を行いたい。

こうした見方に対して理論的な洗練を加えた代表的な論者はドレッツキである。一般的には、アナログ形式で情報を表現することとデジタル形式でそれを行うことの違いは、連続



的な形式で情報を表現することと離散的な形式でそれを行うことの違いとして理解される。だが、ドレッツキはこうした一般的な理解とは異なる観点からデジタル／アナログの対比を捉える。ドレッツキの定義では、デジタル形式およびアナログ形式は次のように規定される (Dretske 1981, p. 137)。

ある信号が「 $s$  は  $F$  である」という情報をデジタルな形式において伝達するのは、それが「 $s$  は  $F$  である」のなかに包含されている以上の情報を  $s$  について含んでいないとき、かつそのときに限る。

ある信号が「 $s$  は  $F$  である」という情報をアナログな形式において伝達するのは、それが「 $s$  は  $F$  である」のなかに包含されていない  $s$  についての付加的な情報を伝達するとき、かつそのときに限る。

ドレッツキによれば、感覚経験の内容はフィルム写真のようにアナログな形式において外界を表象する<sup>88</sup>。反対に、信念や判断の内容は文字情報がそうであるようにデジタルな形式において表象を行う。たとえば、「あの花は赤い」という文は、それが赤い花であるという情報以外に、その花がどのような形であるか、どのような大きさであるか、あるいはどのような種類であるかに関しても伝えていない。これとは異なり、ある花のフィルム写真は、それが赤い花であるという情報以外にその花についてさまざまな情報を伝えてくれる。ドレッツキの定義に従えば、前者は「あの花は赤い」という情報をデジタル形式で伝達し、後者はそれをアナログ形式で伝達している。ドレッツキの理解においては、信念は前者と同じ意味においてデジタルであり、経験は後者と同じ意味においてアナログであるとされる<sup>89</sup>。

知覚は、認知中枢がそこから選択的使用を行うために、より豊かな情報母体のなかに (それゆえアナログ形式において) 情報が供給されるプロセスである。(Dretske 1981, p. 142)

感覚経験は情報をアナログな形式で伝達し、信念や判断を担う認知システムがそこからデジタルな形式で情報を引き出すのである。ドレッツキは、知覚と信念がそれぞれアナログ形式／デジタル形式において情報をコード化しているということを、「知覚の内容は信念とは異なり非概念的である」という主張を支持する証拠として持ち出す。

<sup>88</sup> ただし、これはもちろん「物を見るときには頭の中に小さな写真が構成される」というホームクルスの描像を意味するものではない。

<sup>89</sup> ここで注意すべきは、ドレッツキの論点は、感覚は画像的だからアナログであり、信念は命題的だからデジタルだという点にはないということである。もしある画像が伝達可能なすべての情報が命題で規定可能であり、かつ、 $p$  がそうしたすべての情報を表現する命題であるとすれば、ドレッツキの定義より、その画像は  $p$  という情報をデジタル形式で伝達しているということになる。このように、デジタルとアナログの区別は絶対的なものではなく、どのようなメッセージを考えるかに相対的である。

知識、信念、そして思考は概念を含んでおり、感覚（ないしは感覚経験）はそうではないという伝統的な考え方は、このコード化の違いのなかに反映されている。  
(Dretske 1981, p. 142)

ドレッキはこの概念性／非概念性の違いを、入力情報に分類処理が行われる前後における状態の違いとして捉える。

認知活動は入力情報に対して概念を動員することであり、この概念処理は基本的に（根底にある同一性に対して無関係な）差異を無視すること、具体から抽象へと向かうこと、個別的なものから一般的なものへと移行することに関わっている。(Dretske 1981, p. 142)

ドレッキの理解によれば、感覚経験は分類が施されるのに先立って形成される豊かなアナログ表象であり、そこから認知システムが概念を用いた分類処理を行うことでデジタルな情報を抽出するのである。

しかしながら、感覚経験が前項で述べたようにタイプの分類活動の結果として構成されるとすれば、その内容はドレッキの理解に反してデジタルな形式において情報を伝達しているということになる。たとえば、ある傾き選択性細胞の発火は、その受容野に特定の傾きをもった刺激が呈示されたという情報を伝達する。この細胞の発火は、その刺激がどのような色をしているかやどのような形をしているかに関していかなる付加的な情報も含んでいない。同様に、他の種類の選択性細胞も、それぞれ特定の可感的性質について、無関係な情報を捨象したデジタルな形式でそれを表象していると解釈できる。これらのユニットによって構成される階層的な感覚処理システムにおいては、より下流にあるユニットは、その受容野にあるより上流のユニット群がもつ情報にさらにデジタル変換を施するという役割を果たしている。感覚経験が伝達する情報はこうしたデジタル変換の結果である。したがって、知覚と信念の違いをアナログ形式／デジタル形式という対比のもとで捉えようとするドレッキの見方は知覚に対する誤った理解に基づいていると言わざるをえないだろう。アナログ／デジタルという違いに基づいて内容非概念主義を擁護しようとする議論は妥当性を欠いているのである。

### 3. 4 具体性の現象学と特徴の統合

では、なぜドレッキはそうした誤った理解に陥ってしまったのだろうか。マッテンはその原因が知覚に関するある現象学的な直観にあると推測する (Matthen 2005a, p. 68)。たとえば人は、通常の照明状況で「A」という文字を見るとき、それがもつ色や傾きやサイズを見ることなしに単に形だけを見ることはできない。対象を見るときには、それがもつ特定の視覚可能な性質だけではなく、他の視覚可能な性質も同時に知覚することになるのである。マッテンはこれを「具体性の現象学 (the phenomenology of concreteness)」と

呼ぶ。具体性の現象学によれば、知覚経験はつねに、ある特定の種類の感覚タイプについてだけではなく、別の種類の感覚タイプについての情報も含んでいる。知覚経験がこのように具体性の現象学が告げるような仕方で情報をコード化しているとすれば、ドレツキのように、それをアナログな形式でのコード化として理解しようとする誘惑が生じるのも頷くことができる。

では、前項で述べたように、もし可感的性質が脳内の視覚システムにおいて分散的に処理されているとすれば、われわれはどのようにこの具体性の現象学を説明することができるのだろうか。色と形の情報が脳内の別々の領域で処理されているとすれば、なぜわれわれは色を見ることなしに形だけを見るということができないのだろうか。

この疑問に答えるためには、トリーズマンとゲラードによる「特徴統合理論 (the feature integration theory)」に訴えるのが有効である (Treisman and Gelade 1980)。特徴統合理論はその提唱以来さまざまな修正を受けながらも、認知神経科学においていまだ大きな影響力を有しており、並列的な感覚処理の結果がいかに統合されるかに関する見方として標準的な描像を与えるものであると言ってよい。特徴統合理論の基本的な考え方をトリーズマンは次のように説明している。

〔特徴統合理論の〕考え方はとても単純なものであり、われわれは一度に一つの対象を（受容野の小さな）初期レベルにおけるその位置に基づいてコード化する、というものである。刺激を一時的に他の位置から除外することで、われわれは何であれ現在注意を向けられている性質を容易に結びつけることができる。(Treisman 1998, p. 1296)

すなわち、別々の場所で分散的に処理されている諸性質は、空間的注意の働きによってある位置に共に例化しているものとして集められることで、個々に分離したものとしてではなく統合されたものとして知覚されるのである。トリーズマンらは、知覚システムにおける並列処理を表すために、さまざまな感覚的性質を表象するユニットを「特徴マップ (feature map)」と名付ける。そこにはたとえば「色マップ」や「形マップ」や「肌理マップ」が含まれる。彼女らはこれらに加えて位置情報を表象する「マスターマップ (master map)」を措定している。マスターマップは性質を表象することはないが、共例化している性質間の探索を容易にするために利用される。たとえば、ある視覚的光景のなかから赤い三角形を見つけるためには、マスターマップ上のある位置へと注意を移動し、個別の特徴マップ（色マップと形マップ）上におけるその位置に対応する性質をチェックすればよい。あるいは、いずれかの特徴マップ上でお目当ての性質を見つけ、マスターマップを媒介してもう一方の特徴マップの対応する性質を調べることで同じ目的を果たすことができる。特徴統合理論においては、このように、異なる特徴マップ上に表現された共例化する性質は、それらがマスターマップ上で同じ位置を共有しているということによって統合可能となる。

この特徴統合理論の考え方によれば、共例化している諸性質を統合する役割を果たすの

は空間的注意である。それゆえ、今現在注意を向けられていない諸性質は統合されていないということになる。その証拠となるのが「錯覚的結合 (illusory conjunction)」と呼ばれる現象である。トリーズマンとシュミットによるある実験 (Treisman and Schmidt 1982) では、被験者にはまず、正方形の頂点の位置に 4 つの図形が置かれ、それらの左右両脇に 2 つの数字が並べられた画面が呈示された。それら 4 つの図形は色 (赤、青、緑、黄)、形 (円形か三角形)、サイズ (大か小)、フォーマット (輪郭だけが塗られているか内側も塗られているか) の 4 つの次元において異なるものが使用された。被験者は画面を見た後、2 つの数字について正しく報告するよう求められた。その後、4 つの図形があった位置のいずれかに手がかり刺激が呈示され、被験者はその位置にあった図形がどのような性質を備えていたかを報告するように言われた。結果、画面に呈示されていなかった性質を答えてしまう「性質エラー」が 6% だったのに対して、別の図形がもっていた性質を誤って答えてしまう「結合エラー」は 18% だった。他のタイプの図形を用いた実験では結合エラーは 30% にも上った。被験者は二つの数字を 99% の確率で正しく答えることができたため、被験者の注意は数字の方に主に向けられており、4 つの図形には比較的少ない注意しか向けられていなかったと考えられる。この結果は「性質の統合は注意によってなされる」という特徴統合理論の予測を裏付けるものである。

以上の特徴統合理論の見方が正しいとすれば、われわれが注意を向けながらある対象を見るとき、その対象がもつ諸性質は共例化するものとして統合されるため、他の性質を見ることなしに一つの性質を単独で見ることにはできないということになる。それゆえ、知覚に関する現象学的直観が注意を向けられた対象の知覚に由来しているとすれば (実際、知覚判断は経験のなかでも特に注意の向けられている部分に基づいて下されるため、現象学的直観の由来に関するこうした仮定は妥当なものであると思われる)、それは知覚経験がドレツキの規定する意味においてアナログなものであるという印象を与えることになる。しかし、こうした印象に反して、知覚された性質の各々は、注意を向けられる以前の段階においてすでに別々の処理領域において分類を施されたデジタルなものとして表象されている。注意を向けられることでこれらのデジタルな表象は統合されるが、その結果として生起する知覚経験はいまだ情報が抽出されていないアナログな表象とは異なる内容をもつのである。

注意を向けられたイメージは、主観的には、具体的で完全に規定的であるように見えるのであり、カテゴリー化の過程を経てきたようには見えない。視覚的注意は別々に構成されてきたメッセージを再結合することでこの錯覚を生み出すのである。

(Matthen 2005a, p. 70)

以上のように、空間的注意による特徴の統合という見方は、並列的な分類処理の結果として生起する知覚経験がなぜ具体性の現象学を生み出すのかを説明することができる。われわれが知覚経験から何らかの現象学的な直観を得るのは、典型的には、経験のなかでも特に注意を向けている部分からである。そして、特徴統合理論によれば、注意を向けている

部分においては、共例化している性質が統合されることで、それらの性質が分離されことなく結合しているという印象が生み出される。このように考えるならば、具体性の現象学を説明するために、知覚経験がアナログ形式の表象であると考えする必要はない。感覚的分類理論の見方を前提とした上でも、具体性の現象学に対してはそれと整合的な説明を与えることができるのである。

ここで、特徴統合理論の見方を前節で説明した視覚的指標理論の観点から描き直してみよう。視覚的指標理論によれば、初期視覚システムには最大で4個程度の対象に対して同時に注意を向け、因果的にそれらの数的同一性を追跡するという機能がある。この機能には頭頂間溝下部領域が主に関わっていると考えられる。このとき、注意を向けられた各々の対象に対応して対象ファイルが作成される。これらの対象のうち、さらに焦点的注意——これには主に頭頂間溝上部領域が関わる——を向けられた対象に関しては、初期視覚過程において別々に処理されていた諸性質が、その対象に例化しているものとして結び合わされ、対応する対象ファイルに格納されていくことになる。これは特徴統合理論における「マスターマップへの各特徴マップの統合」という過程と同一のものであると考えられる。感覚的分類理論によれば、それぞれの特徴マップで表象されているのは分類処理を経た結果としての感覚クラスに他ならない。これらの感覚クラスは主部との統合に先立って他の感覚クラスと合成可能なものとしてコード化されており、空間的注意によって対象ファイルと対応づけられることで、当該ファイルを主部とする命題的構造における述定的要素として統合されることになる。このように、コード化された可感的性質は、対象ファイルへの統合によって命題的構造を獲得し、知覚的判断の内容として取りあげられることで、他のさまざまな命題と推論関係を構成しうるようになる。このことは、それらの可感的性質が経験においてだけでなく思考においてもその構成要素として合成可能であることを告げている。この点で、統合の結果として成立する内容は、意識経験に先立つ受動的なメカニズムの産物でありながら、なお概念の必要条件である一般性制約を満たすものであると言える。

以上のように、特徴統合理論と視覚的指標理論はその基本的な発想において相互に通訳可能な内容をもつ。ただし、両者のあいだには無視しえない相違も存在している。それは、一方の特徴統合理論においては、統合の基盤となるマスターマップが表示するのは視覚的空間上の位置であるのに対して、他方の視覚的指標理論においては、統合の基盤となるのはファイルが結びついているところの対象である、という点である。この相違点は、知覚経験のもつ命題的内容において、一体何が主部の役割を果たすのかについての対立として理解することができる。この問題に対しては、次章の第三節において「主部となるのは位置ではなく対象である」という視覚的指標理論の見方を支持する論証を与えることになるだろう。

### 3. 5 感覚的序列化と肌理細かさ

感覚的分類理論によれば、初期知覚における分類システムは入力刺激を処理することで感覚クラスを生み出す。ここまでの論述では、感覚クラスを、ある問いに対して「真／偽」

というブール型の答えを返すものであるかのように扱ってきた。たとえば、「ある対象は赤いか否か」という問いに対して、その対象がもつ色性質が赤という感覚クラスに分類されているのであれば「真」を、そうでなければ「偽」を答えとして返すという具合にである。ここで非概念主義者からは次のような疑問が提起されるかもしれない。もし経験される色性質がこのような離散的な値によって表現されるものだとすれば、知覚経験は肌理の粗い内容しかもたないということになる。だとすれば、感覚的分類理論はいかにして知覚経験が肌理細かな内容をもつという経験的事実を説明しうるのだろうか。

この問いに答えるためには、知覚システムが行う感覚的分類の多くは、実際には「感覚的序列化 (sensory ordering)」であるという点を説明する必要がある。すなわち、多くの可感的性質について、感覚分類システムは関連する刺激に対する序列化を行うのである。マッテンはこの感覚的序列化という見方を次のように定式化している。

感覚システムは刺激間の類似性と非類似性についての序列化された関係を生み出す。  
その関係は感覚された対象が他の対象に対して有する類似性の度合いを格付けする。  
(Matthen 2005a, p. 98)

例として色覚について考えよう。

まず指摘しておくべきは、われわれは色を知覚するとき、それを階層的に構造化された分類体系のなかで捉えるという点である。たとえば、寒色の下位分類には青色などが属し、青色の下位分類には空色などが属し、空色の下位分類にはさらに肌理細かな色合いが属する。こうした階層的な分類には、寒色／暖色や暗色／明色のような肌理の粗いものから、赤や青といった基本色名のレベルに属するもの、そして、特定の色相 (hue) のような肌理の細かなものなどが含まれる。これらの階層的構造は色覚に関わる異なるサブシステムが働いた結果として形成される<sup>90</sup>。たとえば、色相に関する色覚異常をもった知覚者であっても、その一部 (二色型の赤緑色覚異常者) は寒色／暖色の違いを見分けることができる。これは、寒色／暖色に関する処理が他の二色型色覚をもった哺乳類と共通の古いサブシステムによって担われていることによる (Mollon 1989)。ヒトを含む旧世界ザルがもつ三色型の色覚は進化的に新しいサブシステムによってもたらされるが、これは古いサブシステムとは比較的独立であり、それゆえ限定的な機能不全を被りうる。このように、色覚は実際には単一の特徴マップから構成されているわけではなく、階層的な構造をもつ複数の特徴マップが統合された結果として成立する。では、肌理細かな色相のレベルではどのように色性質が表象されているのだろうか。

色相に関わるサブシステムにおいては、色は二値的に表現可能な値をもつものとして分類されているわけではなく、ある表象体系のなかで特定の位置をもつものとして序列化さ

<sup>90</sup> ただし、これは異なる階層の各々がそれぞれ異なるサブシステムに対応するということを意味するものではない。あるサブシステムが色を表象する仕方は、そこから複数の階層が取り出せるようなものであるかもしれない。たとえば、あるサブシステムが色を山脈の地形図のような仕方で表象するとすれば、峰の部分の集合は一つの階層 (基本色名のレベル) を、山腹まで含めた地形図上の位置は別の階層 (より肌理細かな色相のレベル) を構成する。

れている。特定の色合いは何らかの離散的な値によって表されるわけではなく、色相を構成するある種の「質的空間」のなかの特定の位置によって表象される。当該の質的空間は「白－黒」「赤－緑」「青－黄」というの三つの座標軸によって規定される。この質的空間のなかで、「近い」色同士は互いにより類似したものとして、「遠い」色同士は互いにあまり類似していないものとして関係づけられる。色をはじめとする多くの可感的性質は、このように類似性によって規定される何らかの質的空間へと序列化されるのである。色経験が肌理細かな内容をもつのは、色覚システムがこうした質的空間への序列化として色の分類処理を行っているからである。別の言い方をすれば、色空間が肌理細かな色知覚を可能にするのは、それがグッドマン (Goodman 1978) の述べる意味において「統語論的に稠密な (syntactically dense)」表象体系に近似しているからである。ある表象体系が統語論的に稠密であるのは、その体系がそれに属する任意の異なる二つの表象タイプのあいだに三番目の表象タイプを序列化することができるような仕方で、無限に多くの表象タイプを提供しているときである。われわれには感覚可能な閾値があるため厳密に言えば近似的なものでしかないが、それでも色空間は数百万という膨大な数の識別可能な色を備えており、この点で統語論的な稠密性に非常に近い性格をもった表象体系と言えるのである。

ここで指摘しておくべきは、こうした質的空間の構成基準となる類似性は、感覚者から独立な物理的世界で成り立つ類似性の単なる反映ではないという点である。たとえば、序列化の結果において同一のものとして扱われる二つの色は、それに対応する光刺激がもつ物理的性質において必ずしも同一なわけではない。条件等色 (metamerism) と呼ばれる現象では、物理的な分光分布の異なる二つの光刺激がある照明条件のもとで同じ色として知覚される。このように、対応する入射光を純粋に物理的な観点から見ると、類似したまとまりをなす色群は統一性を欠いた雑多な性質の集まりにすぎない。序列化の結果として成立する色空間は環境内にある包囲情報の単なる反映ではないのである。

しかしながら、ここで次のような疑問が提起されうる。色空間を編成する類似性関係が物理的な統一性を欠いているとすれば、それはわれわれの視覚システムが刺激に押し付けた単なる恣意的なものに過ぎないのではないだろうか。もしそうだとすれば、われわれが感覚的序列化において捉えている類似性は、実在に繋がりをもたない唯名論的なものになってしまうのではないか。

この疑問に答えるためには、色覚システムが選択されてきた進化の歴史に訴えるのが有効である。上述のように、ほとんどの哺乳類の色覚システムは二色型であるのに対し、ヒトを含む旧世界ザルの視覚システムはおおむね三色型である。これは、旧世界ザルが新世界ザルと分岐してゆく過程で、それまでの二色型の色覚システムに加えて、新しい三色型の色覚システムを獲得したためであると考えられる。ヒトの網膜には中心窩付近に三種類の錐体細胞 (cone cell) が存在している。これらの錐体細胞はそれぞれ異なる長さの波長に対して反応のピークをもっており (長波長に感受性をもつ L 錐体、中波長に感受性をもつ M 錐体、短波長に感受性をもつ S 錐体の三種類)、組み合わせられることで色覚の基礎をなすと考えられている。古いサブシステムは S 錐体と L 錐体 + M 錐体の活動の差分を情報として受けとる小重層状神経節細胞 (small bistratified ganglion cell) によって、新しい

サブシステムは L 錐体と M 錐体の活動の差分を情報として受けとる小型神経節細胞 (midget ganglion cell) によって担われている。こうした分離は視覚経路におけるより下流の階層においても維持されており、前者は外側膝状体の顆粒細胞層 (konio cellular layer) を、後者は小細胞層 (parvocellular layer) を経由し、それぞれ視覚皮質の異なる層へ投射している。古いサブシステムは長波長が強い短波長が強いという波長分布の特性を検出するものであり、主観的には寒色／暖色の区別に相当する色の序列化を行う。こうした古いサブシステムに新しいサブシステムが加わることで、ヒトは赤、緑、黄、青といった色相に対応する知覚経験をもつことができるようになる。

ここで重要なのは、こうした新しいサブシステムは、それを備えた個体が生存上で優位に立つように形成されてきたという点である。では、新しいサブシステムはどのような適応上の価値をもっているのだろうか。霊長類における三色型色覚の進化について、モロンらのグループは「旧世界ザルの色覚は環境のなかで果実を効率的に見分けるという機能を有している」という仮説を提唱している (Regan et al., 2001)。旧世界ザルは樹上生活を行うなかで、栄養価の高い果実を主な食糧の一つとしていた。しかし、遠くの樹木に生る果実を視覚的に捉えるためには、輝度の異なる無数の葉のあいだに隠れた果実を検出する必要がある。この問題を解決するためには、果物と葉のあいだの対比を最大化し、葉同士のあいだの対比を最小化することで、生い茂る葉を背景として果物が「ポップアウト」するような色覚システムを備えることが望ましい。旧世界ザルが備えるに至った新しいサブシステムは、まさにこうしたタスクをこなすために最適化された——こうしたタスクをこなす上でもっとも適した類似性関係を与える——システムであると考えられる。実際、新しいサブシステムに機能異常を抱えた知覚者は、色の識別を必要とする多くのタスクをこなすことができるにもかかわらず、斑点の集まりから構成された背景のなかで小さな標的を見出す能力には問題が生じることが知られている。これはわれわれの祖先が暮らしていた環境に適応するために必要とされた能力である。

このように、われわれの色空間の構成基準である類似性関係は、過去の自然選択における生存上の要請によって規定されている。こうした色覚システムを備えることで、われわれ（の祖先）は自らの生存にとって有益な環境内の対象（栄養価の高い食物）を効率よく獲得することが可能になったのである。もちろん、進化の歴史は非常に複雑であり、果実の検出という単一の選択圧によってわれわれの色空間を構成する類似性関係が全面的に規定されたわけではないだろう。しかしながら、以上の論述は、そうした類似性関係が感覚システムの側による恣意的な決定の産物でもなく、また、純粋に物理的な観点から規定可能な類似性関係の単なる反映でもないという論点を浮き彫りにしている。色の類似性は、物理的にその実在性を特定することができるものではないと同時に、唯名論的にその実在性を否定しえるものでもない。色の類似性は進化論的に特定可能な基盤を有しており、その意味において実在的であると言えるのである。

### 3. 6 初期視覚による命題的内容の形成

前節と本節では、初期視覚システムの役割に関する二つの理論、すなわち視覚的指標理



論と感覚的分類理論を取りあげ、それぞれを知覚の命題的構造における主部と述部に相当するものを付与するメカニズムを描き出したものとして説明してきた。以上で示したモデルによれば、視覚の初期過程は次のような役割を演じていることになる。まず、ある（複数の）視覚的対象に対して指標づけがなされることによって対象ファイルが作成され、次に、そのなかへ感覚的分類の結果が統合されることで概念的内容が成立し、最後に、その内容が意識経験へと伝えられることで知覚的判断が可能となる。

それらが描き出している感覚処理過程を記号的に表現するならば、指標による直接指示の段階は  $\text{File}(\emptyset)$  と表現でき、感覚的分類の段階は  $\text{File}(p, q, r \dots)$  と表現できるだろう（“File” はある感覚的対象に対応する対象ファイルを、“ $p, q, r \dots$ ” はそのファイルに含まれる、当該対象のもつ分類処理ないしは序列化処理を施された感覚的性質を意味する）。知覚経験を構成する原初的な命題的構造の基本形式は、この  $\text{File}(p, q, r \dots)$  のようなものであると考えられる。われわれは意識経験に与えられたこの対象ファイルをもとに、さまざまな仕方で知覚判断を構成することができる。たとえば、指標を利用してその感覚的対象を直示し、その対象のもつ性質のうちの一つを利用することで、対象を主部とし、その性質を述部とする、「これは  $p$  である」という判断を行うことができる。また、それらの対象および性質は合成可能な要素として個別化されており、他の様々な要素と組み合わせられることで別の判断へと合成されうる。以上で示した知覚経験および知覚判断のモデルは、経験や判断におけるもっとも原初的な段階の構造に関わるものであり、さらに発展した経験や判断の基礎としての役割を果たすと考えられる。

以上の議論が正しいとすれば、知覚経験は命題的に構造化されており、かつ、その内容は一般性を備えた概念的なものであるということになる。これは、マクダウェルやブリュワーの論証とは異なる理路を通じて、内容概念主義に対する直接的な論証を与えるものである。この論証は内容概念主義に経験的な基盤を与えるものであり、その意味において、本章で提示された見方を「自然化された概念主義」と呼ぶことができるだろう。知覚に関して現代の経験諸科学が呈示している枠組みは、内容概念主義のもとでこそ適切な解釈を与えることができるのである。

しかしながら、以上の論述では、知覚経験の内容が一般性を備えたタイプのなものであることは示されているが、それがフレーゲ的な意味での概念的内容であることは十分には示されていない。次章ではまず、以上のモデルが第一章で挙げた概念性の四つの基準を満たすことを示し、それがフレーゲ的内容として認められるということを論じる。次に、自然化された概念主義の観点から、第一章で記述した非概念主義を支えるとされる七つの論拠について批判的な検討を行う。最後に、本節第四項で言及した「知覚経験の原初的な主部をなすのは位置か対象か」という問いに対して考察を行う。

## 第六章 自然化された概念主義の擁護

### 第一節 自然化された概念主義とフレーゲ的内容

第一章で挙げた概念性の基準とは、(1) 合成性、(2) 認知的意義、(3) 指示決定性、(4) 力からの独立性、の四つであった。以下、自然化された概念主義という見方がこれらの基準のそれぞれを満たすということを論じよう。合わせて、自然化された概念主義がマクダウェルやブリューワーによる理由付与関係に関する要請をどのように扱いうるかも検討する。

#### 1. 1 合成性原理

まずは(1) 合成性原理である。合成性原理によれば、ある内容の構成要素が概念として認められるためには、その構成要素は当該の内容以外の様々な内容において現実化されるのでなければならない。感覚的分類理論の見方によれば、知覚経験の内容は未分節なものではなく、感覚クラスとして抽出されたものである。抽出された内容は並列的な処理の結果として形成され、空間的注意の働きによって関連する対象ファイルへと統合される。こうして統合された内容はすでに分節化を施されたものであるため、判断によるさらなる概念化を経ずとも他の内容の構成要素と合成されうる。それゆえ、自然化された概念主義の見方は知覚経験の内容が合成性原理を充足するものであることを含意する。

ただし、ここでいくつかの注釈を加えておく必要がある。感覚的分類理論によれば、ヒト以外のさまざまな生物種も、それぞれの感覚システムによって包囲情報から感覚クラスを抽出するという活動を行っている。だが、これらの生物種がもつすべての知覚状態に合成性原理が適用しうるわけではない。合成性原理が適用可能であるためには、当該の生物は、第一に、分類活動の結果を統合して命題的構造を構成するという操作を行うことが可能でなければならない。そして第二に、知覚状態の内容を他の内容と合成するという操作を行うことが可能でなければならない。第一の論点は、当該の生物種が空間的注意のような情報の収集ないしは統合を担当するシステムを有しているか否かという問いとして理解することができる。これは本質的に経験的な問いであるが、少なくとも、こうしたシステムはヒトだけに限られるものではない。たとえば、多対象追跡実験はマカクザルに対しても行われている(Mitchell et al. 2007)。第二の論点は、感覚システムによる分類結果が身体的な運動反応を司る効果器システムに直接利用されるのではなく、それら二つのシステム間に分離が生じている必要があるということを含意する。一部の生物種では、感覚システムによる分類結果は一対一対応で直接的に効果器システムと結びつき、その速やかな駆動を引き起こす。たとえば、カエルが餌を捕えるために行う舌伸ばしは、視界に適切な条件を満たす刺激が入力されたならば自動的に引き起こされる。マッテンはこのような内容を「強制的内容 (coercive content)」と呼ぶ(Matthen 2005a, p. 236)。より「高等な」生物においても、脊髓反射など、一部の感覚システムにおける情報状態はこのような強制

の内容として身体的反応を引き起こす。しかし、そうした生物がもつ他の感覚システムによる分類結果は、一対一で特定の反応を引き起こすのではなく、異なる多数の行為に利用されうる。この場合には、感覚システムは対応する効果器システムを直接制御するのではなく、しかじかの状況が成立したという信号を伝達し、どのような行為が適切ないしは必要かの決定を他のシステムに委ねることができる。こうした場合の内容は「非強制的内容 (non-coercive content)」と呼ばれる (Matthen 2005a, p. 237)。強制的内容は特定の効果器システムを直接操作するものであるのに対し、非強制的内容はそうした指令的操作からは距離を置き、感覚処理の結果に対するある種の「待機時間」を導入するものである。感覚内容が合成的操作を被りうるものであるためには、少なくともそれがこのような非強制的内容として感覚システムにおいて表示されうるものでなければならない。加えて、合成性原理を満たすためには、非強制的内容は単なる運動行為 (motor action) だけではなく認識行為 (epistemic action) の入力としても働きうるものでなければならない。マッテンは、ヒトの視覚システムが色を利用して行いうるさまざまな認識行為を挙げている (Matthen 2005a, p. 230)。それらのなかには、「帰納のためにいろいろな事物と一緒に分類すること」「今見ている事物を前に見た事物と再同定すること」「視覚的光景を色に従って図と地に分離すること」「色を手がかりに特定のタイプの事物を探索すること」「見た目の色によってある部分と別の部分を同じ事物に帰属させること」などが含まれる。これらは複数の色の知覚表象を利用して何らかの合成的な操作を行うものである。こうした認識行為は言語のみを通じてしか行うことができないものではないが、ある程度高等な生物においてのみ実行可能な操作であると考えられる。

合成性原理を満たすためには、以上のように、感覚分類システムの表示する内容が、(1) 非強制的なものであり、(2) 命題的構造をもたらすシステムによって統合されうるものであり、(3) 認識行為による操作の対象となりうるものでなければならない。どの生物種のどの感覚システムがこうした条件を満たすかは経験的な問題であるが、少なくとも成人が有する知覚経験に関わる感覚システムはこれらの条件を満たしている。それゆえ、自然化された概念主義においても、われわれの知覚経験は合成性原理を満たすと主張することができる。

## 1. 2 認知的意義の原理

では、(2) 認知的意義の原理についてはどうだろうか。認知的意義の原理によれば、ある内容が概念的であるためには、当該の内容は「意味 (Bedeutung)」のレベルではなく「意義 (Sinn)」のレベルで個別化されるのでなければならない。これは、当該の内容の構成要素が何らかの提示様式というかたちで知覚者に与えられるということを含意する。

この認知的意義の原理が特に重要であるのは、この原理を満たすかどうかによって、当該の内容がフレーゲ的内容かそれ以外の内容 (たとえばラッセル的内容) かが左右されるからである。前章で論じたように、マクダウェルやブリューワーによる概念主義の論証は、必ずしも知覚経験の内容がフレーゲ的なものであることを十分説得的に示していない。なぜなら、それらの論証は、知覚経験の内容がラッセル的なものであるという可能性を完

全には排除しえていないからである。それゆえ、内容概念主義の直接的な論証を構築するためには、自然化された概念主義の見方が認知的意義の原理を満たすことを説得的に示す必要がある。

感覚的分類理論によれば、知覚経験の内容は感覚システムと独立に成立している包囲情報の単なる反映ではない。それは包囲情報をそれぞれの生物種や生物個体に相対的な仕方で分類処理した結果である。ここで、マッテンによる一次感覚内容（primary sensory content）と二次感覚内容（secondary sensory content）の区別を導入しよう。

一次感覚内容：

感覚状態の一次内容は、その状況が何らかの行為（群）に適しているということである。その行為は進化によってその状態に結びつけられたものである。そうした行為は認識行為を含んでいるかもしれない。（Matthen 2005a, p. 233）

一次感覚内容は知覚者自身の観点から捉えられた内容である。二つの互いに識別不可能な一次感覚内容は行為において同一の仕方で扱われる。そうした行為には、特定の身体的動作をとまう運動行為だけでなく、上述のような認識行為も含まれる。「知覚状態はアフォーダンス——そこには特に認識的アフォーダンスが含まれる——についての情報を提供する」（Matthen 2005a, p. 233）。感覚状態の一次内容は、その状態に対して結びつけられた運動行為ないしは認識行為に対するアフォーダンスを提供するのである。われわれの知覚経験の内容が個別化されるのはこの一次感覚内容のレベルにおいてである。マッテンはこれに加えて感覚状態の二次内容を次のように定義する。

二次感覚内容：

感覚状態の二次内容は、関連する行為が遂行されることが機能的に適切であるような、物理的に特定可能な環境状況である。（Matthen 2005a, p. 233）

二次感覚内容とは、特定の感覚状態が通常の場合に生起するような遠位的な物理的状況である。ある特定の感覚状態は知覚者の観点から捉えられる一次内容を有しており、その一次内容はそれが生起する通常の条件として必ず物理的に特定可能な何らかの二次内容と結びついている。たとえば、ある対象がもつ色の感覚的現われは一次内容であり、それに対応する表面反射特性や波長特性などは二次内容である。しかしながら、条件等色の場合のように、同じ一次内容をもつ二つの感覚状態であっても異なる二次内容と結びつくことがある。そして、それらの二次内容のあいだには物理的な観点から見出すことのできる統一性は存在していない。あるタイプの一次内容に対応する二次内容の集合は、それらの二次内容だけを見ている場合には、なぜそれらが集合をなしているのかに説明を与えることができない。それらが集合をなしているということを説明することができるのは、あくまでもそれらが同一の一次内容に対応しているという事実——進化の歴史や個体の発達を持ち出すことによって説明可能な事実——のみなのである。

感覚システムの生物種間における多様性に注目した場合には、これとちょうど逆のことを主張することができる。すなわち、ある特定の二次内容は、異なる二つの生物種がもつ色覚システムを考えた場合、それぞれ異なるタイプの一次内容と結びつくことがある。ある生物種がどのように包囲情報を分類し序列化するかは、純粹に物理的な観点からだけでは特定することができず、その生物種が形成してきた独自の進化や発達の歴史を顧みる必要がある。たとえ同一の果実を目にしていたとしても、異なる生物種はその果実からの反射光をそれぞれ異なる色空間上に写像する。その場合、一方の生物種に属する個体はその果実の色をある別の果実の色と類似しているとみなすが、他方の生物種に属する個体はそれらの色をあまり類似しているとはみなさないかもしれない。両者がもつ色覚システムは、刺激を分類する際に異なる類似性基準を用いるのであり、それらの類似性基準はそれぞれの個体がたどってきた異なる系統発生的・個体発生的な歴史に由来するのである。

このように感覚状態がもつ一次内容と二次内容を区別するならば、認知的意義の原理に関して次のように述べることができる。ある生物の感覚状態がもつ内容は、その生物の観点から行為相対的に捉えることができる一次内容と、その一次内容に対応して物理的に特定される二次内容に区別することができる。われわれが知覚経験において与えられるのは、知覚者と独立に特定可能な二次内容ではなく、二次内容をそれぞれの生物種や生物個体に特有の仕方で提示する一次内容である。たとえば、われわれが色知覚において経験するのは、特定の表面反射特性としての二次内容ではなく、その表面反射特性を特定の仕方で分類した結果としての一次内容である。それゆえ、知覚経験を個別化するところの一次内容は、対象や性質それ自体としてのラッセル的内容ではなく、それらの提示様式としてのフレーゲ的内容であるとみなすことができる。自然化された概念主義は、一次内容と二次内容の区別を利用することで、知覚経験の内容が認知的意義の原理を満たすと主張しうるのである。

ここで、一次感覚内容と二次感覚内容の区別を導入することについて次のような疑問が提起されるかもしれない。すなわち、一次内容は知覚者の観点から捉えられるものとして規定されているが、これは物理的基盤をもつ二次内容から乖離した内容概念を導入することであり、自然主義的な立場とは緊張関係にあるのではないか、というものである。この疑問に対しては次のように答えることができる。第一に、一次内容は単に主観的に捉えられるのではなく、それぞれの生物種が進化的に備えるに至った行為パターンに対して相対的な内容である。それゆえ、一次内容における内在的な違いは原理的には行動的な違いに落とし込むことができる<sup>91</sup>。これは問題となる行為が認識行為である場合にも同様である。認識行為自体は特定の運動行為と結びつくものではないが、その行為の結果（たとえば a と b を同じグループに分類したり、a と b が数的に同一の個体であると再同定したり、a と b をそれぞれ地と図に区別したりといった結果）は、その結果を利用した運動行為において何らかの違いを生じさせる。第二に、一次内容は必ず物理的に特定可能な何らかの二

---

<sup>91</sup> ただし、もしクオリア逆転のような思考実験が成立しうるとすれば、仮定上、逆転した二つの色の違いは行動的な違いに落とし込むことはできない。そうであるとしても、知覚者の観点から同時に識別可能な二つの色に関しては、その違いは必ず何らかの行動的な違いへと対応づけ可能である。

次内容に対応づけ可能であり、そうした遠位的な物理的対象ないしは物理的性質を表象しているとみなすことができる。もちろん、上述のように、ある一次内容に対応づけられる二次内容の集合には、その外延に即した特定の定義的な物理的性質が存在しない場合がある。しかし、そのことはそうした集合の個々の要素が物理的に特定可能であることを否定するものではない。この意味において、一次内容はけっして二次内容と乖離しているわけではない。以上のように、一次内容と二次内容の区別は、物理的ないしは生物学的な基盤を欠いた性質の導入を意味するものではなく、したがって自然主義的に許容可能な区別なのである。

### 1. 3 指示決定性の原理

さて、次に(3)指示決定性の原理について考察しよう。指示決定性の原理によれば、ある内容が概念的であるならば、主体はその内容の意味論的値を決定することができなければならない。第二章第六節でこの原理を扱ったときに述べたように、われわれが知覚を通じて経験するのは外界に存在する特定の個別者である。それゆえ、知覚経験の内容が指示決定性の原理を満たすということは、その内容を通じてわれわれが個別者としての知覚の対象を同定できるということを意味する。

われわれは第二章の該当箇所において、「直示的概念」というアイデアを導入することで、知覚経験の内容を概念的なものと認めながらも、それが指示決定性の原理を満足するものであることを論じた。ピリシンの視覚的指標理論は、知覚経験がもつこうした直示性という性格を実験科学のレベルにおいて明らかにするものである。視覚的指標理論によれば、初期知覚システムには視野内にある複数の対象に対して因果的に指示を行うメカニズムが備わっている。このメカニズムはコード化された性質を利用することのない非概念的な指示装置であるが、指示の行われた対象に対応したファイルを作成し、そこにコード化された性質を統合してゆくことで、知覚の概念的内容に対して直示的要素を与えるという役割を果たす。このように、視覚的指標理論を組みこんだ自然化された概念主義は、知覚の概念的内容が指示決定性の原理を満たすという主張に対して経験的な支持を与えるものである。

しかし、ここで次のような批判が提起されるかもしれない。視覚的指標理論によれば、それが指標づけを行う対象は必ずしも遠位的な物理的対象ではない。それは「視覚的指標を引きつける任意のもの」という仕方で操作的に定義される感覚的对象である。だが、われわれが知覚経験において通常指示しているのはまさしく外界に存在する物理的対象としての個別者である。だとすれば、視覚的指標のメカニズムは視覚経験の内容がもつ指示決定性を保証していないのではないか。

この批判に答えるためには、感覚的分類理論を経由して以下のような補足説明を加えることが有効である。感覚的分類理論によれば、知覚経験の内容は感覚システムが入力情報に対して捨象による分類処理を繰り返し行った結果である。それが神経処理に基づいている限り、視覚的指標理論における対象の抽出も基本的には同様の操作を経て行われる。だが、これは物事を単純化した説明に過ぎない。感覚システムが行っていることは、より適

切には、入力情報に基づいて遠位的環境について行われる可謬的推測 (fallible conjecture) であると表現されるべきである (Matthen 2005b, p. 219)。

感覚システムが行うこの可謬的推測についてももう少し詳しく述べよう。神経処理の出発点となる視覚的に利用可能な情報は、網膜上における二次元の神経発火パターンとして与えられる。しかし、われわれが最終的に身体的な行為によって働きかけるのは、網膜上の近位パターンではなく、外界にある三次元的な遠位的対象である。それゆえ、われわれは単に入力情報を分類するだけではなく、そこから適切な処理を経て遠位的な光景を推測しなければならない。ところが、近位的な網膜像は無数の遠位的な光景から写像されうするため、前者から後者を復元するという計算は解が一意に定まらない不良設定問題となる。にもかかわらず、われわれの知覚経験はほとんど常に特定の遠位的な光景を一意的に提示している。感覚システムはこの不良設定問題を何らかの仕方では解決しているのである。では、どのようにその解決は図られているのだろうか。

この不良設定問題を解決するためには二つの方法がある。一つの方法は、われわれが生活している環境において比較的恒常的に成り立っている条件を、知覚システムが利用可能な背景的な前提として——進化の過程を通じて——計算過程に組み込むというものである。たとえば、われわれの祖先が生存してきた地上環境においては、通常、照明は太陽光というかたちで上方から降り注ぐ。こうした条件下では、物体の陰影はその凹凸に応じておおむね特定の方向に形成される。それゆえ、感覚システムはこうした陰影のパターンを立体知覚を行う際に利用することができる。実際、われわれは、たとえばレンズ型の物体を見るとき、その下側に影があると凸、上側に影があると凹に見えるという強い傾向性をもっている<sup>92</sup>。これは、陰影と物体の凹凸に関して恒常的に成立している関係を暗黙的な背景知識として計算に組み込んでいるためであると解釈できる。こうした背景知識は、入力情報から得られる前提と組み合わせられることで、解を一意的に収束させる役割を果たす。もう一つの方法は、こうした条件を背景知識としてではなく計算に対する制約として組み込むというものである。すなわち、ある前提から論理的に導出可能な無数の解のうち、当該の条件と整合的な解以外のものを計算システムに対して端的に利用不可能にするという制約である。マーはこうした制約を自然的制約 (natural constraint) と呼ぶ (Marr 1982)。われわれの知覚システムが背景知識と自然的制約のいずれを利用しているにせよ、それは入力情報に対する単なる分類処理を行っているのではなく、遠位的対象がどのような在り方をしているかに関して無意識的な推測を行っているという解釈することができる。このような推測はつねに正しい結果をもたらすわけではなく、通常と異なる条件下では誤ることがある。しかし、それが誤りうるものであるのも、そうした推測が遠位的な対象の検出をその機能としているからである。

われわれの感覚システムが遠位的対象の検出をその機能としているということにはさまざまな証拠を挙げることができるが、ここでは視覚処理の入り口の段階ですでにそうした検出作業が始まっているということを指摘しておこう。たとえば、われわれが生活する環境においては、ほとんどの遠位的対象はその広がりや位置を規定する輪郭線によって他の

---

<sup>92</sup> この傾向は「クレーター錯視」と呼ばれる錯覚図形の知覚に顕著に表れている。

対象と識別される。それゆえ、輪郭線を検出することは対象を検出するための重要な手が必要となる。視覚的光景のなかから輪郭線を検出するためには、そのなかの隣接する二つの部位におけるコントラストを弁別する必要がある。多くの生物の網膜における視細胞には、コントラストの弁別を容易にするためのコントラスト増強という機能が備わっている。これは隣接する視細胞の活動を抑制する「側抑制 (lateral inhibition)」というメカニズムをその神経基盤としている (Kandel et al., 2012, pp. 592-593)。強い光の当たる面と弱い光の当たる面の境界によって輪郭が作られているとしよう。強い光の当たっている細胞は強く活動し、隣接する細胞に対する抑制も比較的強くなる。反対に、弱い光の当たっている細胞は弱く活動し、隣接する細胞に対する抑制も比較的弱くなる。このとき、境界近くの強い光の当たる細胞は、隣接する弱い光の当たる細胞から弱い抑制しか受けないため、同じように強い光の当たっている他の細胞よりも強く活動する。逆に、境界近くの弱い光の当たる細胞は、隣接する強い光の当たる細胞から強い抑制を受けるため、同じように弱い光の当たっている他の細胞よりも弱く活動する。この仕組みによって、コントラストは実際のものよりも強調され、後続する処理によってより弁別されやすくなる。

このように、われわれの視覚システムは視覚的に利用可能な情報から物理的な遠位的光景を推測することをその基本的な機能としていえると考えられる。初期視覚における対象抽出が同様にこのような推測によるものであるとすれば、視覚的指標メカニズムも遠位的な物理的対象を抽出することをその機能としていえることが理解することができる。確かに、それはしばしば遠位的な物理的対象以外の刺激に対しても指標を配分することがある。しかし、そうした事例は当該のメカニズムが遠位的な対象抽出をその機能とするという見方を損なうものではなく、単にそれが誤作動ないしは副次効果を起こしているということを示しているにすぎない。それゆえ、視覚的指標メカニズムは、視覚経験の内容に対して外界の物理的対象への指示決定性が成立することを、それがもつ対象抽出という機能によって保証することができるのである。

#### 1. 4 力からの独立性の原理

最後に、(4) 力からの独立性の原理について考察しよう。力からの独立性の原理によれば、もしある内容が概念的であるならば、その内容は力とは独立に個別化されうるものでなければならない。第二章第六節で確認したように、マクダウェルは「知覚内容を享受すること」と「享受した知覚内容に対して何らかの態度をとること」とを区別している。知覚経験の内容はそれに対してどのような態度が付与されるかは独立に享受される。知覚経験はその内容に対する力の付与とは独立に成立するのである。

本章で描いた自然化された概念主義はこれと整合的な見方を与える。自然化された概念主義によれば、知覚経験の概念的内容は初期知覚システムによって形成される。初期知覚システムにおける分類活動は自動的に行われるものであり、知覚者の意のままにならないという意味において受動的なプロセスである。この受動的なプロセスは認知システムと比較的独立に働き、後者が態度決定を含む認識行為を行うための内容を提供する役割を果たす。このように、自然化された概念主義はマクダウェルによる区別を受容しうるものであり、



したがって、力からの独立性の原理を満たすことができるのである。

以上のように、自然化された概念主義においては、知覚経験の内容は概念性の四つの基準をすべて満たすことができる。それゆえ、自然化された概念主義に対する本章の議論を通じて、われわれは内容概念主義に対する直接的な論証を得ることができるのである。

## 1. 5 感覚的概念と言語的概念

マクダウェルとブリューワーの論証によれば、知覚信念と知覚経験のあいだには理由付与関係が成立していなければならない。理由付与関係の関係項となるためにはその内容は概念的でなければならない。それゆえ、知覚経験は概念的内容を備えていなければならない。自然化された概念主義はこの理由付与関係に対する要求を満たすことができる。マッテンはこの点について次のように述べている。

感覚的分類理論は感覚が命題的であると主張するものであり、それゆえ、〈感覚経験によってわれわれに提示される感覚的特徴〉と〈結果として得られる信念に現われる概念〉とのあいだに合理的に緊密な関係が構築されうることが踏まえるならば、〔いかにして感覚経験は何かを信じる理由を与えうるかという〕懸念に応答しえているように思われる。(Matthen 2005a, pp. 80-81)

自然化された概念主義によれば、知覚経験は信念と同じ種類のフレーゲ的な概念的内容を備えているのであり、それゆえ、しかるべき信念に対して理由を与える役割を担うことができる<sup>93</sup>。しかしながら、マクダウェルやブリューワーの概念主義と自然化された概念主義とのあいだには無視しえない相違点も存在している。

自然化された概念主義によれば、概念的内容を備えた知覚経験をもちうるのは人間主体のみではない。人間のように分節化された言語をもたない他の動物であっても概念をもつことができる。ただし、そうした動物は言語的概念 (linguistic concept) を備えておらず、それゆえ知覚経験を理由として言語的に表現することができない。だがしかし、マッテンは、そうした動物であっても感覚的概念 (sensory concept) というかたちで概念を備

---

<sup>93</sup> ブリューワーは『知覚とその対象』(Brewer 2011)において、「知覚経験とは、世界の在り方を表象することではなく、物理的对象それ自体と接触すること (acquaintance) である」として、知覚に内容を認める従来の概念主義を放棄し、知覚に内容を認めない「対象説」という立場を展開している。そして、対象説の立場から『知覚と理由』で行った理由付与関係に関する考察に反省を加えている。対象説によれば、知覚的知識の基礎づけにおいて中心的な役割を担うのは、経験と判断のあいだの推論関係ではなく、物理的对象との知覚的接触に基づいて行われる、その対象に対する「概念適用 (concept application)」である。「心から独立な特定の物理的对象が知覚的に提示されることは、判断において特定の経験的概念を適用することの正しさに対する理由を構成するところの、まさにその事物との意識的な接触を与える」

(Brewer 2011, p. 158)。知覚経験は特定の仕方で物理的对象との接触を可能にすることで、その対象に対してどのような概念を適用すべきかの理由を与える。しかしながら、自然化された概念主義によれば、ある対象に対する概念適用は、主体の制御の下で能動的に行えるものではなく、感覚的分類メカニズムの働きによって自動的に行われる。意識経験に提示されるのはその結果としての概念的内容である。それゆえ、少なくとも基本的な感覚的概念に関して、対象への概念適用は理由に基づいて行われるものではない。

えることが可能であると主張する。マッテンによれば、動物がある感覚的性質について次のような知覚的把握 (perceptual grasp) を行っていると認められるならば、その性質を一般性をもった感覚クラスとして扱っているとみなすことができる。

知覚的把握：

生物が感覚的性質 **F** を知覚的に把握しているのは、**F** である事物が現われているときには行使されるが、**F** でないという点においてのみその事物と異なる別の事物が現われているときには行使されないような、何らかの (学習された、ないしは生得的な) 行動パターン **B** が存在するとき、かつそのときに限る。(Matthen 2005a, p. 79)

ある生物が性質 **F** をこの意味で知覚的に把握しているとき、当該の生物はその特定の性質 **F** に関して感覚的分類を行っているとみなすことができる。もしその生物が当該の性質を (1) 非強制的で、(2) 命題的構造をもった、(3) 認識行為による操作の対象となりうる内容として所有しうるならば、当該の性質は感覚的概念として認められることになる。たとえその概念を理由付与というかたちで言語的に表現することができなくとも、当該の動物は真正な意味において概念を所有していると言えるのである。

これに対して、マクダウェルやブリューワーは動物がこのように真正な意味で概念を所有しうることを認めない。たとえば、第二章第四節で述べたように、マクダウェルは概念を「理由への応答性」によって規定しており、その規定が理性的動物と非理性的動物という伝統的な区分に沿うものであると述べている。しかし、理由付与に関する彼らの要請は、「もしある主体が知覚信念を有しているならば、それに対して知覚経験によって理由が与えられるのでなければならない」というものであり、この要請自体には人間以外の動物における概念所有を禁じるものは何もない。むしろ、自然化された概念主義の立場からすれば、「感覚的性質に関する言語的概念は、それに対応する感覚的概念から形成の端緒を与えられる」と考えることができる。

ここで提示している説明〔感覚的分類理論〕は、思考のなかのある概念の内容が、知覚者の「自発的」制御の外側にあるサブパーソナルなシステムの作動から供給されるということを示唆する。感覚的分類理論によれば、色によって事物进行分类するための諸原理は、知覚者による意識的制御の外側にあり、「事物がしかじかの色をしている」という知覚者の信念はこのサブパーソナルに課せられた基準に従う。(Matthen 2005a, p. 81)

この引用でマッテンが述べているように、ある事物の色が赤概念の外延に属するか否かは、その色を感覚システムがどのように色空間のなかで序列化するかに依存している。感覚的分類の結果が (われわれの言語において) 「真っ赤」と呼ばれる色を表示しているならば、当該の知覚者はそれを青概念や緑概念に属していると信じることはできない。知覚者がある母語共同体に参入することで身につけてゆく言語的概念は、感覚的概念に由来するかた

ちで獲得され、それによって制約され続けるのである。

もちろん、このことは言語的概念が知覚者の自発性によって改訂される自由を有していることを否定するものではない。たとえば、ある言語がどのような色彩語彙を備えているかは文化ごとに大きな違いがある。日本語のように数百個の色名を備えている言語もあれば、「薄い」と「濃い」の二つしか色彩語彙が存在しない言語もある<sup>94</sup>。また、われわれは色に関する日常的・科学的な知識を加えることで、色の言語的概念を感覚的概念の内容を越えて豊かなものにしてゆくことができる。そして、こうした豊かな内容に関する言語的教示を通じて、色覚異常のゆえに色の感覚的概念を所有しえない知覚者であっても、色覚異常のない他の知覚者と比べて遜色のない言語的概念を獲得することもできる<sup>95</sup>。

このように、感覚的概念とそれに対応する言語的概念はその内包や外延において必ずしも一致してはいないが、それでもなお両者のあいだには密接な連関が存在している。言語的概念は感覚的概念に由来するとともに、それによって制約されているのである。われわれが自らの知覚信念に対して理由付与を行うことができるようになるのは、感覚的概念に基づいて言語的概念を身につけ、しかるべき発達過程を経て理由の空間のなかに参入することによってである。だが、理由の空間の外側にいる知覚者であっても、適切な感覚システムを備えているならば、概念的な内容をもった知覚経験をもつことができる。以上のように、自然化された概念主義は、言語的概念のみではなく感覚的概念にも市民権を与えることで、人間とそれ以外の動物のあいだに断絶を設けることなく、両者の連続性と差異性を同時に認めることができるのである<sup>96</sup>。

## 第二節 非概念主義への応答

以上で論じたように、自然化された概念主義が描く知覚経験は概念性の四つの基準を充足する。それゆえ、自然化された概念主義は知覚経験がフレーゲ的な内容をもつという見方に対して直接的な支持を与える。では、自然化された概念主義は、第一章第三節で導入

<sup>94</sup> しかし、どの言語の話者であっても、「青らしい青」や「緑らしい緑」といった焦点色に関しては学習や再認が容易であることが知られている（Rosch 1973）。これは、色に関する感覚的序列化に文化間で一定の生得的な共通性があることを示唆するものである。

<sup>95</sup> ただし無論、そうした知覚者は色に関する知覚判断を行うことはできない

<sup>96</sup> このように、自然化された概念主義は経験内容が概念的なものであることを科学的知見に基づいて論証することで、マクダウェルによる「経験から信念への合理的制約」という要請を満足することができる。しかし、この見方はマクダウェルが避けようとする「露骨な自然主義（bald naturalism）」に陥っているのではないかという疑問が呈されるかもしれない。露骨な自然主義とは、「理由の論理空間を構成する規範的關係は、自然の論理空間を住处とする概念的素材から再構成できる」（McDowell 1996, p. xviii）と考える立場——典型的には、理由の空間の独自性を認めず、それを法則の領域に還元しようとする立場——である。本論の提起する立場は自然主義的なものであるが、この意味において還元主義的なものではない。本論が行っているのは、概念的内容そのものを何らかの非概念的な要素へと還元しようとする試みではなく、概念的内容の諸基準——これ自体は哲学的探究を通じて見出される——を経験が満たすことを、科学的探究の成果に対する反省を加えながら論証するという試みである。これは理由の空間を構成する關係性をその独自性を認めることなく他の何らかの關係性へと安易に還元しようとするものではない。ただし、本論はマクダウェルの科学的探究一般に対する冷淡とも言える態度を共有するものではない。

した、非概念主義を支持するとされる七つの論拠に対してどのように応答することができるだろうか。当該箇所述べたように、これらの論拠に対して適切な応答を展開できるかどうかは、自然化された概念主義が成功しているかどうかにとって試金石となる。以下、それぞれの論拠について検討を行っていこう。

## 2. 1 動物や幼児の知覚からの論証

まずは動物や幼児の知覚からの論証である。非概念主義者によれば、概念をもたない動物や概念を獲得していない幼児も概念をもつ成人と同じ種類の知覚内容をもつことができる。それゆえ、こうした連続性が成立するためには、知覚経験の内容は非概念的でなければならない。

自然化された概念主義からの応答を検討する前に、この問題に対してマクダウェルがどのような対処を行っているかを確認しておこう。マクダウェルは、幼児および動物と成人とのあいだに知覚内容の連続性が存在することを否定する。そうすることで、マクダウェルはそれらの主体のあいだに共通の種類の経験内容を認めるべきとする想定を掘り崩すのである。

われわれは単なる動物も有しているもの、すなわち自身の環境の諸特性に対する知覚的感性 (perceptual sensitivity) をもっているが、それを特別な形態においてもっている。自身の環境に対するわれわれの知覚的感性は、動物とわれわれとを分かち自発性の能力の領域へと組み入れられている。(McDowell 1994, p. 64)

ここでマクダウェルは、成人の知覚と動物および幼児の知覚とのあいだに受容性という「能力」の共通性を認めつつも、「内容」の共通性を否定している。成人も動物および幼児もともに感性的能力を有しているが、成人においては受容性が自発性との協働においてその内容を形成するがゆえに、成人は動物および幼児とは異なる概念的内容を知覚の内容とするのである。

自然化された概念主義の立場は、マクダウェルの対処とは異なり、動物や幼児が非概念的内容を有しているという前提を否定する。動物や幼児は確かに言語的概念を有しておらず、それゆえ理由を与えるという活動を行うことはできないが、そのことは動物や幼児がいかなる概念をも有していないということを含意するものではない。上述のように、一定の条件を満たすならば、われわれは動物や幼児が感覚的概念を有しており、それゆえ概念的な知覚内容を有していると認めることができる。成人の場合には、この感覚的概念に基づいて言語的概念を習得することで、信念に対する理由付与の場面で知覚経験を援用することができるようになる。このように考えることで、自然化された概念主義は、成人と動物および幼児とのあいだに知覚内容における連続性を認めつつも、同時にそれが演じる理由付与の役割における非連続性を認めることができる。自然化された概念主義は、連続性に関する非概念主義者たちの直観を満たすとともに、マクダウェルらの非連続性に関する要請も満たすことができるのである。

## 2. 2 知覚の肌理細かさからの論証

われわれはすでに前章の第二節において、自然化された概念主義の立場から知覚内容の肌理細かさの問題にどのように応答しうるかについて検討を加えておいた。感覚的分類理論によれば、われわれの感覚分類システムは多くの可感的性質について、それを二値的に分類するのではなく、肌理細かな質的空間のなかに序列化する。このような序列化処理の結果を享受することで、感覚経験は肌理細かな内容を表象しうるようになるのである。

しかしながら、非概念主義者からはさらに次のような疑問が提起されうる。確かに、知覚システムがこのような序列化を行っているとするれば、知覚経験が概念的内容を有していると認めながら、同時に肌理細かな内容を備えていると考えることができる。だが、エヴァンズやヘックが指摘しているように、われわれは自らが経験する色合いのすべてを規定可能な色彩語彙を備えてはいない。われわれには知覚の肌理細かな内容を捉えるための「記述的資源」が欠如しているのである。だとすれば、感覚的概念は言語的概念によっては十分に規定可能でないということになる。両者のあいだにこのようなギャップが存在するとすれば、たとえ感覚的概念をある種概念として認めうるとしても、それと言語的概念と同じ種類の概念であると認めるのは困難になるだろう。

この疑問に対して、自然化された概念主義からは二つの応答を行うことができる。

第一に、マクダウェルが行っているように、概念のなかに色彩語彙によって表すことのできる一般概念だけではなく、「あの色合い (that shade)」のような「直示語＋種名辞」によって表すことのできる直示的概念を含めるという戦略である。

色彩のもつ色合いという概念を習得することは可能であり、われわれのほとんどはそれを習得している。[...] それを習得することで、人は色合いを視覚経験において示されるのとまさに同じ規定性をもって自身の概念的思考へと包含する能力を身に付けるのであり、それゆえ、概念は経験が示すものと同じ鋭敏さにおいて色彩を捉えることができる [...]。概念の力を超越すると称される経験——しかるべきサンプルを提供すると仮定されている経験——に浴することで、人は提示されたサンプルを利用する直示語を含んだ「あの色合い」のような句を発話することによって、経験とまさに同じ肌理細かさをもつ概念に対して言語表現を与えることができる。(McDowell 1994, pp.56-57)

直示的概念を用いた思考がどのような内容をもつかは、知覚者が直示する実際の例化された性質に依存している。マクダウェルによれば、直示的概念を用いることで知覚者は知覚経験と同じ肌理細かさをもった内容を思考へと包含しうる。なぜなら、直示的概念は知覚的直示によって規定されるため、それによって知覚的に識別可能なあらゆる色合いを思考へともたらしうることができるからである。視覚的指標理論によれば、知覚経験の内容には指標の働きによってもたらされる直示的要素が含まれている。言語的概念は、感覚的概念に含まれるこうした直示的要素を利用することで、感覚的概念をあますところなく規定することができるのである。

第二に、われわれが知覚経験の内容を規定するために利用可能な記述的資源は、色彩語彙などの一般概念や、マクダウェルが導入した直示的概念だけに限られない。われわれは序列化された二つの色合いのあいだの相対的な位置関係を指定するためのさまざまな語彙を備えている。たとえば、「この色は真っ茶色よりも少し明るい」とか、「その色はあの色に比べてより黄色っぽい」とか、あるいは「この色はその色よりもあの色により似ている」といった語彙である。こうした語彙を用いることで、われわれは序列化された空間内の任意の位置を他の位置と相対的に関連づけて記述することができる。こうした記述をわれわれが行うことができるのは、感覚システムが色空間への序列化によって色同士のあいだの類似性関係をわれわれに告知してくれるからである。それゆえ、われわれは感覚システムが弁別しうる限りの肌理細かな内容をこうした比較を与える記述によって掬いとることができる。

以上のように、言語的に利用しうる記述的資源のなかに、名辞によって表される一般概念だけではなく、直示的概念や比較を与える概念を組み込むならば、われわれは言語的概念と感覚的概念のあいだにギャップが存在するという疑念を鎮めることができるのである。

## 2. 3 知覚の改訂不可能性からの論証

次に知覚の改訂不可能性からの論証である。クレインによれば、知覚経験の内容は信念の内容とは異なり証拠に対する改訂可能性をもたない。このように知覚が改訂不可能であることは、その内容が非概念的なものであることを強く示唆する。

このクレインの主張に対して、自然化された概念主義は次のように応答することができる。知覚が改訂可能性をもたないのは、それが「受動性」という性格をもつためである。知覚に組み込まれた感覚的概念は、思考における言語的概念とは異なり、能動的に行使することはできない。知覚経験の内容はわれわれが自発性の働きによって自由に選択できるようなものではなく、その逆に、世界の側からの刺激を受けて駆動する自動的な処理によって課せられるものである。だからこそ、知覚経験は思考に対する外的制約として働くことができるのである。

たとえこのように感覚的概念が受動的にしか現実化しえないということを認めたとしても、そのことはそれが真正の概念であることを否定することにはならない。前節で論じたように、自然化された概念主義の見方においては、知覚経験の内容は概念性の四つの基準をすべて満たすことができる。それは信念とのあいだに推論関係を形成しうるような合成的な内容を備えており、それ自体は改訂可能性を欠いているとしても、その内容によって信念体系に対して改訂可能性を与えるのである。

## 2. 4 知覚の矛盾許容性からの論証

クレインは知覚の矛盾許容性という論点からも非概念主義を支持する議論を行っている。クレインによれば、「滝の錯視」はある物体が「運動している」と同時に「運動していない」という矛盾した内容をもつ。この事例に示されているように、知覚経験は信念とは異なり矛盾した内容を許容する。それゆえ、知覚経験の内容は信念とは異なる非概念的な内容を

有している。

自然化された概念主義は、滝の錯視の事例に対してクレインが行っているのとは別様な解釈を与えることができる。特徴統合理論によれば、異なる種類の感覚的性質はそれぞれ異なる特徴マップによって表象されている。こうした並列的な感覚処理において、位置情報と運動情報はそれぞれ異なる特徴マップによって担われている。たとえば、運動方向の処理に関わる MT に損傷を被った患者は、物体が占める位置を認識することはできるが、その運動を認識することができなくなる。これは視覚性運動盲（Akinetopsia）と呼ばれる。滝の錯視の事例もこのように運動情報と位置情報が乖離しうることから説明することができる（Anstis et al., 1998）。運動方向の処理を担っている細胞には多数のタイプが存在しており、それぞれのタイプはある特定の方向の運動に対して強く賦活する。これらの細胞は常時ベースラインとなる活動を行っているが、静止した風景を見ているときには互いに相殺し合っている。これらの細胞に特定方向への運動が入力されると、その運動方向を担当する細胞群はベースラインとなる活動に加えて強い賦活を示す。当該の運動が一定時間を越えて持続するとき、それらの細胞は順応した状態となり、運動が唐突に停止したときに逆にベースラインよりも活動を弱める。その結果、それらの細胞と相殺し合っていた逆方向の運動を担当する細胞群の活動が相対的に強くなり、対象が逆方向へと運動しているかのような知覚経験が引き起こされる。しかし、位置マップに関わる細胞はこれとは独立に情報処理を行っているため、物体が運動を停止して位置変化がなくなったならば、その情報をそのまま知覚経験へと伝える。こうして「位置の変化を伴わない運動」という知覚が生じると考えられる。

ここで重要なのは、それぞれの特徴マップでは、それが担当する感覚的性質と無関係な情報は捨象されているということである。運動方向マップ上では位置情報は端的に捨象されており、逆に位置マップ上では運動方向情報は端的に捨象されている。それゆえ、「ある運動方向が検出されている」という知覚情報は、「位置変化が検出されている」という知覚情報を含意していない。なぜなら、前者はそもそも位置情報に関するいかなる含意も有してはいないからである。それゆえ、「ある方向への運動が起こっている」という情報と「位置変化が生じていない」という情報がある物体を主部として統合されたとしても、それぞれの情報は互いの内容について含意を有しておらず、それゆえ知覚経験の内容としては矛盾していないということになる。それらの情報が矛盾するのは、当該の知覚内容が知覚判断として信念体系に組み込まれ、「運動は必ず位置の変化を伴う」という背景知識と組み合わせられたときである。

同じような事例は他のタイプの感覚的性質に関しても生じうる。たとえば、第八章で取りあげる視覚形態失認と呼ばれる障害においては、患者は物体の色を認識できるにもかかわらずその輪郭を認識することができない。われわれの常識的な理解においては、色面は必ず輪郭を伴うため、こうした知覚経験は矛盾した内容を含んでいるように思われる。だが、知覚経験の内容という水準でみるならば、色彩と形態は互いに関する含意を伴わずに並列的に処理されており、一方を欠いて他方が成立するという事態は不可能ではないのである。

こうした事例が錯視や視覚障害といった特殊事例に限られていることから明らかなように、特徴マップ間で統合される内容は通常われわれの背景的な常識（「運動は位置の変化を伴う」や「色面は輪郭を伴う」など）に適ったものである。むしろ、ある種の経験内容を矛盾した内容にさせるそうした背景的な常識は、われわれの大部分が経験する一般的な知覚事例から導出されていると考えることができるだろう。しかし、もしそうだとすれば、そうした背景的常識は必然的なものとみなされるべきではない。知覚経験の内容において何が矛盾しているとみなされるべきかは、いわば知覚の言語の在り方を（症例研究や実験研究を通じて）検討しなければ結論できないのである。

このように、知覚経験における特徴マップ間の統合においては、われわれの常識的信念を前提とした場合に矛盾となる内容も特に矛盾とみなされることなく許容される。とはいえ、これは特徴マップ間の統合に限られた話である。同一の特徴マップ内では「知覚は矛盾を許容しないような仕方で働く」と考えるべき現象も存在する。左眼と右眼にそれぞれ異なった絵（例えば、異なった色で塗られた丸）を呈示し、焦点距離をずらすなどして双方の絵を融像する（＝絵が呈示されている左右の視野の部分を互いに重ね合わせる）と、両者が混ざったような絵が現れるのではなく、左眼に呈示された絵と右眼に呈示された絵が時間的に交互に現れる。この現象は「両眼視野闘争（binocular rivalry）」と呼ばれる。この現象の場合、両眼に与えられた異なる色情報が同時に知覚されることはなく、常に片方の情報だけが知覚され、それが交互に入れ代わる。これは、同一マップ内では同一位置における異なる色の同時呈示は矛盾したものとして抑制されているためであると解釈できる。こうした矛盾の選択的回避が他の特徴マップにおいてもグローバルに働いているかは定かではないが、少なくとも両眼視野闘争という現象は、知覚がある場合には矛盾を許容しないような仕方で働くということを示唆している。

## 2. 5 知覚の文脈依存性からの論証

ケリーによれば、知覚経験の内容の一部は文脈依存的であり、この内容は概念によって捉えられない。たとえば、色の恒常性現象において、われわれが色概念によって把握するのは、異なる照明状況下でも恒常性を呈する一様な壁面の見え方である。照明状況の違いによって生じる壁面の見え方の違いは色に関わる違いではなく、それゆえ色概念によって捉えられない。このように、知覚経験の内容には概念によって把握不可能な要素が含まれており、したがって知覚経験の少なくとも一部は非概念的である。

このケリーの議論に対しては次のような反論を行うことができる。われわれの日常的な色経験を顧みるならば、ケリーのように恒常性現象における文脈依存的な変化が色に関する変化ではないと考えるのは不自然である。たとえば、照明状況の異なる壁面上の二つの部分に対して、われわれは異なる色見本を対応させることができる。だとすれば、文脈恒常的な見え方だけではなく文脈依存的な見え方も色に関わる内容として認めるべきであろう。ケリーがこうした可能性を許容しないのは、色彩経験を一元的ないしは単層的なものとして理解していたからであると考えられる。これに対して、前章の第三節第五項で説明したように、自然化された概念主義においては、色知覚は多元的・階層的な感覚処理が統



合された結果として捉えられる。この見方によれば、知覚経験の内容には文脈恒常的な色情報と文脈依存的な色情報の双方が含まれており、それぞれは階層的な色覚システムの異なる処理段階にあるものとして位置づけられる。われわれは注意を向け変えることでいずれの情報をも主題化することができ、それぞれに関する知覚判断を形成することができる。このように、自然化された概念主義がまさにそうしているように、知覚システムにおける処理の多元性・階層性を認め、かつ、われわれの知覚経験がこうした処理を統合した結果として生じることを認めるならば、われわれは色概念に関わる経験内容を文脈恒常的なものに限定する必要はなくなるのである。

## 2. 6 記憶の概念独立性からの論証

記憶を介したマーティンの論証に対してはどのように応答しうるだろうか。マーティンによれば、マリーのサイコロ記憶の事例に示されているように、記憶の内容の一部はそれに対応する概念能力を主体が有しているかどうかとは独立に獲得されうる。それゆえ、記憶の内容の一部は非概念的であり、それに情報を与える知覚の内容の一部も非概念的である。

この論証に対しては次のような応答が可能である。このサイコロ記憶の事例では、幼いマリーは正八面体や正十二面体の概念をもっていないが、それらの形や色の違いを見てとることはできると想定されている。自然化された概念主義の見方に従うならば、ここでマリーがもっていないとされる概念とは、正八面体や正十二面体に関する言語的概念である。マリーはそれらの物体を知覚的に識別できると想定されているが、もしマリーがそれらを（前節で導入した意味において）知覚的に把握していると認められるならば、マリーはそれらに関する感覚的概念を所有しているということになる。たとえばマリーは、面を数えられるような数概念をもっていなくとも、さまざまな多面体のサイコロを面の数による各々の見かけの違いに基づいて分類することができるかもしれない。そうだとすれば、マリーが概念をもっていないというマーティンの想定は掘り崩されることになる。

マリーが成長したとき、彼女は新たに習得した言語的概念を幼き日の記憶内容に適用することで、それが正八面体（あるいは正十二面体）だったという判断を構成することができる。こうした判断が可能なもの、マリーが過去の知覚経験の段階において正八面体と正十二面体を識別する感覚的概念を備えていたからに他ならない。このように、マーティンの論証に対して、自然化された概念主義は感覚的概念と言語的概念の違いに訴えることで反論を行うことができるのである。

## 2. 7 概念の基礎づけからの論証

ピーコックによる記憶の基礎づけからの論証に対しても、自然化された概念主義は感覚的概念と言語的概念の違いに訴えることで答えることができる。ピーコックによれば、もし知覚経験が概念的内容をもつとすれば、それは知覚経験が有するとされる概念の基礎づけという役割を説明することができない。それゆえ、知覚経験の内容は非概念的でなければならない。

この議論に反して、知覚経験が感覚的概念というかたちで概念的内容をもつとすれば、われわれは知覚に非概念的内容を認めずとも、それが信念に表れる言語的概念に対して基礎づけの役割を果たすということを説明することができる。感覚的概念は初期知覚過程に備わった感覚処理システムによって形成されるものであり、進化論的な基盤を有した生得的なものである。すなわち、感覚的概念はそれ固有の特別な学習過程を経ずとも、通常の発達過程のなかで自然と身に着くのである。それゆえ、感覚的概念それ自体はさらなる基礎づけを何ら必要とするものではない。言語的概念はこの生得的な感覚的概念に由来するかたちで獲得され、それに制約され続ける。こうして形成された原初的な言語的概念はより複雑な言語的概念を習得していく際の端緒として働く。細部に関してはさらなる彫琢を必要するが、こうしたストーリーは、ピーコックが与えている非概念主義的な概念形成のストーリーに対して、概念主義と両立可能な他の選択肢を与えるものであるだろう。このように、自然化された概念主義は知覚経験が概念的内容をもつことを放棄することなく、ピーコックが求める概念の基礎づけという要求を満たすことができるのである。

以上、われわれは第一章で取りあげた非概念主義に対する代表的な論証の各々に対して、自然化された概念主義の立場からどのように応答することができるかを論じてきた。本節で示したように、自然化された概念主義はそれらの論証すべてに応じることができる。だとすれば、非概念主義に立つ論者は自らの立場を支持する別の論拠を示す必要がある。そうした論拠が示されるまで、われわれは自然化された概念主義を非概念主義に比べてより有望な理論であるとみなすことができるだろう。

### 第三節 対象基盤説と位置基盤説

本章の最後に、「知覚経験の原初的な主部をなすのは位置か対象か」という問いに対して考察を行おう。視覚的指標理論によれば、われわれの知覚経験は視覚的指標を割り当てられた対象をその述定的構造の主部とすることで成立する。また、そうした主部に対応して作成される対象ファイルは、そのなかへと述定的性質を保存してゆくことで、いわゆる「結びつけ問題 (binding problem)」を解決する糸口を与えられている。だが、オースティン・クラーク (Clark 2000; 2004) はこれに対して、知覚の基本的なメカニズムを対象への指標づけではなく「位置への特徴配置 (feature-placing)」であると論じ、結びつけ問題の解決において鍵となるのは対象ではなく位置であると主張している。本節では、感覚的性質を結びつける基盤が対象であるのか位置であるのかをめぐるこの論争を取り上げ、視覚的指標理論に代表される対象基盤説の方が優れた見方であると論じる。

#### 3. 1 結びつけ問題と感覚的個別者

まずは結びつけ問題について説明しておこう (Clark 2004a, pp. 445-451)。特徴統合理論を扱った際に述べたように、われわれの感覚システムにおいては、もろもろの感覚的性

質は各々に対応する特徴マップにおいて並列的かつ階層的に処理されている。われわれの感覚システムが入力情報に対してこうした特徴マップにおける分散の処理を行うとすれば、そこには次のような問題が生じることになる。たとえば、同じ性質群を含んだ以下の二つの場面を考えよう。

場面 1：緑色の縞模様の横に赤色の格子模様がある。

場面 2：緑色の格子模様の横に赤色の縞模様がある。

われわれの感覚システムが単に感覚的性質を異なる特徴マップへと分離して処理するだけだとすれば、それは場面 1 と場面 2 を異なるものとして区別することはできない。なぜなら、そのような感覚システムはいずれの場面に対しても〈緑色〉、〈赤色〉、〈縞模様〉、〈格子模様〉という四つの性質の連言を出力するのみだからである。われわれが必要とするのは、単にそれら四つの性質が同じ場面のなかに存在しているという情報ではなく、「場面 1 においては、〈緑色と縞模様〉の組み合わせと〈赤色と格子模様〉の組み合わせがそれぞれ別のまとまりをなしている」といった類の情報である。こうした情報を得るためには、性質同士の連言関係とは異なる別種の論理的な関係が必要とされる。それは、「縞模様であり、かつ、緑色である」という性質同士のあいだの連言関係ではなく、「何かが縞模様である」あるいは「何かが緑色である」という述定関係である。述定関係を利用することで、われわれの感覚システムは共生起する諸性質を「同じ主部に述定される」という関係を媒介として結びつけることができる。たとえば、「何かが縞模様である」と「何かが緑色である」という二つの述定関係において、これらの「何か」が同じ  $a$  という項であった場合、それに対して述定関係に立つ〈縞模様〉と〈緑色〉という性質は共生起するものとして扱われることになる（「 $a$  は緑色の縞模様である」）。ここではコーエン（Cohen 2004）に従って、性質を束ねる役割を果たす主部に該当するものを「感覚的個別者（sensory individual）」と呼ぼう。感覚的個別者は、共生起する性質を統合する基盤としての役割を果たすことで、場面 1 と場面 2 のように集合として同一の感覚的性質群が存在する状況を識別することを知覚者に対して可能にするのである。

クラークはこの感覚的個別者の役割を果たすのは時間的・空間的な位置であると考え。共生起する諸性質が互いに結びつけられるのは、それらが同じ場所に位置をもつ性質であるがゆえである。位置が統合の役割を果たすという考えは特徴統合理論においても示されていた見解である。特徴統合理論においては、異なる特徴マップ上に表現された共生起する性質は、それらが位置を表象するマスターマップ上で同じ場所を共有しているということによって統合可能となる。すべての感覚的性質は時間的・空間的に特定の位置をもつと考えられるため、特徴マップ上に表現された感覚的性質はすべてマスターマップ上に対応する位置をもつことができる。言い換えれば、原理上、位置はすべての感覚的性質に対してそれを述定するための主部の役割を果たすことができるのである。クラークによれば、主部である位置と述部である性質の結合から成る〈領域  $R$  にある性質  $P$  の現われ〉という図式こそが、われわれのような感覚性を備えた生物が結びつけ問題を解決するための基本

的な枠組みである。

ここで一つ注釈を加えておきたい。クラークは空間的個別者に関する自らの位置基盤説を初期知覚過程のみに関わるものとして提示している。階層的な感覚処理システムのうち、どこまでが初期過程であるかを明確に境界づけることは困難であるが、おおまかに言って、初期の階層は個々の感覚様相に特異的な処理過程であると理解することができるだろう。この特徴づけに従えば、異なる感覚様相間の連合を含む認知的な処理や、運動領域への出力に関わる処理はもはや初期過程とは言えないということになる。位置基盤説が主張するのは「様相特異的な初期の感覚処理過程を特徴づけるのは位置への特性配置という原理である」ということであり、それ以降の処理過程がどのような原理に従ってなされているかに関しては開かれた立場を取っている。

### 3. 2 対象基盤説の三つの証拠

以上のようなクラークの位置基盤説に対して、ピリシンやマッテン、コーエンといった論者は対象基盤説を支持する議論を展開している。彼らは「束ねの問題を解決するためには何らかの感覚的個別者が必要である」という論点を受け入れながらも、それが「位置」であるという主張を否定し、代わりに「対象」がその役割を果たすと考える。以下、それらの論者が対象基盤説を擁護するために提示している議論を三つの論点に絞って見てゆこう。

対象基盤説を支持する第一の証拠は、仮現運動の一種として知られている「ファイ現象(phi phenomena)」によって与えられる(Matthen 2004, pp. 503-505)。ファイ現象に関する典型的な実験においては、被験者は、適当な空間距離を置いて配置された、交互に点滅する二つの光点を見せられる。点滅する時間間隔を変化させると、一定以上に長い場合には二つの光点が逐次的に点滅するように見えるが、一定程度まで短くした場合には一番目の光点が二番目の位置へ移動するように見える。

場面3：位置1にある光点に続いて位置2にある別の光点が点滅する。

場面4：位置1にある光点が位置2へと移動する。

マッテンによれば、これら二つの条件では、呈示されている性質とその位置に変化はなく、変化しているのはそれらの性質の担い手が何であるのかについての被験者の主観的な経験のみである。したがって、位置1と位置2が光点のもつ性質を担う感覚的個別者の役割を果たしているとするれば、われわれはこれらの場面を区別するための道具立てを欠いているということになるだろう。反対に、感覚的個別者の役割を果たしているのが対象であるとするれば、われわれはそれぞれの場面における感覚的個別者の違いに応じて二つの場面を区別することができる。なぜなら、場面3では別々の対象が位置1と位置2に現れているように見えるのに対して、場面4では同じ一つの対象が位置1から位置2に移動しているように見えるからである。ここからマッテンは、視覚システムにおいて性質が述定されているのは位置ではなく対象であると結論づけている。

対象基盤説を支持する第二の証拠はガボールパッチを用いたブレザーらの実験から得られる (Blaser et al. 2000)。この実験にはピリシン、マッテン、コーエンのいずれもが言及している (Cohen 2004, pp. 477-478; Matthen 2004, pp. 506-507, Pylyshyn 2007, pp. 40-42)。ブレザーらは、注意が対象を基盤に行われているのか、それとも位置を基盤に行われているのかを確かめるために、ガボールパッチを用いて次のような実験を行った。ガボールパッチとは、正弦波縞に二次元ガウス関数をかけたもので、一様に広がる正弦波縞の一部を円形に切り取ったものである。ブレザーらの実験では、ガボールパッチはディスプレイ上の固視点の位置に固定され、色、傾き、空間周波数（縞模様の密度）が連続的に変化してゆくように設定された。このガボールパッチは実際の空間上を移動することはないが、色、傾き、空間周波数をそれぞれ  $x$  軸、 $y$  軸、 $z$  軸とする特徴空間 (feature space) 上を滑らかに、かつランダムに「移動」する。実験のなかでは、固視点に二つのガボールパッチをぴったり重ねて呈示し、それらが時空間上で同じ位置を占めるように配置された。そして、それらの色、傾き、空間周波数をそれぞれ独立に変化させていくときに、被験者が各々のパッチを区別できるかどうか、さらには追跡を行うことができるかどうかテストされた。被験者は、二つのパッチのうち、試行開始時に 45 度の向きで配置されていたパッチを標的として追跡し、10 秒間の移動の後にどちらが標的であったかを答えるよう求められた。結果、被験者らは平均して約 90% の確率で標的を追跡することに成功した。それらのパッチは互いに位置を共有しているがゆえに、ここでの識別や追跡は位置に基づいて行われているのではなく、それぞれに配分された視覚的指標を利用することで行われていると考えられる。それゆえ、この実験は、結びつけ問題の解消に要求されるのは、結合されるべき諸性質が異なる時空間領域に位置することではなく、異なる対象に属することであるということを明らかにしていると考えられる。

対象基盤説を支持する第三の証拠は直示を含む言語表現に関する意味論的な考察から得られる (Cohen 2004, pp. 478-480)。クラークは知覚に関する位置基盤説を意味論的な問題へと接続し、直示表現の指示対象に関する帰結をそこから引き出している (Clark 2000, p. 144ff)。クラークによれば、知覚システムが把握する感覚的個別者は知覚場面において使用される直示表現（知覚的直示）の指示対象としての役割を担う。したがって、もし位置基盤説が正しいとするならば、知覚的直示の指示対象は位置であるということになる。たとえば、あなたが「これは赤い」という文のある知覚場面において（たとえば指さしを伴って）発話するとき、あなたは知覚的に提示されているある空間領域に〈赤さ〉という性質を帰属させているということになる。

しかしコーエンは、この意味論的分析が名前や記述を含む他の言語表現に適用された場合、受け入れがたい奇妙な帰結を招くと指摘する。次の二つの文について考えよう。

- (1) This is a hand and it is my favorite body part.
- (2) This is my wife and I love her.

(1) の文において、“it” は最初の連言肢に含まれる直示表現が指示しているものを受け

る。これは（２）の文の“her”においても同様である。もしクラークの見方が正しいとすると、それらの直示表現の指示対象は私が知覚しているある場所であるということになる。したがって、クラークは（１）や（２）が場所に対する私の愛着を表現したものであるという見方にコミットしていることになる。これは（１）や（２）のような文の解釈としては受け入れがたいものであるように思われる。

これに加えて、コーエンの指摘によれば、知覚的直示の指示対象が場所であると考えることにはさらなる問題がある。われわれは多くの場面において、空間領域が例化しえないような性質を帰属するために知覚的直示を使用している。たとえば、（１）の文の発話において、われわれは手という対象それ自体を指示しているのではなく、〈手である〉という性質がある空間領域に帰属させていることになる。だが、これは明らかにカテゴリーミステイクである。

クラークはこうした批判を避けるために占有関係を分析に導入している（Clark 2000, pp. 142-143）。すなわち、（１）の文の発話を、知覚的に提示されたある領域が手によって占有されているという事態を表現したものとして捉えれば、〈手である〉のような性質を空間領域に例化させるという誤りを避けることができるのである。

しかしながら、コーエンはこの解決策に含まれる次のような問題を指定している。まず、クラークによる占有関係の導入は理論を救うためにのみなされたアド・ホックなものでしかない。クラークの修正案によれば、たとえば、〈～は赤色である〉は例化関係を表現し、〈～は手である〉は占有関係を表現するという点で、両者のあいだには意味論的な違いが存在することになる。アド・ホックという批判を回避するためには、クラークはこのような意味論的な違いが存在するという点に対して理論の擁護とは独立に動機づけを与える必要がある。

さらに、〈～は手である〉という述語が直示表現を主語にもたない文脈（たとえば、「箸を扱うときに用いるのは手である」といった命題）において占有関係を表現しないと考えるならば（そう考えざるを得ないと思われるが）、クラークは〈～は手である〉という述語が知覚的直示を主語とするかしないかに応じて多義性を示すと認めることになる。この論点は容易に他の述語へと一般化できるため、クラークはすべての述語がこのような仕方で系統的に多義的であるという擁護の困難な主張へとコミットせざるを得なくなるだろう。他方、対象基盤説は、いずれの文脈においても〈～は手である〉は〈～〉に入る項に対する概念的な分類関係や同定関係を表現している、と主張することができる。

以上の三つの証拠からの議論は、束ねの問題を解決するために必要な感覚的個別者が位置ではなく対象であるということを示しているように思われる。

### 3. 3 三つの証拠への反論と応答

以上の対象基盤説からの批判に対して、クラークは以下で示すような反論を展開している。本項では、前項で提示した三つの証拠に対するクラークの反論を取りあげながら、それぞれについてクラークに対する再反論を行い、対象基盤説を擁護したい。

その前に、感覚的個別者をめぐる位置基盤説と対象基盤説の対立の争点を明確化してお

こう。上述のように、クラークは特徴配置に関する自らの説を初期知覚のみに適用されるものとして理解している。したがって、初期知覚以降の処理段階において対象が感覚統合の基盤として働くことが示されたとしても、そのことはクラークの位置基盤説にとって反例とはならない。クラークの説にとって問題となるのは、初期知覚での感覚統合において、位置が感覚的個別者としての役割を果たすことができないということが示されるか、あるいは、位置以外の何かが感覚的個別者としての役割を果たすことができるということが示されるか、いずれかの場合である。対象基盤説からの議論が位置基盤説に対する有効な反論となっているかどうかを考える際には、それが初期知覚過程における感覚的個別者としての位置の役割を部分的にせよ否定するものとなっているかどうかには注意する必要がある。

### (1) ファイ現象

さて、以上の点を確認した上で、まずはファイ現象に関するクラークの反論をとりあげよう (Clark 2004b, pp. 557-559)。マッテンは、場面 3 (位置 1 にある光点に続いて位置 2 にある別の光点が点滅する) と場面 4 (位置 1 にある光点が位置 2 へと移動する) において、性質が帰属されるべき位置を光点が呈示される位置 1 と位置 2 に限定して考えている。確かに、二つの場面において性質が帰属されるべき位置が両者に限られるとすれば、われわれはそれら二つの場面を区別するための道具立てを手にはすることはできない。だが、このマッテンの前提は明らかに正しくない。なぜなら、位置 1 と位置 2 のあいだにも当然ながら空間領域が存在しており、その中間的な空間領域も状況に応じて感覚的個別者としての役割を担うことができると考えられるからである。だとすればわれわれは、対象を感覚的個別者として認めずとも、位置とそこに帰属される性質のみに基づいて二つの場面を区別することができる。すなわち、場面 3 では位置 1 と位置 2 の中間領域で何も生じないが、場面 4 ではその中間領域に属する各位置で光点の移動が生じると考えればよいのである。このように考えることができるとすれば、ファイ現象に基づいたマッテンの批判は有効性を失うことになる。この応答は妥当なものであるように思われる。

しかしながら、ここでクラークは、マッテンの批判が位置基盤説にとってのより深い問題の所在を示していると述べている。それは運動知覚という問題である。時空間上の位置のもつもっとも基本的な特徴の一つは、それが (ある固定された座標系の内部で) 移動することはないという点である。ある空間領域を占有する対象はその位置を離れて移動することができるが、その空間領域それ自体は移動することはない。そして、われわれはしばしばそのような移動する対象を知覚的に追跡することができる。だとすれば、運動知覚においては位置ではなく対象が感覚的個別者としての役割を担っていると考えべきではないだろうか。

この問題に対するクラークの応答は次のようなものである。まず、クラークは次のような譲歩を行っている。「ある場所から他の場所へと、ゆっくりかつはっきりと、一つの事物が移動しているのを知覚しているような事例は確かに存在する。そこでは、場所一時間以外の感覚的個別者が実際に必要とされる」 (Clark 2004b, p. 558)。明示的に述べられてはいないが、クラークはこうした譲歩が位置基盤説に対して問題を突きつけるものではない

と考えているはずである。おそらくクラークは、こうした事例は対象の明瞭な知覚を含むものであり、それゆえ対象の同定をともなう認知的なレベルで成立していると理解している。もしそうだとすれば、こうした事例が感覚的個別者として対象を要請するとしても、それは初期知覚における処理に関わるものではないため、位置基盤説に対する反例とはならない。では、対象の明瞭な知覚を含まない運動知覚についてはどうなのだろうか。

クラークは、対象同定を含まない運動知覚は可能であり、実際にそうした運動知覚の事例は存在すると主張する。たとえば視野の周辺部における運動知覚を考えてみよう。周辺視野における運動は、運動しているのが何なのかを知覚者が識別できない場合でさえ知覚者の注意を引きつけることができる。また、素早く移動する対象を知覚するとき、われわれはしばしば移動しているものが何であるかを認識することなく、輪郭のぼやけた色の塊としてそれを知覚する。さらには、輝度が急激に変化するとき、その変化は特定の対象のレベルではなくその表面における肌理のレベルで知覚されうる。これらの事例において、運動はそれが帰属される対象の同定とは独立に（あるいはそれに先立って）知覚されている。しかしながら、そこでの運動は時空間上の位置と独立に知覚されているわけではない。それらのいずれの事例においても、運動に関わる性質は特定の時空間上の領域に位置するものとして知覚されている。それゆえ、これらの事例においては、対象ではなく位置が運動知覚の基盤となる感覚的個別者としての役割を担っていると考えられる。そして、それらの事例における運動知覚は、対象同定を含む上述の事例のものよりも低次の情報処理過程——初期視覚過程——において成立している。だとすれば、初期視覚過程で生じる運動知覚は対象を要請することなく特徴配置の原理のみによって説明することができるということになる。したがって、運動知覚は位置基盤説にとって反例とはならないと結論づけられる。

以上のクラークの議論は妥当であると言えるだろうか。私の考えでは、クラークの議論には対象基盤説が前提としている対象理解に関する深刻な混同が含まれている。それは「対象同定」と「対象指示」の混同である。クラークは、対象が感覚的個別者としての役割を果たすためには、その対象は知覚システムによって同定されていなければならないと述べている。

〔事物が速く移動するときの知覚を対象基盤説で説明することの〕問題は、事物がそのように素早く移動するときには、あなたはそれが何であるかを言うことができないという点である。それはボールかもしれないし、粒上のオレンジ色の雲かもしれないし……素早く移動したときにそのようにぼやけるたくさんの他の事物のどれかかもしれない。知覚者は四次元の軌跡——このあたりで始まりあのあたりで終わる筋状のもの——を知覚する。どちらによけるかを決めるのには役立つだろう！ だがそれは、同定や再同定という作業を必ずしも必要とはしない、四次元上に位置づけられた一つの性質である。(Clark 2004b, p.570)

こうしたクラークの理解は誤りを含んでいる。対象基盤説が念頭に置いている対象は、概



念的な資源を用いて同定された対象ではなく、非概念的な視覚的指標メカニズムによって捉えられた対象である。ここでは前者の意味での対象を「認知的対象」、後者の意味での対象を（前章第一節と同様に）「感覚的对象」と呼ぼう。認知的対象は〈ボール〉や〈風船〉といった具体的な類別概念へと分類されることで把握されるのに対して、感覚的对象は感覚的指示の働きによって概念的な処理を媒介することなく把握される。感覚的对象は認知的対象のように特定の概念によって個別に特徴づけられるのではなく、「視覚的指標を引きつける任意のもの」というかたちで一律に操作的定義が与えられるにすぎない。対象基盤説が主張しているのは、初期視覚には同定に先立って感覚的对象を指示するメカニズムが備わっており、この感覚的对象が性質を束ねる基盤としての役割を果たすということである。それゆえ、そこには「感覚的個別者としての役割を果たすためには対象が同定されなければならない」という主張は含まれていない。概念的資源を用いた対象の同定は初期知覚以降において行われるのであり、初期視覚においては視覚的指標による対象の指示が行われる。クラークは対象基盤説が前提としている対象概念を感覚的对象ではなく認知的対象として理解したがゆえに、それを把握するために初期視覚以降の高度な情報処理が必要であると想定するに至ったと推測される。

以上で述べた感覚的对象と認知的対象の違い——あるいは対象指示と対象同定の違い——を踏まえるならば、クラークが上で挙げている「対象同定を含まない運動知覚」の諸事例に対して対象基盤説の側から適切な説明を与えることができる。周辺視野における運動や輝度の急激な変化はいずれも視覚的指標を受動的に引きつけると考えられる。それゆえ、それらの運動は感覚的对象を基盤とすることで知覚されていると主張できる。また、同定することの困難な素早い運動であっても、視覚的指標は運動している対象に付着して追跡を行うことができる。その際に対象が同定されるか否かは追跡が成功裡に行われるか否かとは無関係である。以上のように、クラークが位置基盤説の優位を示すものとして挙げている運動知覚の事例は、いずれも感覚的对象という概念を用いることで適切に説明することができる。それゆえ、運動知覚に関するクラークの議論は、初期視覚における位置基盤説の優位を示すものではないと結論づけられる。

加えて、位置基盤説に基づく運動知覚の説明に対しては、前章第二節第二項で説明したように、経験的な妥当性が欠けているという実験的な証拠も挙げられている。コンピュータでのシミュレーションにおいて、追跡が対象の位置情報をコード化しながら行われているという想定のもとでは、実際の被験者が行うことのできる高いパフォーマンスを再現することができないのである。それゆえ、運動知覚という問題は、クラークが考えるように位置基盤説に対して支持を与えるどころか、まったく逆にそれに対する不利な証拠として働く主張することができる。

## （２）ガボールパッチ実験

では次に、ガボールパッチ実験からの位置基盤説批判を取りあげよう。先述のように、ガボールパッチ実験では、被験者は互いに重ね合わされた二つのガボールパッチを識別し、標的となった方のパッチを追跡することができた。ここからマッテンやコーエンは、束ね

の問題の解消に要求されるのは、結合されるべき諸性質が異なる時空間領域に位置することではなく、異なる対象に属することであると述べる。

しかしながら、こうした批判に対してクラークは次のような反論を行っている。まず、クラークは二つのガボールパッチが同じ時空間領域を共有しているという見方に疑義を呈する。ディスプレイ上において、両者は確かに「重なり合っている」が、そのことは両者が時空間上の位置を「共有している」ことを必ずしも含意しない。なぜなら、両者が重なり合っているのが事実だとしても、一方が他方を部分的に遮蔽するというかたちで、両者が奥行きにおいて互いに異なる位置を占めているように見えるという可能性があるからである。もし実際に両者が奥行きを異にするように見えていたとすれば、この実験の結果は位置基盤説に対する反例とはならなくなる。

加えてクラークは「常識的には、二つの異なる知覚可能な対象が正確に同じ位置を共有するという考えはいくばくかの困難を覚えさせるものである」と指摘している (Clark 2004b, p. 566)。確かに、物質的对象に関するわれわれの常識からすれば、二つの剛性物体が同時に同じ位置を占めることは考えがたい。だが、われわれの常識的な見方がどうであろうと、われわれの知覚システムは二つの対象が位置を共有するという事態を許容するように思われる。このことを印象的に示すのがブルフリッヒの二重振り子錯視を用いた実験である (Leslie 1988)。片方の眼に対してだけ暗いフィルターを使用すると、そのフィルターを通過する入力刺激が受ける視覚的处理だけが比較的遅くなる。この状態で振り子運動を行う事物を見ると、両眼で処理される情報のあいだに時間差が生じ、当該の振り子は楕円運動をしているように感じられる。ここで呈示する対象を逆位相で振動する二つの振り子にすると、二つの振り子は回転する途中で互いを通り抜けているように見える。このことが示しているのは、「われわれの視覚システムは剛性物体間の相互貫入性を禁止する制約をそのメカニズムのなかに組み込んではいない」ということである。それゆえ、特定の条件下においては、二つの対象が正確に同じ位置を共有するように見えたとしても不思議はない。われわれの知覚システムは、二つのガボールパッチが位置を共有しているように見えるという可能性を排除するものではないのである。さらに、ブレザーらはガボールパッチが「透明に見えた」と報告しており、このことは二つのガボールパッチが互いに遮蔽関係にはなかったということを示唆しているように思われる。

以上の論述は二つのパッチが同じ位置を占めているように見えたということを証明するものではない。だが、ここでは議論のために二つのパッチが奥行きにおいて同じ位置を占めていたと仮定しよう。クラークによれば、そのように仮定した場合でも、当該の実験が位置基盤説の抱える問題点を示すという点については異論の余地がある。クラークは次のような二つの反論を提示している。

クラークによる第一の反論を確認しよう。もしガボールパッチが「視覚的对象」として認められるとすれば、それは非物質的 (insubstantial) でありうるということになる。厳密に言えば、ガボールパッチはスクリーン上の光のパターンにすぎず、それが移動しているように見えるとしても何かが実際に移動しているわけではない。このことは、ガボールパッチのような刺激を対象として認めることに対して疑問を投げかける。

しかし、こうしたクラークの指摘に対しては、対象基盤説が念頭に置いている対象は視覚的指標メカニズムによって捉えられた「感覚的对象」であるという論点を想起すればよい。感覚的对象として認められるために重要なのは、それが視覚的指標を引きつけるかどうかであって、通常の意味において物質的であるかどうかではない。確かに、視覚的指標は通常の意味で物質的ではない対象に付着することもあるが、このことはそうした対象が「性質の担い手となりうる」という点で物質的对象と異なる論理的身分をもつということを含意するものではない。

次にクラークによる第二の反論に移ろう。ガボールパッチを対象として検出するためには、画面上のすべてのエッジを検出し、そのなかから平行なエッジ群を「一つの」ガボールパッチに属するものとしてまとめる必要がある。しかしながら、四個か五個しか同時に配分しえない視覚的指標にこうしたタスクをこなすことができるだろうか。こうした疑問から、クラークは、ガボールパッチを「一つのもの」として規定するためにはまずもって特徴配置が必要であり、視覚的指標はそこで規定された「視覚的对象」に対して付着しうるにすぎないと述べる。この見方によれば「視覚的な特徴配置が最初にイメージに基づいたデータ処理を行い、そのあとで指標や名前、そして種といったものがそこで開示された存在者に適用される」(Clark 2004b, pp. 556-557)。この見方が正しいとすれば、対象基盤説において感覚的個別者とされる対象の検出は、位置基盤説が主張する特徴配置を前提としているということになる。

この反論に対してはどのような応答が可能だろうか。

第一に、仮に特徴配置が初期視覚において一定の役割を果たしているとしても、それは初期視覚における情報処理の唯一の原理ではないという指摘を行うことができる。上の引用から示唆されるように、クラークは指標の配分を名前の適用や種への分類といった認知的な処理と同列の処理として捉えている。これは、クラークが指標によって指示される対象を初期視覚以降で導入される認知的対象として理解していることを示している。もし対象の検出がもっぱら認知的な処理のレベルで行われるとすれば、その前提となる特徴配置が初期視覚における情報処理に関わる唯一の原理であるという主張は脅かされることはない。だが、繰り返し述べてきたように、指標が配分される対象は認知的な処理以前に把握される感覚的对象であり、したがって、その配分は初期の視覚処理過程に属すると考えられる。だとすれば、たとえ特徴配置が感覚的对象の検出に対してその前提として働いているとしても、それはもはや初期視覚における情報処理に関わる唯一の原理ではないということになる。これは位置基盤説に対して大きな譲歩を強いるものである。なぜなら、すでに確認しておいたように、位置基盤説は特性配置が初期視覚を統べる唯一の原理であると主張するものだからである。

第二に、対象の検出に先立つ処理過程はそもそも感覚的個別者を必要とするものではなく、それゆえこの段階では諸性質を結びつける基盤を要請する必要は生じないという批判を行うことができる。この点について論じるために、ピリシンによる「特徴のクラスター化」と「感覚的对象の指示」との区別を導入しよう (Pylyshyn 2007, p. 47)。特徴のクラスター化とは、空間的・時間的な近接性に基づく諸特徴の知覚的グループ化であり、ここ

で「対象の検出に先立つ処理過程」と呼んでいるものである。それは視覚的指標メカニズムとは違って処理容量に明確な制限をもたない。クラスター化の一例として「ランダム・ドット・ステレオグラム」について考えよう。ランダム・ドット・ステレオグラムでは、相対的な位置における視差が生ずるように構成されたランダム・ドットのパターンが両眼に提示される。このとき、両眼の焦点をずらしてパターンを適切に重ね合わせると、そのパターンから特定の形をした奥行きのある表面が浮かび上がってくる。このとき、重ね合わせにおいて対となるドットに対しては対応計算がなされる必要があるが、この計算はドットの数の多寡に関わらず容易に遂行される。こうした計算処理によって確保された特徴クラスター群のなかの一部（あるいは時空的にまとまりのあるクラスター群からなるチャック）が、注意による選択の単位として指標を引きつけることになる。特徴のクラスター化と感覚的对象の指示は別個の過程であり、かつ、後者の過程は前者の過程を前提としてはじめて成立するのである。クラークが「最初に行われるイメージに基づいたデータ処理」と呼ぶものは、この特性のクラスター化に対応すると考えられる。

では、この特徴のクラスター化において、諸特徴が置かれている位置は感覚的個別者としての役割を果たしていると言うべきだろうか。ここで「感覚的個別者が要請されるのは結びつけ問題を解決する基盤としてであった」という点を想起しておこう。特徴統合理論によれば、複数の特徴マップ上にある諸性質が統合されるのは選択的注意の働きによってである。視覚的指標理論が正しいとすれば、ここでの選択的注意の働きは指標を配分することで視覚的指示を行う過程として理解できる。だとすれば、特性のクラスター化は感覚的個別者へと諸特徴が統合される以前の過程であるということになるだろう。特徴のクラスター化は何らかの感覚的個別者を基盤として要請する手前の段階で行われる処理過程なのである。

このことを実際に示しているのが前章の第三節第四項で紹介した「錯覚的結合」と呼ばれる現象である。注意を配分するのに必要な時間的余裕を与えられなかったとき、知覚者はたとえディスプレイにどの性質が表示されたのかを正しく知覚できていたとしても、それらがどのように統合されていたかを誤って知覚してしまう傾向がある。たとえば、ディスプレイに赤色のTと緑色のBが表示されていたとき、少なからぬ知覚者は、たとえば、緑色のTと赤色のBを知覚したと答える。この実験では、知覚者は各々の視覚的性質に対するクラスター処理はできているが、それらを束ねるための注意配分を行うことができなかったため、色と形を正しく統合することに失敗してしまったと解釈できる。このように、特徴のクラスター化は何らかの感覚的個別者を必要としないどころか、錯覚的結合の事例が示しているように、むしろそうした感覚的個別者を欠いていると考えられる。それゆえ、たとえ感覚的对象の検出が特徴のクラスター処理を前提としているとしても、そこで前提されるクラスター処理はそもそも感覚的個別者を必要とするものではなく、特徴配置のように位置を基盤として行われるものではないと考えられる。だとすれば、特徴配置は初期視覚における唯一の原理ではないどころか、そもそも初期視覚において何らの役割も果たしてはいないということになるだろう。

以上の議論が正しいとすれば、ガボールパッチ実験は、対象基盤理論の当初の主張通り、

位置基盤説を否定する証拠として働くと結論できる。もちろん、そのように結論づけるためには、二つのパッチが奥行きにおいても位置を共有しているという点が確証される必要である。だが少なくともこの実験に関するブレザーらの記述はそれらが実際に位置を共有していたということを示唆している。

### (3) 直示表現の意味論

最後に直示表現の意味論に関わる考察からの批判をとりあげよう。この批判に対するクラークの応答は、コーエンが指摘した問題を問題として甘受しつつも、その問題が位置基盤説だけではなく対象基盤説にも共有されるという点を示すことで、それが位置基盤説のみが対処を迫られるべき特有の問題ではないと指摘するものである。

クラークはまず、われわれは自らの認知システムが何らかの対象として表象する以前の存在者に対しても直示的な指示を与えることがあるという点を指摘する。そして、そうした指示場面における指示対象を「原－指示対象(proto-referent)」と名づける(Clark 2004b, p. 571)。われわれが「これ」という知覚的な直示によって指示しうるものであれば、日常的な意味での物質的对象の基準を満たさないものも原－指示対象となりうる。言い換えれば、何であれ指標が付着しうるものであれば原－指示対象たりうるのである。われわれはすでにこうした意味での対象を「感覚的对象」と名づけておいた。

多くの場合、われわれが知覚する感覚的对象は日常的な意味での物質的对象と一致する。しかしながら、感覚的对象は常に日常的な意味での物質的对象と同一であるわけではない。クラークは、われわれが原－指示対象の可能性を認め、かつ、それが常に物質的对象と同一であるわけではないと認めるならば、そこから知覚的直示の二重性という事態が生じ、この二重性はコーエンが指摘したものと同様の問題につながると論じる。

指示対象の二重性という事態は、たとえば、センスデータ理論をとった場合に典型的に生じる。センスデータ理論によれば、“This is a chair, and it is my favorite one.”という直示を含んだ表現を行うとき、この表現が真に意味しているのは、「“this”という知覚的直示と特定の関係に立つ事物が存在し、その事物はイスであって、かつ、その事物は私が一番好きなものである」ということである。ここでは、“this”という直示表現はあるイスについてのものであると同時に、そのイスと特定の関係に立つセンスデータについてのものでもある。したがって、“This is a chair”という表現は異なる二つのものを指示しており、後続する前方照応表現はそれら二つのいずれをもとりうるということになる。もし位置基盤説においても同様に「直示的に指示される時空領域」と「その時空領域に例化された性質（あるいはそれを占有する事物）」という二重指示的な解釈が可能だとすれば、前方照応表現の対象として後者をとることで、上の表現に対する「ある時空領域に私が愛着を感じている」という奇妙な解釈を避けることができる。

クラークによれば、知覚によって把握された感覚的对象が通常の意味における物質的对象ではなく、かつ、その感覚的对象が直示表現による原－指示対象となる場合、そこには二重指示的な構造が生じる。このことを示すために、クラークは以下のような例文を挙げている(Clark 2004b, p. 573)。

1. This is a Gabor patch, and it is on top of that other one. No, sorry, it is transparent.
2. (In a phi phenomenon test): This was a duck, and now it is a rabbit.<sup>97</sup>
3. (In a MOT experiment): This one flashed, then it went under the bar.
4. You see it? That's a reflection, and my favorite tree is in the same place.
5. The photographer from Associated Press was the one hidden by that yellowy orange afterimage. It was caused by his flashbulb.
6. This is a subjective contour, and it forms an edge of a Kanizsa triangle.

これらの例文における感覚的対象はすべて通常の意味での物質的対象がもつ存在論的基準には達していない。例文1～3においては、感覚的対象はディスプレイ上に呈示された光のパターンである。例文4では鏡像であり、例文5では残像、例文6では錯覚像である。

例文1～3における感覚的対象は実際には対象の映像であるにすぎない。たとえば、例文2において、画面上のアヒルやウサギのパターンは、実在のアヒルやウサギではなく、たかだかアヒルやウサギの映像である。ここで二重指示の問題を回避するためには、(位置基盤説において「～によって占有されている」という句が導入される場合と同じように)「～の映像」という句を解釈の際にしかるべき位置に挿入するか、あるいは、(位置基盤説において「～は手である」という述語が系統的に曖昧になる場合と同じように)「～はアヒルである」「～はウサギである」という述語が直示的指示の行われる文脈に応じて系統的に曖昧性をもつとするか、いずれかの対処が必要となるだろう。だとすれば、直示的表現の解釈におけるアド・ホックな修正や系統的な曖昧性の導入といったコーエンが指摘した問題は、位置基盤説だけではなくコーエンが擁護する対象基盤説に対しても降りかかることになる。

最後の三つの例文は二重指示の問題との関連性が特に明確である。なぜなら、それらの文では、単なる感覚的対象への指示を媒介として本来の物理的対象への指示が確保されているように見えるからである。例文4では私の好きな木がその鏡像を介して指示され、例文5では写真家がその残像を介して指示され、例文6では物理的には存在しない主観的輪郭を介して特定の物理的領域からなる図形が指示されている。ここでも、二重指示の問題を回避するためにはアド・ホックな修正や系統的な曖昧性の導入といった対処が必要となる。すなわち、たとえば例文4では、鏡像の「位置」を「そこにあるように見える位置」に修正するか、あるいは、「位置」の意味が文脈に応じて系統的に曖昧性をもつと考えるか、いずれかの対処が必要となる。こうした問題は対象基盤説も等しく解決を迫られる問題である。

さて、以上のクラークによる応答に対して、対象基盤説からはどのような議論が可能であろうか。ここでは、「クラークの応答は位置基盤説と対象基盤説が等しく二重指示の問題

---

<sup>97</sup> この一文は原文のままであるが、ファイ現象と多義図形を混同しているようにみえるため、クラークが誤って書いたものかもしれない。

に答える責務を負っているということを示してはいない」という点を指摘しておこう。対象基盤説が対処すべきとされる直示的指示の問題は、映像知覚や鏡像知覚など、感覚的对象が日常的な意味での物理的对象に属さない周辺の事例においてのみ生じるものである。これに対して、位置基盤説における直示的指示の問題は述語に名前や記述が含まれる通常の事例において生じる。対象基盤説では、ほとんどの日常的な事例で、感覚的对象は日常的な意味における物理的对象と同一であり、そこには存在論的な区別は生じない。だが、センスデータ理論や位置基盤説では、通常の事例でも、知覚的な直示表現が第一義的に指示するもの（センスデータや時空的領域）と第二義的に指示するもの（第一義的に指示されるものと特定の関係に立つ物理的事物）は存在論的には別個のものである。それゆえ、たとえコーエンの指摘した直示的指示の問題が対象基盤説自身に跳ね返って適用される場面があるとしても、それは位置基盤説の場合と異なり周辺の場面に留まる。したがって、直示的指示の問題は位置基盤説と対象基盤説に対して等しくかかっているわけではなく、位置基盤説の方がそれをより切迫した問題として抱えている。さらに言えば、クラークが指摘している映像知覚や鏡像知覚の問題は、たとえ位置基盤説が時空的領域に対する直示的指示の問題を解決しえたとしても、それとは独立に課される問題である。それゆえ、位置基盤説は直示的指示の問題を二重に抱えているということになる。対象基盤説が位置基盤説と共有しているのは、周辺の事例において生じる直示的指示の問題にすぎない。このように、直接指示の問題から課せられる重荷は位置基盤説と対象基盤説で同等ではなく、それゆえ、映像知覚や鏡像知覚における直示的指示の問題を指摘することは、位置基盤説に対してさしたる「鎮痛剤」としての効果をもたないのである。

以上の論述が示しているように、対象基盤説の三つの証拠に対する位置基盤説からの応答はいずれも成功しているとはいいがたい。対象の再同定などの場面において性質の置かれた位置が何らかの役割を演じることは否定できないが、少なくとも対象の指示に先立つ処理において位置は重要な役割を果たしてはいない。知覚において原初的な感覚的個別者としての役割を演じるのは知覚的指標メカニズムによって確保される対象なのである。

以上、本章では前章で提示した自然化された概念主義を擁護するための議論を行ってきた。自然化された概念主義において、知覚経験は視覚的指標によって確保される主部としての対象に対して、感覚的分類によって準備されるもろもろの感覚的性質が述定されることで形成される。この知覚経験の内容は感覚的概念によって形成される命題的なものであり、概念主義／非概念主義の論争において問われてきた四つの主要な概念性の基準のすべてを充足する。また、非概念主義者たちが自身の立場に支持を与えるものとして挙げている七つの主要な論拠に対しても、自然化された概念主義はそのすべてに応答することができる。このように、自然化された概念主義という見方は、論争上において概念主義に対して提起されてきた理論的要件を満たすことのできる有望な立場であると結論できる<sup>98</sup>。

---

<sup>98</sup> 第二章でみたように、マクダウェルは概念主義を唱えると同時に素朴実在論ないしは直接実在論を擁護している。だが、知覚経験の成立において脳内の表象処理過程を認めることは、直接実在論と対立する間接実在論を導くものとしばしば受け止められてきた。では、自然化された概念主義は素朴実在論と両立不可能なのだろうか。ここで指摘しておくべきは、脳内の感覚処理状態は素朴実在論を排除するような類

## 第三部 概念主義と意識および行為

### 第七章 知覚経験と意識

#### 第一節 意識と概念的内容

自然化された概念主義によれば、知覚の命題的内容は二つの理論が初期知覚に対して措定している二つのメカニズムの協働によって形成される。視覚的指標理論によれば、われわれの視覚には視野内にある複数の個別的対象を意識経験の成立に先立って因果的に捉えるメカニズムが備わっている。このメカニズムは、指標づけを行った対象に対応したファイルを作成することで、知覚経験に命題的形式を与える役割を果たす。また、感覚的分類理論によれば、感覚システムの役割は、指標づけされた対象がもつ諸性質を分類し、それらに対応する対象ファイルへと統合することで、命題的形式に概念的内容を付与し、その内容を意識経験へと伝えることである。

だが、感覚システムによる分類は初期知覚過程において行われるものであり、意識経験が成立する手前で遂行される。こうした分類の結果は、意識的な認知的処理以外の何らかの無意識的な認知的処理にも利用されうる。たとえば盲視の事例を考えよう。盲視とは、脳の第一次視覚野における損傷によって視野内の一部に欠損が生じ、その領域内に呈示

---

の表象として解釈される必要は必ずしもないという点である。素朴实在論者のフィッシュは、脳内における感覚的な情報処理が担う機能について、それを「外界を表象する現象的特徴を生成する」とみなす生成説と「外界の対象との直接的な接触を可能にする」とみなす選択説とを区別する。その上で、後者の選択説は素朴实在論と両立可能であると主張する (Fish 2009, p. 137)。フィッシュはマッテンの感覚的分類理論をこのような選択説に立つものとして解釈する。「[マッテンの] 提案は、ある種の事実を見る能力をもつためには、われわれは事物をその種の事実として分類ないしはカテゴリー化する能力をもたなければならない、そして、脳はそのような能力を支える器官であるがゆえに、しかるべきカテゴリー化が行われるためには適切な種類の脳機能および脳活動が要請されるだろう、というものである。このような考え方においては、われわれは脳機能が現象的特徴を生成すると前提することなく神経科学者が発見するいかなる相関〔任意の感覚的特徴に対する神経相関〕も説明することができる」 (Fish 2009, p. 138)。もし自然化された概念主義が提示している知覚処理のモデルをこのような選択説に立つものとして解釈しようとするれば、それを素朴实在論と両立可能なものとして理解することができるだろう。ただし、信念体系に対する合理的制約という「最小限の経験主義 (minimal empiricism)」 (McDowell 1996, p. xi) を確保するためには、素朴实在論をとることは必ずしも不可欠な選択肢ではないかもしれない。たとえ知覚において表象過程を認めるとしても、その直接的対象が (感覚印象やセンスデータのような内的な対象ではなく) 外界の物理的対象であると主張する——換言すれば、経験の「透明性」を認める——ことは可能である。たとえば表象主義者のハーマンは、「表象それ自体がもつ性質 (内在的性質)」と、「その表象が表すもの (志向的对象) がもつ性質」とを区別する (Hermann 1990)。この区別を導入することで、表象主義者は「われわれが直接知覚しているのは、経験それ自体のもつ性質ではなく、それが表象している外界の物理的対象のもつ性質である」という主張を認めることができる。このように考えるならば、表象主義に立ちながらも、「経験を通じた信念に対する合理的制約は、その直接的対象である外界の物理的対象やその性質から与えられる」と主張することができる。いずれにせよ、素朴实在論と間接实在論について本格的に論じるためには、概念主義と非概念主義の論争とは比較的独立に行われている、近年の表象主義と関係主義の論争 (注 57 を参照) を踏まえた上で、より踏み込んだ考察を行うことが必要とされる。



された刺激の自覚的な検出ができない障害を指す (Weiskrantz 1997)。盲視患者は、呈示刺激に対する自覚がない（つまり、見えていない）にもかかわらず、ある種の目的に対してその刺激のもつ向きや形態などの情報を一定程度正確に使用できるということが知られている。たとえば、二人の盲視患者を対象としてマーセルが行ったある実験 (Marcel 1998) では、盲視領域に何らかの語が呈示された後、被験者の可視領域に多義語（“BANK” など）が呈示され、その語と関連すると思われる語（“money” や “river” など）を列挙することが求められた。盲視領域に呈示された語は、可視領域に呈示された多義語のもつ意味の一つと特に強い関連性をもつものであった。結果、盲視領域に呈示された語によって、それと関連する意味へのバイアス効果が有意に高い頻度で生じることが示された。このことは、意識的な視覚経験が成立する以前の段階で、すでに比較的高度な概念に関わる感覚的分類が行われうるということを示している<sup>99</sup>。

感覚的分類が感覚的意識の成立に先立つという主張に対する証拠は視覚障害の事例からだけではなく健常な視覚者の事例からも得ることができる。とりわけ、閾下知覚を生じさせる「視覚マスキング (visual masking)」の事例がそのことを明確に示している。視覚マスキングにおいては、通常状況下では明瞭に知覚される刺激が、その直後に隣接した別の刺激を呈示することによって見えなくされる。たとえば、正常な視覚能力をもった被験者に対して、黒い円盤状の刺激を呈示し、短い間隔ののちに、その円盤刺激を囲むようなリング状の刺激が呈示される。すると、二番目に呈示された刺激（マスク刺激）が最初の刺激（標的刺激）を抑制し、後者が意識に上るのを阻害してしまうのである。しかしながら、意識に上らないにもかかわらず、標的刺激はそれがもつ形態的ないしは意味論的な特徴に応じた処理を施されているという研究結果が報告されている。たとえば、マーセルの行った別の実験では、標的刺激に対してマスキングを行った後で別の二つの刺激を呈示し、それらのうちのどちらが標的刺激と形態的ないしは意味論的により類似しているかを強制選択させた (Marcel 1983)。被験者は標的刺激がどのようなものであったかを想起できないにもかかわらず、より類似性の高い刺激を偶然以上の高い確率で選びだすことができた。この結果は、盲視の事例と同様に、意識的な経験として成立することなしに、呈示された刺激に関して形態的ないしは意味論的な感覚的分類が行われうるということを示している。

このように、感覚的分類が無意識的に行われ、かつ、その結果も無意識的に消費されうるとすれば、概念的 분류が行われることと、その分類結果が意識的な視覚経験の内容になることとのあいだには、なおいくばくかの距離が介在していることになる。この距離はどのようにして埋められるのだろうか。視覚的指標と感覚的分類の協働によって成立する概念的内容は、どのようにして意識経験の内容となるのだろうか。ここで考察の糸口となるのが、視覚的指標がある種の注意のメカニズムであるという点である。

われわれはある対象に注意を向けることで、その対象がもつさまざまな性質をより明確

---

<sup>99</sup> ただし、盲視患者がその盲視領域において完全に何も見えていないかどうかは慎重な検討を要する問題である。マーセルによれば、盲視領域に生じた顕著な出来事に対しては患者の側に何らかの気づきが生じる。とはいえ、それはきわめて曖昧模糊としたものであり、明瞭な意識経験を構成するものではない。

に意識できるようになる。また、新しい対象に注意を向け変えると、それまで注意を向けていた対象は意識からフェードアウトすることになる。こうした日常的な経験からは、注意と意識のあいだに何らかの密接な関係があるということが示唆される。では、両者のあいだには実際のところどのような関係が成立しているのだろうか。

注意と意識の関係については、両者のあいだには二重乖離が存在しており、それぞれ別々の機能と神経基盤とを有しているという立場 (Lamme 2004; Koch and Tsuchiya 2007) から、対象を意識することによって、その対象に注意を向けることが必要十分であるととする立場 (Prinz 2000; 2005; 2010a; De Brigard and Prinz 2010) まで、強弱さまざまな立場が存在している。もし両者の関係が必要十分関係であるとすれば、上述の「距離」はただちに埋められることになるだろう。なぜなら、本論の提示する自然化された概念主義のモデルにおいて、感覚的分類と協働することで知覚に概念的内容を与える指標づけのメカニズムは、ある種の注意のメカニズムであると考えられるからである。視覚的指標が注意のメカニズムであり、かつ、ある対象へと注意を向けることがその対象が意識されることにとって必要十分であるとすれば、視覚的指標は概念的内容が形成される要因であるだけでなく、それが意識的な知覚経験の内容となる要因でもあるということになる。この見方によれば、視覚的指標の配分自体は前意識的に行われるが、それが配分された対象（およびそこへと統合されてゆく感覚的性質）は意識的なものとなるのである。

本章では、注意と意識の関係が必要十分関係であるとするプリンツの理論を祖上にのせ、その理論に対する批判的な検討を通じて注意と意識の関係様態を明確化することで、上述の「距離」を見定めるというアプローチをとりたい。

## 第二節 意識の AIR 理論

プリンツの意識理論は、意識に関する二つの問いに対する答えを組み合わせたものとして提示されている。一つは、「われわれが意識するものは何なのか」という “what” の問いであり、もう一つは、「ある状態はどうやって意識的になるのか」という “how” の問いである。本論の主眼となるのは後者の問いであるが、まずは前者の問いに対するプリンツの応答を確認しておきたい。

### 2. 1 意識の中間レベル説

プリンツは前者の “what” の問いに対して、ジャッケンドフ (Jackendoff 1987) が提唱した「中間レベル説 (intermediate level theory)」を援用することによって答えを与える (Prinz 2000; 2005; 2007)。繰り返し論じてきたように、われわれの視覚システムは階層的に組織化されており、各階層に位置するサブシステムでは、それぞれに対応した異なる抽象度において感覚的性質が処理されている。中間レベル説によれば、このような階層的な感覚処理経路のうち、特定の段階における表象のみが意識的となりうる。それは、低レベルや高レベルの処理段階ではなく、それらのあいだに位置する中間レベルの処理段階

における表象である。低レベル（初期）の階層は感覚刺激が有する局所的特徴を処理する段階であり、高レベル（後期）の階層は特定の視点から抽象された、対象の比較的不変的な特徴（対象のカテゴリ的な特徴など）を表象する段階である。それらに対比される中間レベルの階層は、特定の視点において呈示された、奥行きにおける特定の位置をもつ、対象全体に関する表象が位置づけられる段階である。

時代的な制約もあり、ジャッケンドフは自身の中間レベル説を当時の視覚心理学（特にマーの計算論的視覚理論）などの知見によって支持するに留まった。これに対してプリンツは、それ以降の視覚システムに関する神経科学の知見によって、この理論が現在の証拠に照らしてもなお有効であることを示そうと試みる。

プリンツが視覚処理経路において低レベルの階層として位置づけているのは後頭皮質にある第一次視覚野（V1）であり、高レベルとして位置づけているのは下側頭皮質（inferotemporal cortex：IT）、中間レベルとして位置づけているのは外線条皮質（extrastriate cortex）の第二次視覚野から第五次視覚野（V2、V3、V4、V5/MT）である。プリンツによれば、知覚経験に特徴的な性質は低レベルや高レベルの処理過程が表象する性質とは一致していないが、中間レベルの処理過程におけるそれとは一致している。このことを示す議論を具体的に見てゆこう。

低レベルの階層と視覚的意識の関係に関して、プリンツは以下のような議論を提示している（Prinz 2005）。まず、V1 は意識経験に特徴的なさまざまな現象に可感的ではないという証拠が挙げられる。たとえば、V1 は意識的な色覚に特徴的な文脈効果（色対比効果など）を示さず、錯覚による主観的輪郭に対しても可感的ではないという報告がある。さらに、V1 の活動は瞬きを行っているあいだ低下するが、われわれは通常、瞬きのあいだに視覚的な中断が生じることを意識することはない（Rees et al., 2002）。加えて、素早く連続で二つの色パッチを呈示されたとき、われわれは一つの混合した色を経験するが、V1 の細胞はそれぞれのパッチに対して別々に反応する（Gur and Snodderly 1997）。これらのデータの一部に対しては異論もあり、たとえば、V1 は錯覚的輪郭を処理しているという報告もある（Seghier et al., 2000）<sup>100</sup>。だが、ラムスデンら（Ramsden et al. 2001）によれば、ある傾きの錯覚的輪郭に対して活動を示す V1 神経細胞は、同じ傾きの錯覚でない現実の輪郭に対しては有意な活動を示さない。これは、より高次の V2 における神経活動が錯覚的輪郭と現実の輪郭とで同一の傾きを表象するのと対照をなす。つまり、たとえ V1 の細胞が錯覚的輪郭に何らかの仕方で反応しようとしても、その反応の仕方は意識経験の内容とは一致していないのである<sup>101</sup>。これに加えて、プリンツは V1 の受容野が錯覚的輪郭や色対比効果などに反応するためには小さすぎるという疑義を呈している。

V1 における損傷は、多くの場合、視覚的意識の障害を生じさせる。だが、これは V1 が意識の座に含まれるということを必ずしも意味しない。なぜなら、V1 の損傷による意識障害は、V1 の損傷が直接の原因となっているのではなく、それによって下流の階層への

<sup>100</sup> さらに、プリンツは取りあげていないが、マカクザルの V1 において色対比効果が確認されたという報告もある（Conway et al. 2002）。

<sup>101</sup> 太田はこのプリンツの解釈に疑問を投げかけ、V1 は V2 とは異なる仕方で錯覚的輪郭を表象していると解釈する余地が残されていると批判している（太田 2010, p. 22）。

情報の伝播が阻害されたことが原因かもしれないからである。実際、V1 が損傷された患者においても、視覚的な幻覚や顕著な刺激に対する残存的な視覚経験が生じる場合があると報告されている (Sahraie et al., 1997)。もし V1 損傷患者においても何らかの仕方で視覚的意識が成立しうるならば、V1 は意識の成立にとって最低限必要な神経基盤であるとは認められない。

以上よりプリンツは、現在の証拠は V1 が意識の座には含まれないという仮説を確認するには十分ではないが、少なくともその仮説に対して経験的な支持を与えるものであると主張する。

次に、高レベルの階層と視覚的意識の関係についてはどうだろうか。まず、IT は対象のサイズや位置、向きといった視点依存的な情報を反映せず、複数の異なる視点においても不変であるような、より抽象度の高い情報を表象すると報告されている (Vuilleumier et al., 2002; Baylis and Driver 2001)。また、視覚失認 (visual agnosia) の分類とそれに対応する損傷部位に関する知見からも、高レベルの階層と視覚的意識との乖離に対して支持が与えられる。視覚失認は連合型と統覚型に区分できることが知られている (Farah 1990)。連合型では経験に基づいて対象を認知する能力が障害を被るが、視覚経験それ自体は比較的变化せずに保持される。これに対し、統覚型においては視覚経験までもが障害を被る。連合型は高レベルの損傷と関連しており、統覚型は中間レベルの損傷と関連しているとされるが、ここからは、高レベルにおける情報処理は視覚経験の成立それ自体にとっては無関係であるということが示唆される<sup>102</sup>。

これらに対して、中間レベルの各領域における神経細胞が表象する内容は、意識経験に特徴的な諸内容と対応していると思われる。たとえば、それらの神経細胞は対象のサイズや向きなどの視点依存的な情報に可感的である。さらに、それらは錯覚的輪郭や色恒常性現象を表象し、視覚的な幻覚にも反応すると報告されている (Prinz 2005)。また、中間レベルの各部位における損傷は、その部位での処理に対応する刺激特徴に関連した意識内容の喪失をもたらす。たとえば、色の処理に関わっているとされる V4 の損傷は色覚異常をもたらす、運動の処理に関わっているとされる MT の損傷は視覚性運動盲をもたらす。プリンツによれば、中間レベルの各領域がどのような機能を有しているかに関しては未解明の部分が多々あるが、少なくとも現在までの知見は中間レベル説と親和的である。

以上よりプリンツは、現在得られている神経科学の知見は中間レベル説を支持する（あるいは、少なくともそれと両立可能である）と結論づけている<sup>103</sup>。さらにプリンツは、こ

---

<sup>102</sup> 連合型の視覚失認患者における経験が比較的变化しないとしても、それは健常者における経験とまったく同じではないかもしれない。高レベルから中間レベルに対してはフィードバック経路が存在しているが、高レベルの損傷によってこの経路が断たれたならば、中間レベル表象に対しても何らかの変化がもたらされると考えられる。だが、この場合においても、連合型患者の視覚能力に示されているように、意識経験それ自体が成立しなくなるわけではない。

<sup>103</sup> プリンツは神経学的な意味での中間レベルと意味論的な意味での中間レベルとを区別している (Prinz 2007, p. 254)。前者は脳内の知覚に関わる神経回路における中間レベルという意味であり、後者は局所的な情報から抽象的な情報へといった情報処理の中間レベルという意味である。本論で見たように、双方の意味での中間レベルは一致していると考えられるし、そのことには情報処理の効率性という点から経験的な理由づけを与えることもできる。だが、たとえ両者が実際には一致していなくとも、それは中間レベル説にとって深刻な問題ではないとプリンツは述べる。なぜなら、意識の中間レベル説にとって真に重要な

うした中間レベル表象と意識的な知覚内容との対応は視覚以外の感覚様相においても共通しており、さらには思考と言語の関係にまで適用できると主張している (Prinz 2007, pp. 251-252)。

中間レベル説の検討は本論の主眼ではないため、ここではその内容を概観するに留め、それが感覚的分類理論と整合的であるという点だけ指摘しておきたい。感覚的分類理論によれば、階層的な感覚処理経路のうち、どのレベルで行われている処理も感覚的な分類ないしは序列化として理解することができる。こうした分類処理は意識的な認知的操作をともしずに行われる自動的な過程である。感覚的分類理論は、そうした前意識的な分類処理のうち、どの処理段階の結果が意識的となるかについて特定のコミットメントを行っていない。それゆえ、意識経験の基盤となるのは中間レベルの表象であるという説は感覚的分類理論に反するものではない。

以上を確認した上で、意識に関するもう一つの問い、すなわち “how” の問いに対するプリンツの応答へと論を進めたい。

## 2. 2 意識の注意制御説

中間レベル説はわれわれが「何を」意識するのかに答えるものである。より正確に言えば、脳内の階層的な処理過程のうち、意識的な知覚内容の表象媒体となるのはどの段階であるかに答えるものである。だが、この答えだけでは意識の成立に関する問いに対して十分であるとは言えない。なぜなら、中間レベルの表象は意識の必要条件ではあっても十分条件ではないからである。

このことは閾下知覚の事例を通じて示すことができる。前節で述べたように、閾下知覚に関する実験結果からは、意識的な気づきを妨げる条件下においても、われわれは視覚対象の意味や形態に関する情報を呈示刺激から抽出することができるということが明らかにされている。これらの情報を抽出するためには、単なる局所的な感覚的特徴の処理だけではなく、中間レベルを含む、低レベルから高レベルにまでいたる視覚経路の全体を通じた処理が必要とされる (Prinz 2010a, pp. 2-3)。このように、閾下知覚において中間レベルにおける表象が含まれているとすれば、視覚的意識の成立に対して中間レベル表象の存在は十分ではないということになる。では、中間レベル表象は「いかにして」意識的なものとなりうるのだろうか。

結論を先取りして言えば、この “how” の問いに対するプリンツの答えは、「意識が生じるのは、中間レベルの表象が注意によって制御されるとき、かつそのときに限る」というものである。プリンツは “what” と “how” の二つの問いに対する答えを合わせ、自らの意識の理論を「中間レベル表象の注意制御理論 (Attended Intermediate-level Representation theory: AIR 理論)」と名づける。AIR 理論は、意識の媒体となるのは中間レベル表象であると言う中間レベル説と、その表象が意識的となるのは注意による制御を被ることによってであるという注意制御説との組み合わせによって成立している<sup>104</sup>。中

---

のは、現象学的内容と対応しているとされる意味論的な中間レベルだからである。

<sup>104</sup> プリンツは後者の説に対して特定の名称を付与していないが、本論では便宜的に「注意制御説」とい

間レベル説を支持するプリンツの議論は上述のとおりだが、では、もう半面の注意制御説はどのような議論によって支持されるのだろうか。

プリンツが注意制御説の証拠としてまず挙げているのは「半側空間無視 (unilateral spatial neglect)」の事例である (Prinz 2005; 2010a)。半側空間無視は典型的には右下頭頂皮質 (inferior parietal cortex) における損傷によって引き起こされる障害である。半側空間無視の患者は、損傷が右半球に生じた場合、視覚領域の左側や見ている対象の左側、あるいは自分の身体の左側に関して意識的な報告を行うことができず、対象をスケッチさせてもその左側を無視する傾向がある。にもかかわらず、半側空間無視患者の多くは障害のある側の空間に呈示された刺激に対する閾下知覚の能力を保持している。たとえば、マーシャルとハリガンによる実験 (Marshall and Halligan 1988) では、半側空間無視の患者に対して二枚の家の絵が示される。それらの絵は、一方の家の一部が火事で燃えているという点以外はまったく同じである。ちょうど患者が無視を行う領域に火事の部分が重なるように絵を呈示すると、その患者は双方の絵がまったく同じに見える」と報告する。だが、どちらの家に住みたいかを尋ねると、まったく同じに見えるにもかかわらず、患者は火事の起こっていない方の家を選択する。このことは、半側空間無視の患者が、無視した対象に関する視覚的な意味情報を閾下で処理しているということを示唆している。また、処理情報の内容からすれば、この処理が行われている階層には中間レベルも含まれていると考えられる。実際、脳画像研究では、右頭頂皮質損傷患者における対象の無意識的な知覚に中間レベルの表象が関与していることが示されている (Rees et al., 2000; Vuilleumier et al. 2001)。では、半側空間無視の患者はなぜ当該の中間レベル表象を意識的なものとすることができないのだろうか。

ここで重要なのは、半側空間無視が注意障害として特徴づけられるという点である。半側空間無視と関連する典型的な障害部位である下頭頂皮質は注意の配分に関わる部位として知られている。また、前頭眼野 (frontal eye field) の損傷もしばしば半側空間無視をもたすが、この部位は注意 (特に眼球運動) の定位と関連しているとされる。半側空間無視の患者が空間の左側にある事物を意識的に知覚することができないのは、それらに対して注意を向けることができないことが原因となっていると考えられる<sup>105</sup>。このことは、中間レベル表象を意識的なものとするために注意が必要であることを示唆している。

さらに、注意制御説の証拠としてプリンツが言及するのが、健常者において観察することの可能な、「注意の瞬き」と「不注意盲 (inattention blindness)」という二つの現象である (Prinz 2000, 2010a; De Brigard and Prinz 2010)。

注意の瞬き実験では、被験者は次々と呈示される一連の刺激のなかから二つの標的を検

---

う名称を使用する。

<sup>105</sup> ここで見たように、半側空間無視は注意障害の一種であり、皮質盲の一種ではない。空間の半側領域に関して盲目となる障害は「同名半盲」という名で呼ばれる。半側空間無視を本当に「ものが見えない」障害として扱うことができるかどうかは慎重な検討を要する。たとえば、盲視の場合とは異なり、視野計のテストで視野欠損が認められないがゆえに、半側空間無視患者は障害のある半側領域にあるものが見えていないわけではないと考える論者もいる (下條 1996, p. 98)。だが、プリンツであれば、検査に用いられるテスト刺激が患者の注意を惹きつけたために「見えるようになった」可能性があると主張するだろう。

出するように言われる。最初の標的が呈示されたすぐあと（200～500 ミリ秒後）に二番目の標的が呈示されると、被験者は最初の標的に注意を奪われて二番目の標的を意識することができなくなる。だが、脳の電氣的記録は二番目の標的が閾下で知覚されていたことを示している。ラックら（Luck et al. 2000）は、文脈にミスマッチな語を呈示されたときに確認される N400 という脳波を利用して、意識に上らない二番目の標的が意味的な処理を受けていることを示した。意味処理には中間レベル以上での処理が必要とされるため、注意の瞬き現象で見えなくなる刺激に対しても中間レベル表象が存在していたと考えることができる。

また、不注意盲実験では、被験者が注意を要するタスクを課されているときには、予期せぬ刺激が呈示されたとしてもそれに気づくことができないということが示されている。マックとロック（Mack and Rock 1998）は、被験者に十字型の図形を 200 ミリ秒間呈示し、縦と横の線のどちらが長いかを答えさせた。被験者がこのタスクに従事しているあいだ、十字型図形の近傍に別の単純図形や語が瞬間呈示された。被験者の多くは、それらの図形や語を検出することができず、十字型図形の他に何かが呈示されたということを想起することもできなかった。これは、十字型図形の弁別タスクに注意が奪われていたためであると解釈できる。この不注意盲現象は、瞬間的に呈示される刺激に対してだけではなく、タスク中に気づけなかったことに被験者が驚きを覚えるような長時間の呈示刺激に対しても観察される<sup>106</sup>。シモンズとシャブリス（Simons and Chabris 1999）は、被験者に対して、二つのチームが入り乱れながらそれぞれのチームメイトとバスケットボールをパスし合っているビデオを鑑賞させ、いずれかのチームのパスの回数を数えさせた。このタスクを行っているあいだ、画面の中央をゴリラの着ぐるみを着た人物がゆっくりと横切る。被験者たちの半数以上はゴリラの存在に気づくことができなかった。

以上の証拠（半側空間無視、注意の瞬き現象、不注意盲現象）は、対象に注意が向けられなければ、それが意識されることはないということを示唆している。もしこの示唆が正しいとすれば、ある対象を意識することによって、その対象に注意を向けることが必要であるということになる。さらにプリンツは、意識にとって注意が十分であることの証拠としていくつかの現象を挙げている。

まずはポップアウト現象である。被験者が標的刺激を一様な妨害刺激のなかから選択するように言われたとき（たとえば、赤いボールの群れのなかから青いボールを探しだそうとするとき）、しばしば標的刺激は他の刺激から浮き出して見える。このポップアウト現象において、標的刺激は注意を受動的に引きつけると考えられているが、このとき当該の刺激は妨害刺激とは異なる性質をもったものとして意識的に知覚される。

プリンツは同様の構造がポスナーの有名な実験やカクテルパーティー効果についても当てはまると指摘する。ポスナーの実験（Posner 1980）では、標的刺激の呈示に先立って、その呈示位置を指し示す手がかり刺激（矢印）が与えられる。その手がかりによる予測は正確な場合と不正確な場合の二条件に分けられたが、正確な場合には標的刺激が意識的に

---

<sup>106</sup> このことを理由の一つとして、プリンツは不注意盲現象に対する「意識的に経験されたがすぐに忘却された」という解釈を退けている（Prinz 2010b）。

検出される精度が増すことが示された。

さらに、カクテルパーティー効果においては、上述の二つの事例のような低次の処理しか必要としない感覚的な顕著性によってではなく、ある程度高度な処理を必要とする意味情報によって注意が引きつけられる。私がパーティーで知人と会話を交わしているとき、周囲の人々が織り成す会話は、ある程度の処理を受けつつも、意識的なものとはならず流れ去ってゆく。だが、それらの会話のなかに私に関連する情報（私の名前など）が登場したとき、私はその情報が含まれている会話に注意を引きつけられ、その会話は突如として意識されるようになる。上述のマックとロックによる一連の実験では、カクテルパーティー効果の視覚バージョンとでも言うべき結果が確認されている（Mack and Rock 1998, chap. 5）。先ほどの実験デザインにおいて、十字型図形の近傍に呈示される刺激を被験者自身の名前にすると、他人の名前や普通名詞の場合に比べ、何かが見えたと報告できたり、その刺激を正しく同定できたりする確率が有意に上昇した。これは、自分の名前という関連性の強い刺激によって注意が引きつけられ、そのことによって当該の刺激が意識的になったのだと考えられる。

以上の証拠（ポップアウト現象、ポスナーの実験、カクテルパーティー効果）は、何かが意識的になることにとって、それに注意が向くことが十分であることを示唆している。それゆえ、もし以上の議論が正しいとすれば、現在得られている知見は、中間レベルの表象が意識的となることにとって、それが注意によって制御されることが必要十分であることを支持していると言える。

## 2. 3 注意の機能とその神経基盤

ここまで、意識の注意制御説を支持するためのプリンツの議論をみてきたが、そもそも注意とは何なのかについて何も説明を加えてこなかった。そこで次に、プリンツが注意という概念をどのように理解しているのかを押さえておきたい（Prinz 2005; 2010a; 2010c; De Brigard and Prinz 2010）。

注意は一見多様な現象を含んでいる。たとえば、先に見た「ポップアウト」も注意の一種である。ポップアウトは受動的であるが、注意は能動的でもありうる。何かを「探索する」ときや、対象がもつ特定の性質に「着目する」ときがそれである。また、ある対象を持続的に「監視する」ときや、その動きを「追跡する」ことも注意と呼ばれうる。これらは選択的な注意であるが、注意は拡散的にもなりうる。周囲に「警戒を配る」ときや、周囲を「見渡す」ときがそうである。プリンツは、これら多様な現象のすべて（あるいは多く）は同一の本質を共有する自然種であり、その本質は経験的に探究可能であると考える。

では、それらの現象が共通にもつ本質とは何なのだろうか。この問いに対しては、心理学的な機能に関わる比較的マクロなレベルから、細胞の働きに関わる比較的ミクロなレベルまで、さまざまなレベルでの応答が可能である。プリンツはまずマクロなレベルから出発する。

ポップアウト現象を例にとろう。ポップアウトは刺激間の競争を先行過程として含んでおり、その競争に打ち勝った刺激が注意による制御を受けることになる。では、その刺激



は競争に打ち勝つことで何を得るのだろうか。プリンツによれば、競争に勝った刺激は、競争に負けた刺激とは異なる特定の処理過程へと利用可能になる。それは、そこに参入した情報を報告に利用したり、推論へと結びつけたり、あるいは後の利用のために一時的に保存しておくといった役割を担う熟慮的な処理過程である。この処理過程とはワーキングメモリに他ならない。トップダウン型やボトムアップ型、焦点型や拡散型といった多様な注意現象は、ワーキングメモリに対して制御下にある情報を利用可能にするという機能を共通にもっているとプリンツは考える。

「注意はワーキングメモリに入力される情報の門番役を果たす」というこの仮説に対してはさまざまな経験的証拠が挙げられている (Awh et al. 2006)。たとえば、ロックとガットマン (Rock and Gutman 1981) は、被験者に対して色の異なる二つの部分的に重なった図形を呈示し、そのうちの一方に注意を向けさせた。その後、それらを含むいくつかの図形のなかから先行するタスクにおいて呈示されたものを選択するよう求めた。その結果、注意を向けられた図形は向けられなかった図形に比べて想起されやすいということが示された。また、不注意盲に関する実験では、ワーキングメモリに負荷のかかるタスクを行わせたときには、検出すべき刺激に注意を向けることがより難しくなることが示されている。先に挙げたシモンズとシャプリスの実験でも、バウンドしたパスとバウンドしなかったパスを別々に数えるように求めた場合には、ゴリラの着ぐるみを着た人物を検出できた被験者の割合は減少するという結果が出ている。このことは、ワーキングメモリの容量不足によって注意の配分機能が抑制を被りうることを示している<sup>107</sup>。

プリンツは次に注意を解剖学的な観点から特徴づけている。注意に関わる脳部位としては、半側空間無視の箇所ですべたように、まずは下頭頂皮質が挙げられる<sup>108</sup>。プリンツは、下頭頂皮質は注意の座そのものではなく、さまざまな注意タスクにおいて役割を演じている共通の制御機構であると述べる。注意による制御の対象となるのは知覚経路で処理されている表象であり、そうした知覚表象は注意によって制御されることでワーキングメモリに対して利用可能となる。ワーキングメモリは複数の下位機構から成立していると考えられているが、おおむね外側前頭皮質 (**lateral frontal cortex**) と関連しているとされる<sup>109</sup>。それゆえ注意は、後頭葉や側頭葉などの知覚経路と、その制御に関わる下頭頂皮質、そしてワーキングメモリに関わる外側前頭皮質にまたがる回路を含んでいると考えられる。

以上のような機能的・構造的な特徴づけに加えて、プリンツは注意の細胞レベルでの神経基盤についても仮説を提示している。これまで、脳画像研究の成果によって、注意がそ

<sup>107</sup> ただし、この結果は、ワーキングメモリが注意配分の機能を直接担っていることの帰結として解釈されるべきではない。注意がワーキングメモリに対して情報を利用可能にするというプリンツの見方からすれば、この結果は、ワーキングメモリが容量不足になったことによって、それ以上の情報を伝達しないよう、注意に対してトップダウンの抑制が行われ、その配分が妨げられたと解釈されるのが妥当であろう。こうした解釈が正しいか否かは経験的に探究されるべき問題である。

<sup>108</sup> この部位は第五章第二節で視覚的指標の配分に関わる領域として紹介した頭頂間溝下部領域と重なる。視覚的指標が選択的注意のメカニズムであることを考えれば、この対応関係は当然の結果であると言える。

<sup>109</sup> ただし、ワーキングメモリのすべて単一の部位によって担われているわけではない。たとえば、言語的・聴覚的なワーキングメモリには縁上回 (**supramarginal gyrus**) が関与していることが示唆されている (Paulesu et al. 1993)。

の制御部位における神経活動の増加を伴うということが知られている。では、その増加は細胞レベルでのどのようなメカニズムによって引き起こされているのだろうか。マカクザルに対する電気生理実験の結果は、サルが呈示刺激の運動を追跡しているとき、計測部位（V4）においてスパイク間隔の短い介在ニューロン（interneuron）の活動の増加が見られるということを示している（Mitchell et al. 2007）。だが、介在ニューロンは抑制性であり、かつ、ごく短い距離の投射しか持たない。これは、注意が神経活動の増加を含むという脳画像研究の知見と一見矛盾しているように見える。だが、別の電気生理実験の知見によれば、短距離の抑制ニューロンの活動は、それと結合された細胞に対して位相固定的な振動（30～90 ヘルツのガンマ波）を生み出す（Sohal and Huguenard 2005）。この位相の固定によって、抑制されたニューロン群には集団的な同期が引き起こされる。実際、フリースら（Fries et al. 2008）は、マカクザルが注意を行っているときに V4 においてガンマ帯における位相同期が確認できることを示した。このガンマ帯における位相同期は、同期したニューロン集団が発する信号をより遠方まで伝播することに貢献する<sup>110</sup>。知覚経路の注意制御部位における表象は、このような位相同期のメカニズムによってワーキングメモリに対する利用可能性を獲得すると考えられる。

以上、注意の本質的な機能とその神経基盤に関するプリンツの分析を追ってきた。プリンツによる注意の定義に関して一つ注意すべきは、それが注意をワーキングメモリへの利用可能性によって特徴づけているという点である。注意制御説によれば、意識はワーキングメモリへ実際に情報が利用されることによってではなく、利用可能となることによって生じる。これは、ワーキングメモリへの実際のコード化を意識の要件とする「グローバルワークスペース理論」（Baars 1988; Dehaena and Naccache 2001）と鋭い対照をなす。プリンツが実際の利用ではなく利用可能性による定義を支持する中心的な理由は、ワーキングメモリで処理される情報は中間レベルではなく高レベルの表象だという点である

（Prinz 2010a, pp. 12-13）。もしワーキングメモリで利用される情報が高レベルのものであるとすれば、グローバルワークスペース理論は AIR 理論の半面である中間レベル説に反することになる。中間レベル説が正しいとすれば、意識の媒体となるのはワーキングメモリに対して利用可能となった中間レベル表象であり、ワーキングメモリに実際に利用される高レベル表象はその埒外にあることになる。

### 第三節 意識の AIR 理論への批判

意識の AIR 理論が正しいとすれば、注意は中間レベル表象が意識的なものとなることに

---

<sup>110</sup> プリンツはこうした位相同期の機能を次のような例によって説明している。「あなたが大群衆を見下ろしてバルコニーに立っており、群衆の各々はすぐ隣の人とおしゃべりに勤しんでいるとしよう。結果として、会話の声は解読不可能な不協和音となるだろう。いま、その群衆のなかのある集団が同じことを同じときにしゃべり始めたとしよう。その寄せ集まった声は群衆を乗り越え、バルコニーの上でも聞き取ることができるようになるだろう。同じように、ニューロン群が同時に発火したとき、その信号は神経系の他の領域へと到達できるようになる」（Prinz 2010c, pp. 2-3）。

にとって必要十分である。しかし、コッホと土谷 (Koch and Tsuchiya 2007) が指摘するように、近年のいくつかの実験結果は「意識なしの注意」と「注意なしの意識」が可能であることを示しているようにみえる。プリンツはそれらの実験結果が AIR 理論への反証となっているという解釈に対して反論を加えている。後述するように、それらの反論は有効なものであると思われる。だが、意識に対する注意の必要性に対しては、意識の周縁という別の論点からの批判が可能である。この批判に取り組む前に、次項ではプリンツ自身が取りあげている反例のうちの主要なものとそれらへの応答を確認しておこう。

### 3. 1 意識なき注意と注意なき意識

まずは、「意識なしの注意」の存在を示すとされる反例である。ケントリッジら (Kentridge et al. 2004) は、GY と呼ばれる盲視患者を被験者として次のような実験を行った。まず、スクリーンの中心に矢印を呈示し、それに続けて GY の二つの盲視領域のいずれかに垂直または水平の線を呈示した。GY には矢印は見えるが、盲視領域にあるため線は見えない。GY に線の向きを推測させると、矢印が示す向きに線が位置していたときには正答率が向上した。ケントリッジらは、矢印が GY の注意をそれが指す盲視領域に向けさせ、そのことによって成績が向上したと結論づけた。もしこれが正しいとすれば、意識のない場合（より正確に言えば、呈示刺激に対する意識がない場合）でも注意が可能であるということになる。

プリンツは、この実験が他の解釈を許容するものであり、それらの解釈は AIR 理論に対する反証とはならないと指摘する (Prinz 2010a, pp. 16-17; De Brigard and Prinz 2010, pp. 54-55)。第一に、矢印によって誘導されたのは注意ではなく眼球のサッカード運動（特に、制御の困難な固視微動）であるかもしれない、検出精度の向上はそれによって標的刺激が分解能の高い中心窩に近づいたことの結果であるかもしれない。第二に、注意は標的刺激そのものではなく、標的刺激のある空間領域に対するものであるかもしれない。空間的注意は V4 や V5 の受容野の収縮を伴い、これによって刺激に対する反応細胞数が増加することで分解能が向上する (Moran and Desimone 1985)。検出精度の向上はこの受容野の収縮に由来するのかもしれない。いずれの場合でも、意識のない盲視領域内の呈示刺激に注意が向けられたと解釈する必要はない<sup>111</sup>。

次に、「注意なしの意識」の存在を示すとされる反例である。レディーら (Reddy et al. 2006) は次のような実験を行った。被験者はスクリーンの中央部に呈示された一群の文字 (T と L) がすべて同じかそうでないかを答えるよう求められる。このタスクと同時に、スクリーンの端に有名人の顔写真が一瞬呈示される。被験者らは、タスクが注意に対して負荷の大きなものであった場合にも、顔が呈示されたときに何かを経験したと報告した。これは、注意がない場合でも刺激に対する意識が成立していることを示しているように思われる。

しかし、プリンツはこの解釈が唯一のものではないと考える (Prinz 2010a, p. 19)。ま

---

<sup>111</sup> プリンツは他にジャンらの実験 (Jiang et al. 2006) を取りあげているが、それに対する反論の基本的な論点はケントリッジらの実験に対するものと同様である。

ず、レディーらは当該のタスクが注意の資源を消費し尽くすものであったことを示してはいない。だとすれば、顔を意識するために注意を分割して利用することができた可能性は否定できない。さらに、有名人の顔のような刺激はきわめて有意義なものであり、カクテルパーティー効果のように注意を受動的に引きつける効果が高いと考えられる。以上のような解釈の余地があるとすれば、レディーらの実験が注意のない意識の存在を示すものであると考える必要もなくなるだろう。

以上のように、「注意なき意識」や「意識なき注意」を示すとされる実験に対しては別様な解釈を呈示することができる。それゆえ、それらの実験は AIR 理論に対する有効な反例にはなっていないと結論できる。

### 3. 2 意識の周縁

AIR 理論に対してはプリンツが扱っているのとは別の観点からの批判を提起することができる。それは「意識の周縁」という論点からの批判である。たとえば、私が目の前のパソコン画面に注意を向けているとしよう。このとき、スクリーンの背後に広がっている無機質な壁や、机の上に乱雑に散らばった書類や文具、低く唸りを上げている換気扇の音、あるいは椅子の座面から受ける抵抗感などは、注意の「焦点」あるいは「前景」とはなっていないが、それでも何らかの仕方で意識されているように思われる。もちろん、これらはパソコン画面上の文字列に対する私の意識ほど明確なものではない。しかし、一人称的な観点からすれば、こうした「周縁」ないしは「背景」の少なくとも一部は意識の内容に含まれているように思われる。もし周縁が意識の構成要素であり、かつ、それが注意を向けられていないとすれば、意識にとって注意は必要ではないということになるだろう<sup>112</sup>。

この点をより明確に示すために、第五章で取りあげたピリシンらの多対象追跡 (MOT) 実験を想起しよう。MOT タスクでは、先行手がかりを与えられた標的刺激だけではなく、そうした手がかりを与えられなかった妨害刺激も、追跡が行われているあいだ同じようにディスプレイ内を動き回っている。このとき、(実際にデモを体験すれば明らかなように、) たとえ視覚的指標が付着できる最大数の標的刺激を追跡しているときでも、現象学的には、意識経験のなかに妨害刺激も含まれているように感じられる。だが、この場合には、標的刺激への配分で注意の認知的資源はほぼ尽くされていると考えられる (少なくとも、追跡のために注意がさらに別の対象に配分される余地はない)。だとすると、もし MOT タスクにおける現象学的考察が妥当であるとすれば、妨害刺激は注意の制御下にはないが意識的であるということになる。これは明らかに意識の注意制御説に反する。

この批判に対しては、まず、不注意盲などの実験結果に対する考察から生まれた「新しい懐疑論」<sup>113</sup>からの応答が考えられる。デネット (Dennett 2001; 2002) やブラックモア

---

<sup>112</sup> この「意識の焦点／周縁」という概念を「視野の中心／周縁」という概念と混同してはならない。視覚的な注意には、サッカード運動による注視方向と注意方向が一致する「明示的注意 (overt attention)」と一致しない「潜在的注意 (covert attention)」が区別できる。前者は行動に表れる注意であり、後者は表れない注意である。焦点的注意を向けられている部分は意識の焦点となると考えられるが、このときの注意が潜在的注意であるとすれば、意識の焦点と視野の中心とは一致しないことになる。

<sup>113</sup> この名称は Noë 2002 による。

(Blackmore 2002) を代表的な論者とする新懷疑論によれば、われわれは自らの意識経験のある側面に関する一人称的判断において誤りを犯す傾向がある。その側面とは「われわれは注意の焦点領域においてだけではなく、その外部の領域においても意識経験を有する」というものである<sup>114</sup>。新懷疑論の解釈では、不注意盲の結果は、われわれが注意の焦点の外部に存在する事物について意識経験をもってはいないということを告げており、かつ、不注意盲の結果を知らされたときにわれわれが経験する「驚き」は、われわれの大多数はわれわれが注意の外部にある事物に対して意識経験を有していると信じているということを示唆している。したがって、もしこうした解釈が正しいとすれば、われわれは意識の周縁に関する現象学的な判断において誤りを犯していることになる。このような現象学的な判断に関する信念の誤りはある種の錯覚であり、かつ、この錯覚は個々の経験内容ではなく経験それ自体に関わるもの（物事の見かけではなく、物事の見かけの見かけに関わるもの）であることから、新しい懷疑論は「壮大な錯覚 (the Grand Illusion)」論とも呼ばれる。

われわれが新懷疑論者たちの述べるような錯覚に陥る傾向をもつとすれば、AIR 理論に対する意識の周縁からの批判は退けられることになるだろう。なぜなら、新懷疑論者たちが正しいとすれば、意識経験に関するわれわれの一人称的な理解に反して、実際には周縁における意識経験は存在しないということになるからである。注意の焦点の外部に注意が向けられていないとしても、そもそもそうした外部において意識経験が成立していないのだとすれば、それは注意制御理論を脅かすものとはならない。

しかし、フォードによれば、不注意盲の実験結果は、新懷疑論者たちの主張とは逆に、注意の外部における意識経験の存在を示していると解釈できる。フォードはこのことを示すために三つの論点を呈示している (Ford 2008, pp. 74-77)。以下、順番に見ていこう。

第一に、われわれはしばしば、視野の端に何かを見た気がしたり、幽かに何かが聞こえた気がしたりすることがある。こうした日常的な経験は、注意の外部にある何かが意識に上っており、その何らかの特徴をおぼろげながら把握していたことを示しているのではないだろうか。フォードは、マックとロックの実験から、こうした日常的な観察を裏書きする経験的証拠が得られると論じる。上述のように、マックとロックは被験者に十字型の図形を呈示し、縦と横の線のどちらが長いかを答えさせた。被験者がこのタスクに従事しているあいだ、十字型図形の近傍に別の刺激が瞬間呈示された。被験者の一部はこの刺激に気づき、それが何であったかを同定することができたが、他の一部は十字型図形以外のものに気づくことができなかった。また別の一部は、十字型以外に何かを見たと報告したが、それが何であったかを同定することはできなかった。この第三の答えは、注意の外部にお

---

<sup>114</sup> 新懷疑論の主張に対するこのような解釈は本文のすぐあとで登場するフォードによる (Ford 2008)。この解釈はノエによる新懷疑論の解釈 (Noë 2002; 2004, chap. 2) とは異なっている。ノエの解釈によれば、新懷疑論がわれわれに帰しているのは、「われわれはスナップショットのような詳細な脳内表象をもっている」という信念であり、不注意盲現象はこの信念が誤りであることを告げている。しかし、ノエ自身が認めているように、このような信念帰属は哲学者や心理学者による捏造であり、人々は実際のところこのような信念にコミットしてはいない。フォードは、新懷疑論は大部分の人々が実際にコミットしている信念を標的にしているものとして解釈すべきとし、本文のような解釈を提示している。

いて不明確ながらも意識経験が成立していたことを示しているとフォードは主張する。

しかし、この第一の議論に対しては、前項で述べたレディーらの実験に対するプリンツの反論による批判がそのまま適用されてしまう。十字型図形を構成する線のうち縦と横のどちらが長いかを見分けるというタスクは、確かに注意を要するものではあるが、注意に必要な資源を尽くすものであるということは保証されていない。だとすれば、別の刺激によって注意が受動的に引きつけられ、それによって気づきが可能となったという可能性は十分に考えられる。また、当該の刺激が何であるかを同定できなかったということは、それが意識の周縁に属しているということを示しているのではなく、単に引きつけられた注意が同定のために必要な配分量に届かなかったということを示しているだけかもしれない。だとすれば、フォードの第一の議論は意識の周縁の存在を示すものとして十分であるとは言えないだろう。

次に、フォードによる第二の議論を見てみよう。フォードが意識の周縁の存在を示すものとして第二に挙げているのは固有受容感覚（*proprioception*）である。固有受容感覚はわれわれの筋肉や関節、あるいはそれらの相対的な位置に関する内的感覚である。固有受容感覚はわれわれが覚醒している限り休むことなく常に働いているが、われわれは通常それに注意を向けることはほとんどない。しかし、ひとたびそれが失調を来したときには重大な結果が生じる。フォードはサックスの『妻を帽子とまちがえた男』から多発性神経炎によって固有受容感覚を失った患者についての記述を引用している。

足もとを見つめていなければ立っていることもできなかった。手ではなにも持つことができない。見つめていなければ手はどこへ動くかわからなかった。何かを取ろうと手をのばしたり、食べものを口へ運ぼうとすると、ねらいがはずれてしまう。根源的なコントロールや調整ができなくなったように、ひどくそれてしまう。[……] 彼女はベッドの上で起きあがることさえほとんどできなかった。ガタンとくずれてしまうのだ。顔は奇妙に無表情になり、だらりとたるんだ感じである。顎が垂れさがり、口があいてしまっている。音声を発する構えもとれなくなっている。[……]「なにか恐ろしいことがあったんです」彼女はおよそ無表情な声で言った。「からだの感覚がないんです。ふしぎなへんな気分です。からだがなくなったみたいです」(Sacks 1985, p. 45 邦訳一〇〇頁)

確かにわれわれは固有受容感覚に通常注意を払うことはないが、この引用が示しているように、それが消え去った場合にはたちどころにその喪失に気づく。フォードは、このことは固有受容感覚が常に作動しており、通常の意識経験に対して周縁的ながらも貢献しているということを示していると論じる。

だが、この第二の議論に対しても次のような再反論が可能である。上述のフォードの議論の前提となっているのは、「固有受容感覚が失調を来した場合、われわれがそれに対してすぐに注意を向けることができるのは、固有受容感覚が意識の周縁に存在し、それがわれわれの身体をいわば暗黙裡に監視しているからである」というものであろう。だが、これ

対しては別の解釈も可能である。われわれが円滑に日常的な運動を行っているとき、固有受容感覚はいわば「透明化」して無意識のものとなっているかもしれない。固有受容感覚に失調が生じた場合、それまで円滑に行うことのできていたさまざまな身体運動の遂行が阻害される。この運動失調はそれ自体で自らの身体感覚に注意を向けさせるのに十分な原因となる<sup>115</sup>。それゆえ、「運動失調それ自体が、それまで無意識的だった固有受容感覚に対する注意の配分を引き起こす」というこの解釈が成り立ちうるとすれば、フォードの第二の議論も意識の周縁の存在を示すものとは言えないということになる。

最後に、フォードの第三の議論に移ろう。ふたたびシモンズとシャブリスの不注意盲に関する実験に立ち戻りたい。最初のビデオ鑑賞でゴリラ（の着ぐるみを着た人物）を検出できなかったとき、被験者はそのビデオのスクリーン全体を観ていたはずだと主張する。しかし、新懷疑論者によれば、もし意識の周縁でゴリラを見ていたとすれば、そこにゴリラがいることに気づいていたはずであり、したがってこの被験者の主張は誤りである。

だが、この実験結果に対しては被験者の主張と整合的な別の解釈を提示しうる。それは次のようなものである。

被験者がボールのパス回数を数えることに注意を向けていたとき、彼女はスクリーンの全体を——そのほとんどは周縁的にはあるが——確かに見ていた。彼女は白い服を着た人々に注意を集中していたため、黒い服を着た人々を積極的に無視していた（ボールをパスし合っている彼ら／彼女らによって邪魔されないように）。ゴリラがゆっくりと歩いてきたとき、彼女はそれを確かに見ていたが、妨害刺激の候補として無視されるべき、黒い服を着た人物としてしか見ていなかった。それゆえ彼女はゴリラを無視した。(Ford 2008, p. 77)

黒い服を着た人々を積極的に無視するためには、黒いものを身につけているという特徴に関して、それらの人々を弁別的に意識している必要がある。実際、白チームのパスを数える場合にはゴリラの検出率は42%だったが、黒チームのパスを数える場合には83%に上昇した。黒チームのパスを数える場合には、逆に白い服を着た人々が無視され、黒っぽい着ぐるみをきたゴリラはタスクに関連ある刺激として捉えられることで検出率が上がったのである。白チームのパスを追う場合には、ゴリラは「黒っぽい」という特徴のみを弁別され、それ以上に弁別されることなく意識の周縁に置かれたため、ゴリラであると気づかれなかったが、黒チームのパスを追う場合には、色に関する弁別ののち、標的刺激として意識の中心に置かれたため、さらなる弁別の対象となってゴリラであると気づかれたと考えられる。

さらに言えば、あるチームのパスを数えているときに他のチームの動きが端的に意識にのぼらないのだとすれば、他のチームの動きはタスクを妨害する刺激として働くことはないだろう。これはチームを一つだけにしてパスを数えさせる場合にどれだけタスクが容易

---

<sup>115</sup> これはちょうどハイデガーが道具や技能について述べたのと類比的である（『存在と時間』の第十五節～第十八節を参照）。周知のように、こうした解釈はドレイファスによるものである（Dreyfus 1990）。

になるかを考えれば明らかだろう。他のチームが加わった場合、その動きは端的に無視できるものではなく、積極的な努力を行って無視すべきものとして感じられるのである。

この解釈は MOT タスクに対する解釈としても適用できる。MOT では、先行手がかりを与えられた標的刺激以外の刺激は、注意の周縁に置かれながら、妨害刺激として積極的に無視される。標的刺激と妨害刺激は同じ見かけをしているため、前者を追跡するためには、その軌跡を後者の軌跡と取り違えないようにする必要がある。このために必要なのは、妨害刺激に注意を向けて追跡する（それゆえ、標的刺激と同じように意識する）ことではなく、単に標的刺激と異なるものとして弁別し続ける（それゆえ、軌跡が違うという点についてのみ周縁的に意識する）ことである。実際、妨害刺激の軌跡が標的刺激の軌跡と一定程度近接して弁別が困難になる場合には、標的刺激を正しく選択する率は下がるだろう。

この解釈の利点は、不注意盲の実験結果を整合的に解釈しようという点だけではなく、新懷疑論とは異なり、人々の日常的な直観に過度の誤りを帰属させる必要がないという点にもある。この解釈によれば、人々の直観における誤りは、意識経験が周縁においても成立しているという点に関するものではなく、その周縁における弁別性能が予想に反して低いという点に関するものである。それゆえ、この解釈によれば、人々は意識経験が周縁においても成立しているという直観に関しては正しいとされる。一般に、ある実験結果に関する解釈としては、日常的直観の改訂に対してより保守的であるものの方が望ましいと考えられる。それゆえ、フォードの第三の議論が正しいとすれば、意識の周縁からの解釈は実験結果の解釈に関する整合性という点からだけではなく、その保守性という点からも対抗する解釈に比べ優越していると言える。

以上をまとめよう。フォードの議論のうち、第一のものと第二のものは意識の周縁の存在を示すものとして十分ではないが、第三のものはそれらに比べて見込みのある議論である。また、新懷疑論のように意識の周縁が存在しないと考えるのに比べ、存在すると考えた方がより保守的な仕方を実験結果の解釈を与えることができる。それゆえ、意識の周縁の存在を否定する新懷疑論の主張に対しては否定的であるべきと結論できる。だとすれば、意識の周縁からの批判は AIR 理論に対する反論として一定の有効性をもつと言えるだろう。

### 3. 3 拡散的注意

意識の周縁の存在が AIR 理論に対する反例となるためには、それが注意の外部に位置しているということが保証されなければならない。われわれはここまで、それが注意の外部にあると暗に前提して議論を進めてきた。だが、この前提に対してはプリンツの側からさらなる反論が提起されうる。前項で意識の周縁を注意の外部として規定した際に念頭においていたのは、注意のなかでも特に「選択的注意」である。しかし、前節第三項で触れたように、プリンツは注意に選択的なものだけではなく拡散的なものも含まれると述べている。だとすれば、意識の周縁はこの「拡散的注意 (diffuse attention)」によって意識的なものとなっているという可能性が残されている。プリンツは実際、この拡散的注意という概念を用いていくつかの反例を退けている。



たとえば、ラメによる次のような変化盲実験（Lamme 2004）がその一例である（De Brigard and Prinz 2010, pp. 56-57）。その実験では、被験者はまず円形に配列された複数の図形を 500 ミリ秒間呈示される。続いて、灰色のスクリーンが 200~1500 ミリ秒間挿入される。その後、挿入前と同じ配列がそのなかの一つの図形だけを変えて呈示される。このとき、それらの図形の一つがオレンジ色の線によって指示され、被験者はそれがスクリーンの挿入前後で変化したかどうかを答える。この場合の正答率は 60% だった。これに対して、オレンジ色の線が最初から示されていたときには（容易に予想できるように）正答率は 100% だった。興味深いことに、灰色のスクリーンが呈示されているときにオレンジ色の線を呈示した場合の正答率は 88% と高いものだった。これは、最初の配列にあるすべての図形が意識されており、灰色のスクリーンに変わっても意識的な感覚記憶としてそのまま残存していたということを示唆している。注意は手がかり刺激によって誘導されるが、最初の刺激が消えた後でも感覚記憶が存続している限り、そうした誘導を任意の図形に対して行うことが可能である。この結果は、各々の図形は手がかりが与えられる前から——それゆえ、注意が向けられる前から——意識的であったということを示しているとラメは論じる。

これに対してプリンツらは、最初の配列が呈示されたとき、ディスプレイ全体にわたって注意が拡散的に配分されていたと考えればよいと応じる。この場合、最初の配列に含まれていた各々の図形は選択的に注意を向けられていたわけではないが、全体として拡散的に注意を向けられていたということになる。各々の対象は、この拡散的注意によってワーキングメモリへの利用可能性を保証され、その結果として意識的なものとなっていたと考えられる。その後の手がかりによって誘導された選択的注意は、図形の一つをワーキングメモリへと実際にコード化する役割を果たしていたと考えられる。このように考えれば、ラメの実験を注意なしの意識の存在を示すものとして解釈する必要はなくなる。

前項で論じた意識の周縁からの批判に対しても、プリンツは同様の道具立てによって応答することができるだろう。たとえば、シモンズとシャブリスの不注意盲の実験に対しては次のような解釈を行うことができる。被験者が白チームのパスの回数を追っているとき、白い服を着た人々（あるいは、特にそのなかでもある時点でボールに関わっている人々）は選択的注意の対象として比較的明瞭に意識されているが、黒い服を着た人々（あるいは、その人々に加えてある時点でボールに関わっていない白い服を着た人々）は拡散的注意の対象として比較的漠然と意識されている。ゴリラが検出されにくいのは、それがいかなる注意の対象ともなっていないからではなく、より肌理の粗い弁別しか行うことのできない拡散的注意の対象としかなっていないからである。さらに、この実験では注意に関わる資源の多くはパスの回数を数えるための選択的注意へと振り向けられている。それゆえ、それと同時に進行している拡散的注意に対しては、拡散的注意のみが行われる場合に比べてわずかな資源しか投入されていないということになる。このこともゴリラが検出される精度の低さに関与していると考えられる。MOT 実験における妨害刺激の意識経験に対しても、同様に拡散的注意を用いた解釈を適用することができるだろう。だとすれば、たとえそれらの実験が意識の周縁の存在を示しているとしても、そのことは AIR 理論に対する反

論とはならない。意識の周縁は選択的注意によってではなく拡散的注意によって制御されているのである。

しかし、拡散的注意という概念を利用したこうした反論に対しては以下のような批判を展開することができる。

まず、拡散的注意としてプリンツが挙げていた事例と、上述の意識の周縁に関わる事例とのあいだには日常的な記述のレベルにおいてギャップが存在するという点を指摘できる。プリンツが拡散的注意の事例として挙げていたのは、周囲に「警戒を配る (vigilant)」という事例や、周囲を「見渡す (survey)」といった事例である。確かに、われわれはそれらの事例を日常言語において「注意を配る」と呼ぶ行為に含まれるものとして認めることができる。だが、何かが意識の中心にあるとき、その周縁に対しても同様に「注意を配る」という概念を適用することができるだろうか。むしろわれわれは、選択的注意を向けている対象の外部に対しては、「注意を向けていない」と記述するのが適切だとみなすのではないだろうか。

だが、こうした日常言語の用例からの批判は「経験哲学者」(Prinz 2008) を自認するプリンツに対してはさしたる重みをもたない。プリンツの観点からすれば、重要なのは日常言語においてわれわれが意識の周縁という事例を拡散的注意の事例と同様に記述するか否かではなく、それらが神経基盤を共有する同一の現象であると認められるか否かである。そしてもちろん、これは経験的に明らかにされるべき事柄である。

しかし、たとえ意識の周縁が拡散的注意によって制御されていると仮定したとしても、なおそこにはいくつかの問題が含まれている。上述のように、プリンツは日常的に注意と呼ばれるさまざまな現象を共通の本質をもつ一つの自然種と仮定し、現在の経験的知見からその機能と神経基盤の解明を企てている。その分析によれば、注意は知覚経路における中間レベル表象をワーキングメモリへと利用可能にするという機能を持ち、下頭頂皮質を脳内における共通の制御基盤とし、細胞レベルにおいて介在ニューロンによる抑制信号とそれによって引き起こされる細胞群のガンマ同期とを示す現象である。だが、プリンツが注意に関する神経基盤を解明するために引用した実験は、すべて選択的注意を対象としたものであり、拡散的注意を対象としたものではない。たとえば、ミッチェルらの実験

(Mitchell et al. 2007) では、MOT 実験と同様の対象追跡パラダイムが使用されている。また、フリースらの実験 (Fries et al. 2008) では、固視している対象の色変化を検出するというタスクが使用されている。容易に見てとれるように、これらのタスクは選択的注意に関わるものである。それゆえ、注意の神経基盤に関するプリンツの仮説が拡散的注意にも適用されうるという主張は現在のところ経験的支持のない単なる推測でしかない。

さらに言えば、拡散的注意に関するものとして現在までに行われている諸研究は、それがプリンツの考えるように選択的注意と対比されるものではなく、選択的注意の一種にすぎないことを示唆している。「拡散的注意 (diffuse attention)」または「分散的注意 (distributed attention)」という語を用いている多くの文献では、それら二つは特に区別されることなく、ともに焦点的注意 (focal attention または focused attention) と対比

されるものとして記述されている<sup>116</sup>（ここでは混同を避けるため、焦点的注意と対比されるものとしての拡散的注意を「分散的注意」と呼ぼう）。それらの文献では、多くの場合、分散的注意は「特定の対象に焦点的注意が向けられていない状態」といった否定的な特徴づけしか与えられておらず、それがどのようなメカニズムであるかは明らかにされていない<sup>117</sup>。これに対して、小池と齋木は分散的注意に関してそのメカニズムの解明に踏み込んだ研究を行っている（小池・齋木 2006）。先行研究となるラックとフォーゲルによる変化検出課題では、被験者は同時に四つ程度の物体表象を生成し保持できることが明らかにされている（Lack and Vogel 1997）。だが、齋木による過去の研究からは、視覚的な属性情報を統合した物体表象は一度に一つ程度しか保持できないという結果が得られている。それゆえ、同時並行的に複数の物体表象を保持するメカニズムは、対象がもつ属性情報を利用したメカニズムではないと考えられる。小池と齋木は、前者を「何らかの変化の有無を検出する」分散的注意メカニズム、後者を「属性情報を統合した物体表象を生成／保持する」焦点的注意メカニズムと考え、分散的注意の計算論を組み込んだ神経回路モデルを用いて実験を行い、ラックとフォーゲルの実験と一致する結果を得ている。この研究によれば、分散的注意は対象の顕著性情報のみに基づいて複数の物体表象を生成し保持するメカニズムである。これは視覚的指標メカニズムと同一のものであると考えられる。実際、小池と齋木はこのメカニズムをカーネマンらの対象ファイルと関連づけている。したがって、ここで言われている「分散的注意」とは視覚的指標の配分による対象ファイルの作成と同一であり、「焦点的注意」とは対象ファイルへの諸性質の統合と同一であると解釈することができる。もし分散的注意が視覚的指標のメカニズムと同じものであるとすれば、それは選択的注意と対比されるものではなくその一種であるということになるだろう。第五章で述べたように、選択的注意がこうした分散的注意と焦点的注意という二段階の過程によって構成されているという見方には脳画像研究からも支持が得られている（Xu and Chun 2006; 2009; Xu 2009）。

もしプリンツの言う拡散的注意がこのように分散的注意と同じものであるならば、意識の周縁が拡散的注意によって意識的になっているとはもはや主張できなくなる。このことは MOT 実験の場合について考えてみるならば明らかである。MOT 実験では、指標が最大数の対象に付着している場合、それらの標的刺激に対する配分で分散的注意の容量は尽きている。だが、このとき周囲にある妨害刺激も意識的であるとすれば、それらの妨害刺激を意識的なものとしているのは分散的注意の働きではないということになる。

この論点に対しては次のような反論が提起されるかもしれない。ワーキングメモリに関する研究では、われわれは何らかの空間的まとまりや意味的まとまりをもつ複数の対象をチャンク（塊）化することで、そのチャンクを一つの対象として扱うことができるということが知られている。たとえば、多くの人は“CIAKGBFBI”という文字列を九個の無意味な文字列としてではなく、有意味な頭字語からなる三個のチャンクとして記憶すること

<sup>116</sup> たとえば、Yantis and Jonides 1990; Oades and Dittmann-Balcar 1995; Moore and Egeth 1997; Belopolsky et al. 2007 といった文献が挙げられる。

<sup>117</sup> 多くの実験では、拡散的注意は焦点的注意の働きを解明するための比較対象として実験デザインに組み込まれているのみであり、拡散的注意自体が解明の対象とされることは稀である。

ができる。MOT 実験の場合にも、妨害刺激はこうしたチャンク化によって必要容量を軽減させることで分散的注意の対象となりえているのかもしれない。実際、シューとチェンの実験では呈示刺激に対してこのようなグループ化が行われうることが示されている (Xu and Chun 2006)。しかし、MOT 実験における妨害刺激がこのような仕方ではチャンクとしてグループ化されているとは考えにくい。なぜなら、妨害刺激は標的刺激と入り乱れながらディスプレイ内を移動しており、さらには、実験条件によっては色や形も自由に変化させるからである。これらは、妨害刺激が空間的まとまりや意味的まとまりをもたず、それゆえ一つのチャンクとしてグループ化するための動機づけを欠いているということを示唆している。

しかしながら、以上のような議論に対して、プリンツにはさらに次のような反論を行う余地が残されている。もともとプリンツが注意の拡散的な様態として記述していた、周囲に「警戒を配る」という事例や周囲を「見渡す」という事例は、ある種の準備状態を形成することで光景の全体に注意を払うものである。拡散的注意とはこうした準備状態に対して使用されるべきものであり、上述のような選択的注意の一種としての分散的注意に対して使用されるべきではない。用語上の混乱を避けるために、こうした意味での拡散的注意を「警戒的注意」と呼ぼう。意識の周縁はこのような警戒的注意によって意識的となっているのかもしれない。

しかしながら、このような反論に対しては次のような再反論を行うことができる。まず、警戒的注意は選択的注意と別物ではなく、選択的注意を素早くさまざまな対象へと移動させている（ザッピングしている）状態にすぎないのかもしれない。この場合には、意識の周縁を含む光景の全体へと一度に注意が向けられているわけではなく、光景を走査してゆく選択的注意の効果が通時的に総計されることで、光景の全体へと注意が払われているという見かけが生じているだけである。

また、仮に警戒的注意が選択的注意と別物であるとすれば、それは選択的注意とは異なる機能を有すると考えるべきであろう。たとえば、空港で警備員が周囲に警戒を配っているとしよう。このとき警備員は警戒的注意を用いて挙動不審な人物がいないかどうかをチェックしている。もし挙動不審な人物が視野に入ったならば、当該の人物に選択的注意を向け、その様子を仔細に観察するだろう。ここで警戒的注意は選択的注意の前段階として働いている。われわれは先にポップアウト現象に対するプリンツの考察を通じて、そこには刺激間の競争が行われる段階と、競争に勝った刺激に対して受動的に注意が向く段階の二段階の過程が含まれているということを確認しておいた。この分析に即して考えるならば、警戒的注意はこの刺激間の競争に対して、特定の特徴をもつ刺激が勝利しやすいようにバイアスをかける役割を果たすものと考えられることができる。空港警備の事例では、警戒的注意は、挙動不審な人物が選択的注意を振りやすいように、そうした人物がもつ特徴に対してトップダウンのバイアスをかけていると考えられることができる。だとすれば、警戒的注意はそれ自体が情報をワーキングメモリに対して利用可能にすると考えられるべきではない。もし警戒的注意と選択的注意のあいだにこのような機能の違いが存在するとすれば、その神経基盤も互いに異なる——それゆえ、両者は同一の自然種を構成しない——という

予想が成り立つだろう。この予想はもちろん経験的に検証されるべきものであるが、もしこの予想が正しいとすれば、選択的注意を注意の典型例とするプリンツの分析は、警戒的注意という意味での拡散的注意に対しては適用できないということになる。それゆえ、拡散的注意を選択的注意への準備状態として考えるという方略も見込みのあるものとはいいがたい。

しかし、プリンツからはさらに、拡散的注意は、対象依存的な分散的注意や、準備状態としての警戒的注意と同じものではなく、何らかの仕方で、選択的注意と同時に、かつ、対象とは独立に空間内に拡がりうるようなものであるという反論が提起されるかもしれない。現在の注意に関する科学的知見では認められていないものの、仮にこうした拡散的注意のメカニズムが存在しうるとすれば、意識の周縁はそうしたメカニズムによって意識的なものとなっているという可能性がある。

だが、こうした可能性に対しては、まず、注意が対象独立的なものでありうるという点に関してすら懐疑的な見解が存在している、という点を指摘できる。ピリシンによれば、いくつかの経験的証拠は、注意がもつばら対象を基本単位とするものであり、対象と独立に空間領域に向きうるものではないということを示している (Pylyshyn 2007, pp. 61-67)。まず、受動的な注意転換が生じる場合、注意は出発点となる対象と目的地となる対象のあいだを連続的に移動しているように見えるが、実際にはそうした注意の連続的な移動は生じておらず、出発点および目的地における注意の活性化レベルの漸次的な推移がそうした見かけを与えているにすぎない (Sperling and Weichselgartner 1995)。また、自発的な注意の移動においても、ピリシンはコーエンとの共同研究により、それが連続的な移動ではなく顕著な特徴から別の顕著な特徴へのジャンプによって成り立っているという見方を支持する結果を得ている (Pylyshyn 2007, p. 63)。さらに、ムーアら (Moore et al. 1998) によれば、注意の影響は、それが最初に引き寄せられた位置から、その最初の位置を囲んでいるより大きな対象全体に及ぶように拡がる傾向がある。これは、その対象が主観的輪郭によって構成されたものである場合にも見られる。加えて、いくつかの研究は、注意はそれが置かれている位置に留まるのではなく、対象とともに移動するという示している。たとえば、カーネマンら (Kahneman et al. 1992) の「対象特異的プライミング・ベネフィット (object-specific-priming-benefit)」に関する実験によれば、はじめに対象のなかに何らかのパターン (たとえば文字) が呈示され、対象が移動した後、ふたたびパターンが呈示されたとき、そのパターンが何であるかについての判断をなす時間は、それが以前現れた同一の対象のなかに現れるとき短縮される。また、復帰抑制 (inhibition of return) と呼ばれる現象によれば、注意が向けられたばかりの対象は、たとえそこに注意が呼び出されたとしても、ただちには (すなわち、約 300 から 900 ミリ秒以内) 再度の注意を向けられにくくなる。この復帰抑制の効果は、最初に注意を向けられた位置に留まるのではなく、対象に付随して移動することが示されている (Tipper et al. 1991)。これらの証拠は、注意選択の基本単位を構成するのが空間ではなく対象であることを示唆している。以上より、ピリシンは「注意が空虚な空間に配分されうるというかなり常識的な見解は、その意味が明瞭であるとはいいがたい」 (Pylyshyn 2007, p. 67) と述べている。このように空間

的注意に対する懐疑的な見方が存在する状況を踏まえるならば、対象独立的な拡散的注意なるものに訴えようとする戦略は動機づけを欠いていると言わざるをえないだろう。

さらに言えば、仮に（分散的注意とも警戒的注意とも異なる）拡散的注意なるものが存在していたとしても、そこにはなお以下のような問題が残されている。

「意識の周縁が拡散的注意の対象となっている」という主張が検証可能なものであるためには、意識の周縁が拡散的注意の対象となっているということを、それが意識的であるということと独立に主張しうるのでなければならない。そうでなければ、もはや「拡散的注意の対象となっている」という表現は「意識的である」という表現を言い換えたものにすぎなくなるだろう。ここで検証可能性を与えるものとしてプリンツが訴えることができるのが、「注意は一種の自然種である」という仮説である。仮に、意識の周縁が拡散的注意によって制御されており、その拡散的注意が自然種性によって確保される意味での注意に含まれることが経験的に確認されたとしよう。このときわれわれは、意識の焦点が注意の対象になっているというのとまさに同じ意味において意識の周縁が注意の対象となっているとすることができる。

しかし、この道行きもあまり明るい見通しをもったものではない。プリンツによれば、注意とは、知覚経路における中間レベル表象をワーキングメモリへと利用可能にするという機能を持ち、下頭頂皮質を脳内における共通の制御基盤とし、細胞レベルにおいて介在ニューロンによる抑制信号とそれによって引き起こされる細胞群のガンマ同期とを示す現象である。だが、意識の周縁に対応する表象については、この定義のいずれのレベルにおいても、それが注意の対象となっているということを確保するのは困難である。

第一に、ある表象がワーキングメモリへ利用可能になっているかどうかは、そうした利用可能性を支える神経活動と独立に観察可能な事実ではない。ある表象がワーキングメモリに実際に利用されているときには、多くの場合、観察可能な行動上の事実によってその証拠を見出すことができる。だが、実際に利用されているときには選択的注意の対象となっていると考えられるため、もはやその表象は意識の周縁ではなく意識の中心に位置していることになるだろう。それゆえ、その表象が意識の周縁にあるときに利用可能性を有しているかどうかを行動上の証拠のみから識別することはできない。

第二に、現在の注意に関わる神経ネットワークの知見は、そのほとんどすべてが選択的注意に基づいて得られたものである。それゆえ、意識の周縁にある表象に対しては、注意制御部位として知られる下頭頂皮質や前頭眼野からの投射が有意に高いレベルで確認できない可能性が高い。それゆえ、たとえ意識の周縁にある表象に関わる部位が何らかの仕方と特定できたとしても、それが現在注意に関わるものとして知られているネットワークに含まれる見込みは薄いだろう。だとすれば、脳部位のネットワークのレベルにおいても、意識の周縁に注意が向けられていると言える可能性は低いと言わざるをえない。

第三に、たとえ意識の周縁において選択的注意の際に見られるような細胞活動が観察されたとしても、それだけでそこに注意が向けられていると結論づけることはできない。プリンツ自身が認めているように、介在ニューロンによる抑制やガンマ帯における位相同期は広範に見られる現象であり、注意と特別な関わりをもたない脳領域においても生じうる

(Prinz 2010c)。それゆえ、注意の神経基盤は細胞レベルでの活動のみでは規定できず、よりマクロなレベルへの言及を含む仕方では規定できないかもしれない。しかし上述のように、よりマクロなレベルへの言及を行ったとしても、そのレベルにおける特定自体が大きな問題を抱えているため、おそらくは有効な援護を与えることはできないだろう。したがって、拡散的注意という概念を注意の自然種性によって救い出そうというアプローチも見込みのあるものではない。

以上の論述より、たとえ拡散的注意という概念を持ち出したとしても、意識の周縁を注意の内部にあるものとして承認することは困難である。それゆえ、意識の周縁という論点からの批判は、プリンツからの予想される再批判に抗して、AIR 理論に対する有効な反論であると認めることができる。

#### 第四節 意識と概念的 content の距離を埋める

以上の議論で示したように、中間レベルの表象が意識的であることにとって、それが注意の対象となることが必要十分であるとするプリンツの注意制御説は、意識に関する一般理論としてはいまだ十分な根拠をもっているとはいえない。そして、注意と意識の関係が必要十分関係ではないとすれば、本章の冒頭で掲げた、概念的分類が行われることと、その分類結果が意識的な視覚経験の内容になることとのあいだにある「距離」もいまだ埋められてはいないことになる。だとすれば、われわれは結局のところ振り出しに戻らざるをえないのだろうか。

いや、そうではない。AIR 理論に関するプリンツの分析のなかには、この「距離」をどのように埋めるべきかという問いに対して有益な貢献をなしている部分が含まれている。以下、そうした有益な部分を取り出すことにより、この距離を埋めるための方途を探してみたい。

本論で提示した自然化された概念主義のモデルによれば、感覚的分類の結果として得られるもろもろの感覚クラスは、視覚的指標の働きによって作成される対象ファイルへと統合されることで、命題的構造を備えた概念的 content となる。上述のように、視覚的指標のメカニズムは選択的注意の一種としての分散的注意であると考えられる。

プリンツによれば、注意は自然種の一つであり、知覚経路に含まれる中間レベル表象をワーキングメモリへと利用可能にするという機能を有する。すでに見たように、選択的注意と（そのようなものがあるとして）準備状態としての警戒的注意が自然種の一つとして本質を共有しているという見方に対しては懐疑的であるべき理由が存在する。だが、プリンツのこの機能分析は、それが選択的注意に関するものとして主張されている限り、多くの経験的証拠に支えられた有望な仮説であると認めることができる。このことを手短かに確認しておこう。

まず、選択的注意に含まれる焦点的注意と分散的注意は、それによって制御された情報をワーキングメモリに対して利用可能にするという機能を共通に有すると考えられる。無

論、両者の場合で利用可能となる内容の多寡には大きな違いがある。純粹に分散的注意だけが行われているときには、対象のもつ諸性質はいまだファイルへと統合されておらず、利用可能なのは対象の顕著性情報のみであるため、「何かが見えた」や「何かが動いた」といった程度の報告しか行うことはできない。マックとロックの実験の被験者が行った「何かを見た」という報告はこのケースに該当すると考えられる。これに対して、分散的注意に加えて焦点的注意を向けられた対象については、それがもつ色や形といった諸性質に関する具体的で詳細な情報を報告することが可能となる。だが、いずれの場合であってもワーキングメモリに対する情報の利用可能性が生じているという点で違いはない。

さらに、細胞レベルでの神経基盤に関しても、焦点的注意と分散的注意にはプリンツの行った分析をそのまま適用することができる。プリンツが引用していた実験を改めて想起しよう。注意による介在ニューロンの活動増加を示したミッチェルらの実験では、**MOT** 実験と同様の多対象追跡パラダイムが使用されており、また、注意がガンマ帯の位相同期をもたらすことを示したフリースらの実験では、固視している対象の色変化を検出するというタスクが使用されている。前者のタスクで要求されるのは分散的注意であり、後者のタスクで要求されるのは焦点的注意である。さらに、両者の結果を媒介する役割を果たすソーハルらの実験は、介在ニューロンの抑制信号によってガンマ振動が生じることを示したものであるが、生体組織のスライスを用いた電気生理実験であり、どのような注意タスクにも関係していない。それゆえ、これらの実験結果は選択的注意一般に対して妥当するものと考えることができる。焦点的注意と分散的注意のいずれにおいても、ワーキングメモリへと情報が利用可能になるのは、その制御部位でガンマ帯における位相同期が生じることによってであると考えられる。

次に、意識の周縁という論点からの批判について、それが **AIR** 理論のどの側面に対する批判として働くのかを確認しておきたい。前節で論じたように、意識の周縁が注意の外部にあるとすれば、注意は意識の成立にとって必要ではないということになる。だが、このことは注意（特に注意の典型例である選択的注意）が意識の成立にとって十分ではないということを示すものではない。それゆえ、**AIR** 理論それ自体を全面的に擁護することはできないとしても、プリンツの議論から、少なくとも選択的注意が意識の成立にとって十分であるという主張に支持を与えることはできる。ただし、ここでは選択的注意が無意識的な情報を意識化するとはまでは言えない。なぜなら、選択的注意は意識にとっての十分条件でしかないがゆえに、無意識的な情報を意識化しているのは何か別の  $x$  という働きであり、選択的注意はその  $x$  という働きを必然的に伴っているだけだ、という可能性が残されているからである。だが少なくとも、プリンツの議論を利用することで、選択的注意が向けられるときには（向けられることによってではなく）、無意識的な情報は意識的なものになると主張することはできる。また、選択的注意とワーキングメモリとの結びつきを踏まえるならば、選択的注意は意識の周縁ないしは背景にあるものを報告可能なものとして前景化するという役割を担うと考えられる。これらを合わせると、「選択的注意は無意識的な情報や背景的な意識的情報を前景化するという役割を果たす」という主張が帰結する。これがプリンツの議論から取り出すことのできる有益なテーゼである。



ここで、概念主義にとって必要なのは意識経験とどのような結びつきであるかを反省してみよう。概念主義が唱えるのは、知覚対象に関する判断の基礎となる意識経験は概念的内容をもつという主張である。ここで、「知覚判断の基礎となる意識経験」とは、まずもって報告可能なものとしての前景的な意識経験に他ならない。それゆえ、概念的内容に対しては、特に前景的な意識経験との結びつきが確保できればよいということになる。そして、この結びつきはまさに選択的注意としての視覚的指標の働きによって確保することができる。視覚的指標のメカニズムは意識の必要条件を満たすものではないがゆえに、意識経験のなかには視覚的指標を付着されない内容も存在する。だが、視覚的指標のメカニズムは意識の十分条件を満たすものであるがゆえに、それが付着した結果として形成される内容は必ず意識的なものとして前景化される。そして、指標づけの結果として形成される内容とは、感覚的分類を対象ファイルへと統合した結果として形成される内容、すなわち、概念的内容のことである。以上より、知覚の概念的内容は、その内容に主部を与える視覚的指標の働きによって、知覚判断の基礎となる前景的な意識との結びつきを獲得すると結論できる。「距離」を埋めるために必要なのはとりわけ概念的内容と前景的意識の結びつきであり、この結びつきは分散的注意としての視覚的指標の働きによって与えられるのである。

しかしながら、第三章で確認したように、われわれは知覚対象に関する命題的な判断以外にも、ジスト知覚に基づいて光景全体に関する大まかな判断を行うことができる。こうした判断も、それが自発性の働きとしてなされるものである限り、何らかの仕方では知覚経験による基礎づけを必要としている。では、自然化された概念主義においてこうした判断はどのように扱うのだろうか。次節では、この問題に対する検討を通じて、「階層的概念主義」という主題に立ち戻りたい。

## 第五節 階層的概念主義

われわれは第三章の終わりに、概念主義内部における対立軸の一つとして「全体的概念主義」と「部分的概念主義」という分類を取りあげた。全体的概念主義とは、知覚経験の内容が全面的に概念的であると主張する立場であり、部分的概念主義とは、部分的にのみ概念的であると主張する立場である。

マクダウェルは知覚経験の内容が「端から端まで概念的」とであるとみなしており、全体的概念主義に与している。だがマクダウェルは、そうした内容が「無限定で多様な判断可能な内容」という豊かな内容であるとみなしており、「知覚の周縁は乏しい内容しか備えていない」という不注意盲から得られる示唆に対処する必要がある。これに対してブリューワーは、知覚経験の内容が選択的注意によって概念化された要素といまだ概念化されていない要素という二つの段階によって構成されると考えており、この点で部分的概念主義に与している。だがブリューワーは、注意の外部で成立するジスト知覚——知覚的光景全体に対する大まかな知覚的把握——に基づく判断をうまく扱うことができず、非概念的内容

に対して規範的な力を認めるという問題を抱えている。

これら二つの立場に対して第三章では、全面的概念主義に選択的注意の役割を取り入れた「階層的な概念主義」という立場を示唆しておいた。この立場によれば、知覚経験の内容は全面的に概念的である。ただし、経験は選択的注意によって構造化されており、内容の豊かさと詳細さは経験の中心部と周縁部で異なる。中心部は豊かで詳細な概念的内容を備えているのに対し、周縁部は乏しく簡略な概念的内容しか備えていない。ジスト知覚に基づく判断には、こうした簡略的な概念的内容が関わっていると考えられる。

しかしながら、自然化された概念主義の立場によれば、知覚内容に命題的形式を与えるのは視覚的指標の働きであり、したがって選択的注意の向けられる中心部の内容のみが命題的内容を有する。だとすれば、自然化された概念主義と階層的な概念主義とは整合性を欠くのではないかという疑念が生じる。この疑念に対してわれわれはどのように対処することができるだろうか。ここでは、自然化された概念主義の構図にさらなる注釈を加えることでこの疑念に答えたい。

感覚システムは階層的に構造化されており、入力刺激に対して繰り返し分類活動をおこなってゆくことで知覚経験の内容が形成される。だが、それは単に上流から下流へとボトムアップにのみ処理を行うのではない。神経科学者のバーによれば、われわれの視覚系には詳細な情報を比較的低速でボトムアップに処理してゆく系と、解像度の低い情報を比較的高速度で前頭葉まで運び、そこから対象認識を促進する信号をトップダウンで低速処理系に伝える系の二つが存在している (Bar 2003; Bar et al. 2006; Kveraga et al. 2007)。前者は小細胞系 (parvocellular system) によって、後者は大細胞系 (magnocellular system) によって担われている。網膜から入力を受ける外側膝状体は主に小細胞層と大細胞層に分かれており、それぞれ第一次視覚野の 4C $\beta$  層と 4C $\alpha$  層に投射しているが、これらはそれぞれさらに下流へと延長して小細胞系と大細胞系を形成している<sup>118</sup>。大細胞層から第一次視覚野へ投射された肌理の粗い情報は、一部が短絡経路を通じて素早く眼窩前頭前野 (orbitofrontal cortex) へと伝わり、そこで視覚的光景に含まれる内容に関する「初期解 (initial guess)」が作成される<sup>119</sup>。初期解は視覚的光景に関して肌理の粗い情報に基づいて形成される大まかな解釈である。小細胞系は後頭葉から側頭葉への経路 (次節で説明する腹側経路) を構成しているが、大細胞系で作成された初期解はこの小細胞系へと逆向きに投射され、より肌理の細かな解を与えるために行われる計算を円滑化する。

ジスト知覚はこれらのうち大細胞系によって担われていると考えられる。その情報は特定の対象に帰属されることはないが、いわば現在の視覚的光景全体へと帰属されるかたちで知覚経験へと伝えられる。知覚経験の周縁的な内容の少なくとも一部はこうしたジスト知覚を担う処理によって形成されると考えられる。この内容は小細胞系が担う内容とは独立に前頭前野へと到達しており、選択的注意による制御を経ずにワーキングメモリに対して入力されている可能性がある。ジスト知覚に基づく注意独立的な判断は、このような大

<sup>118</sup> 外側膝状体には他に顆粒細胞層も含まれる。

<sup>119</sup> 大細胞系において、初期視覚野から眼窩前頭前野へ通じる短絡経路としては、次章で説明する背側経路を中継するルートと、視床を中継するルートの二つが考えられる。バーらはこのうち後者の可能性を支持している (Kveraga et al. 2007)。

細胞系の肌理の粗い処理を通じて行われていると考えられる。

では、こうした判断は概念的内容に基づいて正当化されたものであると言えるだろうか。まず指摘すべきは、大細胞系における情報処理も基本的には分類活動に基づくものであり、それゆえ、小細胞系に比べて肌理の粗い分類であるとはいえ、その結果はある種の感覚クラスを構成するという点である。この点で、ジスト知覚の内容も概念の要件である一般性を備えている。しかし、その内容は特定の対象ファイルに統合されるというかたちで命題的内容を構成してはいない。それゆえ、その内容は何らかの対象を主部とする信念内容を正当化しうるものではない。

だが、そのようなジスト知覚の内容であっても、次のような二つの仕方で信念内容に対して正当化を与えることができる。第一に、ジスト知覚は、現在の視覚的光景の全体が大まかにどのようなものであるのかという判断を正当化することができる。たとえば、それが自然の風景であるのか人工の風景であるのかといった、視覚的光景の全体的印象に関する判断である。第二に、ジスト知覚は、「～がある」という存在命題に対して正当化を与えることができる。ジスト知覚の内容は特定の対象ファイルに統合されたものではないがゆえに、「しかじかの対象は～である」という形式を備えてはいない。だがそれは、初期解が知らせる限りにおいて、その光景に何が含まれているのかという情報を与えることはできる。それゆえ、ジスト知覚に基づいた場合であっても、「細長いものがある」といった知覚判断であれば正当化を与えることができる。

知覚経験の周縁的内容を構成するのは、第一に、こうした大細胞系によるジスト知覚の内容である。加えて、第二に、小細胞系で処理されている内容のうち、選択的注意の外部にある内容も含まれる。後者の内容は選択的注意を受けるものではないため、その多くは知覚判断に結びつくことなく消失してゆく。だが、そうした内容でも稀に知覚判断と結びつくことがあるかもしれない。そうした場合の判断に対する正当化は、ジスト知覚の場合に指摘した存在命題による正当化として扱うことができる。このことの傍証として、錯覚的結合の事例について考えてみよう。錯覚的結合を示した実験では、画面に呈示されていなかった性質を答えてしまう「性質エラー」が 6%だったのに対して、別の図形がもっていた性質を誤って答えてしまう「結合エラー」は 18%だった。これは、「注意が十分に向けられなかった対象がもつ諸性質は統合されない」ということを示しており、特徴統合理論に対する支持を与える結果であるとされる。ここではむしろ、「結合エラーに比べて性質エラーは比較的わずかである」という点に注目しよう。結合エラーとは性質の統合が失敗した場合であるが、逆に言えば、どの性質が画面に呈示されていたかについては正しく把握していた場合でもある。このことが示唆しているのは、対象へと統合されるのに十分なほど注意を向けられなかった性質であっても、われわれはその性質が光景のなかに存在しているということを把握し、正しく判断へと利用できる場合があるということである。この場合の判断内容は、対象を主部とする命題ではなく、光景のなかにある性質に関する存在命題である。このように、選択的注意によって統合される以前の内容であっても、それが何らかの仕方でワーキングメモリへと利用されたならば、対応する存在命題を正当化しうるのである。

以上のように、われわれは全体的概念主義を保持しつつも、選択的注意による経験の構造化という論点を取り込み、注意の外部にある経験内容が判断に対する規範的な力をもつことを認めることができる。ただし、注意の外部にある経験内容が正当化しうるのは、対象を主部とする述定的判断ではなく、視覚的光景に関する全体的印象についての判断や、視覚的光景のなかにある性質に関する存在判断である。注意の外部にある経験内容はその内部にある内容に比べて肌理の粗いものであるが、それでもなお対応する命題に対して理由付与の役割を果たす概念的な内容であると言える。以上のような注釈を加えることで、われわれは自然化された概念主義の立場から階層的な概念主義に対して支持を与え、それに内実を与えることができるのである。

## 第八章 知覚経験と行為

### 第一節 知覚と行為をめぐる二つの理論

われわれはここまで、視覚経験が初期視覚に備わる二つのメカニズム——視覚的指標メカニズムと感覚的分類メカニズム——のおかげで概念的内容を獲得するという仮説を擁護するための議論を展開してきた。前章では、分散的注意としての視覚的指標のメカニズムが、感覚的分類の結果を命題的な内容として統合する役割を果たすだけでなく、その内容を前景的な意識の内容として成立させる役割をも担っているという論点を導きだした。意識的な視覚経験の有する前景的内容を構成するのは、視覚的指標によって統合された概念的内容であり、この概念的内容によって個別的对象に関する知覚判断に対して理由や正当化が与えられるのである。以上の論点を踏まえるならば、知覚の前景的内容はわれわれの認識行為に適した形式を備えていると述べることができるだろう。

ところで、知覚経験は推論や判断、あるいは記憶などの認知行為においてだけではなく、運動行為においても重要な機能を果たしているように思われる（以下、単に「行為」と記した場合には運動行為のことを指す）。例として、急ぎ足で歩きながら駅の自動改札機へ切符を滑り込ませる場面を考えてみよう。切符を自動改札機に通すときには、視覚に入力された改札機に関する情報が、何らかの仕方で現在進行中の行為を制御するために利用されている。自動改札機に切符を通すためには、目標とする自動改札機がどの位置にあり、切符投入口はどの高さであり、そこまで私の歩行速度でどのくらいの時間を要するかといった情報を入手し、それらの情報に基づいて手の到達運動の速度や方向、あるいはタイミングなどを調整しなければならない。つまり、通常、空間的な運動行為を成功裡に遂行するためには、行為を知覚によって誘導したり制御したりしなければならないのである。

では、知覚と行為のあいだに成立しているこの結びつきはどのように捉えられるべきだろうか。アンディー・クラークによれば、われわれの日常的な直観は、この結びつきに関して以下のような見方を支持している（Clark 2001）。すなわち、意識的な知覚経験の内容が、われわれの現在進行中の行為を微細なレベルにわたって制御ないしは誘導するために働いている、という見方である。クラークはこのような見方を「経験基盤制御仮説（the assumption of experience-based control）」と呼んでいる。

経験基盤制御仮説：

意識的な視覚経験は主体に対して世界を豊かな質感を備えたものとして——肌理細かな詳細を備えたものとして（その詳細はもしかするとわれわれの概念的ないしは命題的な把握を越えているかもしれない）——提示する。そして、この豊かさのおかげで、視覚経験は現実世界での微調整をとまなう活動の制御や誘導に特に適したものとなっており、通常はそうした制御や誘導に利用されている。（Clark 2001, p. 496）

クラークのこうした特徴づけを踏まえるならば、経験基盤制御仮説を二つの構成要素へと分解することができるだろう。第一に、視覚経験は肌理細かな詳細を備えているという主張であり、第二に、この詳細のおかげで、視覚経験は微調整をともなう運動制御に利用でき、かつ、通常は実際に利用されているという主張である。第一の主張は、本論が論じてきたように必ずしも非概念主義を支持するものではないが、われわれの現象学に関する事実として——少なくとも視覚的意識の中心領域に対しては——認めてよいように思われる。第二の論点についてはどうだろうか。たとえば、コーヒーを飲むために目の前のカップを掴もうとすると、もし視覚的意識がその取っ手の位置に関する詳細な位置情報を与えてくれなかったとしたら、あなたは成功裡にカップを掴むことはできないだろう。したがって、このような行為の微調整を行うためには、それに適した細部を備えた視覚経験をもつことが必要であるように思われる。

しかし、こうした常識的な見方に対しては、認知神経科学の分野から次のような疑義が突きつけられている。神経科学者であるミルナーとグッデールは、われわれの視覚システムにおいては、意識的な経験の生起に関与する側面と視覚運動行為に対するオンライン制御に利用される側面とのあいだに乖離が存在しているという主張を行っている (Milner and Goodale 1995/2006; Goodale and Milner 2004)。すなわち、われわれの視覚システムは「知覚のための視覚 (vision for perception)」と「行為のための視覚 (vision for action)」という二つの相互に独立なサブシステムから構成されているのである。この「二重視覚システム (two visual systems)」仮説によれば、行為制御に直接利用される視覚システムは意識経験の成立に関わる視覚システムとは別物であり、この点で、視覚経験が直接的に行為制御に結びついていると主張する経験基盤制御仮説は誤っているのである。

クラーク自身も、この二重視覚システム仮説をはじめとするいくつかの経験的知見に基づいて経験基盤制御仮説を批判し、それに代えて「経験基盤選択仮説 (the hypothesis of experience-based selection)」を提唱している。

経験基盤選択仮説：

意識的な視覚経験は主体に対して世界を推論と記憶に基づいた行為選択に適したものとして提示する。(Clark 2001, p. 512)

経験基盤選択仮説によれば、意識的な視覚経験は微調整をともなう運動制御にではなく、むしろ推論や記憶などの認知機能を通じた行為選択に適した形式を備えており、この意味で間接的に運動制御に携わるにすぎない。

このように、知覚と行為の関係性をめぐっては、常識的な見方を否定し、それらの相互独立性を強調する二重視覚システム仮説が提唱されており、(後に紹介するように) その仮説の妥当性をめぐってさまざまな議論の応酬がなされている。

その一方で、知覚と行為をめぐっては、二重視覚システム仮説とは逆に、知覚と行為の相互依存性を強調する理論がノエやオリーガンといった論者たちによって提唱されている (O'Regan and Noë 2001; Noë 2004; 2010)。これらの論者が否定する見方——ハーリー

はそれを「入力 - 出力描像 (the input-output picture)」と呼んだ (Hurley 1998) ——によれば、知覚と認知、および行為は線形的に結合された処理過程であり、知覚は認知への入力として、行為は認知からの出力として、原理的には互いに分離可能なものとして実現されている。この入力 - 出力描像によれば、知覚経験は感覚刺激の受動的な記録であり、たとえそれが行為に依存しているとしても、適切な感覚刺激を受容するための場所へと知覚者を運ぶための手段としてという意味においてでしかない。

ノエはこうした見方に対して、単に感覚刺激を受容するだけではわれわれが経験している通常の知覚内容は成立しないと主張する。たとえば、先天性の白内障によって盲を被っている患者を考えよう。その患者が回復手術を施された場合、たとえそれによって感覚刺激を受容する能力を取り戻したとしても、ただちに通常の知覚内容が成立するわけではない。ノエによれば、この患者に欠けているのは、自らが享受する感覚刺激が自己や対象の運動にともなってどのように変化するかについての暗黙的な知識、すなわち、「感覚運動知識 (sensorimotor knowledge)」である。意識的な知覚経験が成立するためには、運動と感覚との随伴関係を学習することで、このような感覚運動知識を習得しなければならない。意識的な知覚経験は感覚運動知識に対して構成的に依存しているのである。ノエは知覚経験に関するこのような見方を「感覚運動アプローチ (sensorimotor approach)」あるいは「エナクティブ・アプローチ (enactive approach)」と名づける<sup>120</sup>。感覚運動アプローチによれば、知覚にとって行為は必要な感覚刺激を手に入れるための単なる手段ではない。感覚運動知識は感覚運動随伴性に関する経験を通じて習得される一種の技能知 (know-how) であり、それを行使することはある種の熟達的活動 (skillful activity) である。この意味で、知覚は行為と独立したものではなく、それ自体が行為に対して構成的に依存したものとして捉えられるのである。

以上で概観したように、知覚と行為の関係性をめぐっては、現在、認知科学や認知哲学において、二つの主要な見方が存在している。一方の二重視覚システム仮説によれば、われわれの視覚システムは「知覚のための視覚」と「行為のための視覚」という機能的に区別される二つのシステムによって構成されている。他方の感覚運動アプローチによれば、意識的な知覚経験は感覚運動知識に構成的に依存している。前者は知覚と行為の機能的分離を強調するものであり、後者は知覚と行為の相互依存性を強調するものであるため、これらは一見して両立不可能であるように思われる。では、これらの理論は実際に両立不可能なのだろうか。また、両立不可能だとすればどちらを支持すべきなのだろうか。本章では、この問題に対する考察を通じて、知覚と行為はどのように関係しているのか、そして、そのなかで知覚の概念的内容はどのように位置づけられるのかを検討する。

後述するように、本論で提示している自然化された概念主義と親和的なのは二重視覚システム仮説であり、マッテンも自身の提示する感覚的分類メカニズムを二重視覚システム仮説が示すモデルのなかに位置づけている。他方、ノエは感覚運動アプローチのもとで本論とは異なる観点から概念主義的な見方を擁護している。ノエによれば、知覚経験は感覚

---

<sup>120</sup> これらは Noë 2004 における名称である。Noë 2010 でノエは自らの立場をアクショニズム (actonism) と呼んでいるが、その基本的な主張は以前の立場と連続的である。

運動依存性についての技能的な知識に対して構成的に依存しており、非命題的ではあるが概念的な内容を備えている。このように、二重視覚システム仮説と感覚運動アプローチはそれぞれ異なる概念主義的な見方と親和的である。それゆえ、本章で行われる議論は、二重視覚システム仮説と感覚運動アプローチについての検討を介して、自然主義的なアプローチから提示されている二つの概念主義のあいだの優劣を評価するものとして理解することができる。結論を先取りして言えば、二重視覚システムと感覚運動アプローチは両立不可能であり、かつ、現在までの経験的証拠は二重視覚システム仮説の側を支持している。それゆえ、本論で展開される考察は自然化された概念主義に対してさらなる論拠を与えるものであると言えよう。

## 第二節 二重視覚システム仮説

### 2. 1 二重視覚システム仮説の概要

視覚システムが大腦皮質において二つの経路に分かれているというアイデアは、マカクザルを用いた実験を通じて、アンガーライダーとミシュキンによって初めて提唱された (Ungerleider and Mishkin 1982)。アンガーライダーとミシュキンによれば、視覚皮質の入り口に当たる第一次視覚野からは、下側頭皮質 (IT) へ向かう腹側経路 (ventral stream) と後頭頂皮質 (posterior parietal cortex: PPC) へ向かう背側経路 (dorsal stream) の二つの経路が伸びており、前者は対象の同定に、後者は対象の位置づけに関わっている<sup>121</sup>。アンガーライダーとミシュキンはこの腹側経路と背側経路における機能的分業を対象の「なに (what)」と「どこ (where)」に関わる処理の分業として特徴づけた。これら二つの視覚経路が解剖学的に区別されるものとして存在することは多くの実験によって確認されており、今日では確立された科学的知見であるとみなしてよいだろう。だが、それらの経路が果たす機能を「なに」と「どこ」という対比において捉えることがはたして妥当であるかについては議論が分かれている。

ミルナーとグッデールによれば、腹側経路と背側経路のあいだの分業は、「なに」と「どこ」という対比ではなく、むしろ「なに」と「いかに (how)」という対比のもとでよりよく定式化することができる。すなわち、腹側経路は主に外界に何があるのかを視覚によって意識的に認知することに関わっており、背側経路は主に外界の対象に対してどのように行為するかを視覚的に制御することに関わっているのである。ミルナーとグッデールは前

---

<sup>121</sup> 視覚システムが単一の経路によって担われているという発想に対する批判はそれ以前から存在していた。シュナイダーは齧歯類の研究を通じて、視覚にはより古い皮質下システムと新しい皮質システムの二つの経路が存在し、それぞれ (アンガーライダーとミシュキンの特徴づけと同様に) 対象の位置づけと対象の同定とに関与していると論じた (Schneider 1967)。アンガーライダーとミシュキンの研究が新規性を有しているのは、二つの経路を皮質下と皮質という別々の領域にではなく、皮質の内部に見出した点においてである。なお、ヒトにおいても視覚情報を担う皮質下の経路の存在は確認されており、中脳にある上丘 (superior colliculus) を介した経路がそれにあたると考えられている。ヒトにおいて、その経路はサッカード眼球運動や目と頭の協調運動などを担うとされているが、盲視患者に特徴的に見られる弁別課題における高いパフォーマンスにこの経路が関与しているとも示唆されている。



者を「知覚のための視覚」、後者を「行為のための視覚」と呼び、両者の機能的な独立性を強調している。

無論、機能的な独立性を有しているといっても、両者は完全に切り離されているわけではなく、通常は両者のあいだに密接な相互作用が成立しており、それによってわれわれの日常的な行動は支えられている<sup>122</sup>。では、両者は行為において具体的にどのように相互作用しているのだろうか。ミルナーとグッデールは行為における三つの側面を区別している (Milner and Goodale 2010, p. 73)。すなわち、(1) プランニング：目標を達成するためにどのようなタイプの行為が行われるかを計画すること、(2) プログラミング：その計画を実行するために必要な運動パラメータを運動の前にプログラミングすること、(3) オンライン制御：プランニングとプログラミングを実行するあいだ運動を制御すること、という三つの側面である。ミルナーとグッデールによれば、行為において腹側経路の知覚メカニズムが貢献するのは第一のプランニングの側面のみであり、プログラミングとオンライン制御に対しては背側経路の行為メカニズムが主な役割を担っている。たとえば、コーヒーを飲むためにカップをつかもうとすると、それがコーヒーカップであることを認識し、取っ手を把握するために適した行為のタイプ（人差し指を回し入れ、他の指は支えとするために添える）を選択するのは「知覚のための視覚」の役割であり、そのためにどのような軌道で手を動かし、指をどのような開き幅にするかを計算し、それを実行に移すのが「行為のための視覚」の役割である。「行為のための視覚」における「行為」が意味しているのは、行為における三つの側面の全体ではなく、あくまで行為の「実装 (implementation)」に関わる側面であり、そのための計画設計は「知覚のための視覚」が担っているのである。

このように、両者は異なる仕方においてであるが、ともに行為の成立に寄与し、われわれの日常生活を支えるために協働している。だが、以下で確認するように、両者の機能は特定の障害や実験条件のもとでは乖離しうるものであり、したがって、たとえ両者が協働しているとしても、そこで成立しているのは相互依存的な関係ではなく、あくまで相対的な独立性を前提とした関係にすぎないと考えられる。

この二重視覚システム仮説（以下では「二重説」と略称する）は主に二つの経験的証拠によって支えられている。第一に、視覚失認 (visual agnosia) と視覚運動失調 (optic ataxia) とのあいだに二重乖離が認められるという知見であり、第二に、視覚運動行為はサイズ対比錯視などのある種の錯覚の影響を受けないという知見である。以下、それぞれの証拠について順を追って論じてゆきたい。

---

<sup>122</sup> 両者の協働がどのような経路を介して行われているかにはいくつかの可能性はある。第一に、背側経路と腹側経路の双方からの逆向きの投射によって、V1 を中継地点として介することで協働しているという可能性はある。第二に、IT から PPC へ向かう直接的な経路を介して協働しているという可能性はある。これらに加えて、坂上とパンは前頭前野を介した協働の可能性を指摘している (Sakagami and Pan 2007)。彼らは IT から腹外側前頭前野 (VLPFC) へ向かう経路を「拡張された腹側経路 (extended ventral pasway)」、PPC から背外側前頭前野 (DLPFC) へ向かう経路を「拡張された背側経路 (extended dorsal pasway)」と呼び、これらの経路を介した情報が DLPFC で統合され、そこから運動野へと運ばれているという見方を提示している。

## 2. 2 視覚形態失認と視覚運動失調

何らかの原因によって腹側経路に損傷を被ると、患者は視覚失認と呼ばれる障害を発症する。視覚失認患者は外界にある対象やその特定の側面を認識することに困難を覚えるようになるが、対象を把握するといった視覚運動行為を遂行する能力は比較的影響を受けない。対照的に、背側経路に損傷を被ると、患者は視覚運動失調と呼ばれる障害を発症する。視覚運動失調患者は、対象を認識する能力は損なわれないが、視覚に基づいて運動を制御する能力に問題が生じる。簡潔に言えば、視覚失認の患者は「掴めるが見えない」のに対し、視覚運動失調の患者は「見えるが掴めない」のである。ミルナーとグッデールは、これら二つの視覚性障害は二重乖離を示しており、それぞれ「知覚のための視覚」および「行為のための視覚」に対する選択的な障害として捉えることができると主張する。

視覚失認を「知覚のための視覚」に関する障害として理解できるという解釈は、ミルナーとグッデールが長年にわたって携わってきた DF と呼ばれる患者に対する研究から支持を得ている。DF は不慮の事故により一酸化炭素中毒に陥り、腹側経路を中心とした脳部位に損傷を被ることになった。詳細な検査によって、彼女は対象の色や肌理に対しては視覚的な検出を行うことができるが、エッジや輪郭、あるいは形態については検出を行うことができないということが明らかになった。たとえば、ガボールパッチを画面上に呈示すると、それが呈示されているかどうかは分かるが、そのパッチの縞模様がどの向きであるかを言うことはできなかった。また、彼女は色を見分けることはできても、色と色の境界を見分けることはできなかった。背景のドットと肌理の異なるドットによって構成された形や、ドットからなる区画が背景に対して運動したときに生じる形を検出することもできなかった。これらの結果は、彼女が失認のなかでも「視覚形態失認 (visual form agnosia)」と呼ばれる障害に陥っていることを示している。

ところが、驚くべきことに、DF は対象の位置や向きや形態を見分けることができないにもかかわらず、眼の前にある対象（たとえば眼の前に差し出された鉛筆）を正確に掴むことができたのである。そこでミルナーとグッデールは、視覚判断と視覚運動誘導とを分離したタスクを利用し、DF の視覚運動誘導能力を計測することにした。たとえば、ある実験では、見本合わせ課題とポスト入れ課題という二つのタスクが被験者に課された。見本合わせ課題では、被験者は手に持ったカードの向きをポストの投入口の向きに合わせることによって（実際に投入口へと手を伸ばすことなく）報告するよう求められる。他方、ポスト入れ課題では、被験者は実際にカードをポストの投入口に合わせて投函するように求められる。結果、見本合わせ課題においては、DF の示したカードの向きは実際の投入口の向きとはまったく関係がなく、DF の成績は当て推量と同程度のものにすぎなかった。これに対して、ポスト入れ課題においては、DF は健常者と同等の正確さで投入口に対してカードを差し入れることができた。また、手を伸ばして立体図形を把握するときの手指の動きの解析も行われたが、ここでも DF は健常者と同じような手の軌道を示すことが分かった。さらに別の実験では、不規則な形をした「ブレイク図形」と呼ばれる図形を人差し指と親指で掴ませることで、DF が向きや幅だけではなく対象の形態に対しても正常な視覚的運動制御を行うことができるということが確かめられた (Goodale et al. 1994)。こ

の図形を適切に掴むためには、人差し指と親指を単に図形の幅やエッジの向きにあわせるだけではなく、それらの指を結んだ線が図形の重心を通るように配置し、かつ、エッジの安定した部分を掴まなければならない。結果、DF は健常者と同じような適切な把握行動を示した。これは視覚運動失調の患者 (RV) の結果と比べると対照的である。

DF に対しては fMRI を用いた実験も行われている (James et al. 2003)。ジェームズらによるこの研究では、DF に対して二つの fMRI 実験が行われた。第一の対象認知実験では、何らかの対象を描いた線画を見ているときと、同じ絵がバラバラに乱雑化されたものを見ているときとが比較された。結果、健常者では対象認知に関わるとされる腹側経路の外側後頭皮質 (lateral occipital cortex) に賦活が見られたが、DF では同様の賦活は見られなかった。これは「知覚のための視覚」に障害があることを示唆する行動実験の結果と整合するものである。第二の対象把握実験では、対象に対して把握運動が行われた場合と到達運動が行われた場合とが比較された。fMRI 実験に先立って行われた MRI による構造分析では、腹側経路だけではなく背側経路に該当する頭頂部にも広範な損傷や委縮が見られた。にもかかわらず、fMRI による機能分析では、健常者と同様に、背側経路に位置する頭頂間溝前方領域 (anterior intraparietal sulcus) に賦活が見られた。この部位は視覚制御下における手による対象操作に関わるとされており、この部位の賦活は構造分析では明らかにされなかった DF の背側経路における機能残存を示すものと考えられる。以上のように、視覚形態失認は「行為のための視覚」が無傷なままなのに対して「知覚のための視覚」が損傷を被っている症例として理解することができる。

一方、視覚運動失調は視覚失認とは正反対の障害パターンを示す (Goodale and Milner 2004, Chap. 3)。視覚運動失調は背側経路に位置する頭頂皮質に損傷を負うことで引き起こされる。視覚運動失調の患者は視覚的な認知を行う正常な能力を有しており、人やものを認識し、文字を読むことができる。だが、視覚情報を利用して運動制御をオンラインで行うように求められると、おおよその場所を手探りするのみで、見えているはずの対象に自分の手を正確にもっていくことができない。これは、視空間情報の処理一般や運動制御一般に関する障害ではなく、まさに視覚性の運動制御に関する選択的な障害である。なぜなら、視覚運動失調の患者は対象の相対的位置を正しく答えることができ、また、固有受容感覚などに基づいて運動制御を行うこともできるからである。

視覚失認と視覚運動失調が二重乖離を示しているという証拠は、双方の患者が示すパフォーマンスを比較した他のいくつかの行動実験からも得られている。ミルナーらによる実験 (Milner et al. 1999a; 1999b) では、視覚形態失認患者 (DF) と視覚運動失調患者 (AT)、および統制群となる健常者に対して、周辺視野に呈示された標的を指で指し示す課題が二つの条件のもとで与えられた。第一の即時反応条件ではオンラインの視覚運動制御が求められるのに対して、第二の遅延反応条件では視覚的記憶に基づく運動制御が求められる。結果、DF は即時反応条件に比べ遅延反応条件の成績が悪かったのに対し、AT は遅延反応条件に比べ即時反応条件の成績が悪かった。DF は「知覚のための視覚」が障害されていたため、遅延反応条件で運動を誘導するための視覚的記憶が生成できなかったのに対し、AT は「知覚のための視覚」が無傷なままだったため、視覚的記憶に基づいて運動を制御

することができたと考えられる。また、グッデールらによる別の実験 (Goodale et al. 1991) では、DF と別の視覚運動失調患者 (RV)、および健常者に対して、中心視野に呈示された対象に手を伸ばして人差し指と親指で掴むか、その幅を人差し指と親指の間隔で示すか、いずれかが求められた。結果、DF は指の間隔によって幅を示す課題での成績が比較的悪かったが、AT は実際に把握行動を行う課題での成績が比較的悪かった。前者の課題は視覚報告に関わっており、後者の課題は視覚運動制御に関わっていると解釈できるため、この結果は二重視覚システム仮説を支持するものと考えられる。

以上のように、ミルナーとグッデールは腹側経路と背側経路という解剖学的に区別される二つの経路にそれぞれ「知覚のための視覚」と「行為のための視覚」という別々の機能を割り当てている。視覚に関わる障害に関するさまざまな研究はこの解釈に一定の経験的な証拠を与える。だが、DF を被験者とした別の実験からは、この解釈に対して異議を唱える声も挙げられている。次項では、この批判とそれに対する反論を検討することで、二重視覚システム仮説と「参照枠」という概念との関係をみておきたい。

## 2. 3 自己／外界中心的参照枠

ミルナーとグッデールによれば、「知覚のための視覚」と「行為のための視覚」は入力となる視覚データに対してそれぞれ異なる変換方式を要求する (Milner and Goodale 1995/2006, chap. 4 and chap. 6; Goodale and Milner 2004, chap.6)。ここでの「変換方式」は、対象のもつ空間的性質を規定するためにどのような参照枠を利用するかによって特徴づけることができる。そうした参照枠は大別して二つの種類に分けられる。すなわち、第一に、行為者自身の空間的位置を中心とした自己中心的参照枠 (egocentric frame of reference) であり、第二に、行為者とは独立な他の空間的対象を中心とした外界中心的参照枠 (allocentric frame of reference) である。

一方で、到達運動や把握運動などを行うためには、視覚運動制御システムは標的となる対象のもつ実際の幅や向き、形、大きさ、そして距離を行為者の現在の位置と相対的に計測しなければならない。このときに利用されるのは行為者と相対的に対象を位置づける参照枠、つまり、自己中心的参照枠である。「行為のための視覚」は対象がもつ諸性質を自己中心的参照枠によってコード化するのである。

他方で、「知覚のための視覚」は、もろもろの対象を同定し、分類し、それらに意味づけや価値づけを行うことを目的としている。それによって知覚者は、対象を異なる文脈において再認したり、対象同士を比較したり、対象について推論を行ったりすることができるようになる。そのために、視覚的認知のシステムは対象のもつ諸性質を行為者とは独立にコード化しなければならない。たとえば、対象が先に見たものと同じかどうかをその形に基づいて判断するためには、知覚者は現在の視点からその対象がどのように見えるかだけでなく、別の視点からどのように見えるかも理解していなければならない。また、リンゴが皿の上にあるのか、それとも皿がリンゴの上にあるのかを視覚に基づいて判断するためには、それらが互いに対してどのような空間的位置関係にあるのかを理解していなければならない。このときに必要とされるのは、行為者と独立に対象のもつ諸性質をコード化

する参照枠、つまり、外界中心的参照枠である。知覚のための視覚は対象がもつ諸性質を外界中心的参照枠によってコード化するのである。

このように、ミルナーとグッデールは、「行為のための視覚」は自己中心的参照枠において情報を表象し、「知覚のための視覚」は外界中心的参照枠において情報を表象すると理解している。だが、こうした特徴づけに対しては、DF を被験者とした実験を通じてシェンクにより反論が提起されている (Schenk 2006)。シェンクは知覚／運動タスクと自己／外界中心的参照枠という二系列の条件を交差させたデザインを用いて実験を行い、その結果から、(1)「行為のための視覚」を自己中心的参照枠と、「知覚のための視覚」を外界中心的参照枠と対応づける見方は誤っており、(2) 背側経路と腹側経路の機能的な分業を定式化するのにふさわしいのは「行為のための視覚／知覚のための視覚」という概念対ではなく「自己中心的参照枠／外界中心的参照枠」という概念対である、と主張している。

では、具体的にシェンクの実験の内容を見てみよう。シェンクの実験では合計四つの条件が設定された。(a)「知覚／外界中心」条件では、被験者はディスプレイに表示された二つの標的 (黒丸か白丸) のうち、どちらが参照点 (十字) により近いかを言葉で報告する。(b)「知覚／自己中心」条件では、(a) と同様の言葉による報告が求められるが、このとき参照点には被験者の人差し指が置かれる。(c)「運動／外界中心」条件では、被験者は参照点から標的までに相当する距離を見積もり、自分の指を任意の位置から見積もった距離の分だけ平行に動かす。(d)「運動／自己中心」条件では、出発点となる位置から標的まで指を直接移動させる。(a) と (b) は知覚判断による応答が求められているため「知覚」条件に分類され、(c) と (d) は運動行為による応答が求められているため「運動」条件に分類される。また、(a) と (c) は参照点を中心に標的を位置づけるものであるため「外界中心」条件に分類され、(b) と (d) は自身の指先を中心に標的を位置づけるものであるため「自己中心」条件に分類される。シェンクの考えでは、このように行動タスクと空間情報の変換様式とを分離した実験を組むことで、いずれが視覚システムにおける機能的分業を特徴づけるのにふさわしいかを調べることが可能となる。

二重説は視覚の二重経路の機能的分離をまずもって「行為のための視覚」と「知覚のための視覚」という対比のもとで捉える説である。それゆえ、二重説からは、DF の成績は運動条件において高く、知覚条件において低いという予想が成立する。だが、実験結果はこの予測を裏切るものだった。DF の成績は (a)「知覚／外界中心」条件と (c)「運動／外界中心」条件で健常者に比べ優位に低く、(b)「知覚／自己中心」条件と (d)「運動／自己中心」条件で健常者と同等のレベルだった。ここからシェンクは、DF において障害が生じているのは、知覚意識に関する能力ではなく、情報を「外界中心的参照枠」に位置づける能力であると結論づけている。

しかしながら、以上の実験結果が二重説に反する証拠を示しているという解釈に対しては疑問の余地がある。ミルナーとグッデールは、特に (b) および (c) の条件に対してはシェンクが与えているものとは別様な解釈が成立するという指摘を行っている (Milner and Goodale 2008 同様の議論は Jacob and de Vignemont 2010 においても行われている)。

ミルナーとグッデールによれば、DF は視覚障害を抱えながら長年生活するなかで、知覚判断が求められるタスクに対しても、残存する「行為のための視覚」の能力を活用する術を身につけるようになった (Goodale and Milner 2004, chap. 8)。たとえば、先述の見本合わせ課題において、カードをポストに投函する運動をほんのわずかだけ行い、そのときの手の動きから感じられるフィードバック情報を手がかりに投入口の向きを判断することができるようになった。さらに DF は、このような視覚運動制御システムを用いる方略を向上させ、実際に運動を行わずとも、自身が運動しているのを想像することで手がかりを得ることができるようになった。DF がこのような方略を身につけているとすれば、(b) の条件においても同じように自身の運動を想像することで成績の向上が図られたという可能性がある。実際、この条件において成績の向上が見られたといっても、それは健常者の成績よりも有意に低く、同じく「自己中心」条件に属するとされる (d) での成績が優秀な健常者に伍するものであったのとは対照的である。それゆえ、こうした可能性を鑑みるならば、(b) の条件を単純に「知覚」条件として分類することはできない。(b) の条件において DF が高い成績を得られたのは、DF がそれを運動タスクに変換し、「行為のための視覚」を利用して解決していたためであるかもしれないのである。

また、(c) の条件に対しても同様の指摘をなすことができる。シェンクは (c) の条件を視覚運動タスクとして解釈しているが、この条件で実際に求められているのは、参照点と標的のあいだの距離に関する見積もりを手の動きで報告することである。したがって、言葉こそ使用してはいないが、(c) のタスクは知覚判断による応答が求められているという点で、運動タスクではなく知覚タスクに分類されるべきであると解釈することもできる。この場合、(c) の条件において DF が低い成績しか得られなかったのは、それが「知覚のための視覚」を必要とするものであったからかもしれない。DF は「知覚のための視覚」に障害を負っているため、知覚タスクにおいて成績が低いことはむしろ二重説から予想される結果である。

このように (b) と (c) の条件に対して別様の解釈の余地があるとすれば、シェンクの実験結果を二重説に不利なものとして捉える必要はもはやなくなるだろう。以上より、シェンクの主張——背側経路と腹側経路における機能的分業は、「行為／知覚のための視覚」という対比のもとではなく、「自己／外界中心的参照枠」という対比のもとで捉えられるべきであるという主張——は十分に説得的なものとはいいがたいと結論できる。

## 2. 4 視覚運動行為と錯覚

二重説を支える二番目の証拠は行為と錯覚に関する一連の研究に基づいている。上述のように、視覚失認と視覚運動失調の症例は背側経路と腹側経路が別々の機能を果たしているという仮説に対して一定の支持を与えるものである。では、健常者においてもこうした機能的分離を見出すことはできるだろうか。もし健常者においても同様の機能的分離が成立しているとすれば、対象へと向けられた運動行為の制御に用いられる視覚情報は、必ずしもその対象についてなされた視覚判断を反映するとは限らないということになる。

実際、ある種の錯視現象においては、健常者における視覚判断と視覚運動行為との乖離

が観察されている。アグリオッティらはエビングハウス錯視図形の立体版を用いてこうした乖離を確認する実験を行った (Aglioti et al. 1995)。エビングハウス図形では同じ大きさの二つの主円がそれぞれ大きな円と小さな円に囲まれている。このとき、大きな円に囲まれた主円は小さく、小さな円に囲まれた主円は大きく知覚される。アグリオッティらはこの図形に含まれる二つの主円をポーカーチップのような円盤で置き換え、被験者が親指と人差し指を用いて掴むことができるようにし、把握行動時における手の開き幅を計測した。このような条件で実験を行ったところ、被験者は知覚的には錯視の影響を受けたにもかかわらず、円盤を把握しようとするときの手の開き幅は実際の物理的な大きさに一致し、錯視の影響を受けないという結果が得られた。こうした乖離は二重説の枠組みにおいて次のように説明される。すなわち、「知覚のための視覚」は標的となる対象の大きさを近傍にある他の対象の大きさとの関係で把握するものであるため、サイズ対比効果によって生じる錯視を免れえないが、「行為のための視覚」は光景のなかの多くの情報を無視し、対象に働きかけるために必要な情報のみを抽出するものであるため、対象の実際の物理的な大きさに合わせてふるまうことができるのである。

アグリオッティらによる実験結果を受けて、数多くの視覚研究者がさまざまな条件のもとで錯覚と行為の関係性について実験を繰り返してきた。運動制御が錯視の影響を受けないという肯定的な結果は、上記のエビングハウス錯視の他にも、ミュラー・リヤー錯視やポンゾ錯視といった他のサイズ対比錯視を用いた実験や、あるいは凹凸に関する錯覚を示すホロウフェイス錯視を用いた実験においても確認されている (Goodale and Milner 2004, p. 89 ホロウフェイス錯視の実験については Kroliczak et al. 2006 を参照)。

だがその一方で、行為が錯視の影響を受けるということを示す実験結果も少なからず報告されている (Goodale 2008)。二重説は知覚と行為のあいだにいかなる相互作用も認めない説ではないため、ときに錯視が行為に対して影響を与えるということが明らかになったとしても、そのことがただちに二重説に対する反例となることはない。逆に、行為が錯視の影響を受けない事例が認められたならば、それは経験基盤制御仮説のような単一経路モデルに対して疑問を突き付け、二重経路モデルに対して有利に働くことになる。そして上述のように、いくつかの実験はそうした事例の存在を示している。とはいえ、行為が錯覚の影響を被る事例に対しても、二重説を擁護する論者はそれがなぜ二重説に対する反例とならないのかについて説明を与える必要があるだろう。この問題を考えることは同時に、二重説において「行為」と呼ばれるものがどのような特徴をもつものとして規定されるのかを理解するためにも有用である。

では、行為に対する錯覚の影響は具体的にどのように説明されるのだろうか。ミルナーとグッデールは錯覚が行為に対して影響を与える原因として以下に挙げる四つを指摘している (Goodale 2008; Milner and Goodale 2008)。

第一に、「行為のための視覚」は、把握しようとする対象の近傍に障害物が存在していた場合、その障害物を自動的に回避するように働くことがある。たとえば、エビングハウス錯視の場合、標的である主円の周囲にある刺激が把握行為に対して妨げとなるならば、手の開き幅はそれを回避しようとして影響を受けることになるだろう。デ・グレイブらの実

験ではこの予想に合致する結果が得られている (de Grave et al. 2005)。その実験では、主円の周囲を囲む刺激を回転させただけで手の開き幅に影響が生じることが示された。このような影響が生じたのは、ある刺激配置は別の刺激配置よりも把握行為にとって妨げとなる度合いが高いからだと考えられる。もし手の開き幅に対するこの影響が図形の見かけの大きさに対する錯視の影響と同じ方向に働くならば、把握行為はあたかも錯視の影響を被っているかのように見えることになるだろう。たとえば、大きな円に囲まれた主円は実際の大きさよりも小さく見えるが、この主円を把握しようとするときに周囲の刺激が障害物として回避を促したとすれば、手の開き幅はあたかも錯覚の影響を受けているかのような挙動を示すことになる。

第二に、刺激呈示と行為誘導のとのあいだに遅延が生じた場合には、遂行される行為は「知覚のための視覚」の影響を受けることになると考えられる。われわれの生活している環境では、対象や自己の運動によって、網膜上の刺激の位置はたえず目まぐるしく変化する。このような移ろいやすい刺激を標的として行為を誘導するためには、行為システムはその瞬間に利用可能な情報をたえず更新し、その情報を即座に行為制御へと反映していかなければならない。このような状況下では、標的の正確な位置情報やサイズ情報を保持しておくことは無益である。なぜなら、標的の位置はたえず変化するため、そうした情報はその一瞬後にはすでに行為システムにとって有用性を失っているからである。われわれに備わった視覚運動制御システムはこのように移ろいやすい情報への対処に特化したかたちで調整されていると考えられる。だとすれば、把握実験において「行為のための視覚」の機能を正しく引き出すためには、実験のデザインは行為のプログラミングの段階で刺激が消えずに呈示されているようなものでなければならない。逆に、プログラミングを行う前に呈示刺激が消失したり遮蔽されたりした場合には、行為の誘導はオンラインの視覚情報に基づいてではなく、保持された記憶情報に基づいて行われることになる。視覚的記憶を担うのは錯覚に対して可感的な「知覚のための視覚」であるため、このような記憶誘導型の行為は知覚を介して錯覚の影響を受けることになる。実際、ウェストウッドとグッデールによる実験では、遅延条件下でのみ行為に対する錯覚の影響が生じることが示されている (Westwood and Goodale 2003)。

第三に、実験で使用された錯覚が二つの経路の分岐する前の初期の視覚皮質において生じるタイプである場合には、「行為のための視覚」に対しても錯覚の影響が生じると考えられる。この予想を確かめるために、ダイドとミルナーは二種類の錯覚図形を利用して実験を行った (Dyde and Milner 2002)。第一のタイプは同時傾き錯視 (simultaneous tilt illusion) であり、この錯視は初期知覚皮質における局所的な神経相互作用を通じて生じると考えられるため、「行為のための視覚」と「知覚のための視覚」の両方に影響を与えると予想される。第二のタイプはロッド・フレーム錯視 (rod-and-frame illusion) であり、この錯視は腹側経路のより下流の領域における大域的な情報処理を必要とすると考えられるため、「行為のための視覚」には影響を与えないと予想される。実験の結果、前者の錯視は行為と知覚の双方に影響を与え、後者の錯視は知覚のみに影響を与えるということが示された。これは二重説からの予想と一致するものである。このように、行為に対する錯覚



の影響を調べるためには、使用される錯覚が脳のどの領域における処理を通じて生じるものかを考慮に入れなければならない。たとえ錯覚が行為に影響を与えることが示されたとしても、それが初期視覚領域で生じるタイプのものであるならば、その結果は二重説に対する反例とはならないのである。

最後に、被験者の行為がぎこちないものや不慣れなものであった場合、その行為が成功裡に行われるためには意識的・認知的な要素の介入が必要となるため、「知覚のための視覚」を介した処理の影響を受けやすくなると考えられる。たとえば、初めて編み物に挑戦するときのことを考えてみよう。このとき、あなたは自分が何を行っているのかを意識的にモニタリングし、どのように動作すべきかを認知的にコントロールしなければならない。反対に、動作が熟達してくると、意識的なモニタリングや認知的なコントロールを必要としなくなり、行為は徐々に自動化してくる。行為が熟達するにつれ、「知覚のための視覚」がより強く関与していた状態から、「行為のための視覚」が支配的であるような状態へと推移してゆくのである。ここから、熟達していない行為は錯覚の影響を受けやすく、熟達した行為は錯覚の影響を受けにくいという予想が成り立つ。ゴンザレスらはこの予想を確かめるため、ポンゾ錯視を用いて被験者に対して不慣れな親指と薬指での把握運動を行わせた (Gonzalez et al. 2008)。結果、被験者の行為は実験初日には錯覚の影響を強く受けたが、数日間の訓練を経た後にはもはや錯覚の影響をほとんど受けなくなった。この結果は、行為が熟達すればするほど、その行為は錯覚に対する耐性をもつようになるということを示している。さらに、ゴンザレスらは利き手による把握運動は反対の手による運動よりも錯覚の影響を受けにくいということを示したが、このことも錯覚に対する耐性に熟達という要因が関与していることを示唆している。以上より、行為に対する錯覚の影響を確かめようとする場合には、実験で計測される行為が十分に熟達したものであり、かつ、その行為が自動的に展開するのを妨げないデザインとなっていなければならない。こうした条件が確保されない場合には、たとえ錯覚の影響が認められるという実験結果が得られたとしても、それを「行為のための視覚」に対する直接的な影響として扱う必要はない。

以上で見てきたように、錯覚が行為に影響を与えているとされる実験結果に対しては、(1) 周辺刺激への妨害回避による影響、(2) 刺激呈示に対する遅延の挿入による影響、(3) 錯覚の基盤となる神経メカニズムの低次性による影響、(4) 要求される行為の非熟達性による影響、の四つの要因によって説明を与えることができる。当該の諸実験のなかでこれらの要因が作用しているとすれば、行為に対する錯覚の影響を二重説に対する反例とみなすことなく説明することができる<sup>123</sup>。ミルナーとグッデールが述べているように、「腹側経路による知覚的制御の介入を免れるのは、高次の錯覚という文脈において呈示さ

<sup>123</sup> これらのうち、(1) と (3) は「行為のための視覚」に対する直接的な影響であり、(2) と (4) は「知覚のための視覚」を介した間接的な影響である。後二者の要因の関与についてはブルーノらの論文においても指摘がなされている (Bruno et al. 2008)。ブルーノらはミュラー・リヤー型の錯視を素材とした 33 例の実験報告を収集・統合し、それらにメタ的な解析を施すことで、視覚運動タスクは概して錯覚の影響を受けにくいこと、そして、影響を受ける場合でも、その大部分は (2) と (4) の要因によって説明されることを明らかにしている。この結果はミルナーとグッデールの応答に対して支持を与えるものである。

れ、リアルタイムで目の前の標的に対して向けられた、右手で行われる高度に熟達した行為のみ」(Miler and Goodale 2008, p. 780) なのである<sup>124</sup>。

われわれはここまで二重説の特徴とそれを支える経験的知見を概観してきた。二重説はいまだ確証された理論であるとは言えないが、現在までのところ、主要な幾つかの反論——とりわけ、われわれが見てきた自己／外界中心的参照枠に関する批判と、行為に与える錯覚の影響に対する批判——に対しては有効な応答を提示しえており、一定の堅牢性を備えた有望な仮説であると認めることができるだろう。

## 2. 5 概念主義と二重視覚システム仮説

ここでは二重説がどのように概念主義と関わるかを確認しておきたい。感覚的分類理論の提唱者であるマッテンは、二重説における二つの視覚機能——「知覚のための視覚」と「行為のための視覚」——をそれぞれ「記述的視覚 (descriptive vision)」と「運動誘導的視覚 (motion-guiding vision)」と呼び、感覚的分類理論の枠内において両者を整合的に理解できると論じている (Matthen 2005a, chap. 13)。一方で、腹側経路を中心とする記述的視覚は、対象のもつ色や形などの感覚的性質を処理することに関わっており、対象がどのような特徴を備えているかを記述するという機能を有している。これはマッテンが主張するところの感覚的分類の機能に他ならない。他方で、背側経路を中心とした運動誘導的視覚は、現在進行形で行われる行為の誘導に関わっており、対象のもつ感覚的性質の処理とは相対的に独立に機能する<sup>125</sup>。

上述のように、ミルナーとグッデールは行為における三つの側面——プランニング、プログラミング、オンライン制御——を区別している。これらのうち、記述的視覚に関わるのはプランニングのみである。感覚的分類理論を踏まえるならば、記述的視覚は対象についての記述的同定を行い、その同定の結果が運動誘導的視覚に伝えられることで行為のプランニングに利用されると考えられる。グッデールとミルナーが引用しているクリームとプロフィットによる実験 (Creem and Proffitt 2001) はこの解釈に支持を与えるものである (Goodale and Milner 2004, pp. 106-107)。彼女らの実験では、被験者にハンマーやドライバー、歯ブラシなどの一連の道具を提示し、手を伸ばしてそれらの道具を持ち上げるように指示した。このとき、柄の部分の被験者から遠い方に位置するように置くと、被験者は不自然な手の動かし方になるにもかかわらず、それらの道具の有する「機能的意味」に合わせるように掴んだ。ところが、認知的な負荷のかかる課題を行わせながら道具を掴ませると、被験者はその機能的意味が理解できていないかのような仕方で掴んだ。この結果は、認知課題の処理が腹側経路における処理と競合し、それを阻害していると考えら

<sup>124</sup> われわれは本節のはじめに、行為において三つの側面——プランニング、プログラミング、オンライン制御——が区別されうという点、そして、「行為のための視覚」に関わるのはプログラミングとオンライン制御のみであるという点を確認しておいた。この区別が明確に成り立つのは、関連する行為が熟達したものであり、かつ、行為計画を実装する段階で行為の標的がリアルタイムに呈示されている場合のみである。行為が熟達したものでない場合、あるいは、刺激の呈示から遅延が生じた場合には、これら二つの側面も「知覚のための視覚」による介入を受けることになる。

<sup>125</sup> マッテンは運動誘導的視覚に対し、身体運動の制御に関わる背側経路が担う機能だけではなく、眼球運動の制御に関わる上丘を介した経路が担う機能も帰属させている。

とで説明できる。競合が生じた場合、腹側経路からの行為への寄与は相対的に低下し、行為の生成に際して背側経路における処理が優勢になると考えられる。ここから、通常の場合には、記述的視覚が対象の記述的同定によってその機能的な意味を把握し、そこで把握された機能的意味がプランニングにおいて利用され、運動誘導的視覚による行為制御へと反映されていると推測される。グッデールとミルナーによれば、記述的視覚に損傷のある DF の場合も、類似したタスクを行わせた場合、認知的な負荷をかけられた被験者と同じように、対象の機能的意味に関わりのない仕方では把握行動を行う (Goodale and Milner 2004, p. 107)。しかし、運動誘導的視覚の機能は損なわれていないため、握ろうとする部位の幅に合わせて把握運動を行うことに支障はない。

以上のように、知覚に記述的内容を付与する感覚的分類システムは、二重説における「知覚のための視覚」と重ね合わせて理解することができる。また、感覚的分類理論は「行為のための視覚」を「運動誘導的視覚」として捉えることで、二重視覚システムの相対的な機能的分離や行為生成におけるそれらの協働といった論点をその描像のうちに受け入れることができる。では、自然化された概念主義のもう一つの要素である視覚的指標理論は二重説の枠組みにおいてどのように扱うことができるだろうか。

視覚的指標メカニズムは分散的注意において制御を担うメカニズムであり、第五章と第七章で述べたように、特に下頭頂皮質（頭頂間溝下部領域）がその処理に関わっている。この部位の機能には半球差があることが指摘されており、注意の制御に関わるのは特に右下頭頂皮質である。半側空間無視が主に左視野に限られているのはこうした半球差に由来する。反対の左下頭頂皮質は特に行為の生成に関わっていると考えられる。左下頭頂皮質（特にその後方部）の損傷は観念失行 (ideational apraxia) や観念運動失効 (ideomotor apraxia) を引き起こす。失行とは、運動を遂行する器官に障害がないにもかかわらず、目的に沿った運動が遂行できない状態のことを指す<sup>126</sup>。観念失行は、日常的な道具に関して、その認知はできるにも関わらず使用ができない失行のことであり、観念運動失行は、指示された運動や模倣運動、あるいは社会的意味をもった運動が損なわれる失行のことである。

ミルナーとグッデールはこの下側頭皮質を腹側経路に含まれるものとみなしているが (Milner and Goodale 1995)、これに対して、その部位が担う機能を二重説の枠組みにおいて捉えることはできないという批判が行われており、視覚システムには二つの経路ではなく三つの経路が存在しているという主張がなされている (Rizzolatti and Matelli 2003; Gallase 2007)。これらの論者によれば、視覚システムには側頭皮質へ向かう腹側経路に加えて、「背側－背側経路 (dorso-dorsal stream)」と「腹側－背側経路 (ventro-dorsal stream)」という二つの経路がさらに区分される。一方の背側－背側経路は第六次視覚野から上頭頂皮質 (superior parietal cortex) へ向かう経路であり、二重説における背側経路と同じく肌理細かなオンラインの行為制御に関わるとされる。他方の腹側－背側経路は第五次視覚野から下頭頂皮質へ向かう経路であり、特に空間認識と行為理解に関わるとされる。ただし、リゾラッティらの分析は下頭頂皮質の半球差をさほど考慮せずに行われている。シン

<sup>126</sup> ここでは『心理学辞典』(有斐閣、1999) の「失行」の項目を参照した。

＝カリーとフセインはこれに対して、下頭頂皮質の半球差を踏まえた上で、特に右下頭頂皮質が担う役割を「環境内の顕著な情報や警戒すべき情報に対して反応すること」と「現在のタスクの目標に対して注意を保持し続けること」であると分析している (Singh-Curry and Husain 2009)。視覚的指標メカニズムは注意の受動的な配分と配分された対象の追跡とを機能とするため、このシン＝カリーとフセインの分析結果は視覚的指標メカニズムの特徴と一致するとみなすことができる。では、この腹側－背側経路は腹側経路とは独立な第三の経路として認められるべきだろうか。

確かに、視覚的指標メカニズムは色や形といった感覚的性質の分類処理に関わるものではないため、知覚経験がもつ記述的内容を与える役割を直接的に担っているわけではない。だが、本論で述べてきたように、それは後頭－側頭皮質経路における分類処理の結果を統合し、前景的な意識に対してその内容を利用可能にするという役割を果たしている。この意味では、視覚的指標メカニズムも記述的内容の構成に対して寄与していると主張できる。実際、こうした機能が欠如した場合には、半側空間無視のような視覚的意識に関わる障害が生じてしまうのである。

また、リゾラッティらは下頭頂皮質が空間認識だけではなく行為の組織化にも関わっていると考えている。行為の組織化に特に関わっているのは左下側頭皮質であると思われるが、その損傷によって引き起こされる観念失効および観念運動失効は、行為のなかでも特に「プログラミング」に関わる障害である。したがって、左下頭頂皮質は行為の組織化のなかでも「知覚のための視覚」が担う部分においてその役割を演じていると考えられる。すでに述べたように、二重説は「知覚のための視覚」と「行為のための視覚」が行為の生成において協働しているということを認める立場であり、したがって「知覚のための視覚」の構成要素に行為の生成における役割を認めることはそれ自体として二重説に反するものではない<sup>127</sup>。

以上より、自然化された概念主義は二重説の枠組みと整合的な描像を与えると結論できる。

### 第三節 感覚運動アプローチ

#### 3. 1 感覚運動アプローチの概要

二重視覚システム仮説は、知覚と行為の関係性について、両者の機能的な分離を強調する立場である。対照的に、感覚運動アプローチはそれらの相互依存性を強調する立場である（そのため、感覚運動アプローチを以下では「依存説」と略称する）。では、依存説は知覚と行為がどのような点で相互依存的であると主張する立場なのだろうか。

まずは知覚に対する行為の依存性について見ておこう。依存説は視覚的な気づきに段階

---

<sup>127</sup> ミルナーとグッデールも、2006年に出版された『行為のなかの視覚脳 (*The visual brain in action*)』第二版のなかでリゾラッティらの見方を批判し、下側頭皮質を含むシステムを異なる第三の経路とみなすという提案は「早まったもの」であり、そのシステムは「主に腹側経路の仕上げをなすものとして機能すると判明するかもしれない」と述べている (Milner and Goodale 2006, p. 220)。

性を認める立場であり、行為や認知へのアクセス可能性の程度に応じて視覚対象に対する気づきの度合いが変化すると主張する。「人々が自分の見ているものに気づくのは、行為や思考を誘導する目的のために、その情報に対するコントロールを有している範囲においてである」(O'Regan and Noë 2001, p 969)。したがって、視覚的に運動制御がなされる場合には、それに利用される情報はつねに（たとえ認知に利用される場合に比べて弱いものであっても）何らかの視覚的気づきをとまなうとされる。この点で、依存説は行為が知覚に依存していると主張する。言い換えれば、依存説は二重説とは異なり経験基盤制御仮説を認める立場なのである。

次に、行為に対する知覚の依存性について確認しよう。ここで注意すべきは、依存説は単に知覚が行為の文脈のなかに埋め込まれてはじめて成立しうる——知覚にとって適切な感覚情報を収集するためには行為が必要である——ということを主張しているわけではない、という点である。言い換えれば、依存説は知覚が行為と外在的にのみ関係していると主張しているわけではない。むしろ、知覚は内在的に行為と関係しているのである。これが意味するのは、知覚の内容は知覚者がある種の熟達的な身体的技能を所有していることによってもたらされる、ということである。ノエは次のように述べている。

知覚者であるとは、運動が感覚刺激へと及ぼす影響を非明示的に理解しているということである。[……] 私たちが近づくにつれて、対象は視覚野のなかでより大きいものとして現れ、私たちがその周囲を動き回るとつれて、対象の姿は変わっていく。私たちが音源に近づくにつれて、音はより大きくなる。対象の表面上で手を動かすと、感覚が移り変わる。知覚者として私たちは、感覚運動依存性 (sensorimotor dependence) のなすこの種のパターンに精通している。[……] [私の] 中心的な主張は、私たちの知覚能力が、この種の感覚運動知識の所有に依存しているというだけではなく、それによって構成されているということにある。(Noë 2004, pp. 1-2)

この引用中で主張されているように、われわれが受けとる感覚刺激は自己の運動や対象の移動にともなって規則的に変化する。依存説によれば、知覚者となるためには、感覚と運動のあいだに成立しているこうした規則的なパターンを暗黙裡に把握していなければならない。この点で、依存説は知覚もまた行為に対して依存していると主張する。知覚経験が成立するためには行為を通じて獲得される感覚運動知識の所有および行使が必要なのである。

また、依存説の見方では、知覚と行為だけではなく、思考を含めた三者のあいだに密接不可分な関係が結ばれている。感覚運動依存性のパターンに関する暗黙的な把握は、「感覚運動知識」という概念に示されているように、知覚者によって習得される一種の知識である。知覚の成立にはこうした一種の知識の所有が要求されるがゆえに、「すべての知覚は本質的に思考的」(Noë 2004, p. 3) であるとされる。

盲目の生き物も思考能力をもちうるが、思考のない生き物が見る能力をもつことは決

してできないだろうし、また、内容をもった真正な知覚経験の能力をもつこともないだろう。知覚と知覚意識とは、思考に満ち、知識に裏打ちされた活動の類型なのである。(Noë 2004, p. 3)

このように、依存説は知覚の成立における行為の役割だけではなく、知識や思考の役割を強調するところにも特徴がある。後に論じるように、こうした知識や思考の重視は依存説を概念主義的な立場へのコミットメントへと導くものである。

以上で見てきたように、依存説の中心的なテーゼは「知覚経験は感覚運動知識によって構成されている」というものである。このテーゼに対しては、反対方向から即座に二つの疑問が提起されるだろう。第一に、依存説は一種の行動主義ではないのかという疑問である。なぜなら、依存説は意識経験を感覚運動に基づいた説明にあまりに強く結びつけすぎているように思われるからである。そして第二に、依存説は知覚プロセスを過度に知性化してしまっているのではないのかという疑問である。なぜなら、依存説は知覚内容のある種の知識によって構成されているものとみなしているからである。

第一の疑問に対して、ジェイコブは依存説における知識の役割に着目することで応答が可能であると指摘している (Jacob 2006, p. 2)。定義上、行動主義は観察不可能なプロセスに訴えるのを避け、心の内的なメカニズムをブラックボックスとみなす。だが依存説は、知覚経験が身体運動と感覚刺激のあいだの規則的な依存性から生じるという説ではなく、そうした依存性についての知覚者の感覚運動知識から生じるという説である。後者は前者とは異なり行動主義的ではない。なぜなら、感覚運動知識という概念を導入することで、依存説は知覚経験の説明において外部から観察不可能なものに訴えているからである。しかしながら、「外部から観察不可能」であることは「科学的に理解することが不可能」であることを意味しない。オリガンとノエが言及しているように (O'Regan and Noë 2001, p. 971, n. 4)、たとえば、異なる視点から対象を見たときにその形がどのように変化するかは、視覚科学の分野で「アスペクトグラフ」や「視覚的ポテンシャル」と呼ばれ、これらの概念をどのように人工視覚に実装するかが研究されている。このように、依存説は知覚経験の成立においてある種の知識に中心的な役割を認めており、そのため行動主義ではないかという非難を免れることができるのである。

次に、第二の疑問に対しては、ノエ自身が次のような応答を行っている (Noë 2004, pp. 182-184)。確かに、知覚内容を構成する知識がある種の命題的ないしは言語的な知識であるとすれば、言語をもたない幼児や動物から知覚をもつ資格を奪ってしまうことになるため、そうした理論は著しく常識に反するものとなるだろう。だが、依存説が主張しているのは、知覚内容が言語的な形式を備えた知識によって構成されているということではなく、感覚運動知識によって構成されているということである。感覚運動知識はある種の技能知であり、言語をもたない幼児や動物でも所有することが可能である。この点で、依存説に対しては過度の知性化という非難もまた当たらないのである。

ここまで依存説をその中心的な主張に焦点を当てて概観してきた。その中心的な主張とは「知覚内容は感覚運動知識の所有および行使によって構成されている」というものであ

る。では、これはどのような経験的な証拠に支えられているのだろうか。この主張からは次の二つの理論的予測を導き出すことができる。もし依存説が正しいとすれば、第一に、たとえ感覚器官の損傷による盲を被っていないくとも、人はしかるべき感覚運動知識の欠如によってある種の盲を被りうることになるだろう。ノエはこうした種類の盲を「経験盲 (experiential blindness)」と呼ぶ (Noë 2004, p. 4)。第二に、人が新たな種類の感覚運動知識を習得したときには、その知識に対応した新たな種類の知覚経験を獲得することになるだろう。このように、依存説からは感覚運動知識の欠如ならびに習得に付随して、ある種の知覚の障害や知覚の獲得が生じるという理論的な予測が導き出される。もしこれらの種類の知覚障害や知覚獲得の事例が存在することが確かめられたとすれば、それらの事例は依存説に対する経験的な証拠を与えることになるだろう。

われわれは本章の冒頭で、依存説を動機づけている経験的現象の一つに先天性盲患者の事例があるという点を指摘しておいた。回復手術をうけた先天性盲患者の視覚機能に関する逸話は、単に感覚刺激を受容するだけでは、われわれが経験している通常の知覚内容は成立しないという示唆を与える。ノエは、回復手術後の患者が実質的にいまだ盲状態にあるのは、自らの視覚印象がもつ感覚運動的な意義を理解することができていないからではないかと推測している。だが、ノエ自身が認めているように、これは感覚運動知識の欠如に起因しているのではなく、感覚それ自体の異常に起因しているという可能性が残されている (Noë 2004, p. 7)。それゆえ、この事例を単純に経験盲の存在を立証するものとして扱うことはできない。

では、依存説に対してはどのような経験的証拠が挙げられるだろうか。ノエは知覚障害の証拠として逆さ眼鏡の事例と子ネコを用いた有名な発達実験を、知覚獲得の証拠として感覚代行システムの事例と非感性的補完 (amodal completion) という現象をそれぞれ挙げている。以下、項を分けてそれぞれについて見てゆきたい。

### 3. 2 感覚運動知識と知覚の障害

#### (1) 逆さ眼鏡

感覚運動知識の欠如による経験盲の事例として第一に挙げられているのは古典的な逆さ眼鏡の事例である (O'Regan and Noë 2001, p. 953-954; Noë 2004, p. 7-11)。逆さ眼鏡をかけると、使用されているプリズムの形状や配置に応じて、網膜への入射光の空間的内容が左右や上下に逆転させられる。ノエはこのとき、単に視覚経験のもつ空間的内容が逆転するだけではなく、見ること自体に部分的な障害が生じると主張する。これを例証するものとして、ノエは球形プリズム眼鏡を用いたコーラーの実験 (Kohler 1964) に参加した K と呼ばれる被験者の証言を引いている。

注視しながら頭を動かす度に、視覚野の対象が思いがけない奇妙な仕方で変形する。熟知していた形が、これまで見たこともなかった仕方で解体して融合するかのように見える。ある場合には、複数の形が混ざりあい、それらのあいだの空間が消えてなく

なる。他の場合には、観察者を欺こうとしているかのように、それらの諸部分が分離する。数え切れないほど、私はこのような極度の歪みによって騙され、不意をつかれた。たとえば、壁が突然道に傾いて落ちてくるように見えたり、目で追っていたトラックが曲がり始めたり、道が波のように弓形に曲がり始めたり、家や木が前に傾いて見えたりした。頭の上に崩れ落ちて来る家々、波のようにうねる道、そしてゼリー状の人間からなる混乱した世界のなかに生きているかのように思えた。(Noë 2004, p. 8 から孫引き)

引用文から明らかなように、この被験者は完全に盲目に陥っているわけではなく、眼鏡を装着した後でもある程度の対象認識を行うことは可能である。しかし、「彼の視覚世界は歪曲され、予測不可能で混乱したものになっている。その限り、Kは盲を被っている」(Noë 2004, p. 8)。このような部分的な盲を引き起こしているのは感覚それ自体の異常ではない。なぜなら、逆さ眼鏡は視覚刺激それ自体の内在的な性格に変化を及ぼすものではないからである。ノエによれば、ここでの視覚的な障害はむしろ、逆さ眼鏡を装着することでそれと関連する空間的方向に関する感覚と行為のあいだの関連づけが乱され、被験者のもつ感覚運動知識の一部が無効になったことに起因している。したがって、ここでは感覚異常をとまなうことなく、感覚運動知識の欠如のみに基づいて盲状態が引き起こされていると考えられる。だとすれば、逆さ眼鏡の事例は経験盲が存在する証拠——したがって、依存説を支持する証拠——とみなすことができるだろう。

## (2) ヘルトとハインの発達実験

ノエが経験盲の事例として他に挙げているのはヘルトとハインによる発達実験である(Held and Hein 1963)。特にこの実験は、感覚運動知識の習得にとって単なる対象の移動や身体の受動的な移動ではなく、能動的な自己運動が重要であることを示唆するものと解釈しうる。

この実験で、ヘルトとハインは同腹の子ネコのペアを生後十週間にわたって暗闇のなかで育てた。子ネコたちは暗闇のなかでは自由に行動し、一日に三時間だけ訓練機に入れられた。訓練機は回転木馬のような構造をしており、二匹の子ネコが中心軸を通る棒の両側に結びつけられた。このとき、一方の子ネコ(能動ネコ)はしっかりと地面に立つことができ、回転木馬の周囲を能動的に運動することができたが、もう一方の子ネコ(受動ネコ)は空中にぶら下げられ、反対側の子ネコの動きに連動して受動的にしか移動できなかった。訓練機のなかでは二匹とも同じ視覚刺激を受けとったが、こうした制約により、能動ネコのみがその刺激を自己運動の結果として受けとることになった。その後、視覚誘導四肢配置や視覚性断崖回避といったテストを用いて、子ネコたちの視覚機能が正常に発達しているかどうか調べられた。テストの結果、能動ネコは通常の視覚能力を示したが、受動ネコは能力に障害が見られた。ノエはこの結果に対して、受動ネコは自己運動を阻害されたため、関連する感覚運動依存性のパターンを試行し、学習することができなかったという解釈を提示している(Noë 2004, p. 13)。この解釈が正しいとすれば、受動ネコの陥った



視覚障害は、この猫が感覚運動知識の欠如による経験盲に陥っていることを示すものである。

### 3. 3 感覚運動知識と知覚の獲得

#### (1) 感覚代行システム

次に知覚獲得の事例に移行しよう。第一に挙げられるのは感覚代行システムである。バキリタは 1960 年代に盲人のために「触覚知覚代行システム (tactile-vision substitution system: TVSS)」と呼ばれる視覚補綴システムを開発した (Bach-y-Rita 1972)。この装置では、頭部に装着されたカメラを通じて受容された視覚情報が触覚情報に変換され、額や舌に置かれた一連の振動器を動かす。それらの振動器は剣山のように縦横に並べて配列され、カメラが得た視覚情報を低い解像度ながらも被験者に伝達する。TVSS を装着した被験者は、辺りを自由に動き回ることによって触覚運動依存性を制御することができる場合には、あたかも実際に見ているかのように遠位的な対象に対応することができる。被験者は TVSS を利用して環境内にある事物の数や、それらの相対的な大きさ、そして位置について判断を下すことができ、また、対象の遮蔽や接近といった奥行き現象にも反応することができる。ノエはこのような盲人による TVSS への習熟を、関連する感覚運動知識の習得によって視覚に類似した新たな感覚様相が獲得された事例として理解する (Noë 2004, pp. 26-28)。もちろん、TVSS によって実現されるのは完全な視覚経験ではない。しかし、それは視覚が備えている諸特徴をある程度まで共有しており、この意味である種の「触視覚 (tactile vision)」あるいは「準一視覚 (quasi-vision)」であると言うことができる。このように、ノエは TVSS をはじめとする感覚代行システムの事例を依存説に対する証拠を提供するものとして捉えるのである。

#### (2) 非感性的補完

最後の事例は非感性的補完と呼ばれる現象である。部分的に遮蔽された対象を見ると、われわれはその対象が遮蔽物によって寸断されているのではなく、その背後で連続していると知覚する。たとえば、柵の向こうにネコが見えるとき、厳密に言えば柵越しに見える部分のみを知覚しているにもかかわらず、われわれは途切れのない一匹のネコが現前しているという感覚をもつ。また、一個のトマトを見ているとき、われわれはそのトマトを、見えている表面を備えているだけではなく、現在は見えていない背面を備えたものとして知覚する。このように、われわれの知覚経験は対象のもつ感性的な側面のみによってでき上がっているのではなく、非感性的な側面を何らかの仕方で補完しつつ成立しているのである。ノエによれば、この非感性的補完はあくまで知覚のレベルで成立する現象である (Noë 2004, pp. 60-61)。われわれは対象が遮蔽物の背後で連続していると単に判断するのではない。そのように見えるのである。言い換えれば、補完された側面はわれわれの現象学の一部をなすのである。とはいえ、非感性的側面は現在見えている感性的な側面と同等なものとして知覚経験を構成するわけではない。非感性的な側面はアクセス可能なもの

として知覚に対して現前しているのである (Noë 2004, p. 63)。知覚者は、自分がわずかに横に動けば、それまで隠れていたネコの一部分が見えるようになる (=アクセスされる) だろう、という暗黙的な予期をもちつつ柵の向こうのネコを眺めている。こうした暗黙的な予期が対象の非感性的な部分に対する知覚的な現前を与えているのである。ノエの考えによれば、このアクセス可能性はわれわれのもつ感覚運動知識によって支えられている。

トマトの全体性についての私たちの知覚的感觉——立体感や裏側など——は、たとえば左から右へと身体を動かすことがトマトのさらなる部分を視界にもたらすだろうという私たちの非明示的な理解 (私たちの予期) の内にある。トマトの見えない部分と私たちとの関係は、感覚運動付随性のパターンによって媒介されている。(Noë 2004, p. 63)

このように、非感性的補完を成り立たせているのはアクセス可能性に対する暗黙的な理解であり、この理解の根拠となっているのはわれわれの有する感覚運動知識である。それゆえ、非感性的補完という現象は感覚運動知識の所有によって獲得される知覚経験の一側面であると考えられる。だとすれば、この現象も依存説に対する支持を与えるものとして理解することができるだろう。

### 3. 4 概念主義と感覚運動アプローチ

本節の最後に、依存説がどのように概念主義と関わるかを確認しておこう。ノエは『知覚のなかの行為』の第六章で、依存説に基づいて経験内容についての概念主義的な見方を展開している。その際のポイントは、知覚経験を構成するところの感覚運動知識を、それ自体が概念的 (あるいは「原 - 概念的」) なものとして考えるべきだ、という点にある (Noë 2004, p. 183)。第二章でみたように、マクダウェルはカント的な伝統を継承し、知覚経験を自発性と受容性の不可分な協働において構成されるものとして理解している。ノエの主張によれば、ここでの自発性の能力は、知覚者が所有している感覚運動技能に置き換えて理解されるべきである。「単なる感覚刺激は、知覚者が感覚運動技能を所有しているおかげで、世界を現前させるような内容をもった経験となる」(Noë 2004, p. 183)。知覚者が受容する感覚刺激は、感覚運動依存性に対する暗黙的な理解を行使することによって、はじめて正常な知覚経験として成立するのである。

しかし、感覚運動技能が概念的なものであるというノエの主張はどのように正当化されるのだろうか。ノエはまず、概念を明示的で熟慮的な判断と過度に関連づけて捉える見方を一面的なものとして批判する (Noë 2004, p. 187)。たとえば、言語をもたず、明示的で熟慮的な判断をなしえない動物の場合でも、それが示す高度な行動を説明するための認知的な背景条件として、しかるべき概念に関する理解の指定が行われることがある。こうしたかたちでの概念所有についての語りが正当なものとして認められるならば、概念理解と実践的な技能の所有とのあいだに見かけほどの断絶は存在しないことになるだろう。また、動物が示す認知能力は別の文脈に適用可能であるという意味である程度の一般性を備えて

おり、この点でも通常概念的なものとされる諸能力とのあいだに顕著な隔絶は認められない。

さらにノエは、対象の位置変化の知覚と対象を追跡する感覚運動技能の關係に触れたポアンカレの文章を引用しつつ、知覚者がある種の觀察概念を所有しているかどうかという問題は、それと関連する感覚運動技能を所有しているかどうかという問題と実質的に等しいと主張する (Noë 2004, pp. 199-201)。ここからノエはさらに、感覚運動知識の習得は、関連する觀察概念の所有を構成すると認めてよいのではないかと提案する。もしこの提案が妥当なものであるとすれば、感覚運動知識それ自体を概念的なものであると認めることができるだろう。実際、ノエによれば、感覚運動知識の帰属は、概念の帰属において問題となるような全体性や規範性といった特徴を有している。

〔…〕 感覚運動技能の帰属は、概念的なものの領域を特徴づけているような類の、全体性や規範性に関する考察によって支配されている。次のような種類のさらなる諸条件が満たされない限り、われわれは人が対象の位置変化についての視覚的経験を有しているとは認めないだろう。それらの条件とは、対象の位置変化を視覚的に経験することができる知覚者は、たとえば、自分が目を閉じれば対象が見えなくなるであろうことも予期することができ、さらには、対象が移動することと、対象と相対的に自分が移動することとを区別することもできるはずだ、というものである。ここにおいては、感覚運動技能を所有することは、関連する觀察概念を所有することと実質的に等しいのである。(Noë 2004, p. 201)

このようにノエは、感覚運動知識は一般性、全体性、規範性といった概念がもつ本質的な諸特徴を備えており、それゆえ概念的な技能として認められるべきであると主張する。この主張が正しいとすれば、そうした技能によって構成される知覚経験の内容もまた概念的であるということになるだろう。

ここでひとつ注意すべき点がある。それは、感覚運動知識は一種の技能知であり、したがって、非命題的な知識であるという点である。ノエが感覚運動知識を「原 - 概念的」なものとして考えるのも、それが命題的な分節形式を備えた信念によって構成される概念的知識とは異なるものだからである。それゆえ、依存説に基づいたタイプの概念主義においては、知覚経験は概念的ではあるが非命題的な内容を備えているということになる<sup>128</sup>。

前節と本節では、二重説と依存説の諸特徴とそれらを支える証拠とを概観し、それぞれが概念主義とどのように関係しているのかを見てきた。上述のように、二重説は本論が支持するような命題説型の概念主義と親和的であり、依存説は非命題説型の概念主義と親和的である。それゆえ、依存説に比べて二重説の方がより有望な理論であるということを示

---

<sup>128</sup> 知覚経験の内容が命題的な形式を欠いているとすれば、それがどうやって命題的な形式を備えた判断を正当化しうるのかという問いが提起されることになるだろう。すなわち、ノエの概念主義は所与の神話を免れうるような真正な概念主義として認められるのかという問いである。ノエの議論の範囲ではこの問いは未解明なままに残されている。

すことができたとすれば、それは本論が提示している概念主義に対して間接的な支持を与えることになるだろう。以下、われわれは両者に対する批判的な検討を通じてこの課題に取り組みたい。

## 第四節 感覚運動アプローチへの批判

依存説に対しては、経験的証拠との関係において二つのタイプの批判を展開することができる。第一の批判は、依存説を支えるとされる現象に対しては、依存説に依拠しない別の観点からも説明を与えることができるというものである。このように言えるとすれば、それらの現象は依存説を特別に支持するものではなく、したがって依存説は経験的証拠を欠くことになる。第二の批判は、依存説は視覚障害に関する経験的知見と不整合であるがゆえに、単に経験的証拠を欠いているだけではなく、それと矛盾するというものである。以下、項を分けてそれぞれのタイプの批判について論じてゆきたい。

### 4. 1 経験的証拠に対する別解釈

第一のタイプの批判は、依存説が依拠している経験的証拠に対して別解釈を提示するものである。プリンツはこのタイプの批判を「エナクティブな知覚にブレーキをかける」という論文のなかで展開している (Prinz 2006)。この論文で、プリンツは本章で紹介した依存説の四つの経験的証拠に対して別解釈を提示し、それらの証拠は依存説を持ち出すことなく理解することができる<sup>129</sup>と論じている。ここではプリンツの議論を参考にしながら、それぞれの証拠に対する別解釈の可能性について検討したい。

#### (1) 逆さ眼鏡

まずは逆さ眼鏡の事例である。ノエによれば、逆さ眼鏡をかけた被験者は単に視野が上下ないしは左右に逆転するだけではなく、見ること自体についての部分的な障害に陥る。しかし、プリンツは被験者が一時的な経験盲に陥るというノエの解釈に対して疑義を呈する (Prinz 2006, pp. 5-7)。第一に、被験者は自らが盲目に陥っていると報告することはなく、対象の認識もおおむね支障なく行うことができ、さらには（たとえごちないものであるとしても）身体運動を調整するために視覚を利用することもできる。また、被験者が静止しているときには、逆さ眼鏡を通じた知覚は単なる鏡像知覚と同じであり、特に視覚障害が生じていると考えるべき点はない。とはいえ、被験者が周囲を動き回ろうとするときには、確かに被験者はしばしば視覚的な歪みを訴える。だが、プリンツによれば、こうした現象は容易に説明することができる。われわれは運動を行うとき、次の瞬間についての視覚的なイメージを形成することで、次に何が起こるかについての予期を形成する<sup>129</sup>。

<sup>129</sup> プリンツ自身は言及していないが、こうした予期は「遠心性コピー (efference copy)」に関わるものと考えられる。遠心性コピーとは、大脳から末梢の効果器へ向かう運動指令のコピーであり、このコピーをフォワード型の内部モデルに入力することで、自動的にその指令に伴う感覚運動予測が行われる。この予測は自発的に発生させた感覚および運動とそうでないものとを識別するのに役割を果たしている

逆さ眼鏡をかけて間もないときには、運動にともなって形成されるこの予期が系統的に誤ったものとなるため、世界は不安定で歪んだものとして経験されると考えられる。以上のように、プリンツの考えによれば、逆さ眼鏡の事例を経験盲の事例と解釈することそれ自体が疑わしく、また、運動時に生じる視覚的な歪みも予期的な視覚的イメージによって説明することができる。それゆえ、逆さ眼鏡が依存説に対する証拠を与えるという解釈には疑問の余地がある。

だが、上述のプリンツの議論に対しては、依存説から次のような反論が提起されるかもしれない。プリンツは運動しているときの視覚的歪みを次の瞬間についての予期によって説明しているが、こうした予期はまさに感覚運動知識によってこそ可能となるものである。なぜなら、感覚運動知識とはまさに「このように運動すればこのような感覚が生じる」ということについての暗黙的な知識だからである。だとすれば、逆さ眼鏡によって生じる視覚的歪みはやはり依存説によって説明されることになるのではないだろうか。

確かに、運動時に生じる視覚的歪みに関する説明は感覚運動知識の行使に基づいて与えられるかもしれない。だが、これはさして驚くべきことではない。なぜなら、感覚運動知識の性格からして、運動に関わる場面でその種の知識が利用されることはむしろ通常期待されることだからである。知覚経験に関する一般的な説明を与えることを意図するならば、依存説は運動に関わりのない場面でも経験盲が成立することを明らかにしなければならない。しかし、静止時における見えが経験盲に陥っていないというプリンツの論点は依然として無傷なままである。したがって、逆さ眼鏡の事例は依存説が必要とする証拠を与えるものではないと結論できる。

以上の議論に付言しておけば、逆さ眼鏡をかけた被験者が経験盲に陥るという解釈をもっともらしく見せているのは、ノエが引用しているコーラーの実験の被験者 K の証言である（前節を参照）。だが、ここで注意すべきは、K が装着したのは通常の上下反転眼鏡や左右反転眼鏡で利用される直角プリズムを用いた眼鏡ではなく、球形プリズムを用いた眼鏡であるという点である。直角プリズムとは異なり、球形プリズムは視覚刺激の空間的な配列を歪める効果をもつ。それゆえ、球形プリズムを用いた逆さ眼鏡をかけた場合、もはや被験者が正常な感覚刺激を受けとっている考えることはできない。だとすれば、それによってある種の視覚的な歪みが引き起こされたとしても、その歪みを視覚運動知識の欠如へと帰することはできないと言うべきであろう。

## （２）ヘルトとハインの発達実験

次に、ヘルトとハインによる発達実験について検討しよう。プリンツはこの実験を経験盲の事例として解釈することについて次のような批判を提示している（Prinz 2006, p. 10）。第一に、受動ネコの視覚テスト（視覚誘導四肢配置と視覚性断崖回避）に対する成績の低さは、受動ネコが視覚経験に障害をもっているという解釈に訴えなくとも説明することができる。すなわち、受動ネコは視覚刺激を運動制御へと変換する能力に異常をきたしていたと解釈すればよいのである。受動ネコは実験上の制約によって視覚運動制御の訓練がで

---

（Kandel et al. 2012, p. 746ff）。

きなかったため、こうした異常が生じることはきわめてありうることである。第二に、この実験に対しては再現結果が得られていない。その上、人間を被験者とする反例実験も存在している (Rivière and Lécuyer 2002)。その実験では、自己運動をする能力を先天的に欠いた脊髄性筋萎縮症の子どもを被験者として、視覚的な空間認知に関する能力がテストされた。結果、それらの子どもたちの能力には特に問題が認められなかった。以上の二点より、ヘルトとハインの実験もまた感覚運動知識の欠如による経験盲の存在を示すものではないと結論できる。

### (3) 感覚代行システム

TVSS をはじめとする感覚代行システムの事例についてはどうだろうか。上述のように、ノエは、TVSS に習熟し、新たな感覚運動知識を身につけることによって、被験者は触覚を介して一定程度視覚と類似した経験を得ることができるようになると論じている。オリガンとノエは、次の二つの特徴が TVSS を利用することで得られる経験を取りわけ視覚経験に類似したものにしていると指摘している (O'Regan and Noë 2001, p. 958)。すなわち、TVSS を利用することで、被験者は (a) 遠位的な対象に対する非接触的な知覚的弁別を行うことができる、(b) 三次元的な遮蔽や接近といったパターンを識別することができる、という二点である。

プリンツは (a) の論点について次のような批判を行っている (Prinz 2006, pp. 4-5)。TVSS を装着した被験者は確かに触覚を介して遠位的な対象に対する非接触的な識別を行うことができるようになる。だがプリンツによれば、この条件を満たしながら、なお疑いなく触覚的であるような事例は多数存在する。たとえば、われわれは杖を使って対象の形態や肌理を識別することができるし、車のタイヤによって路面の状況を感じることができるし、扇風機や暖炉に近づくことでそれらとの距離をおおまかに知ることができる。これらはいずれも身体的接触をとまわずに遠位的対象がもつ諸性質を識別する事例である。しかしながら、だからといってこれらの事例における経験が視覚的な質を備えるようになるわけではない。それゆえ、(a) の条件は経験を視覚と質的に類似したものとするわけではない。

プリンツは (b) について特に何も述べていないが、こちらについても類似した指摘をなすことができるだろう。ノエとオリガンは遮蔽や接近といったパターンの識別を視覚特有のものと考えているが、聴覚や嗅覚においてもこれらのパターンを識別することは可能であり、したがって、これらのパターンは視覚特有のものではなく様相横断的なものであると考えられる。だとすれば、(b) の条件も経験を視覚と質的に類似したものとするわけではないと言うべきであろう。

もちろん、通常の視覚と TVSS を介した「触視覚」とのあいだにはある程度の感覚運動依存パターンの同形性が認められる。しかしながら、こうした同形性から質的類似性を導き出すのは論点先取である。そうした推論は問われるべき依存説の正しさを前提としてはじめて可能になるのである。以上より、感覚代行システムの事例も依存説に対する証拠を与えるものではないと結論できる。

#### （４）非感性的補完

最後に非感性的補完の事例について考察しよう。上述のように、ノエは、非感性的補完はわれわれの現象学の一部をなしており、それは感覚運動知識の行使によって可能となっていると論じる。これに対するプリンツの批判は次のようなものである (Prinz 2006, p. 8)。ノエは非感性的補完を知覚経験の構成要素であると考えている。だが、その現象は暗黙的に形成された予期によっても説明することができる。たとえば、対象を部分的に覆っていた遮蔽物が取り去られたとき、その対象が実際には寸断された不完全なものだったとしたら、われわれはそのことに驚きを感じるだろう。しかし、この驚きはわれわれが無意識的な予期を形成していたことを示すのみであり、遮蔽された部分を（逆説的にも）経験していたということを示すものではない。

しかし、このプリンツの批判は十分な説得力をもつものではない。なぜなら、非感性的補完が知覚のレベルに位置する現象であることは容易に否定されるべきではないと思われるからである。たとえば、紙の上に黒い太線が引かれており、それが途中で短く途切れているとしよう。この途切れた部分を覆うように鉛筆を置くとどうなるだろうか。このとき、あなたはその太線が実際には途切れているのを知っており、太線がつながっているという予期を形成することはないはずである。それにもかかわらず、あなたには太線が鉛筆の下でつながっているように見えるだろう。われわれは、たとえ別様な予期を明示的に形成したとしても、非感性的補完を消去することはできないのである。だとすれば、非感性的補完を単なる予期の形成によって説明することはできない。このことは、非感性的補完が知覚経験そのものの構成要素であることを強く示唆する。

ここでプリンツ側からは次のような応答が予想される。非感性的補完に関わる予期は、上の批判で想定されているような明示的かつ自発的な判断によって構成されるものではなく、暗黙的かつ自動的に生成されるイメージとしての予期である。こうした種類の予期は認知レベルからの影響に対して相対的に閉じており、たとえ明示的な判断と食い違ったとしても打ち消すことはできない。だとすれば、別様な判断によって非感性的補完を消去することができないとしても、それを知覚経験それ自体の構成要素として認める必要はなくなるだろう。

だがノエの側からは、こうした応答に対して、逆さ眼鏡のところで論じたものと同じ反論が適用可能である。すなわち、ここで言及されている暗黙的な予期は、それ自体が感覚運動知識の行使によって構成されているかもしれない、という反論である。もしそうだとすれば、暗黙的な予期を持ち出したとしても依存説を批判したことにはならないだろう。加えて言えば、認知レベルからの浸透不可能性は、モジュール的なシステムの働きと非モジュール的なシステムの働きとを分ける一つの有力な指標である。非感性的補完にともなう暗黙的な予期がそのような浸透不可能性を示し、かつ、それが感覚入力によって受動的に形成されるすたとすれば、なぜそれを知覚レベルに位置する現象として認めてはならないのだろうか。第一章で論じたように、知覚システムがデータ駆動型のモジュール的なシステムとして特徴づけられるとすれば、ここでの予期はまさに知覚システムの一部を構成し

ていると言って差し支えないのではないだろうか。もしそうだとすれば、上述のプリンツの反論は退けられることになるだろう。なぜなら、非感性的補完が感覚運動知識の行使を必要とする予期によって構成されており、かつ、その予期が認知的に浸透不可能なレベルに位置づけられるとすれば、そこから、非感性的補完は感覚運動知識によって構成される知覚現象であるという主張が導かれるからである。

では、非感性的補完は依存説に支持を与えると結論すべきだろうか。そう結論するのは早計である。第一に、ノエが論じているように、非感性的補完によって構成されるのは知覚の現勢的な (actual) 内容 (=現在アクセスされている内容) ではなく潜在的な (virtual) 内容 (=アクセス可能な内容) である。それゆえ、たとえ知覚の潜在的な内容に関して感覚運動知識による構成が認められるとしても、そこから現勢的な内容に関しても同じ論点が帰結するわけではない。知覚の構成要素として現勢的な内容と潜在的な内容の二種類が区別可能であるとするならば、たとえ潜在的な内容の存在を認めたとしても、知覚内容の構成に対する感覚運動知識の寄与は部分的なものに留まることになるだろう。

この議論に対して、ノエからは、現勢的な内容と潜在的な内容をこのように分離可能なものとして扱うのは妥当ではない、という再反論が提起されるかもしれない。もし潜在的な内容が存在しないとすれば、たとえば、トマトは背面のある三次元的対象には見えず、ネコは柵の向こうで連続しているようには見えないだろう。このように、われわれが正常な知覚内容を獲得するためには潜在的な内容が不可欠であり、現勢的な内容と潜在的な内容は一体となってわれわれが現に有しているような知覚経験を構成しているのである。それゆえ、潜在的な内容に関して感覚運動知識による構成を認めることは、知覚内容の全体に関してもそれを認めることに他ならない。

しかしながら、この再反論に対してはさらに疑問を提起しうる。ノエは立体知覚や奥行き知覚と非感性的部分の知覚とを感覚運動知識によって可能になるものとして統一的に扱おうとしているが、これらは区別されるべきものと思われる。たとえば、「トマトを立体的なものとして知覚すること」と「トマトの背面を現前するものとして知覚すること」は区別されるべきであり、「ネコを柵で寸断されていないものとして知覚すること」と「ネコの柵で遮蔽された部分を現前するものとして知覚すること」は区別すべきである。一方で、トマトが立体的に知覚されることやネコが連続体として知覚されることは通常の知覚経験が成立するために本質的である。だが、これらは感覚運動知識に依拠せずとも説明可能である。たとえば、トマトを立体的なものとして知覚するためには、両眼視差によって得られるトマトの視差情報を計算すればよい。また、ネコを柵によって寸断されていないものとして知覚するためには、同じく両眼視差によって得られる柵とネコの奥行き情報の違いを計算すればよい。両眼視差は運動視差とは異なり運動的な要素を含んでいないため、これらの立体知覚や奥行き知覚は必ずしも感覚運動知識に訴えずとも説明可能である。他方で、トマトの背面を現前するものとして知覚することや、ネコの柵で遮蔽された部分を現前するものとして知覚することは、通常の知覚経験の成立にとって必ずしも本質的なものとは言えない。少なくとも、それらが本質的であるかどうかは、トマトの立体知覚やネコの奥行き知覚が本質的であるかどうかには比べればはるかに賛否が分かれる問題だろう。だ



とすれば、たとえ非感性的知覚が感覚運動知識によって可能になるとしても、それが通常の現勢的な知覚内容の成立にとって不可欠であるとは必ずしも言えないということになる。このように、潜在的な内容が通常の知覚経験の成立にとって不可欠に思えたのは、立体知覚や奥行き知覚と非感性的知覚とを一緒に論じ、それらすべてを感覚運動知識によって可能になるものとして扱ったためであると考えられる。だとすれば、非感性的補完現象についても依存説を支持する証拠として認められるとは言えないということになる。

以上で論じてきたように、依存説が依拠している経験的事例はいずれも依存説によらずとも別様に解釈可能であり、それゆえ、依存説を支持する証拠として即座に認められるものではない。しかしながら、ここまでの議論は依存説が経験的証拠による支持を欠いていることを示すものではあっても、経験的証拠と不整合をきたしていることを示すものではない。次項では後者の論点を示すための議論を展開したい。

#### 4. 2 経験的証拠に対する不整合

本章第二節において、二重説が視覚形態失認と視覚運動失調の二重乖離を経験的証拠の一つとしているということを確認しておいた。二重説によれば、われわれの視覚には意識経験の形成に関わる経路と運動制御に関わる経路の二つの経路が存在しており、これらはそれぞれ相対的に独立に機能している。それゆえ、二重説が正しいとすれば、知覚者は視覚を用いて行為制御を行う能力を欠いたとしても、なお眼の前の光景についての視覚経験をもつことができることになる。実際、視覚運動失調の患者はこのような症状を呈する。しかし、そうだとするならば、依存説は視覚運動失調に関する経験的証拠と不整合をきたすように思われる。なぜなら、依存説は視覚経験が感覚運動技能の行使によって構成されているという説であるが、視覚運動失調の症例が示すのはまさに、こうした技能を欠いていたとしても外界を視覚的に経験することができるということだからである。だとすれば、依存説は二重説を支持する経験的証拠と衝突し、それゆえ二重説と両立不可能であるということになるだろう。

これに対して、ノエからは次のような応答が提起されうる。第一に、依存説は知覚が何のために存在しているかという点についていかなるコミットメントも行わないものではない。特に、依存説は知覚経験が行為誘導のために存在しているという主張を含意してはいない。それゆえ、二重説が主張するように、行為誘導を目的としない視覚システムが存在したとしても、そのこと自体は依存説の主張と矛盾することはない。ノエは次のように述べている。

エナクティブ・アプローチは「視覚は行為を導くためのものである」という考え方に加担していないので、視覚処理の一部は行為を導くために存在するという事実も、視覚処理の一部は行為を導くために存在していないという事実も、エナクティブ・アプローチとはいかなる直接的な関係ももたない。エナクティブ・アプローチの見方では、すべての知覚表象は、それが背側経路の活動の結果であろうと腹側経路の活動の結果

であろうと、感覚運動技能を知覚者が発動することに依存しているのである。(Noë 2004, p. 19)

第二に、視覚運動失調患者は確かに視覚対象に対して適切な運動行為を行うことができないが、この事実は依存説にとって問題を突きつけるようなものではない。なぜなら、依存説は知覚経験が感覚運動知識の所有を必要とするという説であって、実際の運動行為を必要とするという説ではないからである (Noë 2010, p 247)。たとえ視覚運動失調患者が把握運動などの行為を行うことができないとしても、しかるべき感覚運動知識を所有しているならば、当該の患者が視覚的な経験を有していることは問題とはならないのである。

この応答に対しては即座に次のような疑問が生ずるだろう。すなわち、視覚運動失調患者が視覚的な運動制御を行うことができないということは、その患者が関連する感覚運動知識を欠いていることを意味するのではないか、という疑問である。この疑問に対しては、ある患者が視覚運動失調を患っているという事実からは、その患者が視覚経験に必要な視覚運動知識を失っているということは必ずしも帰結しない、と答えることができる。このことを理解するためには、感覚運動知識を所有していることと、その知識を運動制御に利用可能であることとを区別する必要がある。私がピアノを弾く技能を身につけているとしよう。もし私が全身麻酔をかけられたとすれば、それが効いている間、私はピアノを弾く技能を発揮することができない。しかしだからといって、私がその間に当該の技能を失っていたということにはならない。麻酔が切れて十分な時間が経過したならば、私はふたたびピアノの前でその技能を行使することができるだろう。同様に、視覚運動失調患者の場合も、たとえ運動制御に利用できないとしても、しかるべき感覚運動知識を所有し、それを（運動制御においては行使できないとしても）視覚経験において行使できているのかもしれない。加えて言えば、視覚運動失調患者であっても、眼球運動などの他の運動行為に関しては損傷を被っていない場合があるため、そうした無傷な感覚運動技能が当該の患者における視覚的意識に結びついている可能性も考えられる。以上の議論からは、少なくとも視覚運動失調の存在が依存説をただちに無効にすることはないと結論できるだろう。

しかしながら、前項で提示した脊髄性筋萎縮症の子どもを被験者とした実験 (Rivière and Lécuyer 2002) に対してはこうした反論は無効である。この実験では、被験者に対して視覚的な空間認知に関するテストが行われ、結果として特に認知能力に異常は認められなかった。これらの患者は自己運動を行う能力を先天的に欠いているため、単に運動制御を行うことができないだけでなく、自己運動を通じて学習される感覚運動知識をもっているとも認められない。だとすれば、この実験結果は依存説に対して反例を与えることになるだろう。これらの患者が車椅子などで受動的な身体運動を経験し、その結果として感覚運動依存性を獲得したという可能性は残されているが、少なくともノエらが重視するような能動的な身体運動は行われていない。確定的な結論を得るためにはさらなる経験的知見を必要とするが、少なくともこの実験は、依存説の主張に反して、感覚運動知識は知覚経験の成立にとって必要ではないということを示唆するものである。

さらに、視覚形態失認の存在も依存説にとって反例を与えると思われる。視覚形態失認

が示しているのは、知覚者がたとえ視覚的に行為を制御する能力を有していたとしても、しかるべき視覚経験が成立しない場合が存在するということである。依存説が主張するように、もしも意識経験が感覚運動知識によって構成されているとすれば、DF は彼女が所有する感覚運動知識に応じた意識経験を有していなければならないはずである。だが、DF はそのような経験を有していることを自ら否定している。DF は対象の形状に合わせた把握行動を行うことができるにもかかわらず、それを視覚的に経験していないと証言しているのである。

この問題に対して依存説は、DF が形態に関する知覚的意識を有していないという論点を否定することで対処する。本章第三節で述べたように、依存説は視覚的な気づきに段階性を認める立場であり、ある視覚情報が認知システムや行為システムなどにどれだけ統合されているかによって気づきの度合いが変化することを認める。したがって、視覚情報が行為システムへと利用される場合、その情報は——認知システムに利用される場合に比べれば弱いものかもしれないが——何らかの視覚的気づきを伴うとされる。このような観点からオリーガンとノエは、DF は自らのもつ運動制御に対応した「部分的な気づき (partial awareness)」を有していると述べている (O'Regan and Noë 2001, p. 969)。DF がこのように部分的気づきを有しているとすれば、視覚失認の事例は依存説に対する反例とはならないだろう。依存説によれば、DF は自らの有する視覚運動知識に応じた視覚的意識を有しているが、それを言語報告に利用することができないだけなのである。

同様の指摘はクラークの経験基盤制御仮説批判に対する再批判を展開したワルハーゲンの論文においてもなされている (Wallhagen 2007)。ワルハーゲンによれば、ミルナーとグッデールによる一連の実験は背側経路が何らかの意識を下支えしているという可能性を排除するものではない。それらの実験で示されたのは、対象の幅や向き、あるいは形態について言語や身振りで報告を行うタスクにおいて、DF にはパフォーマンスの著しい悪化が認められるということである。この種のタスクは DF に何らかの形で視覚判断を求めるものである。それゆえ、ここから直接帰結するのは、DF は視覚判断を行う能力に問題を抱えているということであり、DF がしかるべき意識経験を欠いているということではない。したがって、DF は対象の形態に対する現象的な視覚的意識を有しているが、それを概念的な判断の内容として報告することができないだけかもしれない。だとすれば、背側経路における処理が意識の成立において独自の寄与をなしている可能性は否定されていない。むしろ、DF の事例が経験基盤制御仮説を否定するものでないとしたら、対象の幅や形について視覚的に制御された行為を行うことができる限り、彼女はそれらの性質に関する現象的意識を有していると考えるべきであろう。

ジェイコブとデ・ヴィニユモンは、DF が形態に対する視覚的意識を有しているかもしれないというこのような懐疑の背景に、「意識の報告可能性基準 (the reportability criterion of consciousness)」への疑念が存在していると指摘している (Jacob and de Vignemont 2010, p. 132)。意識の報告可能性基準によれば、ある表象の内容が意識的であると認められるためには、その表象内容に対して主体が報告可能性を有しているのなければならない。言い換えれば、意識の報告可能性基準とは、知覚者が有する表象内容のう

ち、報告できた内容のみが意識的であったとする基準である。この基準を採用したならば、現象的な知覚経験が成立することとその経験についての知覚判断が可能であることとのあいだに何ら深刻なギャップは存在しないことになる。だが、ジェイコブとデ・ヴィニユモンによれば、近年のいくつかの経験的知見はこうしたギャップが存在することを示唆している。彼らを取りあげているのは不注意盲と半側空間無視の事例である。彼らによれば、これらの事例は視覚的光景のなかの注意が向いていない部分においても現象的意識が成立していることを示唆している。われわれが前章で論じたように、少なくとも不注意盲の事例に関してはこうした議論は妥当であろう。

しかし、たとえ意識の報告可能性基準が疑わしいものであるとしても、なお DF が対象の幅や形に関する現象的意識を有しているという見方に対しては否定的であるべき理由が存在する。もし、オリガンやノエが指摘するように、DF において損傷を負っていない背側経路が独自の現象的内容をもっているとすれば、健常者においてもまた背側経路は現象的意識の構成に寄与しているはずである。だがここでエビングハウスの錯視を利用した把握実験を想起してほしい。その実験では、被験者の手の開き幅は錯覚の影響をほとんど受けないということが示されていた。もし背側経路も現象的意識の構成に寄与するとすれば、錯視の影響を受ける腹側経路と受けない背側経路の扱う現象的内容には齟齬が生じるはずである。それゆえ、健常者はエビングハウス錯視の視覚経験において相矛盾する二重の意識をもつことになる。しかし、ジェイコブとデ・ブニユモンが指摘しているように、被験者は認知的不協和に陥るわけではなく、ただ錯覚的な意識内容に気づいているのみである (Jacob and de Vignemont 2010, p. 140)。主体による「気づき」を意識にとって不可欠の要件とみなす多くの論者にとって、こうした気づきのない意識という想定は不可解なものであろう。

ここで、オリガンとノエからは次のような反論が提起されるかもしれない。背側経路が担うとされる情報は、気づきの対象とならないという点で確かに多くの論者にとって不可解なものであろう。だが、ブロックが論じているように、アクセス意識と現象的意識が分離可能だとすれば、「気づきを伴わない意識」という想定も概念的に不可能だとは言えない。DF は、認知的にアクセス可能な現象的意識を有してはいないが、アクセス不可能な現象的意識は有していると考えればよいのである<sup>130</sup>。意識の報告可能性基準に対する懷疑はまさに、アクセス意識と現象的意識が分離可能——少なくとも現象的意識からアクセス意識を除くことは可能——であるということを支持するものである。それゆえ、その懷疑が上述のように一定の妥当性をもつならば、DF が現象的意識をもつという想定も不可解なものであるとは言えないということになるだろう。

しかしながら、こうした反論に対しては次のような再反論が可能である。確かに、アクセス意識と現象的意識が分離可能であるならば、アクセス意識のない現象的意識が存在したとしても不思議ではない。だが、不注意盲や半側空間無視の事例におけるアクセス可能性の欠如と背側経路が担う情報におけるアクセス可能性の欠如のあいだには看過しがたい

---

<sup>130</sup> ただし、DF の現象的意識は行為制御には利用可能であり、この点で何ら機能をもたない不活性な存在ではない。

相違点がある。前章で取りあげたラメの注意盲実験を振り返ってみよう。ラメの実験では、最初に呈示される円形に配列された図形群が、注意が向けられる前から意識的であった——アクセス意識の内容となる前から現象的意識の内容となっていた——とされる。ブロックは、この実験が示しているのは、現象的意識はアクセス意識よりも担うことのできる容量が多いゆえに、現象的意識はアクセス意識を「溢れ出る」(overflow)ということであると述べている (Block 2007)。ここで注意すべきは、アクセス意識から溢れ出た現象的意識は、もしその時点で注意が向いていたならばアクセス意識になっていたであろうという点で、いわば「アクセス可能性の可能性」をもっていたということである。これに対して、背側経路が担う情報における (想定上の) 現象的意識は、そもそも注意を向けることができない、アクセス意識から閉ざされた現象的意識であり、「アクセス可能性の可能性」すらもたない意識である。この点で前者と後者は大きく異なる。前者のアクセス意識から溢れ出た現象的意識には「意識の周縁で漠然と意識されていた」といったかたちでアクセス可能性がなくとも意識の存在を比較的違和感なく想定できるが、後者のアクセス意識から閉ざされた現象的意識についてはそのように想定することすらできない。たとえ注意盲などの事例からアクセス意識のない現象的意識の存在が擁護されとしても、そこで擁護されるのはアクセス可能性の可能性をもった現象的意識の存在であって、アクセス可能性の可能性をもたない現象的意識の存在ではない。だとすれば、たとえ意識の報告可能性基準に対する懐疑が妥当なものだとしても、なお背側経路が独自の現象的内容をもっているという想定は支持できないと結論すべきだろう。その想定はたかだか経験基盤制御仮説を擁護するために設けられたアド・ホックなものにすぎないのである。

以上の議論より、視覚形態失認は、視覚的な行為制御が可能であるにもかかわらず、しかるべき視覚的意識を欠いた障害であると認めることができる。それゆえ、視覚形態失認の存在は、知覚経験の成立にとって感覚運動知識は十分ではないということを示していると考えられる。依存説は「知覚経験の成立にとって感覚運動知識が構成的に働く」という説であるが、既存の経験的証拠は感覚運動知識の必要性に対しても十分性に対しても疑問を投げかけているのである<sup>131</sup>。

## 第五節 二重視覚システム仮説への批判

### 5. 1 画像理論と現前の感じ

本章の最後に、依存説から二重説に対して提起されている反論の一つを取りあげたい。それは、二重説は視覚経験についての「画像理論 (the picture theory)」にコミットしており、このコミットメントは視覚経験のもつ重要な側面を捉え損ねる帰結を招く、という

---

<sup>131</sup> 依存説は「知覚経験一般の成立にとって感覚運動知識が必要十分である」という主張であるが、それを必要性のみに限定し、かつ、知覚経験一般ではなく知覚経験のある特定の側面 (たとえば運動視や立体視の成立など) に関する説へと弱めるならば、その説を二重説に対立するものとしてではなく二重説と両立可能なものとして理解できるかもしれない。この場合、依存説は擁護可能な主張として認められるかもしれないが、経験における感覚運動知識の役割はより限定的なものになる。

ものである。

二重説によれば、腹側経路と背側経路はそれぞれ異なる機能を有している。腹側経路は「知覚のための視覚」としての機能を担っており、視覚情報を外界中心的な参照枠に位置づけ、それを意識経験の内容として表象する。他方、背側経路は「行為のための視覚」としての機能を担っており、視覚情報を自己中心的な参照枠に位置づけ、それを自動的に行われる行為制御のために利用する。だがノエによれば、意識経験をこのように理解することは画像理論への暗黙のコミットメントをとまなう。

この枠組み〔二重説〕のなかで研究している者のほとんどは見ることについての画像理論と私が呼んでいるものを仮定している。それらの研究者は、ものを見るときに、私たちは光景についての画像に類似した外界中心的な表象を意識のなかにもっている  
と想定している。(Noë 2010, p 252)

二重説によれば、知覚のための視覚は光景を知覚者とは独立な外界中心的な座標において表象している。それゆえ、視覚経験において、光景のなかにある諸事物は、同時に表象されている他の諸事物と特定の空間的關係に立つものとして位置づけられていることになる。この点で、二重説は「知覚のための視覚」が視覚的光景を一種の「画像」として描出していると理解する立場である。「知覚のための視覚」は光景をある特定の記述的内容——光景がしかじかの外界中心的な用語による記述を満たすものであるという内容——をもった画像として知覚者に対して提示するのである。「知覚のための視覚」は入力刺激をもとにこうした画像に類似した表象を産み出し、ついで、「行為のための視覚」が表象された特定の対象を標的に定め、行為のタイプに合わせたパラメータの値を自動的に計算するのである。

しかしながらノエによれば、視覚経験の画像理論には次のような問題がある(Noë 2010, p. 253)。それは、意識経験を担うシステムが、それが果たすことを期待されているある重要な機能を果たしえないという問題である。われわれが到達運動や把握運動などを成功裏に遂行するためには、視覚経験はどれがその標的となる対象であるかを行為制御システムに教えなければならない。だが二重説の理解する視覚経験は、光景のなかの諸事物を外界中心的に表象するものであるがゆえに、この役割を果たすことができない。絵画のなかでは、たとえば、ミルクの入った壺は、それを注いでいる人物や籠に入ったパン、あるいは光の射し込む窓といった周囲の事物としかじかの位置関係にあるものとして表象されている。だが、絵画はそこに表象されている事物がそれを見ている私とどのような位置関係にあるのかについて何も告げてはくれない。同様に、私がミルクの入った現実の壺を見ているとき、「知覚のための視覚」が提示するのは、その壺が環境内のしかじかの位置にある特定のパンとしかじかの関係にあるという記述を充足するという内容である。しかし、こうした記述的内容は、その壺が私との関係でどこにあるかを告げてくれはしない。なぜなら、「知覚のための視覚」は知覚者との関係を捨象した外界中心的な座標において光景を描き出すとされているからである。このように、「知覚のための視覚」は事物を外界中心的に表象するとされているがゆえに、「行為のための視覚」が必要とする事物の自己中心的な位置

に関する情報を与えることができないのである。

ノエはさらに、二重説はわれわれの経験が有する基本的な現象的特徴を捉えるための手立てを欠いていると批判を加える。通常の視覚経験においては、ミルク壺を見ているとき、あなたはその壺を特定のパンとしかじかの位置関係にあるものとして見ているだけではなく、あなた自身としかじかの位置関係にあるものとして見ている。言い換えれば、あなたはその壺を「そこにあるもの」として、手の届く範囲内や範囲外にあるものとして見ているのである。視覚経験は諸事物を単に外界中心的に表象するだけではなく、あなたの身体との関係で自己中心的にも表象する。視覚経験はこのように諸事物を「ここ」や「あそこ」にあるものとして位置づけることで、視覚的光景を行為可能性に満ちた空間として開くのである。だが、もし視覚経験が外界中心的な表象によって構成されているとすれば、それはこうした行為可能性に満ちたパースペクティブを知覚者に対して与えることができない。二重説は画像理論に暗黙裡にコミットすることで、視覚経験が備えるこうした基本的な現象的特徴を扱うことに失敗してしまうのである。

このノエの批判に対して二重説の側からはどのような応答が可能であろうか。ここではマッテンによる応答を取りあげよう (Matthen 2010)。先述のように、マッテンは腹側経路によって担われる視覚機能を「記述的視覚」と呼び、これが記述的内容を伝える描写的機能をもつと理解している。マッテンはこのように記述的視覚——知覚のための視覚——が与える経験内容が画像的なものであることを認めているが、にもかかわらず、二重説がノエの指摘するような問題を含意するとは考えていない。では、なぜそのような理解が可能なのであろうか。その鍵は、もう一方の視覚システムである「運動誘導的視覚」——行為のための視覚——にある。

マッテンによれば、透明なガラスを通してある景色を眺めているときと、そのガラスと同じ大きさのスクリーンに同じ景色の映像が映っているのを眺めているときとでは、それぞれの記述的内容には変わりがない。だが両者は「現前の感じ (the feeling of presence)」を伴っているか否かという点で大きく異なる。前者の経験のみが、実際の光景がそこに拵がっているという感を備えている——言い換えれば、諸事物に対する行為可能性を知覚者に対して告げてくれる——のである<sup>132</sup>。では、何が同じタイプの記述的内容に対してこうした違いをもたらすのであろうか。

この問いに対するマッテンの答えは、記述的内容に現前の感じを与えるのは、もう一方の運動誘導的視覚の働きによる、というものである。運動誘導的視覚は近傍空間にある諸事物を自己中心的な座標に位置づけ、それらの事物を可能的な身体行為の標的として表象する。いったんこのように近傍空間の諸事物が自己中心的に位置づけられたならば、より遠方にある諸事物は記述的視覚が与えてくれるさまざまな手がかりに基づいて近傍空間にある諸事物と関連づけられ、われわれの身体を中心とする座標空間のなかに場所を占めるようになる。記述的視覚によって与えられる視覚経験は、このように運動誘導的視覚の寄

---

<sup>132</sup> マッテンによれば、現前の感じは経験内容それ自体に属するものではなく、いわばその内容に付加される「力」(force)である。このマッテンの見方においても、経験内容は概念性の基準の一つである力からの独立性を有しているという点は指摘しておくべきであろう。

与によって現前の感じを獲得し、行為可能性に満ちた空間として表象されるようになるのである。

このようなマッテンの応答に対してノエは次のような批判を展開している (Noë 2010, p. 254)。もしマッテンの述べるように、背側経路に位置づけられる行為誘導的視覚が意識経験に対して現前の感じを付与する機能を担っているならば、背側経路を損傷した患者は現前の感じ喪失し、その視覚経験はあたかも写真を見ているときと同じようなものに変化するはずである。しかし、視覚運動失調の患者はしばしば自らが何らかの障害を負っていることに気づかない場合すらあり、その視覚経験から現前の感じが失われているとは考えがたい。だとすれば、マッテンの応答によっても二重説に対する先の批判は拭えないということになる。二重説は自らにかけられた画像理論の疑いをいかにして払拭しうるのだろうか。

## 5. 2 中間レベル説からの応答

ここで今一度問題の出発点を振り返ってみよう。二重説では、「知覚のための視覚」と「行為のための視覚」という二つの視覚システムは、「外界中心的参照枠」と「自己中心的参照枠」の対比に重ね合わせて理解されていた。二重説が画像理論へのコミットメントをともなうとされたのは、この二重説の標準見解において、「知覚のための視覚」が入力情報を知覚者とは独立な外界中心的参照枠において表象するとされているためである。だが、「知覚のための視覚」を外界中心的参照枠とのみ関連づけるこの見方は果たして妥当だろうか。

ここで、前章で紹介した意識の中間レベル説 (Jackendoff 1987; Prinz 2007) を想起しよう。プリンツによれば、階層的に組織化された知覚経路のうち、低レベルは光景の局所的特徴を処理する段階であり、続く中間レベルは対象全体に関する視点特異的な表象が位置する段階、最後の高レベルは視点独立的な対象の内在的特徴を処理する段階である。中間レベル説は、視覚的意識の内容を構成しうるのはこれらのうち中間レベルの処理段階に位置する表象のみである、という説である。プリンツは低レベルを第一次視覚野に、高レベルを下側頭皮質に位置づけているため、ここでの視覚処理経路は腹側経路に沿ったものとして考えられていると見てよいだろう。

この階層的な処理システムにおいては、入力情報は低レベルにおける網膜部位再現的な (retinotopic) 二次元的表象から、奥行きをもった視点特異的な三次元的表象へ、そして抽象化された視点独立的な表象へと処理を施されてゆく。それと同時に、情報が位置づけられる参照枠も、網膜中心的な参照枠から、眼中心的な参照枠などの自己中心的な参照枠へ、そして外界中心的な参照枠へと移行してゆく。中間レベルの情報は視点特異性を残しており、完全に外界中心的な座標において表象される以前の、自己中心性と外界中心性の混在したものであると考えられる。すなわち、中間レベルにおける表象では、事物は私の身体との関係で位置づけられているとともに、私の視点からみた他の事物との関係においても位置づけられている。情報が視点特異性を離れ、完全に外界中心的な参照枠において表象されるのは、処理がさらに高レベルの段階へと進んでからにすぎない。

以上の見方からすれば、二重説の標準見解のように、腹側経路の情報をもっぱら外界中



心的に表象されたものとするのはミスリーディングである。腹側経路は最終的には視点独立的で外界中心的な参照枠における情報の表象を可能にするが、意識経験に対応する中間レベルは自己中心的参照枠と外界中心的参照枠が並存しつつ事物を表象している段階である。こうした描像において、知覚経験にともなう「現前の感じ」は、背側経路に由来するのではなく、腹側経路に位置する中間レベル表象のもつ自己中心性に由来すると考えられる。このように、腹側経路における処理が階層性をもつものであることを踏まえるならば、マッテンのように視覚経験に現前の感じを与える役割を「行為のための視覚」に負わせる必要はない。「行為のための視覚＝自己中心的参照枠／知覚のための視覚＝外界中心的参照枠」という概念対に対して反省を加えることで、「知覚のための視覚」それ自体を最初から現前の感じを与える自己中心性を備えたものとして理解しうるのである。

以上、本章では知覚と行為の関係性に関する二つの主要な理論である二重視覚システム仮説と感覚運動アプローチを取りあげ、両者のいずれが妥当な理論であるかについて考察を展開してきた。二重説は本論で提示した自然化された概念主義と整合的であり、かつ、それに対して現在までに提起されているさまざまな批判に耐える堅牢な立場である。これに対して、依存説は、それを指示するとされる経験的証拠に対して別解釈が可能であり、かつ、二重説を支持する視覚形態失認などの経験的証拠と不整合であるという点で、経験的な支えを欠いていると言わざるをえない。二重説と依存説は両立不可能であり、かつ、経験的証拠は二重説の側に有利に働いている。以上の議論は、知覚経験と運動行為との関係を闡明するものであるとともに、自然化された概念主義に対してさらなる支持を与えるものである。

## 結論

本論では、知覚経験の概念主義と非概念主義の論争を主題とし、自然主義的な観点から概念主義を擁護するための新たな論証を構築してきた。その道程を今一度振り返り、達成された成果を確認するとともに、将来に残された課題を取り出して結論としたい。

概念主義に対してマクダウェルやブリューワーが当初提示してきた論証は、われわれが世界に向けられた経験的な信念をもつことを出発点として、そうした信念の成立可能性を確保するために、知覚経験は概念的な内容をもたなければならないということを主張するものであった。マクダウェルは経験的な信念に対する合理的制約の可能性を確保するために、経験を自発性と受容性の協働によって構築される概念的内容を備えたものとして捉え直す。このことによって、マクダウェルは近代哲学が抱える不安に対して治療を施そうとする。ブリューワーはマクダウェルの基本的な洞察を受け継ぎつつ、概念主義に対する外在主義や非概念主義からの批判に応答しうる論証を与える。こうした超越論的な論証は精緻な内容を用意しているものの、内容概念主義と状態概念主義の区別を踏まえた場合、状態概念主義を支持するものでしかないという懸念を払拭しきれない。

そこでわれわれは、感覚システムの初期過程に関する経験的な知見に着目することで、知覚経験が命題的に構造化された概念的内容を備えているという点に対する自然主義的な論証の構築を試みた。初期知覚過程に備わる視覚的指標と感覚的分類という二つのメカニズムは、協働することで命題的な形式をもった内容の形成に寄与する。視覚的指標メカニズムは同時に複数の対象へと指標を配分することで、感覚的諸性質が統合されるための非概念的な基盤を与える役割を果たす。感覚的分類メカニズムは入力刺激を感覚タイプへと分類ないしは序列化することで、そうした基盤のもとに統合される感覚的諸性質を準備する役割を果たす。このように、自然化された概念主義が描き出す知覚の内容は、指標を配分される視覚的对象を主部とし、それが例化する感覚的諸性質を述部とする命題的なものである。選択的注意はこうした述定的要素を主部のもとへと統合し、同時に統合された内容を意識の内容として前景化することで、知覚判断を行う認知システムに対してそれを利用可能にするという役割を果たす。とはいえ、前景化されていない知覚意識の内容も、命題的な構造を通じてではないにせよ、認知システムに対して規範的な制約を与える力を備えており、この点で知覚経験は焦点部分だけではなく周縁部分に至るまで概念的な内容をもつと言える。本論ではこうした概念的内容の階層的形成という見方を「階層的概念主義」として提示した。このようにして形成される概念的内容は、単に認知システムに制約を与えるだけではなく、行為のプランニングを通じて間接的に行為の制御にも関わる。直接的なオンラインの行為制御は、こうした記述的視覚によるプランニングに基づいて、それとは相対的に独立な運動誘導的視覚によって行われる。

以上のように本論は、自然主義的な立場に依拠しつつ、認知科学や神経科学の関連する知見を参照しながら概念主義の新たな描像を構築してきた。各章で論じてきたように、本論で提示された自然化された概念主義は、概念主義／非概念主義の論争において論じられ

てきたさまざまな論点に対して一貫した説明を与えることのできる有力な理論であると考えられる。

では、自然化された概念主義はマクダウェルの言う「近代哲学に特徴的な不安」を全面的に治癒しえたのだろうか。その不安とは、「経験が一種の自然現象であり、それゆえ理由の論理空間のなかに位置をもたないとすれば、経験的信念は成立不可能なのではないか」というものであった。マクダウェル自身は自然概念を第二の自然を含むような豊かなものとして捉え直すことで、自然現象としての経験が理由の論理空間に位置づけられるものであることを保証しようとする。それに対して、自然化された概念主義の立場は、自然概念に対するこのような概念的拡張を要求することなく、自然科学のさまざまな知見を駆使することでそうした保証を与えようとする。自然化された概念主義によれば、知覚経験の成立に関わるメカニズムは感覚刺激を命題的に構造化された概念的内容として意識へと前景化するのであり、そうしたメカニズムの働きによって、経験は同じように命題的な内容をもつ信念や判断と理由関係に立つことができるのである。このようなアプローチは、経験が信念に対する外的な合理的制約を与えうるものであることを示すことで、経験的信念の成立不可能性に対する不安を静めえているように思われる。

しかしながら、ここで次のような疑問が提起されるかもしれない。それは、本論で自然主義的な解決が与えられているのは、「経験は理由の空間に立ちうるような内容を備えているのか」という点についてのみであり、「そこで経験が立つところの理由関係とはそもそものようなものであるか」という点については解決が与えられないままに残されているのではないか、というものである。マクダウェルが通常の意味での自然主義的な立場——マクダウェルが「露骨な自然主義」と呼ぶ立場——を拒否するのは、それが理由の空間がもつ特有な理解可能性を軽視し、それを法則の領界のもつ理解可能性から再構成可能なものとして処理してしまうからである (McDowell 1996, p. xviii)。マクダウェルからすれば、こうした立場は件の不安の源泉を十分深刻に受け止めていないという点で、それに対して全面的な治癒を与えるものではない。

確かに本論は、マクダウェルが主張する理由の空間と法則の領界の二分法をそのままにしながら、自然主義的に利用可能な資源を用いて概念的内容の形成に説明を与えており、この点で、問題となる二つの空間のあいだに拙速に過ぎる架橋を行っているという印象を与えるかもしれない。こうした疑念は、第六章で行った感覚的概念と言語的概念の区別に対しても向けられうる。一方で、感覚的概念が知覚経験の内容として備わっているという点は本論で行った自然主義的な論証を通じて認められるとしても、それがいかにして信念や判断に関わる言語的概念の習得へと結びつくかについては、それらのあいだに断絶がないことは強調されているものの、いまだ十分な内容を備えた説明が与えられているとはいえない。

こうした疑問に対して答えるためには、「概念とは何か」という根本的な問題に対して正面から取り組む必要があるだろう。本論では、この問題に対する解答を先送りした上で、信念の内容を概念的なものたらしめている諸基準を析出し、それらの基準に照らすことで経験の内容が概念的であるか否かを判定するという戦略をとった。経験が概念的内容をも

つという点を論証する上では、こうした戦略は必要十分なものであったと考えられる。だが、概念主義に対してより徹底した自然化を遂行するためには、こうした戦略を超えて、自然主義的なアプローチから概念の本性を明らかにするという課題に取り組む必要がある。

こうした課題を遂行する上で重要な参照軸となると考えられるのが、プリンツが提唱している「概念経験主義 (concept empiricism)」と呼ばれる立場である (Prinz 2004)。概念経験主義によれば、概念とは感覚を通じて獲得された様相依存的なカテゴリー表象であり、高次認知に関わる領域におけるそうした表象の再構築によって構成される。それゆえ、概念経験主義が正しいとすれば、思考それ自体が知覚に由来する表象によって構成されることになる。概念経験主義は思考と知覚のあいだに強い連続性を認める立場であり、いくつかの対立点を含みながらも、その基本においては概念主義的な立場と親和性の高い理論であると考えられる。こうした理論を手がかりとして、概念や思考に関する自然化をより包括的に行うことが、本論で提示した概念主義をより強固なものにしてゆく一つの有望な方途であろう。

このような課題が控えているにせよ、本論が示した概念主義の新たな構図は——もしその論証が成功しているとするならば——、「心はいかにして世界と結びつきうるのか」という哲学の根本問題の一つを論じる上で、それを足掛かりとして次の一步を踏み出すことのできる礎石を与えるものである。われわれが本論で行ったのは、そうした礎石を築くための一つの新たな試みである。ここではそうした試みを提示しえたことで満足し、ひとまず論を閉じることとしたい。

## 参考文献表

参考文献および引用の指示は以下のように規定する。参考文献については、著者名と出版年（同一著者、同一年の著作がある場合には、さらに a,b,c,……で区別する）を用いて、この表に記載された文献を指示する。なお、邦訳が存在する文献からの引用に関しては、できる限り訳者の方の意向を尊重したが、文脈上訳文を変更した箇所も存在することをお断りしておく。

- Aglioti, S., DeSouza, J. F. X., and Goodale, M. A. (1995), “Size-contrast illusions deceive the eye but not the hand,” *Current Biology*, 5 (6), 679-685.
- Anscombe, G. E. M. (1957), *Intention*, Oxford: Basil Blackwell. (『インテンション』、菅豊彦訳、産業図書、1984)
- Anstis, S., Verstraten, F. A. J., and Mather, G. (1998), “The motion aftereffect,” *Trends in Cognitive Sciences*, 2 (3), 111-117.
- アリストテレス (1971)、『ニコマコス倫理学 (上)』、高田三郎訳、岩波文庫。
- Ayers, M. (2004), “Sense experience, concepts, and content: Objections to Davidson and McDowell,” in *Perception and Reality: From Descartes to the Present*, Schumacher, R., (ed.), Paderborn: Mentis, 239-262.
- Awh, E., Vogel, E. K., and Oh, S. H. (2006), “Interactions between attention and working memory,” *Neuroscience*, 139, 201-208.
- Baars, B. J. (1988), *A cognitive theory of consciousness*, New York: Cambridge University Press.
- Bach-y-Rita, P. (1972), *Brain Mechanisms in Sensory Substitution*, New York: Academic Press.
- Bahrami, B. (2003), “Object property encoding and change blindness in multiple object tracking,” *Visual Cognition*, 10 (8), 949-963.
- Bar, M. (2003), “A cortical mechanism for triggering top-down facilitation in visual object recognition,” *Journal of Cognitive Neuroscience*, 15 (4), 600-609.
- Bar, M., Kassam, K. S., Ghuman, A. S., Boshyan, J., Schmidt, A. M., Dale, A. M., Hämäläinen, M. S., Marinkovic, K., Schacter, D. L., Rosen, B. R., and Halgren, E. (2006), “Top-down facilitation of visual recognition,” *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 103 (2), 449-454.
- Baylis, G. C. and Driver, J. (2001), “Shape-coding in IT cells generalizes over contrast and mirror reversal, but not figure-ground reversal,” *Nature Neuroscience*, 4 (9), 937-942.
- Belopolsky, A. B., Zwaan, L., Theeuwes, J., and Kramer, A. F. (2007), “The size of an attentional window modulates attentional capture by color singletons,” *Psychonomic*

- Bulletin & Review*, 14 (5), 934-938.
- Bermúdez, J. L. (2007), "What is at stake in the debate on nonconceptual content?" *Philosophical Perspectives*, 21 (1), 55-72.
- Blackmore, S. J. (2002), "There is no stream of consciousness", *Journal of Consciousness Studies*, 9, 17-28.
- Blaser, E., Pylyshyn, Z. W., and Holcombe, A. O. (2000), "Tracking an object through feature-space," *Nature*, 408, 196-199.
- Block, N. (2007), "Consciousness, accessibility, and the mesh between psychology and neuroscience," *Behavioral and Brain Sciences*, 30, 481-548.
- Brandom, R. (2000), *Articulating Reasons: An Introduction to Inferentialism*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Brewer, B. (1999), *Perception and Reason*, Oxford: Oxford University Press.
- . (2011), *Perception and Its Object*, Oxford: Oxford University Press.
- Bruno, N., Bernardis, P., Gentilucci, M. (2008), "Visually guided pointing, the Müller-Lyer illusion, and the functional interpretation of the dorsal-ventral split: Conclusions from 33 independent studies," *Neuroscience and Biobehavioral Reviews*, 32 (3), 423-437.
- Byrne, A. (2004), "Perception and Conceptual Content," in *Contemporary Debates in Epistemology*, Sosa, E. and Steup, M. (eds.), Oxford: Blackwell, 231-250.
- Campbell, J. (2002), *Reference and Consciousness*, Oxford: Oxford University press.
- Clark, A. (2000), *A Theory of Sentience*, Oxford: Oxford University press.
- . (2004a). "Feature placing and proto-objects," *Philosophical Psychology*, 17 (4), 443-469.
- . (2004b), "Sensing, objects, and awareness: Reply to commentators," *Philosophical Psychology*, 17 (4), 553-579.
- Clark, A. (1994) "Connectionism and cognitive flexibility," in *Artificial Intelligence and Creativity*, Dartnall, T. (ed.), Dordrecht: Kluwer Academic Publisher, 63-79. Reprinted in *Essays on Nonconceptual Content*, Gunther, Y. H. (ed.), Cambridge, Mass.: The MIT Press, 2003, 165-181.
- . (2001), "Visual Experience and Motor Action: Are the Bonds Too Tight?" *Philosophical Review*, 110 (4), 495-519.
- Cohen, J. (2004), "Objects, places, and perception," *Philosophical Psychology*, 17 (4), 471-495.
- Collins, A. W. (1998), "Beastly experience," *Philosophy and Phenomenological Research*, 58 (2), 375-380.
- Conant, J. (2012) "Two Varieties of Skepticism," in *Rethinking Epistemology, Vol. 2*, Abel, G. and Conant, J. (eds), Berlin: Walter De Gruyter, 1-73.
- Conway, B. R., Hubel, D. H., and Livingstone, M. S. (2002), "Color Contrast in Macaque

- V1,” *Cerebral Cortex*, 12 (9), 915-925.
- Crane, T. (1992), “The nonconceptual content of experience,” in *The Contents of Experience: Essays on Perception*, Crane, T. (ed.), Cambridge: Cambridge University Press, 136-157.
- . (2003), “The Waterfall Illusion,” in *Essays on Nonconceptual Content*, Gunther, Y. H. (ed.), Cambridge, Mass.: The MIT Press, 231-236.
- Creem, S. H. and Proffitt, D. R. (2001), “Grasping objects by their handles: A necessary interaction between cognition and action,” *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 27 (1), 218-228.
- Crowther, T. M. (2006), “Two Conceptions of Conceptualism and Nonconceptualism,” *Erkenntnis*, 65, 245-76.
- Davidson, D. (1980), “Mental Events,” in *Essays on Action and Events*, Oxford: Oxford University Press, 207-225. (「心的出来事」『行為と出来事』、服部裕幸・柴田正良訳、勁草書房、1990、所収)
- . (1986), “A coherence theory of truth and knowledge,” in *Truth and Interpretation: Perspective on the Philosophy of Donald Davidson*, LePore, E. (ed.), Oxford: Blackwell, 307-319. (「真理と知識の斉合説」『現代思想 1989年6月号』、丹治信春訳、青土社、1989、所収)
- . (1999), “Reply to John McDowell,” in *The Philosophy of Donald Davidson*, Hahn, L. E. (ed.), Chicago: Open Court Publishing Company, 105-107.
- De Brigard, F., and Prinz, J. J. (2010), “Attention and consciousness,” *Wiley Interdisciplinary Reviews: Cognitive Science*, 1 (1), 51-59.
- de Grave, D. D. J., Biegstraaten, M., Smeets, J. B. J., and Brenner, E. (2005), “Effects of the Ebbinghaus figure on grasping are not only due to misjudged size,” *Experimental Brain Research*, 163, 58-64.
- Dehaena, S. and Naccache, L. (2001), “Towards a cognitive neuroscience of consciousness: Basic evidence and a workspace framework,” *Cognition*, 79, 1-37.
- Dennett, D. C. (2001), “Surprise, surprise,” *Behavioral and Brain Sciences*, 24, 982.
- . (2002), “How could I be wrong? How wrong could I be?” *Journal of Consciousness Studies*, 9 (5/6), 13-16.
- Dennis, J. L. M. and Pylyshyn, Z. W. (2002), “Effect of object discriminability on multiple object tracking,” *Journal of Vision*, 2 (7), article 241.
- Dretske, F. (1981). *Knowledge and the Flow of Information*, Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Dreyfus, H. (1990), “Being-in-the-World: A commentary on Heidegger’s *Being and Time*, Division I,” Cambridge, Mass.: The MIT Press. (『世界内存在—『存在と時間』における日常性の解釈学』、門脇俊介・貫成人・轟孝夫・榊原哲也・森一郎訳、産業図書、2000)

- Dyde, R. T. and Milner, D. (2002), "Two illusions of perceived orientation: One fools all of the people some of the time; the other fools all of the people all of the time," *Experimental Brain Research*, 144, 518-527.
- Evans, G. (1982), *The Varieties of Reference*, Oxford: Oxford University Press.
- Farah, M. J. (1990), *Visual Agnosia: Disorders of Object Recognition and What they tell us about Normal Vision*, Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Fish, W. (2009), *Perception, Halucination, and Illusion*, Oxford: Oxford University Press.
- . (forthcoming), "High-level properties and visual experience," *Philosophical Studies*.
- Fodor, J. A. (1983), *The Modularity of Mind: An Essay on Faculty Psychology*, Cambridge, Mass.: MIT Press. (『精神のモジュール形式—人工知能と心の哲学』伊藤 笏康・信原幸弘訳、産業図書、1985)
- Ford, J. (2008), "Attention and the new skeptics," *Journal of Consciousness Studies*, 15 (3), 59-86.
- Fries, P., Womelsdorf, T., Oostenveld, R. and Desimone, R. (2008), "The effects of visual stimulation and selective visual attention on rhythmic neuronal synchronization in macaque area V4," *Journal of Neuroscience*, 28, 4823-4835.
- Gallese, V. (2007), "The 'conscious' dorsal stream: Embodied simulation and its role in space and action conscious awareness," *Psyche*, 13 (1). Available at: [http://www.theassc.org/journal\\_psyche](http://www.theassc.org/journal_psyche).
- Gaynesford, M. (2004), *John McDowell*, Cambridge & Malden: Polity Press.
- Gonzaleza, C. L. R. Ganelb, T., Whitwella, R. L., Morrissey, B., Goodale, M.A. (2008), "Practice makes perfect, but only with the right hand: Sensitivity to perceptual illusions with awkward grasps decreases with practice in the right but not the left hand," *Neuropsychologia*, 46 (2), 624-631.
- Goodale, M. A. (2008), "Action without perception in human vision," *Cognitive Neuropsychology*, 25 (7-8), 891-919.
- Goodale, M., and Milner, D. (2004), *Sight Unseen: An Exploration of Conscious and Unconscious Vision*, Oxford: Oxford University Press. (『もうひとつの視覚—〈見えな い視覚〉はどのように発見されたか』、鈴木光太郎・工藤信雄訳、新曜社、2008)
- Goodale, M. A., Milner, A. D., Jakobson, L. S. and Carey, D. P. (1991), "A neurological dissociation between perceiving objects and grasping them," *Nature*, 349, 154-156.
- Goodale, M. A., Meenan, J. P., Bulthofft, H. H., Nicolle, D. A., Murphy, K. J., and Racicot, C. (1994), "Separate neural pathways for the visual analysis of object shape in perception and prehension," *Current Biology*, 4, 604-610
- Goodman, N. (1978), *Ways of Worldmaking*, Indianapolis: Hackett. (『世界制作の方法』、菅野盾樹訳、ちくま学芸文庫、2008)



- Gunther, Y. H. (2003a), "General introduction," in *Essays on Nonconceptual Content*, Gunther, Y. H. (ed.), Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1-20.
- . (2003b), "Emotion and force," in *Essays on Nonconceptual Content*, Gunther, Y. H. (ed.), Cambridge, Mass.: The MIT Press, 279-288.
- . (ed.) (2003), *Essays on Nonconceptual Content*, Cambridge, Mass.: The MIT Press
- Gur, M. and Snodderly, D. M. (1997), "A dissociation between brain activity and perception: Chromatically opponent cortical neurons signal chromatic flicker that is not perceived," *Vision Research*, 37 (4), 377-382.
- Heck, R. G. (2000), "Nonconceptual content and the "Space of Reasons"", *The Philosophical Review*, 109 (4), 483-523.
- . (2007), "Are there different kinds of content?" in *Contemporary debates in philosophy of mind*, McLaughlin, B., and Cohen, J. (eds.), Oxford: Blackwell, 117-138.
- Held, R., and Hein, A. (1963), "Movement-produced stimulation in the development of visually guided behavior," *Journal of Comparative and Physiological Psychology*, 56 (5), 872-876.
- Herman, G. (1990), "The intrinsic quality of experience," in *Philosophical Perspectives*, 4. *Action Theory and Philosophy of Mind*, Tomberlin, J. (ed.), California: Ridgeview, 31-52. (「経験の内在的質」『シリーズ心の哲学Ⅲ 翻訳篇』、信原幸弘編、勁草書房、2004、所収)
- Hubel, D. H. and Wiesel, T. N. (1959), "Receptive fields of single neurones in the cat's striate cortex," *Journal of Physiology*, 148, 574-591.
- Hurley, S. L. (1998), *Consciousness in Action*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Jackendoff, R. (1987), *Consciousness and the Computational Mind*, Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Jacob, P. (2006), "Why visual experience is likely to resist being enacted," *Psyche*, 12 (1). Available at: [http://www.theassc.org/journal\\_psyche](http://www.theassc.org/journal_psyche).
- Jacob, P. and de Vignemont, F. (2010), "Spatial coordinates and phenomenology in the two visual systems model," in *Perception, Action, and Consciousness: Sensorimotor Dynamics and Two Visual Systems*, Gangopadhyay, N., Madary, M., and Spicer, F. (eds.), Oxford: Oxford University Press, 125-144.
- James, T. W., Culham, J., Humphery, G. K., Milner, A. D., and Goodale, M. A. (2003), "Ventral occipital lesions impair object recognition but not object-directed grasping: An fMRI study," *Brain*, 126, 2463-2475.
- Jiang, Y., Costello, P., Fang, F., Huang, M., and He, S. (2006), "A gender- and sexual orientation-dependent spatial attentional effect of invisible images," *Proceedings of*

- the National Academy of Sciences of the United States of America*, 103 (45), 17048-17052.
- Kahneman, D., Treisman, A., and Gibbs, B. J. (1992), "The reviewing of object files: Object-specific integration of information," *Cognitive Psychology*, 24 (2), 175-219.
- Kandel, E. (2012), *Principles of Neural Science, Fifth Edition*, New York: McGraw-Hill Companies.
- Kelly, S. D. (2001), "The non-conceptual content of perceptual experience: Situation dependence and fineness of grain," *Philosophy and Phenomenological Research*, 62 (3), 601-608.
- Kentridge, R. W., Heywood, C. A., and Weiskrantz, L. (2004), "Spatial attention speeds discrimination without awareness in blindsight," *Neuropsychologia*, 42 (6), 831-835.
- Koch, C. (2004), *The Quest for Consciousness: A Neurobiological Approach*, Greenwood Village: Roberts and Company Publishers. (『意識の探求—神経科学からのアプローチ』、土谷尚嗣・金井良太訳、岩波書店、2006)
- Koch, C. and Tsuchiya, N. (2007), "Attention and consciousness: Two distinct brain processes," *Trends in Cognitive Science*, 11 (1), 16-22.
- Kohler, I. (1964), *The formation and transformation of the perceptual world, Psychological Issues*, 3 (4), Monograph 12.
- 小池耕彦・齋木 潤 (2006)、「変化検出課題のモデル研究—物体表象を保持しない分散的注意メカニズムにより」、『電子情報通信学会技術研究報告』、7-12.
- Króliczak, G., Heard, P., Goodale, M. A., and Gregory, R. L. (2006), "Dissociation of perception and action unmasked by the hollow-face illusion," *Brain Research*, 1080, 9-16.
- Kveraga, K., Boshyan, J., and Bar, M. (2007), "Magnocellular projections as the trigger of top-down facilitation in recognition," *The Journal of Neuroscience*, 27 (48), 13232-13240.
- Lamme, V. A. F. (2004), "Separate neural definitions of visual consciousness and visual attention: A case for phenomenal awareness," *Neural Networks*, 17 (5/6), 861-872.
- Lammenranta, M. (2004), "Theories of justification," in Niiniluoto, I., Sintonen, M., and Wolenski, J. (eds.), *Handbook of Epistemology*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 467-497.
- Lerman, H. (2010), "Non-conceptual experiential content and reason-giving," *Philosophy and Phenomenological Research*, 81 (1), 1-23.
- Leslie, A. M. (1988), "The necessity of illusion: Perception and thought in infancy," in *Thought without Language*, Weiskrantz, L. (ed.). Oxford: Oxford Science Publications, 185-209.
- Luck, S. J. and Vogel, E. K. (1997), "The capacity of visual working memory for features and conjunctions," *Nature*, 390, 279-281.

- Luck, S. J., Woodman, G. F., and Vogel, E. K. (2000), "Event-related potential studies of attention," *Trends in Cognitive Science*, 4 (11), 432-440.
- Mack, A. and Rock, I. (1998), *Inattention blindness*, Cambridge Mass: The MIT Press.
- Marcel, A. J. (1983), "Conscious and unconscious perception: Experiments on visual masking and word recognition," *Cognitive Psychology*, 15, 197-237.
- . (1998), "Blindsight and shape perception: Deficit of visual consciousness or of visual function?" *Brain*, 121 (8), 1565-1588.
- Margolis, E. and Laurence, S. (eds.) (1999), *Concepts: Core Readings*, Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Marr, D. (1982), *Vision: A Computational Investigation into the Human Representation and Processing of Visual Information*, San Francisco: W. H. Freeman.  
(『ビジョン—視覚の計算理論と脳内表現』、乾敏郎・安藤広志訳、産業図書、1987)
- Marshall, J. C. and Halligan, P. W. (1988), "Blindsight and insight in visiospatial neglect," *Nature*, 336, 766-767.
- Martin, M. (1994), "Perception, concepts, and memory," *Philosophical Review*, 101 (4), 745-64.
- Matthen, M. (2004), "Features, places, and things: Reflections on Austen Clark's theory of sentience," *Philosophical Psychology*, 17 (4), 497-518.
- . (2005a), *Seeing, Doing, and Knowing: A Philosophical Theory of Sense Perception*, Oxford: Oxford University Press.
- . (2005b), "Visual concepts," *Philosophical Topics*, 33 (1), 207-233.
- . (2010), "Two visual systems and the feeling of presence," in *Perception, Action, and Consciousness: Sensorimotor Dynamics and Two Visual Systems*, Gangopadhyay, N., Madary, M., and Spicer, F. (eds.), Oxford: Oxford University Press, 107-124.
- McDowell, J. (1994); reissued with an Introduction, 1996, *Mind and World*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- . (1996), "Reply to Gibson, Byrne, and Brandom," *Philosophical Issues*, 7, 283-300.
- . (1998a), "The Content of Perceptual Experience," in *Mind, Value, and Reality*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 341-358.
- . (1998b), "Reply to Commentators", *Philosophy and Phenomenological Research*, 58 (2), 403-431.
- . (2000a) "Experiencing the World," in *John McDowell: Reason and Nature: Lecture and Colloquium in Münster*, Willaschek, M. (ed.), Hamburg: LIT, 3-18. (「世界を経験する」『現代思想 2004年7月号』、荒畑靖宏訳、青土社、2004、所収)
- . (2000b), "Responses," in *John McDowell: Reason and Nature: Lecture and Colloquium in Münster*, Willaschek, M. (ed.), Hamburg: LIT, 91-114.

- . (2002), “Responses,” in *Reading McDowell: On Mind and World*, Smith, N. H. (ed.), London and New York: Routledge, 269-305.
- . (2008), “Avoiding the Myth of the Given,” in *John McDowell: Experience, Norm and Nature*, Lindgaard, J. (ed.), Oxford: Blackwell, 1-14.
- . (2009), “Conceptual Capacities in Perception,” in *Having the World in View: Essays on Kant, Hegel, and Sellars*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 127-144.
- . (2010) “Brandom on observation,” in *Reading Brandom: On Making It Explicit*, Weiss, B. and Wanderer, J. (eds.), London: Routledge, 129-144.
- Millar, A. (1994), “Possessing Concepts,” *Mind*, 103 (409), 73-82.
- Milner, A. D., Dijkerman, H. C., Carey, D. P. (1999a), “Visuospatial processing in a pure case of visual form agnosia,” in *The hippocampal and parietal functions of spatial cognition*, Burgess, N., Jeffrey, K. J., O’Keefe, J. (eds.), Oxford: Oxford University Press, 443-466
- Milner, A. D., and Goodale, M. A., (1995); second edition in 2006, *The visual brain in action*, Oxford: Oxford University Press.
- . (2008), “Two visual systems re-viewed,” *Neuropsychologia*, 46, 774-785.
- . (2010), “Cortical visual systems for perception and action,” in *Perception, Action, and Consciousness: Sensorimotor Dynamics and Two Visual Systems*, Gangopadhyay, N., Madary, M., and Spicer, F. (eds.), Oxford: Oxford University Press, 71-96.
- Milner, A. D., Paulignan, Y., Dijkerman, H. C., Michel, F, Jeannerod, M. (1999b), “A paradoxical improvement of misreaching in optic ataxia: New evidence for two separate neural systems for visual localization,” *Proceedings of the Royal Society B: Biological Sciences*, 266, 2225-2229.
- Mitchell, J. F., Sundberg, K. A., and Reynolds, J. H. (2006), “Attentive tracking of multiple objects modulates neuronal responses in area V4 of the macaque,” *Journal of Vision*, 6 (6), 772.
- Mollon, J. D. (1989), ““‘Tho’ she kneel’d in that place where they grew...” The uses and origins of primate colour vision,” *The Journal of Experimental Biology*, 146, 21-38.
- Moore, C., Yantis, S., and Vaughan, B. (1998), “Object-based visual selection: Evidence from perceptual completion,” *Psychological Science*, 9, 104-110.
- Moore C. M., and Egeth, H. (1997), “Perception without attention: Evidence of grouping under conditions of inattention,” *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 23 (2), 339-352.
- Moran, J. and Desimone, R. (1985), “Selective attention gates visual processing in the extrastriate cortex,” *Science*, 229 (4715), 782-784.
- Nagel, T. (1974), “What is it like to be a bat?” *Philosophical Review*, 435-450. (「コウ

- モリであるとはどのようなことか』『コウモリでるとはどのようなことか』、永井均訳、勁草書房、所収)
- Noë, A. (2002), "Is the visual world a Grand Illusion?" *Journal of Consciousness Studies*, 9 (5/6), 1-12.
- . (2004), *Action in Perception*, Cambridge, Mass.: The MIT Press. (『知覚のなかの行為』、門脇俊介・石原孝二監訳、春秋社、2010)
- . (2010), "Vision without representation," in *Perception, Action, and Consciousness: Sensorimotor Dynamics and Two Visual Systems*, Gangopadhyay, N., Madary, M., and Spicer, F. (eds.), Oxford: Oxford University Press, 245-256.
- Oades, R. D., and Dittmann-Balcar, A. (1995), "Mismatch negativity (MMN) is altered by directing attention," *Neuroreport*, 6 (8), 1187-1190.
- 小口峰樹 (2007)「知覚経験の概念性—ジョン・マクダウエルの『心と世界』を中心に—」、東京大学、修士学位論文.
- O'Regan, J. K., and Noë, A. (2001), "A sensorimotor account of vision and visual consciousness," *Behavioral and Brain Sciences*, 24, 939-1031.
- 太田紘史 (2010)「身体知覚はいつ感情になるのか?—視覚意識と情動意識の中間レベル説に対する疑問—」、『京都大学文学部哲学研究室紀要: Prospectus』、第12巻、18-31.
- Paulesu, E., Frith, C. D., and Frackowiak, R. S. J. (1993), "The neural correlates of the verbal component of working memory," *Nature*, 362, 342-345.
- Peacocke, C. (1992), *A Study of Concepts*, Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- . (1998), "Nonconceptual Content Defended," *Philosophy and Phenomenological Research*, 58 (2): 381-388.
- Posner, M. I. (1980), "Orienting of attention," *The Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 32 (1), 3-25.
- Prinz, J. J. (2000), "A Neurofunctional theory of visual consciousness," *Consciousness and Cognition*, 9 (2), 243-259.
- . (2002), *Furnishing the Mind: Concepts and Their Perceptual Basis*, Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- . (2005), "A neurofunctional theory of consciousness," in *Cognition and the Brain: Philosophy and Neuroscience Movement*, Brook, A., and Akins, K. (eds.), Cambridge: Cambridge University Press, 381-396.
- . (2006), "Putting the Brakes on Enactive Perception," *Psyche*, 12 (1). Available at: [http://www.theassc.org/journal\\_psyche](http://www.theassc.org/journal_psyche).
- . (2007), "The intermediate level theory of consciousness," in *The Blackwell Companion to Consciousness*, Velmans, M., and Schneider, S. (eds.), Oxford: Blackwell, 247-260.
- . (2008), "Empirical Philosophy and Experimental Philosophy," in *Experimental Philosophy*, Knobe, J. and Nichols, S. (eds.), Oxford: Oxford University Press,

189-208.

- . (2010a), “Is attention necessary and sufficient for consciousness?” (Manuscript for Seminar in Mind & Language Spring 2010 at New York University)  
<http://www.nyu.edu/gsas/dept/philo/faculty/block/M&L2010/Papers/Prinz.pdf> (Last accessed on Dec. 19, 2012).
- . (2010b), “Supplementary Note 1: Inattentional Amnesia,” (Manuscript for Seminar in Mind & Language Spring 2010 at New York University)  
<http://www.nyu.edu/gsas/dept/philo/faculty/block/M&L2010/Papers/PrinzSupp1.pdf> (Last accessed on Dec. 19, 2012).
- . (2010c), “Supplementary Note 2: Neural Correlates of Attention,” (Manuscript for Seminar in Mind & Language Spring 2010 at New York University)  
<http://www.nyu.edu/gsas/dept/philo/faculty/block/M&L2010/Papers/PrinzSupp2.pdf> (Last accessed on Dec. 19, 2012).
- Pylyshyn, Z. (2001), “Visual Indexes, Preconceptual Objects, and Situated Vision,” *Cognition*, 80 (1/2), 127-158.
- . (2007), *Things and Places: How the Mind Connects with the World*, Cambridge, Mass.: The MIT Press. (『ものと場所—心は世界とどう結びついているか』、小口峰樹訳、勁草書房、2011)
- Quine, W. V. O. (1951), “Two dogmas of empiricism,” *The Philosophical Review*, 60, 20-43. Reprinted in *From a Logical Point of View*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press. (『経験主義のふたつのドグマ』『論理的観点から—論理と哲学をめぐる九章』、飯田隆訳、勁草書房、1992、所収)
- Ramsden, B. M., Hung, C. P., and Roe, A. W. (2001), “Real and illusory contour processing in area V1 of the primate: A cortical balancing act,” *Cerebral Cortex*, 11, 648-665
- Reddy, L., Reddy, L., and Koch, C. (2006), “Face identification in the near-absence of focal attention,” *Vision Research*, 46 (15), 2336-2343.
- Rees, G., Wojciulik, E., Clarke, K., Husain, M., Frith, C., and Driver, J. (2000), “Unconscious activation of visual cortex in the damaged right hemisphere of a parietal patient with extinction,” *Brain*, 123 (8), 1624-1633.
- Rees, G., Kreiman, G., and Koch, C. (2002), “Neural correlates of consciousness in humans,” *Nature Review Neuroscience*, 3 (4), 261-270.
- Regan, B. C., Julliot, C., Simmen, B., Viénot, F., Charles-Dominique, P., and Mollon, J. D. (2001), “Fruits, foliage, and the evolution of primate colour vision,” *Philosophical Transactions of the Royal Society B: Biological Sciences*, 356 (1407), 229-283.
- Rivière, J. and Lécuyer, R. (2002), “Spatial cognition in young children with spinal muscular atrophy,” *Developmental Neuropsychology*, 21, 273-283.
- Rizzolatti, G. and Matelli, M. (2003), “Two different streams form the dorsal visual

- system: Anatomy and functions,” *Experimental Brain Research*, 153, 146-157.
- Rock, I. and Gutman, D. (1981), “The effect of inattention on form perception,” *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 7 (2), 275-285.
- Rosch, E. H. (1973), “Natural Categories,” *Cognitive Psychology*, 4, 328-350.
- Rosenthal, D. (2005), *Consciousness and mind*, Oxford: Oxford University Press.
- Saarinen, J. (1996), “Localization and discrimination of “pop-out” targets,” *Vision Research*, 36 (2), 313-316.
- Sacks, O. (1985), *The Man Who Mistook His Wife for a Hat, and Other Clinical Tales*, New York: Summit Books. (『妻を帽子とまちがえた男』、高見幸郎・金沢泰子訳、晶文社、1992)
- Sakagami, M. and Pan, X. (2007), “Functional role of the ventrolateral prefrontal cortex in decision making,” *Current Opinion in Neurobiology*, 17, 228-233.
- Schenk, T. (2006), “An allocentric rather than perceptual deficit in patient D.F.” *Nature Neuroscience*, 9 (11), 1369-1370.
- Schneider, G. E. (1967), “Contrasting visuomotor functions of tectum and cortex in the golden hamster,” *Psychologische Forschung*, 31, 52-62.
- Searle, J. (1983), *Intentionality*, Cambridge: Cambridge University Press. (『指向性』、坂本百大監訳、誠信書房、1997)
- Seghier, M., Dojat, M., Delon-Martin, C., Rubin, C., Warnking, J., Segebarth, C., Bullier, J. (2000) “Moving illusory contours activate primary visual cortex: An fMRI study,” *Cerebral Cortex*, 10 (7), 663-670.
- Sellars, W. (1997), *Empiricism and the Philosophy of Mind, with an Introduction by Richard Rorty and Study Guide by Robert Brandom*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press. [The original, 1956] (『経験論と心の哲学』、岩波書店、浜野研三訳、2006)
- Siegel, S. (2005), “The Contents of Perception,” *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. <http://plato.stanford.edu/entries/perception-contents/> (Last accessed on Dec. 19, 2012).
- 下條信輔 (1996) 『サブリミナル・マインド』、中公新書.
- Simons, D. J. and Chabris, C. F. (1999), “Gorillas in our midst: Sustained inattention blindness for dynamic events,” *Perception*, 28 (9), 1059-1074.
- Singh-Curry, V. and Husain, M. (2009), “The functional role of the inferior parietal lobe in the dorsal and ventral stream dichotomy,” *Neuropsychologia*, 47, 1434-1448.
- Sohal, V. S. and Huguenard, J. R. (2005), “Inhibitory coupling specifically generates emergent gamma oscillations in diverse cell types,” *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 102 (51), 18638-18643.
- Speaks, J. (2005), “Is there a problem about nonconceptual content?” *Philosophical Review*, 114 (3), 359-398.

- Sperling, G. and Weichselgartner, E. (1995), "Episodic theory of the dynamics of spatial attention," *Psychological Review*, 102(3), 503-532.
- Stalnaker, R. (2003), "What might nonconceptual content be?" in *Essays on Nonconceptual Content*, Gunther, Y. H. (ed.), Cambridge, Mass.: The MIT Press, 95-106.
- Strawson, P. F. (1959), *Individuals: An Essay in Descriptive Metaphysics*. London: Methuen. (『個体と主語』、中村秀吉訳、みすず書房、1978)
- Stroud, B. (2002), "Sense-experience and the grounding of thought," in *Reading McDowell: On Mind and World*, Smith, N. H. (ed.), London and New York: Routledge, 79-91.
- Tipper, S., Driver, J., and Weaver, B. (1991), "Object-centered inhibition of return of visual attention," *Quarterly Journal of Experimental Psychology A*, 43A, 289-298.
- Toribio, J. (2008), "State versus content: The unfair trial of perceptual nonconceptualism," *Erkenntnis*, 69, 351-361.
- Travis, C. (2004), "The silence of the senses," *Mind*, 113 (449), 57-94.
- Treisman, A. (1988), "Features and objects: The fourteenth bartlett memorial lecture," *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 40A (2), 201-237.
- Treisman, A. and Gelade, G. (1980), "A feature integration theory of attention," *Cognitive Psychology*, 12, 97-136.
- Treisman, A. and Schmidt, H. (1982), "Illusory conjunctions in the perception of objects," *Cognitive Psychology*, 14, 107-141.
- Tye, M. (2006), "Nonconceptual content, richness, and finess of grain," in *Perceptual Experience*, Gendler, T. S. and Hawthorne, J. (eds.), Oxford: Clarendon Press, 504-529.
- 植原亮 (2011)「实在論と知識の自然化—自然種の一般理論を中心とする哲学的自然主義の体系—」、東京大学、博士学位論文。
- Ungerleider, L. G. and Mishkin, M. (1982), "Contribution of striate inputs to the visuospatial functions of parieto-occipital cortex in monkeys," *Behavioral Brain Research*, 6 (1), 57-77.
- Vuilleumier, P., Sagiv, N., Hazeltine, E., Poldrack, R. A., Swick, D., Rafal, R. D., and Gabrieli, J. D. E. (2001), "Neural fate of seen and unseen faces in visuospatial neglect: A combined event-related functional MRI and event-related potential study," *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 98 (6), 3495-3500.
- Vuilleumier, P., Henson, R. N., Driver, J., and Dolan, R. J. (2002), "Multiple levels of visual object constancy revealed by event-related fMRI of repetition priming," *Nature Neuroscience*, 5 (5), 491-499.
- Wallhagen, M. (2007), "Consciousness and action: Does cognitive science support (mild)



- epiphenomenalism?" *British Journal for the Philosophy of Science*, 58 (3), 539-561.
- Weiskrantz, L. (1997), *Consciousness Lost and Found: A Neuropsychological Exploration*, Oxford: Oxford University Press.
- Westwood, D. A. and Goodale, M. A. (2003), "Perceptual illusion and the real-time control of action," *Spatial Vision*, 16 (3/4), 243-254.
- Wu, W. (2008), "Visual attention, conceptual content, and doing it right," *Mind*, 117 (468), 1003-1033.
- Xu, Y. (2009), "Distinctive neural mechanisms supporting visual object individuation and identification," *Journal of Cognitive Neuroscience*, 21 (3), 511-518.
- Xu, Y. and Chun, M. M. (2006), "Dissociable neural mechanisms supporting visual short-term memory for objects," *Nature*, 440, 91-95.
- . (2009), "Selecting and perceiving multiple visual objects," *Trends in Cognitive Sciences*, 13 (4), 167-174.
- Yantis, S., and Jonides, J. (1990), "Abrupt visual onsets and selective attention: Voluntary versus automatic allocation," *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 16 (1), 121-134.